

八雲町

山越 3 遺跡・山越 4 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺の空中写真 (これは国土地理院発行のもの
のを複製したものである)



山越3遺跡 Ⅲ群a類土器



山越4遺跡 H-2発掘（北から）



山越4遺跡 A地区包含層出土復元土器

例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道建設（七飯～長万部間）に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成12年度に実施した八雲町山越3遺跡、山越4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆は第Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ章を藤原秀樹が、第Ⅳ章を立田 理が、第Ⅵ・Ⅶ章を藤原・立田が担当した。第Ⅷ・Ⅷ章の執筆者については文章の各項の文末に記してある。
4. 遺物の整理は山越3遺跡を立田が、山越4遺跡を藤原が担当した。
5. 現地調査時の写真撮影は山越3遺跡を立田が、山越4遺跡を藤原が担当した。室内での遺物撮影は第1調査部第1調査課長立川トマスが行った。土器の展開写真は小川忠博氏に依頼した。
6. 炭化物の放射性炭素年代については、阪地球科学研究所に依頼した。
7. 炭化種子の同定については、札幌国際大学、吉崎昌一・椿坂恭代氏に依頼した。
8. 黒曜石の原産地同定については、京都大学原子炉実験所、薬科哲男氏に依頼した。
9. 火山灰分析は第1調査部第1調査課花岡正光による。
10. 石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡の指導のもと、立田・藤原が行った。
11. 土器、石器などの実測・トレースは柳谷りさ、小林晴美、木下はるみが行った。
12. 出土資料および記録類は、八雲町教育委員会で保管する。
13. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導を頂いた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町教育委員会、七飯町教育委員会、八雲町立野田生小学校、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一・横山英介・安西雅希・吉田 力、長万部町教育委員会 佐藤 稔、森町教育委員会 藤田 登・荻野幸男、七飯町教育委員会 石本省三、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二、函館市教育委員会 野村祐一、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則・大矢内愛史・木元 豊・山田 央、上磯町教育委員会 森 靖裕、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、秋田県埋蔵文化財センター 五十嵐一治・小島朋夏

凡 例

1. 本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。なお混用を避けるため、山越4遺跡ではB地区検出の遺構について「B」をそれぞれの略号の頭に付けた。

H：住居跡、P：土塋、F：焼土、C：炭化物集中、S：集石

FC：フレイク・チップ集中域、HP：住居内の柱穴、HF：住居内の焼土

2. 挿図中の遺物のシンボルマークについては個々に凡例を付けた。
3. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。復元土器および礫石器の一部には1：4のものもある。各図にはスケールを付けている。

遺 構 1：40 遺物出土状況図 1：20 復元土器 1：3 土器拓本 1：2

剥片石器 1：2 磨製石器 1：2 礫石器 1：3 土・石製品 1：2

4. 遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（ ）で示した。

住居跡・土塋

確認面での長軸長×短軸長/床面・底面での長軸長×短軸長/最大深さ（単位cm）

焼土・炭化物集中・フレイク・チップ集中

確認面での長軸長×短軸長/最大深さ（単位cm）

集石

確認面での長軸長×短軸長（単位cm）

5. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。
6. 土層の土色標記は『新版標準土色帖1997年版』を用いた。
7. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位m）を示している。
8. 石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。

最大長×最大幅×最大厚（単位cm）

9. 掲載した石器実測図では、たたき痕は「V—V」、すり痕は「┌─┐」で範囲を示した。

目 次

口絵カラー	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 調査の概要	2
II 遺跡の位置と環境	6
1 位置と環境	6
2 周辺の遺跡	10
III 調査の方法	16
1 発掘区の設定	16
2 調査の方法	16
(1)発掘調査の方法	16
(2)整理の方法	17
3 基本層序	17
4 遺物の分類	19
(1)土器の分類	19
(2)石器などの分類	20
IV 山越3遺跡の調査	25
1 発掘区の設定	25
2 発掘調査の方法	25
3 基本層序	27
4 遺構と遺構出土の遺物	30
(1)住居跡	30
(2)土壌	41
(3)焼土	54
(4)フレイク・チップ集中域	56
5 包含層出土の遺物	57
(1)土器	57
(2)石器など	80
遺構一覧表・遺物一覧表	93

V	山越4遺跡の調査	99
1	発掘区の設定	99
2	発掘調査の方法	99
3	基本層序	103
4	A地区の遺構と遺構出土の遺物	108
	(1)住居跡	108
	(2)土壌	139
	(3)焼土	145
	(4)炭化物集中	145
	(5)フレイク・チップ集中域	145
5	B地区の遺構と遺構出土の遺物	147
	(1)土壌	147
	(2)焼土	150
	(3)集石	151
6	包含層出土の遺物	152
	(1)A地区出土の土器	152
	(2)B地区出土の土器	174
	(3)石器など	183
	遺構一覧表・遺物一覧表	214
VI	自然科学的分析	222
1	山越3・4遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代	財地球科学研究所 222
2	山越4遺跡から出土した炭化植物種子	吉崎昌一・椿坂恭代 228
3	平成12年度山越4遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原産地分析	京都大学原子炉研究所 藁科哲男 231
VII	まとめ	241
1	山越3遺跡	241
2	山越4遺跡	242
VIII	成果と問題点	245
1	山越3遺跡のⅢ群a-3類土器の編年の位置と放射性炭素年代について	245
2	半円状扁平打製石器について	253
	写真図版	257
	1山越3遺跡	257
	2山越4遺跡	292
	引用参考文献	347
	報告書抄録	350
	奥付け	

挿図目次

II 遺跡の位置と環境	図II-2 遺跡周辺の旧地形(1)	8
図II-1 遺跡の位置	図II-3 遺跡周辺の旧地形(2)	9

図Ⅱ-4	遺跡分布図	11	図Ⅳ-40	包含層出土の土器②	75
図Ⅱ-5	山越周辺の遺跡分布図	15	図Ⅳ-41	包含層出土の土器③	76
Ⅲ調査の方法			図Ⅳ-42	包含層出土の土器④	77
図Ⅲ-1	発掘区の呼称	16	図Ⅳ-43	包含層出土の土器⑤	78
図Ⅲ-2	基本層序	18	図Ⅳ-44	包含層出土の土器⑥	79
Ⅳ山越3遺跡の調査			図Ⅳ-45	包含層出土の土器の分布(1)	81
図Ⅳ-1	発掘区設定図	25	図Ⅳ-46	包含層出土の土器の分布(2)	82
図Ⅳ-2	遺跡周辺の地形と発掘区	26	図Ⅳ-47	包含層出土の土器(1)	84
図Ⅳ-3	調査区の区分	27	図Ⅳ-48	包含層出土の土器(2)	85
図Ⅳ-4	山越3遺跡の基本層序	27	図Ⅳ-49	包含層出土の土器(3)	86
図Ⅳ-5	土層断面図(1)	28	図Ⅳ-50	包含層出土の土器(4)	87
図Ⅳ-6	土層断面図(2)	29	図Ⅳ-51	包含層出土の土器(5)	88
図Ⅳ-7	最終面の地形と遺構位置図	31	図Ⅳ-52	包含層出土の土器(6)	89
図Ⅳ-8	H-1・3(1)	32	図Ⅳ-53	包含層出土の土器(7)	90
図Ⅳ-9	H-1・3(2)	33	図Ⅳ-54	包含層出土の土器(8)	91
図Ⅳ-10	H-1出土の遺物(1)	34	Ⅴ山越4遺跡の調査		
図Ⅳ-11	H-1出土の遺物(2)とH-3出土の遺物	35	図Ⅴ-1	発掘区設定図	100
図Ⅳ-12	H-2と遺物出土状況図	37	図Ⅴ-2	遺跡周辺の地形と発掘区	101
図Ⅳ-13	H-2出土の遺物(1)	38	図Ⅴ-3	調査区の区分	103
図Ⅳ-14	H-2出土の遺物(2)	39	図Ⅴ-4	山越4遺跡の基本層序	104
図Ⅳ-15	H-2出土の遺物(3)	40	図Ⅴ-5	土層断面図(1)	105
図Ⅳ-16	P-1~4とP-3出土の遺物	42	図Ⅴ-6	土層断面図(2)	106
図Ⅳ-17	P-5~8とP-8遺物出土状況図	44	図Ⅴ-7	土層断面図(3)	107
図Ⅳ-18	P-8出土の遺物	46	図Ⅴ-8	最終面の地形と遺構位置図	109
図Ⅳ-19	P-9とP-9出土の遺物(1)	48	図Ⅴ-9	H-1(1)	111
図Ⅳ-20	P-9出土の遺物(2)とP-10~12	49	図Ⅴ-10	H-1(2)とH-1出土の遺物(1)	112
図Ⅳ-21	P-13~14とP-13~14出土の遺物	51	図Ⅴ-11	H-1出土の遺物(2)	113
図Ⅳ-22	P-15・16とP-16出土の遺物	53	図Ⅴ-12	H-1遺物出土状況図	114
図Ⅳ-23	P-17・18, F-1~3, FC-1	55	図Ⅴ-13	H-2(1)	115
図Ⅳ-24	包含層出土の土器の分布	58	図Ⅴ-14	H-2覆土4層・床面遺物出土状況図	116
図Ⅳ-25	包含層土器出土状況図(1)	59	図Ⅴ-15	H-2(2)	117
図Ⅳ-26	包含層土器出土状況図(2)	60	図Ⅴ-16	H-2(3)	118
図Ⅳ-27	包含層土器出土状況図(3)	61	図Ⅴ-17	H-2遺物出土状況図	119
図Ⅳ-28	包含層土器出土状況図(4)	62	図Ⅴ-18	H-2覆土中検出の焼土	121
図Ⅳ-29	包含層出土の土器(1)	63	図Ⅴ-19	H-2出土の遺物(1)	122
図Ⅳ-30	包含層出土の土器(2)	64	図Ⅴ-20	H-2出土の遺物(2)	123
図Ⅳ-31	包含層出土の土器(3)	65	図Ⅴ-21	H-2出土の遺物(3)	124
図Ⅳ-32	包含層出土の土器(4)	66	図Ⅴ-22	H-2出土の遺物(4)	125
図Ⅳ-33	包含層出土の土器(5)	67	図Ⅴ-23	H-2出土の遺物(5)	126
図Ⅳ-34	包含層出土の土器(6)	69	図Ⅴ-24	H-2出土の遺物(6)	127
図Ⅳ-35	包含層出土の土器(7)	70	図Ⅴ-25	H-3(1)	130
図Ⅳ-36	包含層出土の土器(8)	71	図Ⅴ-26	H-3(2)	131
図Ⅳ-37	包含層出土の土器(9)	72	図Ⅴ-27	H-3遺物出土状況図	132
図Ⅳ-38	包含層出土の土器⑩	73	図Ⅴ-28	H-3出土の遺物(1)	133
図Ⅳ-39	包含層出土の土器⑪	74	図Ⅴ-29	H-3出土の遺物(2)	134
			図Ⅴ-30	H-4(1)	136

図V-31	H-4(2)と遺物出土状況図	137
図V-32	H-4 出土の遺物	138
図V-33	P-1~3	141
図V-34	P-4~6、C-1	142
図V-35	P-5・6とP-5・6出土の遺物、P-7	143
図V-36	P-8・9	144
図V-37	F-2・3、FC-1	146
図V-38	B P-1・2とB P-1・2出土の遺物	148
図V-39	B F-1・2	149
図V-40	B S-1(1)	150
図V-41	B S-1(2)	151
図V-42	包含層出土の土器の分布(1)	153
図V-43	包含層出土の土器の分布(2)	154
図V-44	包含層出土の土器の分布(3)	155
図V-45	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(1)	156
図V-46	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(2)	157
図V-47	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(3)	158
図V-48	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(4)	159
図V-49	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(5)	160
図V-50	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(6)	161
図V-51	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(7)	162
図V-52	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(8)	163
図V-53	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(9)	164
図V-54	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(10)	165
図V-55	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(11)	167
図V-56	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(12)	168
図V-57	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(13)	169
図V-58	A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(14)	170
図V-59	A地区包含層出土の土器 その他(1)	171
図V-60	A地区包含層出土の土器 その他(2)	172
図V-61	B地区包含層出土の土器(1)	175
図V-62	B地区包含層出土の土器(2)	176
図V-63	B地区包含層出土の土器(3)	177
図V-64	B地区包含層出土の土器(4)	178
図V-65	B地区包含層出土の土器(5)	179
図V-66	B地区包含層出土の土器(6)	180
図V-67	B地区包含層出土の土器(7)	181
図V-68	B地区包含層出土の土器(8)	182

図V-69	包含層出土の石器の分布(1)	184
図V-70	包含層出土の石器の分布(2)	185
図V-71	包含層出土の石器の分布(3)	186
図V-72	包含層出土の石器の分布(4)	187
図V-73	包含層出土の石器の分布(5)	188
図V-74	包含層出土の石器の分布(6)	189
図V-75	包含層出土の石器の分布(7)	190
図V-76	包含層出土の石器の分布(8)	191
図V-77	包含層出土の石器の分布(9)	192
図V-78	包含層出土の石器の分布(10)	193
図V-79	包含層出土の石器の分布(11)	194
図V-80	包含層出土の石器(1)	195
図V-81	包含層出土の石器(2)	196
図V-82	包含層出土の石器(3)	197
図V-83	包含層出土の石器(4)	198
図V-84	包含層出土の石器(5)	199
図V-85	包含層出土の石器(6)	200
図V-86	包含層出土の石器(7)	204
図V-87	包含層出土の石器(8)	205
図V-88	包含層出土の石器(9)	206
図V-89	包含層出土の石器(10)	207
図V-90	包含層出土の石器(11)	208
図V-91	包含層出土の石器(12)	209
図V-92	包含層出土の石器(13)	210
図V-93	包含層出土の石器(14)	211
図V-94	包含層出土の石器(15)	212
図V-95	包含層出土の石器(16)・土製品・石製品	213

VI 自然科学的分析

図VI-1	黒曜石原産地	236
-------	--------	-----

VII 成果と問題点

図VII-1	Ⅲ群a類土器編年表	246
図VII-2	各段階における円筒上層各型式の共存関係図	250
図VII-3	山越3遺跡復元土器	252
図VII-4	半円状扁平打製石器の分類	254
図VII-5	半円状扁平打製石器の持ち方(想像図)	255

表目次

表I-1	山越3遺跡出土遺物一覧	5
表I-2	山越4遺跡出土遺物一覧	5
表II-1	八雲町内の遺跡	12
表IV-1	山越3遺跡 遺構規模一覧	93

表IV-2	山越3遺跡 遺構出土復元土器一覧	94
表IV-3	山越3遺跡 遺構出土拓本掲載土器一覧	95
表IV-4	山越3遺跡 遺構出土掲載土器一覧	95

表IV-5	山越3遺跡	包含層出土復元土器一覧	96
表IV-6	山越3遺跡	包含層出土拓本掲載土器一覧	97
表IV-7	山越3遺跡	包含層出土掲載石器一覧	97
表IV-8	山越3遺跡	土器土観察表	98
表V-1	山越4遺跡	A地区遺構規模一覧(1)住居跡	214
表V-2	山越4遺跡	A地区遺構規模一覧(2)土壇	214
表V-3	山越4遺跡	A地区遺構規模一覧(3)焼土、炭化物集中、フレイク・チップ集中	214
表V-4	山越4遺跡	B地区遺構規模一覧(1)土壇	214
表V-5	山越4遺跡	B地区遺構規模一覧(2)焼土、集石	214
表V-6	山越4遺跡	遺構出土遺物点数一覧	214
表V-7	山越4遺跡	A地区遺構出土復元土器一覧	215
表V-8	山越4遺跡	A地区遺構出土拓本掲載土器一覧	215
表V-9	山越4遺跡	A地区遺構出土掲載石器一覧	216
表V-10	山越4遺跡	B地区遺構出土復元土器一覧	216

表V-11	山越4遺跡	B地区遺構出土拓本掲載土器一覧	217
表V-12	山越4遺跡	出土点数一覧	217
表V-13	山越4遺跡	A地区包含層出土復元土器一覧(Ⅲ群a類)	217
表V-14	山越4遺跡	A地区包含層出土拓本掲載土器一覧(Ⅲ群a類)	218
表V-15	山越4遺跡	A地区包含層出土復元土器一覧(その他)	218
表V-16	山越4遺跡	A地区包含層出土拓本掲載土器一覧(その他)	218
表V-17	山越4遺跡	B地区包含層出土復元土器一覧	218
表V-18	山越4遺跡	B地区包含層出土拓本掲載土器一覧	219
表V-19	山越4遺跡	包含層出土掲載石器一覧	220
表VI-1	山越4遺跡炭化種子出土表		229
表VI-2	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値		237
表VI-3	山越4遺跡出土黒曜石製石器、石片の元素比分析結果		235
表VI-4	山越4遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原産地推定結果		240
表Ⅶ-1	近年の円筒土器各時期の時期別炭素年代測定結果(AMS法による)		250

図版目次

山越3遺跡

図版1	1 調査区遠景(山越2遺跡から)	257
	2 基本土層	
図版2	1 調査終了(北西から)	258
	2 調査終了(北から)	
図版3	1 H-1(北東から)	259
	2 H-1土層断面(北東から)	
図版4	1 H-1覆土石皿出土状況(南から)	260
	2 H-2(北西から)	
	3 H-2土層断面(北から)	
	4 H-2床面土器出土状況(北から)	
	5 H-2覆土遺物出土状況(北から)	
	6 H-3(北東から)	
図版5	1 P-1(北東から)	261
	2 P-2(東から)	
	3 P-3・4土層断面(西から)	
	4 P-5(北東から)	
	5 P-6土層断面(南東から)	
	6 P-7(西から)	

図版6	1 P-8遺物出土状況(東から)	262
	2 P-9(南西から)	
	3 P-10(西から)	
	4 P-11(南東から)	
	5 P-12(南から)	
	6 P-13(東から)	
図版7	1 P-14(北から)	263
	2 P-15(北から)	
	3 P-16(西から)	
	4 P-17(北東から)	
	5 P-18(北から)	
	6 F-1(北から)	
図版8	1 F-2(北から)	264
	2 F-3(南西から)	
	3 FC-1(東から)	
	4 土器集中1(東から)	
	5 土器集中2(南から)	
	6 土器集中3(南から)	
図版9	1 土器集中4(東から)	265

	2 土器集中 5 (東から)	
	3 土器集中 5 裏面 (東から)	
	4 土器集中 6 (南西から)	
	5 土器集中 7 (西から)	
	6 土器集中 8 (西から)	
図版10	1 土器集中 9 (北から)	266
	2 土器集中10 (北東から)	
	3 石楯出土状況 (北東から)	
図版11	1 H-1 出土の土器 (図Ⅳ-10-1)	267
	2 H-1 出土の遺物	
図版12	1 H-1・H-3 出土の土器	268
	2 H-2 出土の土器 (図Ⅳ-13-1)	
	3 H-2 出土の土器 (図Ⅳ-13-2)	
図版13	1 H-2 出土の土器 (図Ⅳ-14-3) ...	269
	2 H-2 出土の土器	
図版14	1 H-2 出土の土器	270
	2 P-3・P-8 出土の遺物	
図版15	1 P-8 出土の土器	271
	2 P-9 出土の土器 (図Ⅳ-19-1)	
	3 P-9 出土の土器	
図版16	1 P-10・P-16 出土の遺物	272
	2 P-13 出土の土器 (図Ⅳ-21-1)	
	3 P-14 出土の土器 (図Ⅳ-21-1)	
	4 P-14 出土の土器 (図Ⅳ-21-2)	
図版17	1 H-2 出土の土器 (図Ⅳ-13-1)	273
図版18	1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-4)	274
図版19	1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-6)	275
図版20	1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-29-1)	276
	2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-2)	
	3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-3)	
	4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-4)	
	5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-5)	
図版21	1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-6)	277
	2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-7)	
	3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-8)	
	4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-9)	
	5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-10)	
	6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-11)	
図版22	1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-12)	278
	2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-13)	
	3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-14)	
	4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-15)	
	5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-16)	
図版23	1 包含層出土の土器(1)	279
図版24	1 包含層出土の土器(2)	280
図版25	1 包含層出土の土器(3)	281
図版26	1 包含層出土の土器(4)	282
図版27	1 包含層出土の土器(5)	283

図版28	1 包含層出土の土器(6)	284
図版29	1 包含層出土の土器(7)	285
図版30	1 包含層出土の土器(8)	286
図版31	1 包含層出土の石器 (石鏃・石槍・石鎌・つ まみ付きナイフ・スクレイパー)	287
図版32	1 包含層出土の石器 (両面調整石器・石核・ Uフレイク・Rフレイク・石斧)	288
図版33	1 包含層出土の石器 (たたき石)	289
	2 包含層出土の石器 (すり石・半円状扁平打 製石器(1))	
図版34	1 包含層出土の石器 (半円状扁平打製石器(2))	290
	2 包含層出土の石器 (北海道式石冠)	
図版35	1 包含層出土の石器など (石皿・土製品・石 製品)	291

山越 4 遺跡

図版36	1 発掘前の遺跡の状況 (東から)	292
	2 調査区遠景 (野田生 1 遺跡から)	
図版37	1 A 地区 25% 調査状況 (西から)	293
	2 B 地区調査状況 (北東から)	
図版38	1 A 地区完掘状況 (北東から)	294
	2 B 地区完掘状況 (北東から)	
図版39	1 A 地区南東斜面完掘状況 (南から)	295
	2 A 地区南東斜面完掘状況 (西から)	
	3 A 地区メインセクション M-11・12 区付近 (北から)	
	4 A 地区メインセクション S-T-13 区付近 (南東から)	
図版40	1 B 地区メインセクション (南西から) ...	296
	2 H-1 セクション (南東から)	
	3 H-1 セクション (西から)	
図版41	1 H-1 遺物出土状況 (南から)	297
	2 H-1 H P-1 遺物出土状況 (北から)	
	3 H-1 H P-1 壕底面遺物出土状況 (北から)	
	4 H-1 H P-2 セクション (南から)	
	5 H-1 H P-4・6・7 完掘 (北から)	
図版42	1 H-1 完掘 (西から)	298
	2 H-2 完掘 (北から)	
図版43	1 H-2 セクション (南から)	299
	2 H-2 セクション (東から)	
	3 H-2 H F-1 検出状況 (南東から)	
	4 H-2 H F-2・3 検出状況 (南から)	
図版44	1 H-2 覆土 3 層遺物出土状況 (北東から)	300
	2 H-2 撤除遺物出土状況 (北から)	
	3 H-2 床面遺物出土状況 (北から)	

	4 H-2 床面遺物出土状況 (北から)		図版53 1 B P-2 セクション (西から) …………… 309
	5 H-2 床面台石出土状況 (南東から)		2 B P-2 完掘 (北から)
	6 H-2 付近の土器出土状況 (西から)		3 B F-1 検出状況 (西から)
図版45	1 H-2 H P-3 セクション (西から) …… 301		4 B F-1 セクション (北から)
	2 H-2 H P-3 完掘 (西から)		5 B F-2 検出状況 (南から)
	3 H-3 セクション (北東から)		6 B F-2 付近の遺物 (北西から)
	4 H-3 H F-2 (F-1) セクション (東から)	図版54	1 B S-1 検出状況 (北から) …………… 310
	5 H-3 石組炉確認状況 (北から)		2 B 地区土製品出土状況 (北から)
図版46	1 H-3 完掘 (北から) …………… 302	図版55	3 B 地区石製品出土状況 (南西から)
	2 H-4 完掘 (北から)		1 H-1 出土の土器 1 …………… 311
図版47	1 H-4 セクション (南西から) …………… 303		2 H-1 出土の土器 2
	2 H-4 セクション (北西から)		3 H-1 出土の土器 3
	3 H-4 H F-1 検出状況 (北東から)		4 H-1 出土の遺物(1)
	4 H-4 H P-1 セクション (南西から)	図版56	1 H-2 出土の遺物(2) …………… 312
	5 H-4 H P-2 完掘 (北から)	図版57	1 H-2 出土の土器 1 …………… 313
	6 P-1 ~ 3 完掘 (北東から)		2 H-2 出土の土器 2
図版48	1 P-1 セクション (北から) …………… 304		3 H-2 出土の遺物(1)
	2 P-1 完掘 (東から)	図版58	1 H-2 出土の遺物(2) …………… 314
	3 P-2 セクション (南東から)	図版59	1 H-2 出土の遺物(3) …………… 315
	4 P-2 完掘 (東から)	図版60	1 H-2 出土の遺物(4) …………… 316
	5 P-3 セクション (南西から)	図版61	1 H-3 出土の土器 …………… 317
	6 P-3 完掘 (北西から)		2 H-3 出土の遺物(1)
図版49	1 P-4 セクション (南西から) …………… 305	図版62	1 H-3 出土の遺物(2) …………… 318
	2 P-4 完掘 (西から)	図版63	1 H-4 出土の土器 …………… 319
	3 P-5 セクション (南東から)		2 H-4 出土の遺物
	4 P-5 完掘 (北東から)		3 B P-2 出土の土器
	5 P-6 セクション (南から)		4 土壌出土の遺物
	6 P-6 完掘 (東から)	図版64	1 A 地区出土の土器 1 …………… 320
図版50	1 P-7 セクション (東から) …………… 306		2 A 地区出土の土器 2
	2 P-7 完掘 (南西から)		3 A 地区出土の土器 3
	3 P-8 セクション (西から)		4 A 地区出土の土器 4
	4 P-8 完掘 (西から)		5 A 地区出土の土器 5
	5 P-9 セクション (南東から)	図版65	1 A 地区出土の土器 6 …………… 321
	6 P-9 完掘 (西から)		2 A 地区出土の土器 7
図版51	1 F-2 検出状況 (北から) …………… 307		3 A 地区出土の土器 8
	2 F-3 検出状況 (西から)		4 A 地区出土の土器 9
	3 C-1 検出状況 (南西から)		5 A 地区出土の土器 (I群b類) 1
	4 F C-1 付近土器出土状況 (東から)		6 A 地区出土の土器 (I群a類) 3
	5 F C-1 付近土器出土状況 (東から)	図版66	1 A 地区包含層出土の土器(1) …………… 322
	6 N-5-b 区土器出土状況 (北から)	図版67	1 A 地区包含層出土の土器(2) …………… 323
図版52	1 W-3-b 区土器出土状況 (南から) …… 308	図版68	1 A 地区包含層出土の土器(3) …………… 324
	2 T-10-a 区土器出土状況 (北東から)	図版69	1 A 地区包含層出土の土器(4) …………… 325
	3 S-12-c 区土器出土状況 (北東から)	図版70	1 A 地区包含層出土の土器(5) …………… 326
	4 U-10-b 区北海道式石冠・台石出土状況 (南から)	図版71	1 A 地区包含層出土の土器(6) …………… 327
	5 B P-1 セクション (西から)	図版72	1 A 地区包含層出土の土器(7) …………… 328
	6 B P-1 完掘 (東から)	図版73	1 A 地区包含層出土の土器(8) …………… 329
		図版74	1 A 地区包含層出土の土器(9) …………… 330
			2 A 地区出土復元土器2の展開写真

図版75	1 B地区出土の土器	1	331	図版80	1 B地区包含層出土の土器(5)	336
	2 B地区出土の土器	2			図版81	1 A地区出土の復元土器 (Ⅲ群 a類)	337
	3 B地区出土の土器	3				2 B地区出土の復元土器 (Ⅲ群 a-3類)		
	4 B地区出土の土器	4			図版82	1 包含層出土の石器(1)	338
	5 B地区出土の土器	5			図版83	1 包含層出土の石器(2)	339
	6 B地区出土の土器	6			図版84	1 包含層出土の石器(3)	340
図版76	1 B地区出土の土器	7	332	図版85	1 包含層出土の石器(4)	341
	2 B地区出土の土器	8			図版86	1 包含層出土の石器(5)	342
	3 B地区出土の土器	9			図版87	1 包含層出土の石器(6)	343
	4 B地区出土の土器	10			図版88	1 包含層出土の石器(7)	344
	5 B地区包含層出土の土器(1)				図版89	1 包含層出土の石器(8)	345
図版77	1 B地区包含層出土の土器(2)		333	図版90	1 包含層出土の石器(9)	346
図版78	1 B地区包含層出土の土器(3)		334		2 包含層出土の土製品・石製品		
図版79	1 B地区包含層出土の土器(4)		335				

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道路（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者 日本道路公団 北海道支社

受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター

受託期間 平成12年4月1日～平成14年3月31日

遺跡名 ①山越3遺跡（北海道教育委員会登録番号B-16-45）

②山越4遺跡（北海道教育委員会登録番号B-16-46）

現地発掘調査期間 ①平成12年9月7日～平成12年10月31日

②平成12年9月1日～平成12年10月31日

整理作業期間 平成13年4月1日～平成14年3月31日

所在地 ①山越郡八雲町山越405ほか

②山越郡八雲町山越336-1ほか

発掘調査面積 ①1,632㎡

②2,516㎡

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

平成12年度（現地発掘調査）

理事長 大澤 満

専務理事 宮崎 勝

常務理事 木村尚俊（第1調査部長兼務）

第4調査課長 遠藤香澄（山越4遺跡発掘担当者）

主任 皆川洋一（山越3遺跡発掘担当者）

主任 藤原秀樹（山越4遺跡発掘担当者）

文化財保護主事 立田 理（山越3遺跡発掘担当者）

平成13年度（整理作業）

理事長 大澤 満

専務理事 宮崎 勝

常務理事 木村尚俊（第1調査部長兼務、平成13年7月逝去）

第2調査部長 大沼忠春（第1調査部長兼務、7月18日から）

第4調査課長 遠藤香澄（山越4遺跡発掘担当者）

主任 中田裕香

主任 藤原秀樹（山越4遺跡発掘担当者）

文化財保護主事 立田 理（山越3遺跡発掘担当者）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路は七飯町から室蘭市・札幌市を經由し名寄市へと至る総延長488kmの自動車専用道路で、国越IC～和寒IC間359kmは既に供用開始されている。

このうち、七飯～長万部間の路線については平成2年4月に日本道路公団札幌建設局（当時）から北海道教育委員会へ埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた道教委は平成2年4月に所在確認調査を実施し、平成5年に北側の長万部町から順次試掘調査を開始した。八雲町内の試掘調査は平成13年で終了している。八雲町内での発掘調査を必要とする遺跡数は八雲IC以北で5ヶ所、八雲IC～落部ICまでが9ヶ所、落部IC以南が5ヶ所の合計19ヶ所であった。この内、平成12年までに山越3・4遺跡を含む12ヶ所の発掘調査が終了している。また、平成13年には八雲IC～落部IC間の遺跡2カ所、落部IC以南の遺跡4ヶ所、合計6ヶ所の調査が行われ終了した。

山越3遺跡については平成9年4月に試掘調査を実施し、約3,000㎡が発掘調査必要、約3,100㎡が工事の際に立会が必要な範囲とされた。日本道路公団では工法などを変更し、1,490㎡が発掘調査範囲となった。その後、平成12年度に再度工法変更を実施し工事幅を広げ、最終的には1,632㎡が発掘調査必要範囲となった。

山越4遺跡については平成7年5月および11年11月に試掘調査を実施し、2,771㎡が発掘調査必要範囲とされた。同じく日本道路公団は工法などを変更し、最終的に2,516㎡が調査範囲となった。

調査を受託した財団法人北海道埋蔵文化財センターでは、八雲IC以北の4遺跡を先行調査することとし、山越3・4遺跡は後半の平成12年9・10月に調査を実施した。

4 調査の概要

山越3遺跡

山越3遺跡は噴火湾（内浦湾）を望む境川右岸の標高30～40mの海岸段丘上に位置する。今回の調査区は海岸に面した段丘縁から200mほど内陸で、段丘平坦面から境川に向かう標高32～37mの緩斜面にある。境川をはさんで南東方向には山越2遺跡が位置する。

現在、調査区周辺の平坦面は馬鈴薯畑やとうもろこし畑、牧草地として利用されている。段丘縁には耕作時に出土し廃棄された台石・石皿、北海道式石冠などの礫石器や、土器、頁岩のフレイクなどの遺物がうず高く積まれており、これらの土器や石冠の形態などから段丘全域が縄文時代中期を中心とする比較的大規模な遺跡であることを伺わせる。調査区はこの耕作によりほぼ全域が攪乱を受けており、包含層の残存状況は段丘縁を除いて不良であった。

検出された遺構は住居跡3軒、土壇18基、焼土3ヶ所、フレイク・チップ集中域1ヶ所である。全ての遺構は縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式～見晴町式の時期に属すると推測される。この他に、縄文時代中期前半のサイベ沢Ⅶ式・見晴町式の土器集中域が10ヶ所検出された。

住居跡のうちH-1・3は重複した住居跡でH-1の方が新しい。いずれも楕円形で炉跡は確認できなかった。H-2は調査区南端で確認されたものである。今回調査できた部分のごく一部で、ほとんどが調査区外に及んでいる。覆土から大型の土器片が折り重なるように出土し、復元できた。

土壇は調査区全域に散在し、まともには示さない。ほとんどの土壇は遺物が出土せず、性格などは不明である。そのなかで、P-8からは人頭大からこぶし大の礫が多く出土した。その出土状況や埋め戻しであることから土壇墓の可能性が考えられる。

遺物は土器が6,972点、石器など3,055点の合計10,027点が出土した。この内、遺構出土は土器455点、石器など517点など点の合計972点、包含層出土は土器6,517点、石器など2,538点の合計9,055点である(表I-1)。

土器はそのほとんどが縄文時代中期前半のサイベ沢Ⅷ式、見晴町式に相当するものである。このほかに早期東銅路Ⅲ式、前期円筒土器下層d式・後期初頭のトリサキ式に相当するものが数点出土している。

石器は定型的なものとして石鏃、石槍またはナイフ、石錐、スクレイパー、両面調整石器、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿などが出土している。なかでも、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿の礫石器が多いことが特徴である。石材は剥片石器では頁岩がほとんどを占め、わずかに黒曜石製のものがあり、礫石器では安山岩が多く、砂岩、泥岩、流紋岩が少数である。

また、軽石を釣鐘形に整形し5ヶ所を穿孔した用途不明の石製品1点、小型の石斧状の泥岩製石製品1点が包含層から出土している。

山越4遺跡

山越4遺跡は噴火湾(内浦湾)を望む弥之助沢川左岸の標高30~40mの海岸段丘上に位置する。調査区は海岸に面した段丘縁から150mほど内陸で、弥之助沢川に合流する無名沢に面した南東向き緩斜面にあり、標高は32~38mである。試掘調査時の遺物の散布状況により、北側のA地区、南側のB地区に分かれる。A地区は縄文時代中期の円筒土器上層b式からサイベ沢Ⅷ式・見晴町式を主体とする遺跡である。これに対してB地区はサイベ沢Ⅷ式の単純遺跡として捉えることができる。

なお、無名沢をはさんで同じ段丘上に山越9遺跡が、弥之助沢川をはさんで対岸に野田生1遺跡がある。

現在、調査区近くの平坦面は馬鈴薯畑として利用されている。調査区の一部も畑として耕作されていたが、多くは雑木林であった。そのため、一部が耕作の攪乱を受けていた他、伐間時の抜根により攪乱が集中していた部分があったが、全般的に包含層の残存状況は良好であった。

検出された遺構はA・B地区合わせて住居跡4軒、土壇11基、焼土4ヶ所、炭化物集中1ヶ所、集石1ヶ所、フレイク・チップ集中域1ヶ所である。一部時期不明の遺構を除き、多くは縄文時代中期前半に属すると推測される。この他に、縄文時代中期前半の円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅷ式、サイベ沢Ⅷ式・見晴町式および統縄文時代の後北C1式の土器集中域が8ヶ所検出された。

住居跡はいずれもA地区で検出された。このうちH-1・2はしっかりとした掘り込みの住居跡である。H-1は調査区の北端で確認された住居跡で、全体の2分の1ほどは調査区外に及んでいる。床面や付属土壇からミニチュア土器が3点出土した。H-2は楕円形の住居跡で、床面に台石が据え置かれており、更に頁岩の剥片がまともに出土し接合したのもあった。また、住居廃絶後のくぼみを再利用したらしく、覆土中に焼土3ヶ所と遺物の集中が確認された。H-3は抜根攪乱などで、壁のほとんどが壊されていた。石組炉と地床炉を持つ住居で、石組炉上には土器片がまともだった。H-4は掘り込みの浅い不明瞭な住居で、同じく抜根攪乱が集中し半分程度は不明のままである。このH-4は、しっかりとした掘り込みで柱穴も明瞭なH-1・2とは性格が異なり、仮小屋もしくは作業場的なものと推測される。

土壇は住居跡と同じ緩斜面に位置するものと、平坦面に位置するものとに分かれる。この内、P-1~3は緩斜面から急斜面への転換点付近に位置し、3つが並ぶように検出された。P-1・2の間

I 調査の概要

には大型の台石が使用面を上にして据え置かれたように出土した。これらの土壌は台石を用いた作業に関連する遺構と推測される。フレイク・チップ集中域はH-2に近接して検出されたもので、豊泉産の黒曜石がまわっていた。

集石はB地区南角の湧水地点に位置する。検出時には水場遺構に関連するものとも考えたが、同じ噴火湾沿岸で水場遺構を持つ伊達市北黄金貝塚とは異なり、集石に定型的な礫石器が見られないこと、周辺に遺物の出土がほとんど無いこと、礫の多くは褐色を呈し地山の礫に類似すること、から人為的な集石の可能性は低いと思われる。

遺物は土器が6,503点、石器など3,774点の合計10,277点が出土した。この内、遺構出土は土器256点、石器など2,165点の合計2,421点、包含層出土は土器6,247点、石器など1,609点の合計7,856点である。

土器はそのほとんどが縄文時代中期前半の円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅵ式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するものである。ほかには前期後半の円筒土器下層d式、後期初頭の天祐寺式、後期中葉の証洞式、続縄文時代の後北C1式に相当するものが少数出土している。

石器は定型的なものとして石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核、石斧、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿などが出土している。なかでも、たたき石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿などの礫石器が多いことが特徴である。半円状扁平打製石器は同じ八雲町内でも北側に位置する山崎5遺跡で良く見られた板状節理の礫を用いたものはほとんどなく、扁平礫を半割した素材を用い使用部を作出したものが多い。北海道式石冠は小型のものが多く、全面敲打整形されたものは少ない。

石器の石材は剥片石器では頁岩がほとんどを占め、石鏃・フレイクに豊泉産・赤井川産と推測される黒曜石製のものがごく少数ある程度である。礫石器では安山岩が多く、凝灰岩が続く。

また、B地区で板状土偶に類似する土製品および小型の石斧状の石製品が検出された。土製品は無文で胸に相当する部分が横方向から穿孔されている。

なお、H-3・4の地床炉及びF-1の焼土中からクリ属の子葉が検出されている（第IV章2参照）。

表 I-1 山越3遺跡 出土遺物一覧

出土地点	土器				剥片石器群											
	I群b類	II群b類	III群a類	IV群a類	石鏃	石槍またはナイフ	石錘	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	石核	原石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	
遺構			455						1			2			6	133
包含層	2	36	6460	19	8	1	1	6	29	1	2	5	7	54	251	
小計	2	36	6915	19	8	1	1	6	30	1	2	7	7	60	384	

出土地点	磨製石器群	礫石器群							その他		合計	
	石斧	たたき石	すり石	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	石鋸	砥石	台石・石皿	石錘	礫・礫片		土製品・石製品
遺構	1	4	2	9	1				2		356	972
包含層	3	68	5	46	13				4		2028	9055
小計	4	72	7	55	14				6		2384	10027

表 I-2 山越4遺跡 出土遺物一覧

地区名	出土地点	土器					剥片石器群											
		II群b類	III群a類	IV群a類	V群b類	VI群c類	不明	石鏃	石槍またはナイフ	石錘	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	石核	原石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク
A地区	遺構		242	6				2				12			3	4	10	505
	包含層	120	2802	158	11	231		7			2	46		7	13	15	35	303
B地区	遺構		8															
	包含層	1	2913	3				8	5		1	3	13	1	1	7	21	61
その他	表探など																	
合計		121	5965	167	11	231	8	14		1	5	71		8	18	26	66	869

地区名	出土地点	磨製石器群	礫石器群							その他					合計				
		石斧	たたき石	すり石	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	石鋸	砥石	台石・石皿	石錘	礫・礫片	安山岩片	土製品	焼成粘土塊		石製品	有孔自然石	炉石	
A地区	遺構		6	2	7	3			12		120	32	3				1	4	974
	包含層	11	53	7	45	33			75		488	52							4514
B地区	遺構										1439								1447
	包含層	2	10	3	18	6			24		142	48	4	42	1	1			3339
その他	表探など																		
合計		13	69	12	70	43			112		2189	132	7	42	1	2	4	10277	

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

八雲町は渡島支庁管内北部に位置し、北側は長万部町、南側は森町に接している。町の面積は735.60km²で、平成12年度の人口は17,636人である。噴火湾の最も奥まった部分に面しており、晴れた日には遺跡から見て、向かって正面から左側にかけて室蘭市の白鳥大橋・有珠山・羊蹄山を、右側には駒ヶ岳を望むことができる。遺跡から眺める噴火湾はさながら湖のようであり、往時の頻繁な交通・交渉の様相を容易に想像することができる。

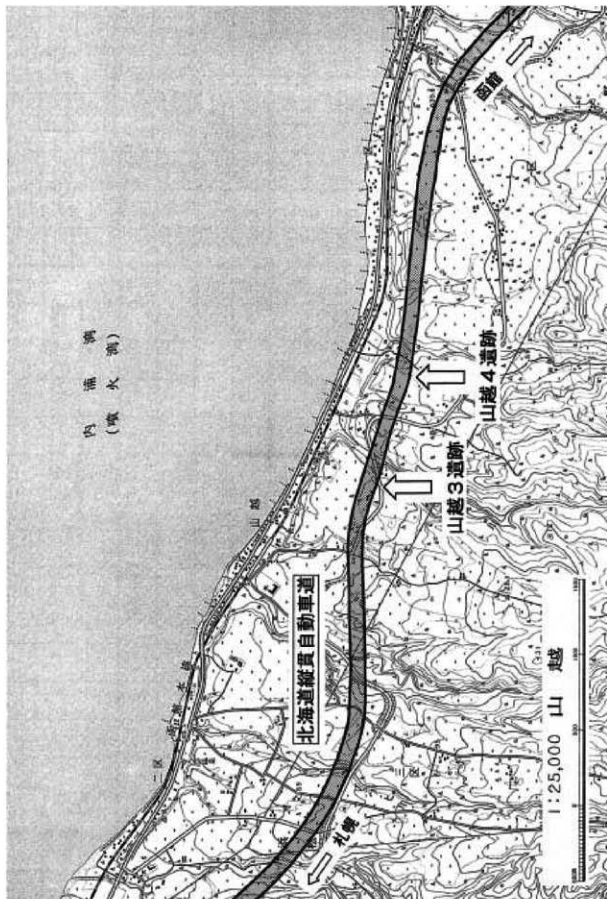
山越3・4遺跡は八雲町市街地から森町・函館市方面に向かって6kmほど南下した、国道5号線・JR函館本線右側(山手)の標高30mほどの海岸段丘上に位置する(図II-1)。この海岸段丘上には遺跡が連続と存在しており、山越地区周辺だけでも山越1~9遺跡、野田生1~6遺跡の合計14遺跡が中小の沢に挟まれながら連続している。

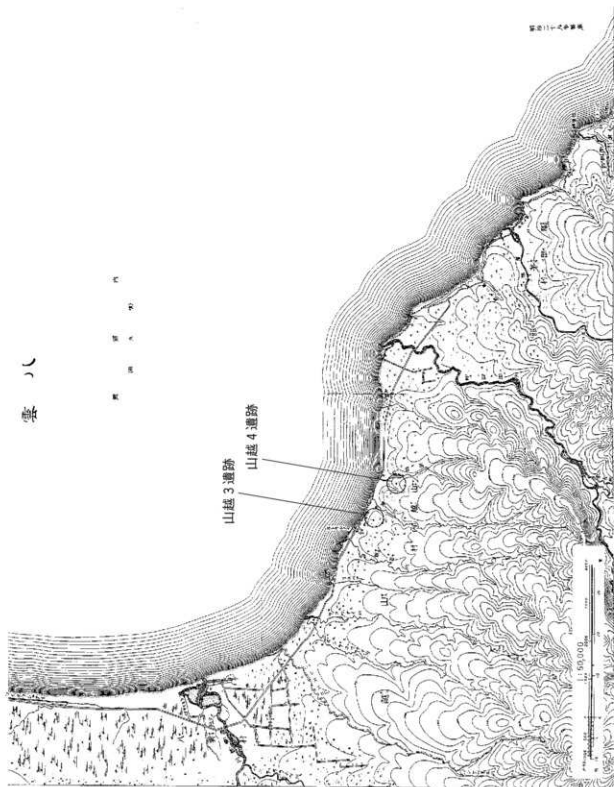
両遺跡とも昭和54年の一般分布調査により確認され、主に縄文時代中期、円筒土器上層式を主体とする遺跡であるとされた。その後、平成2年から北海道縦貫自動車道建設に伴う所在確認調査、試掘調査が行われその際にも中期の遺物が出土している。

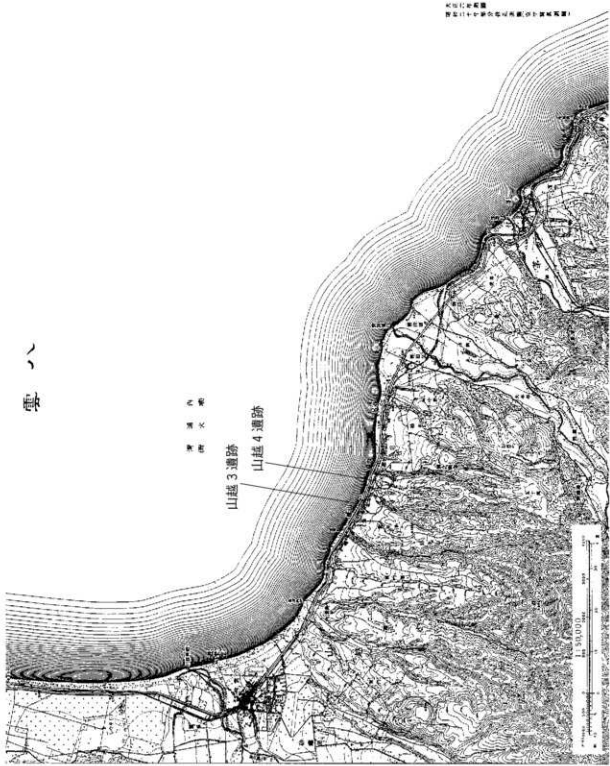
遺跡の所在する山越地区は江戸時代にユウラップ場所が設けられた場所で、その後も様々な役所が設置されたこの地方の中心地であった。天明6年(1787)にはユウラップ場所に運上屋一戸が建てられていたという記録があり、それは山越内にあったことが分かっている(菅江真澄「えぞのでぶり」)。また、寛政11年(1799)に西蝦夷地が幕府直轄となったのに伴い、翌12年(1800)、運上屋の代わりに山越内に会所が設けられた。そして、同13年に野田生までが「村並」の扱いとなったことに伴い、山越内の境川が和入地と蝦夷地の境となり、関門が設置されている。また、文政4年(1821)に幕府直轄を止め、ふたたび松前藩が支配した際には蝦夷地に置かれた11の勤番所のうちの一つが山越内に設置された。安政2年(1855)に再び幕府が蝦夷地を直轄化した翌年には山越内に番所が設置され、室蘭の調役の配下に置かれた。なお、山越内の関門は文久元年(1861)に廃止されている。

山越の地名の由来はアイヌ語の「ヤムクシナイ」=栗の多い沢(松浦武四郎「蝦夷日誌」)、「栗(を拾い)に行く沢」(藤知文「東夷周覧」)と考えられている。現在でも山越3遺跡周辺では大きな栗の木が沢沿いに見られ、山越4遺跡でも栗林が隣接している。江戸時代の紀行文などによっても周辺に栗の木が多くあったことが示されており、更にアイヌの人々が稗などともに栗を栽培していたとの記録もある(「東蝦夷地海岸図台帳」など)。最近の研究によれば、本州から北海道に栗が持ち込まれたのは縄文時代前期後半で、中期にその分布域を広げ、中期末には登別市周辺まで、後期中葉には道央部まで及んだと考えられている(山田1999)。このことから、山越周辺に栗の木が繁茂する状況は江戸時代を遡り、縄文時代からではなかったかと推測される。なお、山越4遺跡の住居跡H-3・4(サイベ沢V-V式)の地床炉の焼土中からクリ属の子葉が検出されている(第IV章2参照)。

遺跡の位置する山越地区の海岸段丘上は現在、段丘縁を除いて馬鈴薯・とうもろこしなどの畑が作られており、やや山沿いは牧草地として利用されている。段丘縁には栗の木などの落葉広葉樹林がみられ、なかには大木もある。地元の人々の話によると段丘縁に見られる植生は開墾当初の姿を表しているという。実際に、明治29年の地図によると遺跡周辺の段丘上には広葉樹林が広がっていたことがわかる(図II-2)。また明治11年の尾張藩入植時の八雲町市街地周辺台地上にはカツラ、ナラ、シナ、







図Ⅱ-3 遺跡周辺の旧地形 (2) (この図は大日本帝国陸軍測量部、大正6年測図、昭和29年部分) (修正測図の五分の一地形図「八景」を複製したものである)

雲 々

クリ、セン、カシワ、クルミ、オンコなどの林が広がっていたという。さらに遡って、文化6年(1809)の記録によると山越の会所から山側へ一里ほど行った所には薪となるはんの木、カツラなどの雑木がたくさんあり、春夏秋に切り出していたという。これらのことから少なくとも江戸時代には、遺跡周辺にクリやカツラなど落葉広葉樹林の豊かな森が広がっていたことがわかる。

また、遺跡の眼前に広がる噴火湾では現在ホタテの養殖が盛んである。やや古く昭和56年の統計によると、八雲町ではサケ、マイワシ、スケトウダラ、サバ、カレイが多く水揚げされ、他に雑魚としてシラウオ、イサダ、ハタハタ、チカが漁獲されている。江戸時代の文化6年(1809)において山越内場所の「土産物」とされているものに鱈、鯉、鮎(しらうお)、昆布、鮭がある。また、文化9年(1812)において特に山越の産品とされているものにオオフキ、シイタケ、ヒラメ、カスベ、アブラコ、ホッケなどがある。八雲町コタン温泉遺跡での調査によると縄文時代前期・後期の貝塚・包含層から出土した魚類の遺存体はニシン科が最も多く、カレイ類、ウグイ類が続き、アイナメ類やカサゴ類、ナガズカ類、サケ・マス類、ヒラメ類、ホッケ類、タラ類などが見られるという(八雲町教委1992)。時代により若干の変遷が見られるが、サケ、ニシン、タラ、カレイなどは古くから捕獲され利用されていたと推測される。

2 周辺の遺跡

八雲町内の遺跡については「八雲町シラリカ2遺跡」(北埋調報142, 2000)や「八雲町山越2遺跡」(北埋調報163, 遺埋文2001)などの当センター報告書ですでに多く触れられているのでここでは省略し、山越・野田生地区を中心とした遺跡についてのみ触れることとする。

なお、八雲町内の周知の埋蔵文化財蔵地一覧表と山越周辺の遺跡分布図は表Ⅱ-1、図Ⅱ-4・5に示しておいた。遺跡分布図を見ると、ハシノスベツ川から野田追川にかけての噴火湾に面した海岸段丘上に、大小の河川にはさまれて連続と遺跡が存在していることがわかる。

山越地区では山越1～9遺跡が、さらに南の野田生地区の野田生1～6遺跡が大小の沢に挟まれて海岸段丘上に連なっている。また、本年度発見された山越10遺跡はやや内陸に位置している。この内、北海道縦貫自動車道建設に伴い発掘調査された遺跡は山越2～4遺跡、野田生1・2・4・5遺跡の合計7遺跡である。これらはいずれも標高30～40mの海岸段丘上に位置し、発掘区は海岸部から100～150mほど離れている。これらの遺跡の多くは縄文時代中期の円筒上層式を主体とする遺跡であるが、比較的大きな川に面した野田生1・5遺跡は中期よりも新しい時期が主体となる。ただし、両遺跡とも昭和54年の一般分布調査時には円筒土器上層式が採取され、中期を主体とする遺跡であるとされている。このことから、この2遺跡でも、より海岸線に近い段丘縁部分には中期の遺構・遺物も存在していることがわかる。

また、山越5・6遺跡は1987年に山越小学校建設に伴い八雲町教育委員会によって調査され(八雲町教委1988)、山越5遺跡は町道拡幅に伴い2001年に再び調査された(八雲町教委2002)。標高は15mほどで縦貫自動車道建設に伴う遺跡群よりは一段低い段丘に位置する。縄文時代晩期、続縄文時代の遺構と遺物が検出された。時期が新しくなるにつれ、遺跡がより標高の低い位置に立地するようになる傾向が何われる。

以下では主に北海道縦貫道建設に伴う発掘調査を中心に、八雲町市街地寄りから順番に各遺跡について触れてみる。

山越2遺跡は山越3・4遺跡にはさまれて位置しており、2000年に当センターにより調査された

表1-1 八雲町内の遺跡

発見番号	遺跡名	所在地	立地(標高)	時期	調査資料
B-16-1	オオツナノ遺跡	浜松1, 31, 304ほか	海岸内川右岸河段段丘 (8-20m)	縄文文化(意山)	採集資料あり。秦田(1991b)
B-16-2	トコナシ遺跡	浜松144-2, 3014ほか	海岸段丘 (20-25m)	縄文文化(意山)	田中(1956)のトコナシ遺跡C地点
B-16-3	カコツ1遺跡	浜松222911ほか	海岸段丘 (30-35m)	縄文文化(意山)	早稲田弥生館展覧会 頁行海行
B-16-4	浜松1遺跡	浜松22911ほか	海岸段丘 (25-28m)	中世	明徳土層式
B-16-5	大谷佐保遺跡	トキモ296-1ほか	海岸段丘河段段丘 (70-75m)	旧石器	昭和35年調査大岡遺跡。吉嶋(1961) 千代(1965) 三浦、秦田(1983)
B-16-6	シラカサ遺跡	浜松6, 326	海岸段丘 (25-40m)	平城12年度新発見遺 頁行海行	昭和35・36・38年調査のトクムバツ遺跡 吉嶋(1961)
B-16-7	シラカサ遺跡	上ノ宮28011ほか	海岸段丘河段段丘 (70-80m)	旧石器	昭和58年10月22日追加発掘調査
B-16-8	宮坂遺跡	宮坂9111ほか	海岸段丘河段段丘 (65-65m)	旧石器	三浦、秦田(1992) 葉巻遺跡、玉巻遺跡、貝塚 国の重要文化財指定骨角牙製品。昭和20, 30年 代田川貝三調査の甲子部遺跡 無形コタン遺跡。八雲高校土史研究会(1970)のコタン 遺跡A遺跡
B-16-9	コタン環状遺跡	浜松28111ほか	ヒケウヒ川左岸の海岸段丘 (21-34m)	中層-晩層、縄文文化	三浦、秦田(1997, 1998a)
B-16-10	大倉遺跡	大倉1-1ほか	砂礫川原段丘の頂上 (32m)	中層、中層、晩層、縄文文化(東北式)	
B-16-11	山崎1遺跡	山崎434-1ほか	海岸段丘 (30m)	中層	三浦(1980-1984) 秦田(1991a, b) 早稲田展覧会、秦田文土器、魚形石器
B-16-12	山崎2遺跡	山崎154-7ほか	アイタラナイ川左岸海岸段丘 (28m)	早期-晩層、縄文文化	三浦(1987) 東北式と秦田系土器(天土山式)が伴出
B-16-13	谷の上遺跡	東野50611ほか	シラカサ川河段段丘 (15-20m)	中層-晩層、縄文文化	内閣土層式、タンネトウト式
B-16-14	八雲1遺跡	八雲町40	砂礫川原段丘 (10m)	中層、晩層	採集資料あり(魚形石器)。秦田(1981b)
B-16-15	シラカサ遺跡	黒川210012ほか	シラカサ川河段段丘 (5-10m)	縄文文化(意山) 爾文	内閣土層式
B-16-16	小倉沢遺跡	黒野62511ほか	野田通川右岸の河段段丘 (40m)	中層	
B-16-17	浜松1遺跡	黒野62511ほか	海岸段丘 (15-17m)	縄文文化(意山式)	板井(1961, 1964) 昭和34・37調査の高松遺跡 黒巻・小貝屋・住居跡、魚形石器
B-16-18	板井1遺跡	板井201-1ほか	野田通川河段段丘 (60-65m)	中層	内閣土層式
B-16-19	上ノ宮2遺跡	上ノ宮334-1ほか	海岸段丘河段段丘 (85m)	旧石器	ブレイトド・モイネト・ナイフ・石刃
B-16-20	ハンズノツ遺跡	上ノ宮334-3ほか	海岸段丘の頂上 (30-50m)	中層	早稲田弥生館展覧会 土器片 瀬江(彌生石・貝石)
B-16-21	比呂佐島遺跡	浜松729-31ほか	海岸段丘の頂上 (30-50m)	中層	田中(1938) 昭和28年調査の元山遺跡 住居跡6
B-16-22	八雲2遺跡	黒川14111ほか	砂礫川原段丘 (30-28m)	晩層	アノトウト式
B-16-23	トコナシ遺跡	黒川14111ほか	海岸段丘 (17-28m)	晩層	武方・山田(1968) 野村(1982) 昭和42・55年調査の熱田遺跡-秦田土器を伴う住居跡
B-16-24	トコナシ遺跡	黒川165-11ほか	海岸段丘 (25-45m)	縄文文化	平城12年度新発見遺 土器片 瀬江
B-16-25	浜松2遺跡	浜松123-11ほか	シラカサ川河段段丘 (20-30m)	早期-晩層	三浦(1989) 三浦・秦田(1991)
B-16-26	浜松6遺跡	浜松123-11ほか	シラカサ川河段段丘 (20-30m)	縄文文化	平城12年度新発見遺 土器片
B-16-27	浜松6遺跡	浜松123-11ほか	海岸段丘 (25-32m)	中層	平城12年度新発見遺 土器片
B-16-28	熱田1遺跡	熱田223-1ほか	トコナシ川右岸の砂丘 (5-10m)	縄文文化(意山)	平城12年度新発見遺 土器片 6 晩度9
B-16-29	熱田遺跡	熱田57114ほか	海岸段丘 (60m)	後群	
B-16-30	新島遺跡	新島72911ほか	海岸段丘 (30m)	後群	昭和49年文化財調査員所存確認調査 三浦(1984)
B-16-31	ナツアノ遺跡	上ノ宮25211ほか	海岸段丘河段段丘 (100m)	旧石器	採集資料(ブレード・アレード)あり。三浦(1984)
B-16-32	トコナシ遺跡	熱田62111ほか	海岸段丘 (35m)	中層	採集資料(ブレード・アレード)あり。三浦(1984)
B-16-33	赤沼1遺跡	赤沼72111ほか	海岸段丘	前期-晩層、縄文文化(意山・東北式)	田中(1991) 1995 前南未・中南未 にいたる大倉落(住居跡203軒部)、配石遺跡。平成12年度調査ではトリカギ式割の土器、平 成13年度調査遺跡
B-16-34	春日1遺跡	春日124-1	海岸段丘河段段丘 (14m)	後群-晩層	
B-16-35	上ノ宮4遺跡	上ノ宮502-4・6	海岸段丘河段段丘 (100m)	旧石器	採集資料(石核・ブレード)あり。三浦(1984)
B-16-36	上ノ宮5遺跡	上ノ宮432・502	海岸段丘河段段丘 (60m)	旧石器	
B-16-37	上ノ宮6遺跡	上ノ宮28011ほか	砂丘 (80m)	旧石器	
B-16-38	山崎2遺跡	山崎14-11ほか	山崎川の河段段丘 (17-25m)	前期-中層-縄文文化	

登録番号	遺跡名	所在 地	立 地 (標高)	前期・中期	時期	文書・内容・備考
B-16-39	山越3遺跡	山崎山砂呂の川岸段丘 (15~32m)		前期・中期		山崎山層式 山崎山層式
B-16-40	黒石275-1 11号	海岸段丘 (38m)		中期		平城12年発掘調査 三浦 (1990)
B-16-41	黒石1遺跡	海岸段丘 (40m)		早期・前期		昭和三十五年発掘調査、宮城 (1961) 千代 (1965) 三浦、柴田 (1983)
B-16-42	黒石2遺跡	砂原風川の扇状地 (14m)		晩期・前期		平城11・12年度調査 住原幹生 住原幹生 土庫10 北津原館163
B-16-43	浜6.4遺跡	浜段丘 (20~40m)		前期・後期		平城12年度調査 中期前半主体 住原幹生 土庫18 焼土3ほか 本報告
B-16-44	山越2遺跡	海岸段丘 (32~34m)		前期・晩期		平城12年度調査 中期前半主体 住原幹生 土庫11 焼土1ほか 本報告
B-16-45	山越3遺跡	海岸段丘 (32~34m)		前期・中期・後期・総縄文		平城12年度調査後編 (総縄文) 主体 住原幹生 土庫28ほか 赤石土器・石巻・糸織り器 平城13年度調査後編
B-16-46	山越4遺跡	海岸段丘 (30~30m)		前期・中期		平城12年度調査後編
B-16-47	野田生1遺跡	野田生317-6 11号	海岸段丘 (33~40m)	中期・後期		平城12年度調査後編 住原幹生 土庫71ほか 平城13年度調査後編
B-16-48	野田生2遺跡	野田生355-1 11号	海岸段丘 (34~30m)	中期・後期・総縄文		三浦・柴田 (1987・1988a)
B-16-49	野田生3遺跡	野田生364-1 11号	海岸段丘 (25~37m)	前期		平城12年度調査後編 住原幹生 土庫13 焼土1 北津原館171
B-16-50	野田生4遺跡	野田生372 11号	海岸段丘 (36~38m)	前期		平城12年度調査後編 住原幹生 土庫12 焼土1 北津原館164
B-16-51	野田生5遺跡	野田生303 11号	海岸段丘 (30~35m)	総縄文 (野山・北式)		平城12年度調査後編 土庫16 Tビレット1 焼土8 北津原館164
B-16-52	松野2遺跡	松野41-1 11号	野田山河岸段丘 (70~75m)	中期・晩期		クノエトウシ
B-16-53	松野3遺跡	松野222 11号	野田山河岸段丘 (70~75m)	総縄文 (野山)		山崎山層式・クノエトウシ
B-16-54	松野4遺跡	松野291 11号	野田山河岸段丘 (15~18m)	早期・後期 縄文		平城12・13年度調査 住原幹生 土庫2 (2002)
B-16-55	赤玉2遺跡	赤玉214 11号	海岸段丘 (31m)	前期・晩期		三浦・柴田 (1988) 三浦 (2002)
B-16-56	山越5遺跡	山越475-476	海岸段丘 (14m)	前期・中期・総縄文		三浦・柴田 (1988) 栗山式、北式
B-16-57	山越6遺跡	山越214-474・475	海岸段丘 (14m)	早・後・晩期・総縄文		三浦・柴田 (1995)
B-16-58	浜6.5遺跡	浜314-1 11号	海岸段丘 (10~30m)	前期・中期		平城12年度八戸町調査後編 住原幹生 土庫7
B-16-59	旭1遺跡	旭3-8 11号	海岸段丘 (42~55m)	前期・後期		平城10~12年度調査 中期主体住原幹生 土庫88 北津原館162
B-16-60	山越4遺跡	山越138-1 11号	海岸段丘 (25~45m)	早期・前期		平城11・12年度調査 住原幹生 土庫4 焼土5 北津原館155
B-16-61	ボウシワカ1遺跡	黒石692-1 11号	海岸段丘 (39m)	早期・前期		平城12年度調査 住原幹生 土庫4 焼土5 北津原館155
B-16-62	山越5遺跡	黒石244	海岸段丘 (35~45m)	早期・後期		平城12年度調査 住原幹生 土庫2 焼土2ほか 北津原館155
B-16-63	黒石3遺跡	黒石244	海岸段丘 (45m)	早期・後期		北津原館142 前期後半のヒスI製番割り (赤山山原)
B-16-64	シラカ2遺跡	黒石289-289・586	海岸段丘 (38~40m)	早期~中期・総縄文		三浦 (1989) 三浦・柴田 (1991)
B-16-65	浜6.6遺跡	浜6209-401	海岸段丘 (40~50m)	平城12年新編発掘		平城12年度調査後編 土器片
B-16-66	浜6.7遺跡	浜6273-1 11号	海岸段丘 (39~45m)	平城12年新編発掘		平城12年度調査後編
B-16-67	浜6.8遺跡	浜6280 11号	海岸段丘 (39~40m)	平城12年新編発掘		平城12年度調査後編
B-16-68	山越7遺跡	浜6302 11号	海岸段丘 (30~50m)	平城12年新編発掘		平城12年度調査後編
B-16-69	山越8遺跡	山越711 11号	海岸段丘 (30~40m)	平城12年新編発掘		平城12年度調査後編
B-16-70	山越8遺跡	山越281 11号	海岸段丘 (30~40m)	平城12年新編発掘		昭和三十八年町工化材調査委員が所在確認調査 三浦 (1984)
B-16-71	山越9遺跡	山越325 11号	海岸段丘 (30~40m)	中期		平城12年新編発掘 石斧
B-16-72	野田生6遺跡	野田生433 11号	海岸段丘 (20~30m)	前期		平城12年新編発掘
B-16-73	東野遺跡	東野253 11号	海岸段丘 (10~40m)	後期・晩期 縄文		平城12年度調査後編
B-16-74	赤玉3遺跡	赤玉202 11号	海岸段丘 (10~40m)	前期・中期		平城12年度調査後編 総縄文 遺物 遺物 遺物 平城13年度八戸町調査後編
B-16-75	赤玉4遺跡	赤玉269 11号	海岸段丘 (25~50m)	前期・中期		平城12年度調査後編
B-16-76	黒石4遺跡	黒石293	海岸段丘 (35~50m)	前期 (?)		平城12年度調査後編 北津原式冠、すり石、たたき石、ナブ
B-16-77	浜6.9遺跡	浜6374	黒部山左岸段丘 (26~38m)	中期・晩期・総縄文		平城13年度調査後編 住原幹生 土庫7 Tビレット7 焼土11ほか

II 遺跡の位置と環境

(北埋調報163, 2001)。中期前半のサイベ沢Ⅷ式・見晴町式の住居跡7軒、後期初頭の天祐寺式の住居跡3軒が検出された。土壌は30基あり、多くは中期前半のものである。この内2基は土壌墓、2基はフラスコ状ピットであった。この他に焼土17ヶ所が検出されている。

野田生1遺跡は弥之助沢川をはさんで、山越4・9遺跡の対岸に位置する。2000・2001年両年にわたり調査された(調査年報14, 2002)。縄文時代後期中葉を主体とする大規模な集落で、住居跡41軒、土壌137基、焼土28ヶ所、柱穴状ピット162基、炭化物集中3ヶ所、フレイク・チップ集中2ヶ所、土器集中57ヶ所が検出されている。後期中葉の縄調式を中心に土器約11万点、石器など約7万点の合計18万点余の遺物が出土している。微隆起線と貼瘤で文様が構成された赤彩土器や完形の石棒、漆塗りの櫛など特徴ある遺物も出土した。

野田生2遺跡は野田生1遺跡の南東側に無名沢をはさんで位置する遺跡で2000・2001年両年にわたり調査された。縄文時代中期前半を主体とする遺跡で住居跡7軒、土壌墓5基、土壌28基、焼土13ヶ所、小ピット24基が確認された(北埋調報167, 2002)。このほかに、縄文時代早期アルトリ式、続縄文時代後北式の遺物と遺構が確認された。1基の土壌は縄文時代早期のもの、焼土の内3ヶ所は続縄文時代のものである。

野田生4遺跡は野田生2遺跡の東側に無名沢をはさんで位置する遺跡で2000年に調査された(北埋調報171, 2002)。縄文時代中期前半のサイベ沢Ⅷ式・見晴町式が主体の遺跡で、住居跡2軒、土壌13基、焼土1ヶ所が検出された。土壌の内2基は中期の墓の可能性もある。また、縄文時代後期中葉の遺物も出土している。

野田生5遺跡は野田生4遺跡の東側に、野田生3遺跡及び無名沢をはさんで位置する遺跡で2000年に調査された(北埋調報164, 2001)。柏木川の左岸にあり、右岸には野田生6遺跡がある。この内、野田生3・6遺跡は縦貫道建設に伴う発掘調査が実施されなかった。野田生5遺跡は続縄文時代の恵山式・後北式を主体とする遺跡で土壌4基、Tピット1基、焼土・炭化木片集中8ヶ所が確認された。この他に、縄文時代後期の手稲式、弥生系土器、擦文式土器が少数出土している。石器ではビエス・エスキューがまとまって出土したことが特徴である。

1987年に町教委によって調査された山越5遺跡は縄文時代晩期恵山式が主体の遺跡で土壌5基、焼土1ヶ所が検出された。この他に縄文時代中期の円筒上層式、後期の手稲式土器とスクレイパー、たたき石などが出土している。山越6遺跡は同じ段丘上に位置し、小沢をはさんで隣接している。続縄文時代の後北C2式を主体とする遺跡で土壌1基、焼土2カ所が検出された。他に縄文時代前期後半の遺物が出土している(八雲町教委, 1988)。また、2001年に再調査された山越5遺跡は1987年と同じく縄文時代晩期を主体とし、中期の円筒上層式も出土した。遺構は中期の可能性のある小竪穴1基、時期不明の土壌4基が検出されている(八雲町教委, 2002)。

Ⅲ 調査の方法

1 発掘区の設定

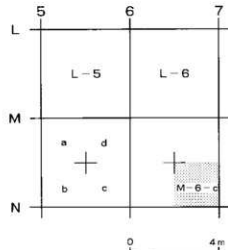
発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）八雲南工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。山越3遺跡では工事予定中心線上の中心杭であるSTA.601とSTA.602を結ぶ線を、山越4遺跡ではSTA.593とSTA.594を結ぶ線を基準のMラインとした。Mラインから平行に南西へ向かって4m毎にL、K…とし、同様に北東へ向かってN、O…とした。

そして山越3遺跡ではSTA.601を通りそれと直行する線を15ラインとし、同様に4m毎に北に向かって16、17、18…、南に向かって14、13、12…とした。山越4遺跡ではSTA.593を通りそれに直交する線を0ラインとし、同様に4m毎に北西に向かって1、2、3…とした。そして、これらの交差する地点に杭を打設した。

発掘区はこの4m方眼を基本とし、その南側（図左上）の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（例：L-5、L-6など）。また、平坦部では調査の必要に応じて4m方眼の発掘区を2m方眼に4分割し（小発掘区）遺物の取り上げを行った。小発掘区は杭のある側（南端）から反時計回りにa、b、c、dを付し、「M-5-a、M-6-c」のように呼称した（図Ⅲ-1）。

Mラインの真北は山越3遺跡では $N-288^{\circ}-W$ 、山越4遺跡では $N-292.5^{\circ}-W$ である。

なお、各遺跡の詳細については第Ⅳ章、第Ⅴ章の冒頭で触れているので、そちらを参照されたい。



図Ⅲ-1 発掘区の呼称

2 調査の方法

(1) 発掘調査の方法

山越3・4遺跡とも発掘調査に先行し重機により耕作土、表土を除去した。表土除去の段階で山越3遺跡は耕作による攪乱がほぼ全面に及んでいることが分かった。山越4遺跡では一部に耕作時および立木伐開時の抜根による攪乱が見られたが、全般的に胸ヶ岳火山灰（Ko-d）以下の包含層の残りは良好であった。

両遺跡とも調査計画を立てるため、先ず当初発掘調査面積の12.5～25%程度の調査を行った。その結果、遺物や遺構の分布に濃淡が見られたほか、耕作やその他の削平・攪乱が広範囲に及んでいる部分があった。この調査結果を基に、いずれの遺跡も移植ゴテを用いてⅥ層まで掘り下げる区域、主にスコップ・ジョレンを用い遺物回収・遺構確認調査を主体とする区域、重機を併用しローム（Ⅵ層）まで掘り下げ遺構確認調査を主体とする区域、などに分け調査を実施した。

遺物の取り上げも包含層の残存状況や遺物の濃淡を勘案し、1グリットを4分割した小発掘区単位で行った部分と1グリット単位で行った部分がある。これら調査方法の詳細については第Ⅳ章、第Ⅴ章で述べている。

移植ゴテを用い調査した主たる遺物包含層については5cm毎に掘り下げ、小発掘区単位で遺物を取り上げるとともに、その掘り下げ回数についても明記した(例：Ⅲ層2回目など)。また、掘り下げ毎に遺構の確認に勤めた。

遺構の遺物については全点の出土位置、標高、層位を計測して取り上げを行った。なお、山越3遺跡の住居跡では1m四方単位で層位を計測し取り上げたものもある。

両遺跡ともに旧石器確認調査のためトレンチを設定し、50cmほど掘り下げた。しかし、旧石器時代の遺物は確認できなかった。

(2) 整理の方法

現地では遺物取り上げ後、水洗し大まかな分類を行い遺物台帳・遺物カードを作成した。遺物の内、深さ5cm単位で取り上げたものについては掘り下げ回数を台帳・カードの備考欄に書き入れた。台帳整理が終わったものから順次注記作業を行った。土器片・定形的石器・遺構出土遺物については遺跡名の略号(山越3遺跡=「YK3」、山越4遺跡=「YK4」)、発掘区(遺構名)、遺物番号、出土層位を記した。

平成13年度からの室内整理作業では遺物台帳・カードの点検、台帳の補正、土器の接合・復元作業、剥片類・礫石器の接合作業、遺物の実測および作図、集計、記録類の整理を行った。

土器については分類の見直しを行い、接合作業を行った。接合・復元作業にあたっては同一個体の破片を把握することに努めた。また、発掘区毎に口縁部破片を抽出し個体数を推定した。実測図では、断面は最も器形の特徴を表している部分を表現するために90°回転した位置で実測したもの、現存部分を実測し復元したものもある。破片資料は文様構成・器形に分かる口縁部・胴部破片を中心に拓影図を作成した。整理作業終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように小分けして収納し、それ以外のものは分類毎に遺構別もしくは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。なお、包含層の資料については口縁部・底部・胴部に分け収納し、その際同一個体と見られるものは一つにまとめた。

石器についても分類の見直しを行い、一部の剥片や礫石器については接合作業を行った。これと並行し完形品を中心に器種や分類に偏りの無いように運び出して実測し、この報告書掲載石器に限り最大長・最大幅・最大厚・重さについて計測した。黒曜石製の定形的石器、剥片については原産地同定の分析を行った(第Ⅶ章3参照)。整理終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように1点づつ収納し、それ以外のものは細分類した器種毎に分け遺構別もしくは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。

3 基本層序

土層は八雲町教育委員会によるこれまでの調査および財団法人北海道埋蔵文化財センターによる長万部町・八雲町での調査に準じて分層した。ただし、遊楽部川をはさんで八雲町の北側と南側では火山灰の堆積状況など、土層の状況が若干異なり、また山越・野田生周辺でも地域により部分的な相違が見られるため、山越3・4遺跡で層位の統一はしていない。

ここではこれまでの八雲町教育委員会(『栄浜』、八雲町教委1983など。なお黒色土のⅢ層をさらに細分する例が多い)、および財団法人北海道埋蔵文化財センター(『八雲町シラリカ2遺跡』北理調報142、『八雲町山崎5遺跡』北理調報165)による八雲町内での調査で6層に分層した例の概要を述べ(図Ⅲ-2)、詳細は各遺跡の記載の冒頭で述べることにする。

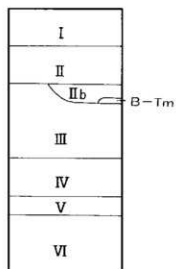
Ⅲ 調査の方法

- I 層：黒褐色土 (7.5YR 2/2) 耕作土、表土。Ko-dが混じる。
- II 層：駒ヶ岳火山灰 Ko-d。
- III 層：黒色土 (7.5YR 1.7/1～2/1) 粘性、しまり弱。乾燥するとクラックが入る。
- IV 層：黒褐～暗褐色 (7.5YR 1/3～3/3) 粘性は下方ほど強く、しまり強。所々に褐色火山灰 (Ko-g) が混じる。
- V 層：暗褐色土 (7.5YR 3/4) 漸移層。粘性、しまり強。
- VI 層：褐色土 (7.5YR 4/4～4/6) 褐色ローム質土。粘性、しまり強。

山越3遺跡ではIV層とV層の差異が不明瞭で分層しなかった。山越4遺跡でも同様であったがKo-gを指標にIV層とV層を分層した。

なお、III層上面には主に長万部町などに分布する褐色風成層(長万部町教委1999)に類似する黒褐色土が部分的に確認された。この層の下位にはB-Tmが混じる部分がある。これをIIb層とし記載したが、遺物取り上げ時にはIII層として扱っており、ほぼIII層1回目がこれに該当する。

また、VI層より下位には濁川テフラ(Ng)やクッタラテフラ(Kt)が確認される部分もあり、便宜的にⅦ～Ⅹ層まで分層した部分もあった。



図Ⅲ-2 基本層序

4 遺物の分類

(1) 土器の分類

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。統縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。

また、a・b類に2分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に分類したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉を意味する。

このうち、山越3遺跡ではⅤ群、Ⅵ群、Ⅶ群に相当する資料が、山越4遺跡ではⅠ群、Ⅴ群、Ⅶ群に相当する資料が出土していない。

[Ⅰ群] 縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

- a類：条痕文平底土器。アルトリ式に相当するもの。
- b類：縄文、撚糸文、組紐匠痕文、貼付文等のある土器群
 - b-1類：東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2類：コッタロ式に相当するもの。
 - b-3類：中茶路式に相当するもの。
 - b-4類：東銅路Ⅳ式に相当するもの。

[Ⅱ群] 縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

- a類：縄文尖底土器群。
- b類：円筒土器下層式に相当するもの。

[Ⅲ群] 縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

- a類：円筒土器上層式に相当する土器群。
 - a-1類：円筒土器上層b・c式に相当するもの。サイベ沢Ⅴ式に相当するもの。
 - a-2類：サイベ沢Ⅵ式に相当するもの。
 - a-3類：サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの。
- b類：中期後半の土器群。

[Ⅳ群] 縄文時代後期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

- a類：天祐寺式、涌元式、入江式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。
- b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、鮎瀬式に相当するもの。
- c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。

[Ⅴ群] 縄文時代晩期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

Ⅲ 調査の方法

- a類：大洞B式、大洞B-C式に相当するもの。
- b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。
- c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

〔Ⅵ群〕 続縄文時代に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

- a類：恵山式以前に相当するもの。
- b類：恵山式に相当するもの。
- c類：後北式に相当するもの。

〔Ⅶ群〕 擦文時代に属する土器群

(2) 石器などの分類

石器の分類は本年度刊行の『八雲町山崎5遺跡』（北埋調報165、2002）の分類を踏襲し剥片石器群、磨製石器群、礫石器群に大別した。更に従来当センターで行われている分類を参考にし、定形的石器群をⅠ～Ⅳ、Ⅵ～Ⅹ群に分け、石核・原石および定形的な石器としがたい加工痕或使用痕のある剥片をⅤ群、同様に加工痕或使用痕のある礫・礫片をⅪ群とした。いくつかの器種については細分類も行った。

なお、複数の器種が複合していると考えられるものは、形態をより多く残す分類もしくは下位の分類に含めている。分類記号を用いなかったものには土製品、石製品、焼成粘土塊がある。

剥片石器群

Ⅰ群 石鏃・石槍

(A類) 石鏃 形態を中心に5細分した。

1 石刃鏃

- 2 薄手で細身のもの
 - a 柳葉形のもの
 - b 五角形のもの

3 三角形のもの

4 木葉形のもの、菱形のもの

5 有茎のもの

9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

(B類) 石槍または両面加工のナイフ 尖頭部を持つ木葉形・柳葉形のもの。形態から2細分した。

1 有茎のもの

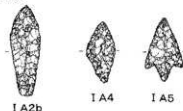
2 無茎で菱形、木葉形のもの

9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

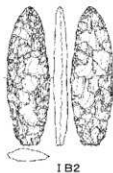
Ⅱ群 石錐 形態から3細分した。

1 剥片に刺突部を作り出したもの

Ⅰ群A類



Ⅰ群B類



Ⅱ群



Ⅲ群A類



- 2 棒状のもの
- 3 棒状のものにつまみ部を作り出したもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など



ⅢA4

Ⅲ群 ナイフ・スクレイパー類

(A類) つまみ付きナイフ 身部の加工状況から4細分した。

- 1 片面加工のもの
 - a 裏面の側縁に表面調整の打面があるもの
 - b 片面のみ加工のもの
 - c 片面の周縁を加工したもの

Ⅲ群B類



ⅢB1a

ⅢB2a

- 2 両面加工のもの
- 3 横形のもの
- 4 素材の剥片の形状を大きく変えないもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

(B類) スクレイパー 連続する剥離によって刃部を作り出しているもの。形態から8細分した。

- 1 石筥と称されるもの、筥状石器 三角形・方形に近い台形状のもの。

- a 片面加工のもの
- b 両面加工のもの



ⅢB2b

ⅢB2c

- 2 縦長の剥片を用い、側縁を加工したもの
 - a 刃部が外湾するもの
 - b 刃部が直線的なもの
 - c 刃部が内湾するもの



ⅢB3a

- 3 横長の剥片を用い、側縁を加工したもの
刃部の形状からB2類と同じくa b cに細分した



ⅢB6

- 4 ラウンドスクレイパー
- 5 エンドスクレイパー
- 6 先端部のあるもの
- 7 挟りこみのあるもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅳ群



Ⅳ3

Ⅳ群 両面調整石器 両面が加工された石器のうち、上記分類に含めることができないもの。形態により3細分した。

- 1 円形・楕円形のもの
- 2 木葉形のもの
- 3 半円形で一方の側縁に平坦面をもつもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅴ群A類



ⅤA1

III 調査の方法

V群 石核、フレイク・チップ類

(A類) 石核

- 1 石核
- 2 石器原石と考えられるもの

(B類) 加工痕・使用痕のある剥片

- 1 剥片に加工痕のみられるもの (Rフレイク)
- 2 剥片に使用痕のみられるもの (Uフレイク)
- 3 楔形石器 (ビエス・エスキーユ) と称されるもの

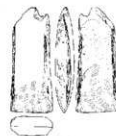
(C類) フレイク・チップ

V群B類



VB1

VI群



VIA1



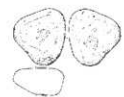
VIA4

VI群

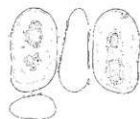


VI1

VI2



VI3



VI4

VI群



VI5

磨製石器群

VI群 石斧

(A類) 磨製石斧 製作技法から4細分した。

- 1 擦り切り技法により製作されたもの
- 2 打ち欠きにより整形されたもの
- 3 敲打 (ベッキング) により整形されたもの
- 4 磨きのみにより整形されたもの
- 5 擦り切り残片

6 研磨石材

9 破片 (細分の困難な破片)・未成品など

(B類) 石のみ

礫石器群

VI群 たたき石 素材の形態および、たたき痕の位置から4細分した。

- 1 棒状礫・扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの
- 2 扁平礫の周縁にたたき痕のあるもの
- 3 扁平礫の腹背面にたたき痕のあるもの
- 4 くぼみ石と称されるもの
- 9 破片 (細分の困難な破片)・未成品など

VI群 すり石 素材の形態から5細分した。

- 1 断面三角形の礫の稜にすり面のあるもの
- 2 扁平礫の側縁にすり面のあるもの
- 3 半円状扁平打製石器と称されるもの
- 4 北海道式石冠と称せられるもの
- 5 円礫などの一部にすり面のあるもの
- 9 破片 (細分の困難な破片)・未成品など

IX群 石鋸・砥石

(A類) 石鋸 素材の断面幅が狭く、擦痕のある機能部の断面形がU字、V字状となるもの。

1 石鋸

9 破片 (細分の困難な破片)・未成品など

(B類) 砥石 機能部の形態から2細分した。

1 砥面に溝のあるもの

2 砥面が平滑かやや凹状になるもの

9 破片 (細分の困難な破片)・未成品など



図2



図3



図4



図5

X群 台石・石皿

IX群 石錘 打ち欠きの位置から3細分した。

1 四ヶ所に打ち欠きをもつもの

2 長軸両端に打ち欠きをもつもの

3 短軸両端に打ち欠きをもつもの

XI群 礫・礫片

1 加工痕・使用痕のある礫

2 礫・礫片

X群



X



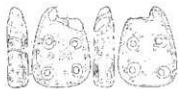
X



土製品



土製品



石製品

Ⅲ 調査の方法

IV 山越3遺跡の調査

1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）八雲南工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。工事区予定中央線上の中心軸であるSTA.601とSTA.602を結び延長して、これを基軸のMラインとした。Mラインから調査区を覆うように4m間隔の平行な直線を設定し、南西方向に平行な直線をL、K、J…ラインとし、北東方向の平行線をN、O、P…ラインとした。そしてSTA.601と直交する線を15ラインと設定した。同様に調査区を覆う4m間隔の平行な直線を設定し、北東方向の直線を16、17、18…ラインとし、南西方向を14、13、12…ラインとした。そしてこれらの交差する地点に杭を打設した（図IV-1）

なお、Mラインは真北に対してN-72.5°-Wの角度である。

この方眼の平面直角座標は第Ⅹ系で以下のとおりである。（旧測量法、日本測地系による）

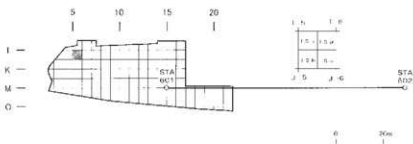
STA.601	（調査区杭番号M-15）	X=-197460.739	Y=7156.235
STA.602	（調査区外）	X=-197431.287	Y=7060.684

2 発掘調査の方法

発掘調査に先行してバックフォーにより耕作土、表土を除去した。段丘の先端部を除く調査区のほとんどの場所で深度耕作が行われており、包含層の残存状況はよくない。残存状況の目安となる胸ヶ岳火山灰（Ko-d）は八雲町内においては平均層厚にして30cmほどの堆積が見られるが、調査区内では南側にあたる境川に向かう緩斜面においてわずかに残存しているのみであった。

当初計画では15ラインより北西側が遺構確認区、南東側が発掘調査区域とされていた。しかし遺構確認調査区域においてわずかながらも包含層がプライマリーな状態で検出される部分があり、また遺構確認調査区域である15～17ラインにおいて耕作土直下から大量の遺物が出土したため、調査区全体の10%程の面積を先行して調査を行い、その結果をみて改めて遺構確認調査の設定をすることにした。先行調査の結果、Mラインと14ラインを境にした北東側、また18ラインより北西側においては遺物が希薄になることがわかった。このためMラインと14ラインから北東側の約15グリッドと18ラインより北西側約7グリッドをバックフォーによって漸移層まで掘り下げ、遺構確認調査に切り替え調査することにした（図IV-3）。

また調査区の北西と南東の境界は工事範囲によったが、遺構にかかわる部分ではさらに拡張して調査した部分もある。

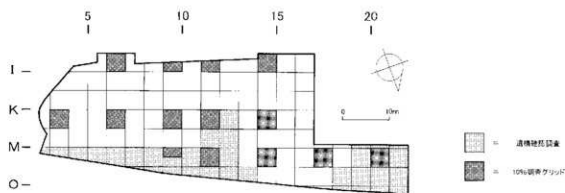


図IV-1 発掘区設定図

IV 山越3遺跡の調査



図IV-2 遺跡周辺の地形と発掘区

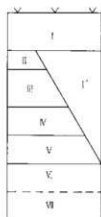


図Ⅳ-3 調査区の区分

3 基本層序

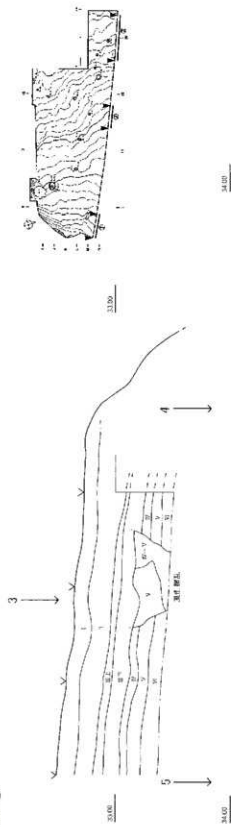
土層は当センターによる八雲町シラリカ2遺跡（北埋調報142 2000）の調査を参考にして以下のように分層した。なお、シラリカ2遺跡を始め、八雲町内で早期包含層としてしばしばみられる「暗褐色土」（シラリカ2遺跡においてはⅣ層）は指標となるKo-g火山灰を含めて確認できなかった。

- I 褐灰色土（10Y R5/1）しまりあり 粘性あり（近代耕作土）
- I' 深度耕作攪乱層 ⅡからⅤ層までが混じる層
- Ⅱ 灰白色砂（10Y R8/1）Ko-d
- Ⅲ 黒～黒褐色土（10Y R2/1～2）しまりなし 粘性なし
- Ⅳ 灰黄褐～黒褐色土（10Y R4～3/2）しまりなし 粘性なし 漸移層
- Ⅴ 明黄褐色土（10Y R6/6）ややしまりなし 粘性なし
- Ⅵ 黄橙色土（10Y R6/8）ややしまりなし 粘性なし 段丘堆積物とみられる礫を若干含む部分がある。
- Ⅶ 黄橙色土（10Y R6/8）ややしまりなし 粘性なし Ⅵ層に1 cm～人頭大の礫を多量に含む層

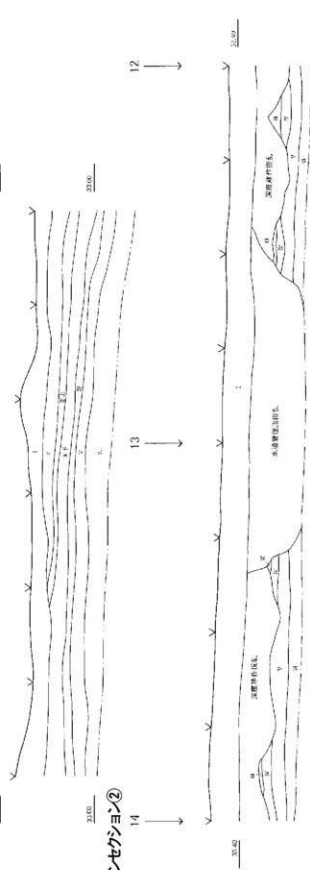


図Ⅳ-4 山越3遺跡の基本層序

メインセクション①

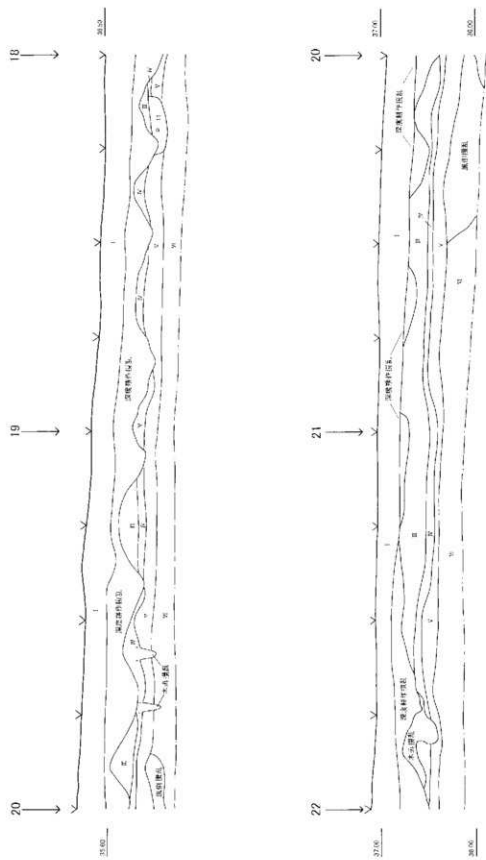


メインセクション②



図IV-5 土層断面図(1)

メインセクション③



図IV-6 土層断面図(2)

4 遺構と遺構出土の遺物

山越3遺跡では、住居跡3軒、土壇18基、焼土3ヶ所、フレイク・チップ集中域1ヶ所が検出されている。これらは、標高35m線を境に2ヶ所に分かれて検出されており、H-1、3、P-3、4、10、12-14、16-18、F-3、FC-1は段丘先端部分の沢に向かう緩斜面に位置し、H-2、P-1、2、5-9、11、15、F-1、2は段丘平坦面に位置している。これは概ね遺物の分布と重なっている。

(1) 住居跡

H-1 (図IV-8~11、表IV-1~4、図版3・4・11・12)

位置 H-5-c・d、H-6、I-5-d、I-6-a・d

規模 412×372/360×304/64cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-97°-W

確認・調査 調査区南端の緩斜面で駒ヶ岳d火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みは東西に長い楕円形を呈し、その東側の段丘平坦面には掘土とみられる褐色土も明瞭に観察された。落ち込みの中心をとおるようにトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた結果、壁・床を確認した。発見当初は1軒の住居と考えていたが、床面が2段になることからH-1と3の重複であると判断した。

しかしH-1、3の境界から柱穴が検出できなかったことから、1軒の住居の可能性も否定できない。住居の掘土は北東から南東方向の調査区外に延びている。

覆土 8層に分層した。1、5、6層は黒褐色土の自然堆積、3、4、8層はⅤ層起源とみられる黄褐色土の混じる土で人為的堆積とみられる土である。

壁・床面 壁は全周で不明瞭であったが、確認できた部分では急である。床面はほぼ平坦であるが、住居の中央からやや斜面よりの位置が円形にくぼんでいる。また基盤層であるⅣ層の礫が露出する面まで掘り込まれており、硬い。

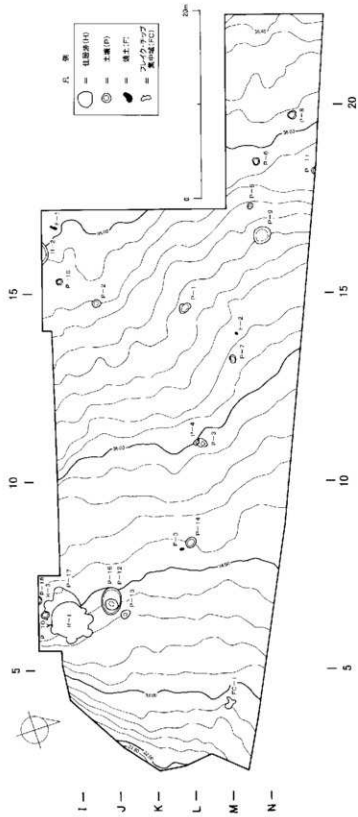
炉 検出されていない

付属ビット・柱穴 H-1と3の両住居跡をあわせて7基の柱穴(HP-1、3、4、8、9、12、14)と、8基の付属ビット(HP-2、5、6、7、10、11、13、15)を確認した。柱穴はいずれも壁と床面の境界付近で検出されている。すべて浅く、掘り方はほとんど認められない。付属ビットは住居を囲むように検出されている。いずれも浅く、皿状で住居に向かって緩やかに傾斜している。これらの付属ビットは、堅穴住居の構造材である垂木を支えたものの可能性がある。

遺物出土状況 覆土中にⅣ層起源とみられる礫、礫片が多く出土している。その他の遺物は少ないが、住居の南東壁において覆土1層下部から石皿(写真図版4-1)東壁付近の覆土1層から北海道式石冠が出土している。

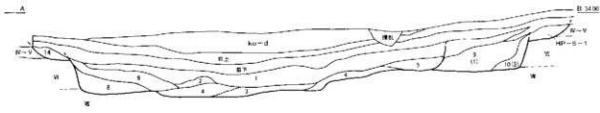
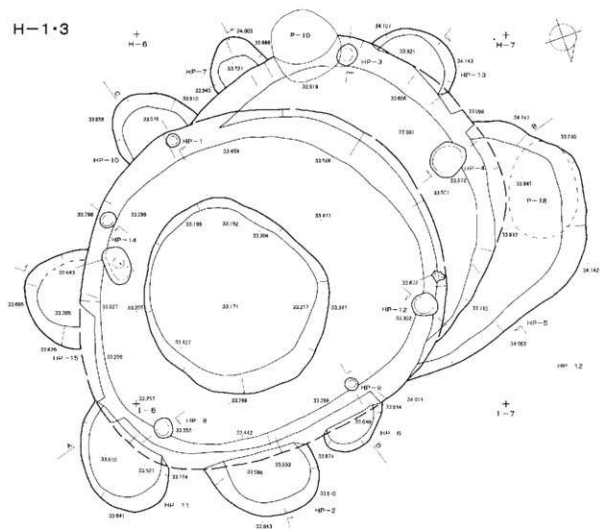
遺物 覆土からⅢ群a類土器片66点、石器等196点(うち礫・礫片は158点)が出土している。床面から出土した遺物はない。

1はⅢ群a-3類土器、4ヶ所に弁状突起をもつやや大型の深鉢である。胴部上半のみ復元できた。体部と突起部は横位の釣り耳状の貼り付けによって区画される。弁状突起には3本の貼付帯が横位につけられ、中央よりやや下に穿孔される。地文は結束第2種羽状縄文で、口唇には縄の押捺による刻みがつけられる。2はⅢ群a-1類とみられる胴部片である。無文部に馬蹄形圧痕文が施され、貼付帯上には縄の刻みがつけられる。3はⅢ群a-3類の突起部分である。台形状の突起に無文の貼付帯



図IV-7 最終面の地形と遺構位置図

H-1・3



H-1	1	宝色土	(1)VR1.7/1	粘性あり 土質なし
	2	黄赤土	(1)VR1.7/4	粘性あり 土質なし 粘りが若干あり
	3	黄赤土	(1)VR1.7/1	粘性あり 土質なし 粘性土層を 黄褐色サブソイルが多数存在
	4	黄赤土	(1)VR1.7/1	粘性あり 土質なし 粘性土層を 黄褐色サブソイルが多数存在
	5	黄赤土	(1)VR1.7/3	粘性ややわら 土質あり 黄褐色土 黄褐色土が多数存在(土質なしは若干あり)
	6	黄赤土	(1)VR1.7/3	粘性なし 土質なし
	7	黄赤土	(1)VR1.7/1	粘性あり 土質なし
	8	黄赤土	(1)VR1.7/3	粘性なし 土質なし 黄褐色土が多数存在
H-3	10(1)	黄赤土	(1)VR3.5/3	粘性あり 土質なし
	10(2)	黄赤土	(1)VR3.5/4	粘性あり 土質なし
HP-10	11	黄赤土	(1)VR3.1/1	粘性なし 土質なし
	12	黄赤土	(1)VR4/1	粘性なし 土質なし
	13	黄赤土	(1)VR4/2	粘性なし 土質なし
	14	黄赤土	(1)VR3/1	粘性なし 土質なし

図N-8 H-1・3 (1)

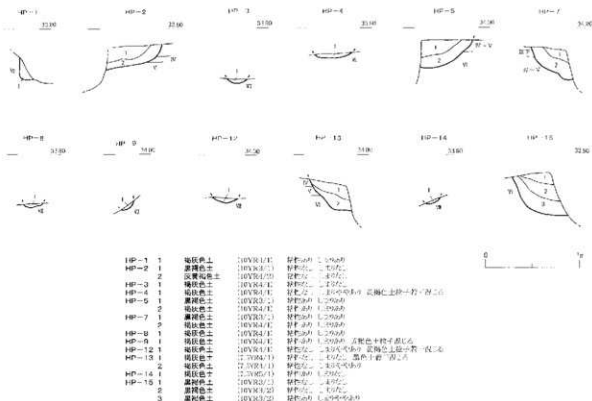
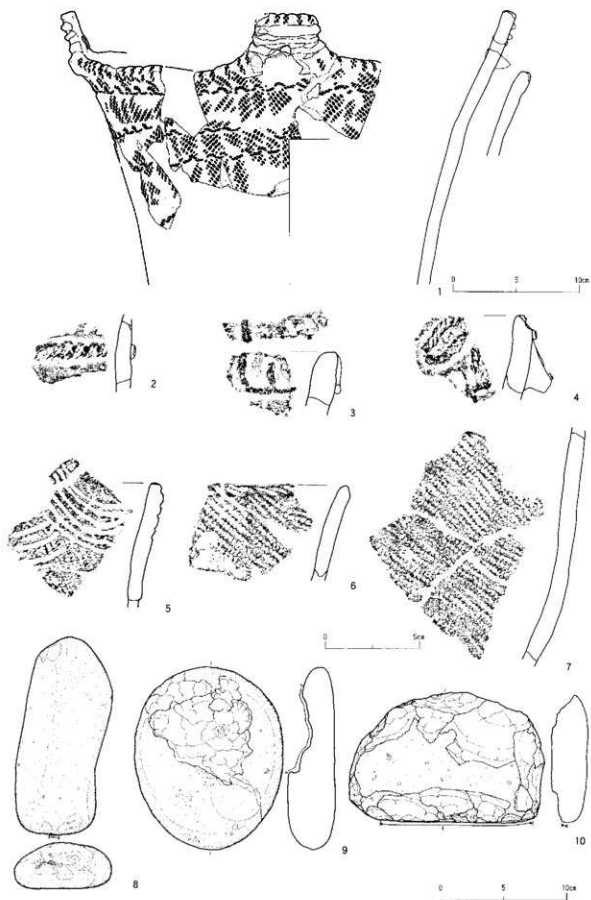


図9 H-1・3 (2)

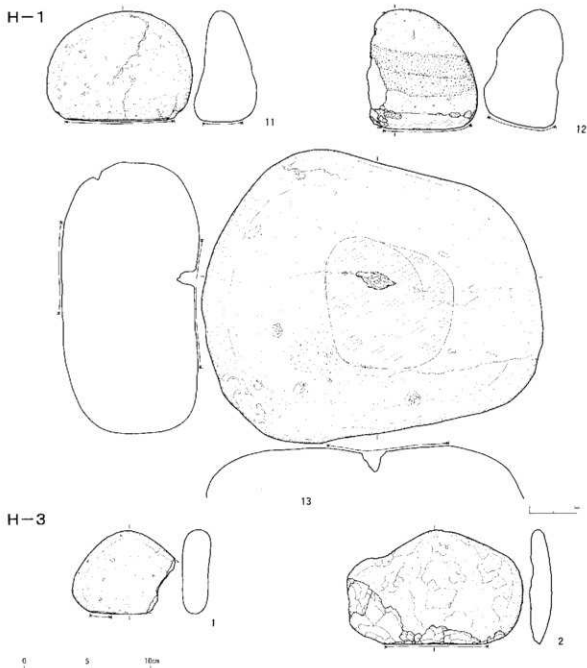
がつけられる。4は平縁土器の口唇部片とみられ、Ⅲ群 a-1の可能性があるものである。貼付帯上には縄線が施される。5～7はⅢ群 a-3類である。5は筒状工具による胸骨状の数条の沈線が施されるもので、口唇には同一の工具によるとみられる刻みがつけられる。

6, 7は同一個体と見られる。口唇はやや丸みを帯びた切り出し状を呈し、RL斜行縄文が器面全体に施される。1～7はすべて覆土1層から出土したものである。8, 9はたたき石である。8は棒状の一端に不明瞭な敲打痕があるものである。9は扁平な碟の表面中央よりやや右にずれて敲打痕があるものである。10は半円状扁平打裂石器である。扁平な碟の周囲を打ち欠いて整形されている。機能部の幅は狭い。11はすり石である。扁平な碟の側縁に弱い擦痕があるものである。12は北海道式石冠である。図の左側1/4程を欠損する。13は石皿である。扁平で厚い安山岩製のほぼ中央に使用面がある。使用面は円滑で、中央よりややずれた位置にくぼみがある。くぼみは人為的なものとみられ、深さ約2cmで円錐形に尖っている。8は覆土8層、13は覆土1層下位、その他の石器は覆土1層から出土している。

時期 付近の遺物出土状況、また覆土から出土する遺物から縄文時代中期前半円筒上層b式～サイバⅢ式の時期とみられる。



図IV-10 H-1出土の遺物(1)



図IV-11 H-1出土の遺物(2)とH-3出土の遺物

H-2 (図IV-12~15、表IV-1~4、図版4・12~14・17)

位置 G-15-c, G-16-b, H-15-d, H-16-a

規模 (250)×(112)/(222)×(92)/48cm

平面形 円形?

長軸方向 N-76.5°-W

確認・調査 調査区南側の境界においてI層を調査中に深度耕作に攪乱された黒褐色土の落ち込みを確認した。付近には風倒攪乱が多く検出されていたが、落ち込みの周囲から遺物が多く出土し遺構の可能性があった。そのため、調査区の境界に沿って落ち込みを超える範囲でトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、壁・床を確認し、覆土とみられる土から大量の遺物が出土したため住

居跡であることがわかった。住居跡は調査区外に延びており、一部調査範囲を拡張して全体の調査を進めたが確認できた範囲はおそらく全体の半分以上とみられる。平面形は検出面床面ともに円形を呈すると考えられる。

覆土 13層に分層した。覆土1～4、6、9、10、12、13層はV層起源とみられる黄褐色土の粒子またはブロック、もしくは炭化物片を含んでおり人為的に攪拌された土と考えられる。住居は掘込み面付近までこの人為的堆積で覆われているが、これらの成因は12、13層が住居構築時の掘上土とみられる他は不明である。上記以外の5、7、8、11層は自然堆積とみられる暗褐色土もしくは黒色土である。

壁・床面 壁は確認できた部分では急激に立ち上がり、床面は平坦である。

炉 検出されていない

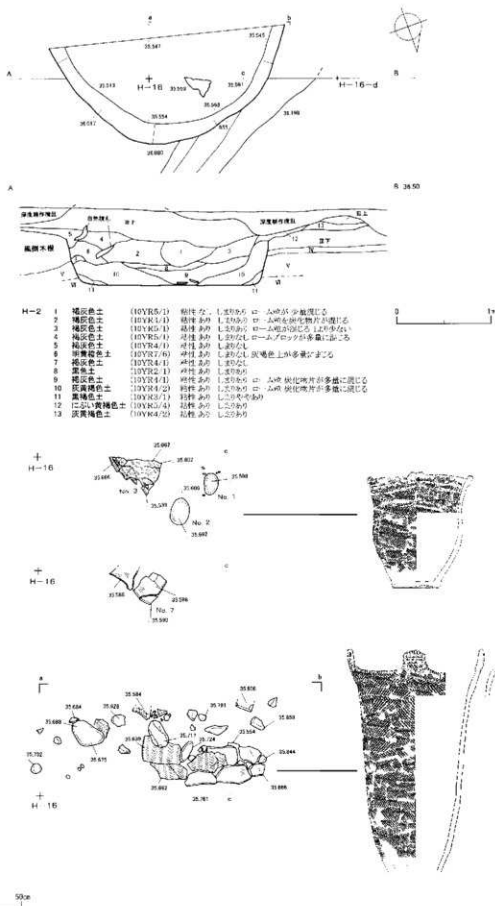
付属ビット・柱穴 検出されていない

遺物出土状況 住居中央部の覆土8層下部、覆土9層から多くの遺物が出土している。また床面からサイベ沢Ⅷ式の完形個体（図Ⅳ-12）が出土している。

遺物 覆土からⅢ群a類土器147点、フレイク・チップ10点の他、スクレイパー2点、Uフレイク10点、半円状扁平打製石器4点、礫・礫片4点が出土している。床面からはⅢ群a類土器41点の他、礫・礫片57点が出土している。1は床面から出土したⅢ群a-3類、2種2対の小さな突起がつく中型の深鉢である。口縁部はやや外反し、胴下半部が若干張り出している。突起部は口唇部を肥厚させる際にわずかにつまみ出して形成されたとみられ一方は台形様、他方は三角形で、指頭によるくぼみがある。頸部に半截竹管状工具による沈線が2条めぐり、突起部を中心に四角形の文様を配しているが、やや乱れている。地文は結束第1種羽状縄文、口唇部を肥厚させ、平坦にした部分に縄による刻みがつけられる。底部はやや上底になっている。2は覆土8層下部から出土したⅢ群a-3類、やや大型の深鉢である。全体の1/2程度残存する。突起は2種類あり正面は中央がやや尖る山形様、左方は台形を呈する。施文方法は両者とも同じで篋状工具による沈線が突起部分を区画するように数条施され、中央よりやや下に穿孔される。突起部分を含め口唇には縄による刻みがつけられる。地文は結束第1種羽状縄文である。突起以外の器面全体に横位に施される。なお1、2の土器は炭化物が付着していた。この炭化物を放射性炭素分析により年代測定したところ、1の土器の内面に付着していた炭化物2点の分析結果はそれぞれ14C補正年代で4470±40yBP、4490±40yBP（Beta-160073、160074）、2の土器の表面に付着していたものは4370±40yBP（Beta-160075）の結果がでている（第Ⅵ章1）。

3はⅢ群a-3類の小型深鉢である。4つ小さな山形突起がつき、突起の下部には剥落しているが2種2対の釣り耳状の貼り付けがある。地文は無節の結束第2種斜行縄文、口唇には篋状工具による刻みが施される。4、5はⅢ群a-1類とみられる突起部分の破片である。台形状の突起の中央よりやや下に5カ所横に並んで穿孔される。穿孔部分を挟んで貼付帯がつけられ、貼付帯上には篋状工具による刻みがつけられる。上端には粘土紐貼り付けによる鋸歯状の装飾がつけられる。5は篋状工具による沈線、管状工具による刺突文により装飾される。6～9はⅢ群a-3類である。6は突起部分がいびつなM字状を呈し、無文の貼付帯による文様がつけられている。地文は結束第1種羽状縄文、口唇には縄による刻みがつけられる。7は縄文地に篋状工具による沈線で装飾される。地文は斜行縄文に2連の結節回転文を重ねているものである。8は篋状工具による沈線のほか、円形の貼り付けがある。地文は結束第2種羽状縄文である。9はⅢ群a-3類である。山形突起の輪郭に沿って粘土紐がつけられ、突起の中心を除いて斜行縄文が施される。口縁直下から胴部にかけて半截竹管状工具による文様が描かれている。拓本土器の出土層位は4～6、9が覆土8層下、7、8が覆土3層である。

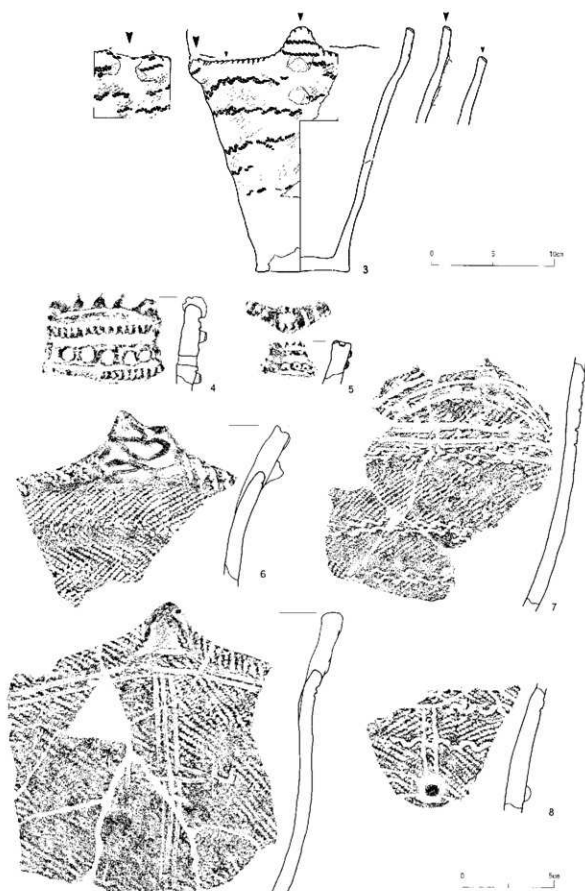
H-2



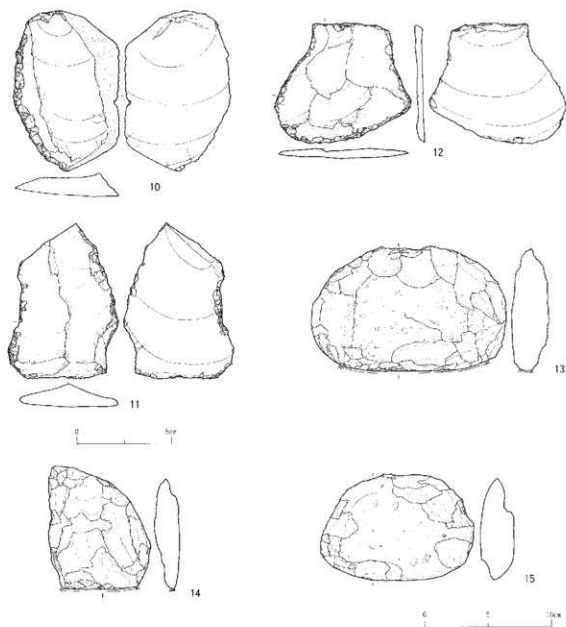
図IV-12 H-2と遺物出土状況図



図IV-13 H-2出土の遺物(1)



図Ⅳ-14 H-2出土の遺物(2)



図Ⅳ-15 H-2出土の遺物(3)

10～12はスクレイパーである。10は原石面が残る縦長剥片を用い、背面側右側縁に外湾する刃部がつくものである。11は腹面側左側縁にやや内湾する刃部がつくもの、12は安山岩製の横長剥片を素材とするもので、背面の全周が細部調整される。13～15は半円状扁平打製石器である。15は扁平礫の周囲を部分的に打ち欠いたもので、未成品とみられる。石器の出土層位はすべて覆土8層下部である。

時期 床面から出土した土器から縄文時代中期前半サイベ沢Ⅵ式の時期とみられる。

H-3 (図IV-8~11、表IV-1・4、図版4・12)

位置 H-6-a・c・d, H-7-a・b

規模 (356)×(100)/(324)×(60)/36cm

平面形 —

長軸方向 N-30° —W

確認・調査 H-1のトレンチにおいて確認し、断面観察より古い方をH-3とした。ほとんどがH-1と重複するため全容は不明である。また、H-1とともに、南西部にベンチ状の構造物をもつ1軒の住居である可能性は否定できない。

覆土 2層に分層した。灰褐色土とにぶい黄褐色土の堆積である。

壁・床面 確認できた部分の壁は急で床面は平坦である。

炉 検出されていない

付属ビット・柱穴 検出されているが、H-1に属するものと明確に区別できなかったため、H-1で述べてある。

遺物出土状況 H-1に同じく覆土中からⅦ層起源とみられる礫が多く出土している。

遺物 覆土からⅢ群a類土器片23点、すり石1点、半円状扁平打製石器1点、礫・礫片129点が出土している。床面からは出土していない。

1はすり石である。扁平礫の側縁に弱い擦痕のあるものである。2は半円状扁平打製石器である。扁平礫の2側縁を打ち欠いたもので、幅の狭い機能部を有する。ほとんど加工されていないが、形態上から半円状扁平打製石器とした。

時期 重複するH-1と覆土の色調等が類似しているため、縄文時代中期前半円筒上層b式~サイベ沢Ⅶ式の時期とみられる。

(2) 土壌

P-1 (図IV-16、表IV-1、図版5)

位置 K-14-b・c

規模 142×104/110×70/22cm

平面形 不整形

長軸方向 N-23° —W

確認・調査 V層上面を精査中に、深度耕作に攪乱される黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた結果、凸凹の壙底と緩やかに立ち上がる壁を確認して土壌であることがわかった。

覆土 6層に分層した。自然堆積とみられる。

遺物 覆土からⅦ層起源とみられる礫が10点出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅶ式前後の時期とみられる。

P-2 (図IV-16、表IV-1、図版5)

位置 I-14-c・d

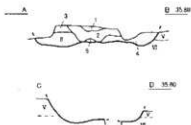
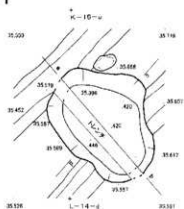
規模 84×78/54×40/34cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-22.5° —W

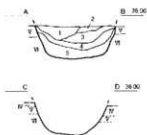
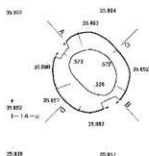
IV 山越3遺跡の調査

P-1



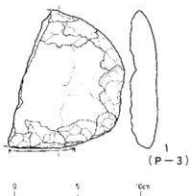
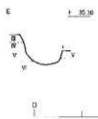
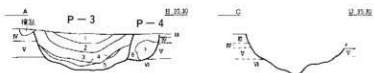
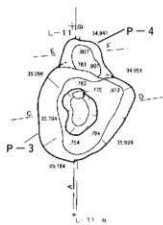
- | | | | | |
|---|---------|-----------|------|---------------------|
| 1 | 黒褐色土 | (10YR5/3) | 粘性あり | しずりなし |
| 2 | 褐灰色土 | (10YR4/4) | 粘性あり | しずりなし |
| 3 | 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性あり | しずりなし |
| 4 | にぶい黄褐色土 | (10YR5/3) | 粘性あり | ややしずりあり 黄褐色コーム状に混じる |
| 5 | 黒褐色土 | (10YR2/1) | 粘性あり | ややしずりあり |
| 6 | 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり | しずりなし 黄褐色コームが混在に混じる |

P-2



- | | | | | |
|---|------|-----------|------|-------------------|
| 1 | 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり | しずりなし |
| 2 | 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり | ややしずりあり |
| 3 | 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性あり | ややしずりあり 黄褐色土が少量混在 |
| 4 | 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり | しずりなし 腐葉土層 |
| 5 | 黄褐色土 | (10YR5/6) | 粘性なし | しずりややあり 腐葉土が若干混在 |

P-3・4



- | | | | | |
|---|---------|-----------|--------|-----------------|
| 1 | 反白シルト | (10YR6/1) | 粘性なし | しずりなし |
| 2 | 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しずりややあり しずり層 |
| 3 | 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しずりなし |
| 4 | 暗黄褐色土 | (10YR5/5) | 粘性なし | しずりなし 4と5境目に混在 |
| 5 | 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性なし | しずりなし |
| 6 | 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性ややあり | しずりなし コーム粒 若干混在 |
| 7 | にぶい黄褐色土 | (10YR5/4) | 粘性ややあり | しずりなし コーム粒 若干混在 |

図IV-16 P-1~4とP-3出土の遺物

確認・調査 V層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの形状が不明瞭であったため、長軸方向にトレンチを設定して深さにして5cm掘り下げた時点で楕円形を呈する平面形を確認した。そのため半載して壁、壙底を確認し、土壌であることがわかった。

覆土 5層に分層した。1～2、4層は自然堆積、3には黄褐色土が混じる黒褐色土、5層は埋め戻しの可能性のある土である。

遺物 覆土から礫・礫片が4点出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅲ式前後の時期とみられる。

P-3 (図Ⅳ-16、表Ⅳ-1・4、図版5)

位置 L-10-d, L-11-d

規模 (110)×(86)／82×(62)／40cm

平面形 不整形

長軸方向 N-161°-W

確認・調査 L-11区の調査中、L-10区側の壁面に火山灰を伴う黒褐色土の落ち込みを確認した。グリッドの境界に沿って掘り下げたところ凸凹の壙底、緩やかに立ち上がる壁を確認し土壌であることがわかった。壙底に段差があったため、土層を改めて確認すると重複する2つの土壌(P-3, 4)であることがわかった。先後関係から新しいほうを本遺構とした。

覆土 5層に区分した。4層以外は自然堆積である。

遺物 覆土から半円状扁平打製石器片1点、礫・礫片が1点出土している。1は半円状扁平打製石器である。破片であるが扁平礫の周縁を打ち欠いて整形され、機能部の幅は狭い。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅲ式前後の時期とみられる。

P-4 (図Ⅳ-16、表Ⅳ-1、図版5)

位置 L-10-d, L-11-d

規模 (60)×(32)／(26)×(26)／24cm

平面形 不整形

長軸方向 N-150°-W

確認・調査 P-3の調査中、断面観察から重複するより古い遺構を確認し、本遺構とした。半載して土壌であることがわかった。壙底と壁は緩やかに連続し、椀状を呈する。

覆土 2層に区分した。黄褐色土粒子が混じる褐色土で構成される。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅲ式前後の時期とみられる。

P-5 (図Ⅳ-17、表Ⅳ-1、図版5)

位置 M-17-a・b

規模 (66)×(56)／(40)×(25)／20cm

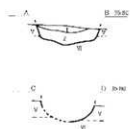
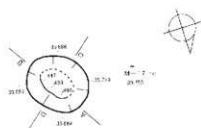
平面形 楕円形

長軸方向 N-41°-W

確認・調査 V層上面を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。半載するとやや凸凹のある壙底と急激に立ち上がる壁を確認し、土壌であることがわかった。

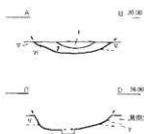
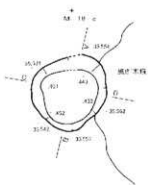
IV 山越3遺跡の調査

P-5



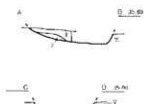
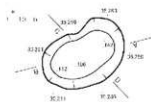
- 1 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め
2 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め

P-6



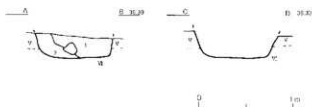
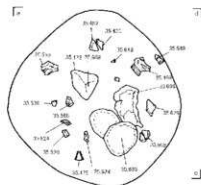
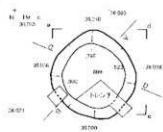
- 1 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め
2 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め

P-7



- 1 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め
2 褐色土 (7.5V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め

P-8



- 1 褐色土 (10V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め
2 褐色土 (10V10/1) 粘質土、やや粘り、赤褐色土を混在し認め

図IV-17 P-5～8とP-8遺物出土状況図

覆土 2層に区分した。褐灰色土を呈する自然堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式の時期とみられる。

P-6 (図Ⅳ-17、表Ⅳ-1、図版5)

位置 M-18-b・c

規模 84×80/60×60/3 cm

平面形 不整形円形

長軸方向 N-145° -W

確認・調査 V層上面を精査中に風倒木痕に重複する黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果緩やかに椀状を呈する壁・壙底を確認し、土壌であることがわかった。

覆土 2層に区分した。黒褐色土の自然堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式の時期とみられる。

P-7 (図Ⅳ-17、表Ⅳ-1、図版5)

位置 L-13-a・b

規模 94×62/72×40/16cm

平面形 不整形円形

長軸方向 N-104° -W

確認・調査 VI層上面を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。半載して壁・壙底を確認して土壌であることがわかった。

覆土 2層に分層した。黒色土の自然堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式の時期とみられる。

P-8 (図Ⅳ-17・18、表Ⅳ-1・3・4、図版5・14・15)

位置 N-19-c

規模 88×66/85×63/24cm

平面形 ほぼ円形

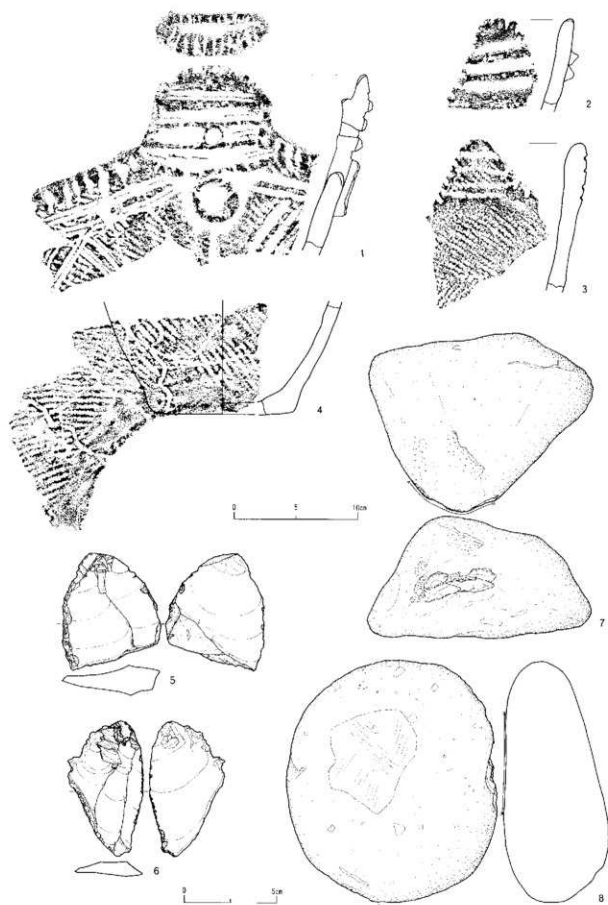
長軸方向 N-315° -W

確認・調査 V層上面を精査中に黄褐色土の混じる黒褐色土の落ち込みを確認した。半載すると覆土中から遺物が出土し、ほぼ平坦な壙底、急激に立ち上がる壁を確認したため、土壌であることがわかった。覆土が埋め戻しとみられることから、土壌墓の可能性がある。

覆土 2層に分層した。いずれもローム粒子、炭化物片が混じる人為的堆積である。

遺物 覆土1層からⅢ群a類土器片18点、スクレイパー1点、Uフレイク1点、フレイク・チップ2点、たたき石1点、すり石1点、台石1点、礫・礫片2点が出土している。

1～4はⅢ群a-3類である。1は突起部分に貼付帯が横位に3条つけられ、貼付帯に沿って半載竹管状工具による沈線が施される。貼付帯上には椀状工具による刻みがつけられ、突起の直下には円



図IV-18 P-8出土の遺物

形の貼り付けがつけられる。地文はLRの斜行縄文、口縁直下とそこから胴部にかけて2条の半截竹管状工具による沈線が施される。口唇には縄を押捺した刻み目がある。2は突起部中央に横方向の貼付帯が2条施されている。先端には縄を押捺した刻み目がつけられている。3は突起部分に縄線が4条施され、口唇には縄の押捺による刻み目がつけられている。地文は結束第1種羽状縄文である。4は底部片である。縄文地に垂下し蛇行する沈線がつけられている。1は覆土2層、2～4は覆土1層からの出土である。5はスクレイパーである。原石面が残る剥片を用い、背面側左側縁に刃部を作出するものである。6はUフレイクである。背面側左側縁に微細な剥離痕がある。7はたたき石である。三角柱状の礫の一端に敲打痕があるものである。8は石皿である。礫の表面、中心付近が使用されるもので、使用面は円滑である。5、6は覆土2層、7、8は覆土1層から出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式の時期とみられる。

P-9 (図Ⅳ-19・20、表Ⅳ-1～3、図版6・15)

位置 M-16

規模 184×140/120×114/22cm

平面形 不整形円形

長軸方向 N-71.5°-W

確認・調査 深度耕作攪乱を除去中に水道管理設坑に攪乱される黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定してV層まで掘り下げた結果、緩やかに凸凹する坑底を確認し土壌とした。しかし攪乱の影響で土壌の全容は不明であり、自然攪乱に伴う落ち込みの可能性もある。

覆土 3層に区分した。

遺物 覆土からⅢ群a類土器片81点、フレイク・チップ1点、礫・礫片4点が出土している。1～7はⅢ群a-3類土器である。1は4つの台形突起がつく大型の深鉢で、突起部分には横位の貼付帯がつけられ、中央に穿孔される。地文は結束第1種羽状縄文、口唇には縄の押捺による刻み目がつく。2は半截竹管状工具による沈線と円形の貼り付けがつけられる。3は突起中央に垂下する短い貼り付けがつき、貼付帯と口唇には縄の押捺による刻み目がつけられる。4は地文が結束第1種羽状縄文であり、口唇には縄の押捺による刻みが施される。口唇端部は平坦面が作られ、やや角張っている。Ⅲ群a-1の可能性もある。5はLR斜行縄文が施され、口唇には縄の押捺による刻み目がある。6は胴部の強く張る壺形状の器形とみられる胴部片で、縄文地に篋状工具による横位で2条の沈線がつけられ、円弧状を呈している。すべて覆土上面から出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

P-10 (図Ⅳ-20、表Ⅳ-1、図版6)

位置 G-6-b・c、H-6-a・d

規模 76×70/56×54/32cm

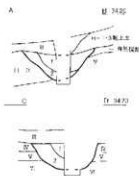
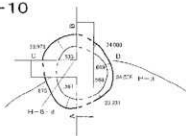
平面形 ほほ円形

長軸方向 N-11°-W

確認・調査 H-3の南西壁を確認するため、トレンチを設定して掘り下げたところ、H-3とは別の落ち込みを確認した。そのため、トレンチをさらに延長して椀状の断面形を確認し、H-3より新しい土壌であることがわかった。



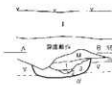
P-10



- 1 灰褐色土 (7.0182/1) 粘土あり、土質の硬
- 2 赤色土 (7.0182/1) 粘土あり、土質の硬

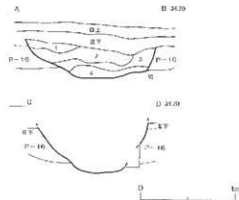
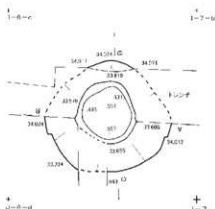
P-11

N-1B



- 1 灰褐色土 (0.0184/2) 粘土あり、土質の硬
- 2 赤褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬
- 3 赤褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬

P-12



- 1 灰褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬
- 2 赤褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬
- 3 赤褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬
- 4 赤褐色土 (0.0184/1) 粘土あり、土質の硬

図N-20 P-9出土の遺物(2)とP-10~12

覆土 2層に区分した。自然堆積とみられる。

遺物 覆土からⅢ群 a 類土器片が1点出土している。1はⅢ群 a 類土器の底部付近の破片である。結束2種羽状縄文が横位に施文される。

時期 不明であるが覆土の色調、掘込み面などから縄文時代中期サイベ沢Ⅷ式前後の時期とみられる。

P-11 (図Ⅳ-20、表Ⅳ-1、図版6)

位置 N-18-a

規模 64×(36)/44×26/16cm

平面形 円形?

長軸方向 N-67° -W

確認・調査 V層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは調査区外に延びていたため調査区境に沿って半載した。その結果、椀状の壙底、急な壁を確認し、土壙であることがわかった。

覆土 3層に区分した。いずれも炭化物片あるいはV層起源とみられる黄褐色土が混じっており、人為的堆積の可能性が高い。

遺物 覆土からフレイク・チップ1点、礫・礫片1点が出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅷ式の時期とみられる。

P-12 (図Ⅳ-20、表Ⅳ-1、図版6)

位置 I-6-c

規模 134×118/64×66/38cm

平面形 ほぼ円形

長軸方向 N-68° -W

確認・調査 I-7区のV層上面を精査中I-6区側の壁面に褐灰色土の落ち込みを検出した。I-6区を精査したところ、H-1の掘り上土を切る楕円形の落ち込みを確認した。落ち込みの長軸に沿い、落ち込みの範囲を超えてトレンチを設定してV層まで掘り下げた結果、2基の土壙(P-12、16)であることがわかった。2基は入れ子状に重複しており、そのうち新しいものが本遺構である。

覆土 4層に区分した。自然堆積とみられる。

遺物 覆土からⅢ群 a 類土器片1点、礫・礫片1点が出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物、検出状況から縄文時代中期サイベ沢Ⅷ式前後の時期とみられる。

P-13 (図Ⅳ-21、表Ⅳ-1・2、図版6)

位置 J-6-a・d

規模 110×66/20×22/36cm

平面形 楕円形?

長軸方向 N-35° -W

確認・調査 H-1の調査中、掘上土の厚さを確認するために北に向かってトレンチを設定した。トレンチをV層まで掘り下げたところ、壁面に黒褐色土の落ち込みを確認した。H-1の掘上土を切つて作られている。断面形は概ね椀状を呈し、平面形は楕円形とみられる。

IV 山越3遺跡の調査

覆土 3層に区分した。覆土の中心位である2層は炭化物片、黄褐色土の混じる土である。

遺物 覆土中からⅢ群 a 類土器片24点が出土している。1は覆土2層から出土した破片が17点接合したⅢ群 a-3 類土器である。上下の破片は接合していない。同一個体とみられる。山形の突起がつく中型の深鉢である。縄文地に篋状工具による沈線で施文される。沈線は口縁に沿って2条、胴部上半横位に2条施され、その間に突起中央から垂下する3条の沈線でつなげている。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物、検出状況から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

P-14 (図IV-21、表IV-1・2、図版7)

位置 K-8-d, L-8-a・d

規模 120×104/76×70/46cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-56°-W

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定してV層まで掘り下げたところ、やや袋状を呈する断面を確認し、土壌であることがわかった。しかし、北東側を風倒木痕に攪乱され、壙底からは木根攪乱が検出されているため、自然攪乱の形成に伴う自然の落ち込みである可能性もある。土壌の形状は土壌の下部が壙口よりも広がるいわゆるフラスコピットである。壁は確認できた部分すべてオーバーハンクするが、南東側でやや角度が大きい他は比較的緩やかである。

覆土 5層に分層した。覆土の中心位2層は褐灰色土にV層起源とみられる黄褐色ブロックが混じる人為的に攪拌された土である。

遺物 覆土からⅢ群 a 類土器片が26点、礫・礫片が2点出土している。1は覆土1～3層から出土した破片が接合したⅢ群 a-3 類土器である。上下の破片は接合していない。同一個体とみられる。底部は円形だが上半部はいびつで、上面観は楕円形である。縄文地に2条単位の沈線で文様が描かれる。地文は結束第1種羽状縄文で文様帯より上位は概ね横位に施文されるが、下位は縦位に施文される。2はⅢ群 a 類土器の底部片である。結束第1種羽状縄文が施文される。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

P-15 (図IV-22、表IV-1、図版7)

位置 H-15-a・b

規模 72×60/58×46/20cm

平面形 不整形円形

長軸方向 N-29°-W

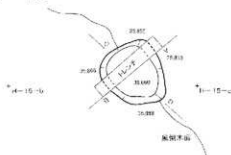
確認・調査 IV層上面を精査中に風倒木痕を切っている黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通り風倒木痕の中心に向かう方向にトレンチを設定してVI層まで掘り下げた結果、碗状の断面を確認し、土壌であることがわかった。

覆土 2層に区分した。自然堆積とみられる。

遺物 出土していない。

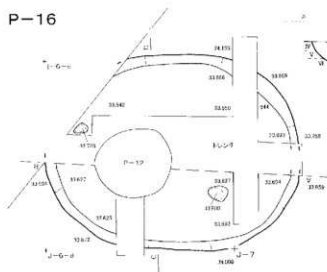
時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

P-15

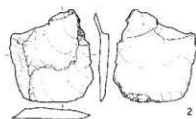


- 1 褐色色土 (10YR6/1) 粘りなし、しめりなし
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘りなし、しめりなし

P-16



- 1 褐色色土 (10YR6/1) 粘りなし、しめりなし
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘りなし、しめりなし



図IV-22 P-15・16とP-16出土の遺物

P-16 (図IV-22、表IV-1・3・4、図版7)

位置 I-6-c・d, I-7-b

規模 268×210/250×190/30cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-77°-W

確認・調査 確認の経緯はP-12で述べたが、トレンチ調査の結果2基の入れ子状に重複する土壌を検出した。より新しく、内側に位置するものがP-12、古く外側に位置するものが本遺構である。土壌は東西方向に長い比較的整った楕円形を呈し、壁は急で平底は平坦である。

覆土 2層に区分した。自然堆積とみられる。

IV 山越3遺跡の調査

遺物 覆土からⅢ群 a 類土器片 7 点、頁岩原石 1 点、U フレイク 1 点、フレイク・チップ 1 点、礫・礫片 1 点が出土している。1 はⅢ群 a-3 類とみられる口縁部片である。斜行縄文が施され、口唇には縄の押捺による刻みがつけられる。2 は U フレイクである。原石面の残る不定形な剥片を素材とし、背面右側縁と腹面下端に連続しない微細な剥離痕がつく。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅳ式前後の時期とみられる。

P-17 (図Ⅳ-23、表Ⅳ-1、図版7)

位置 G-6-c

規模 86×(32)/56×(26)/44cm

平面形 楕円形?

長軸方向 N-150°-W

確認・調査 V 層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは調査区外に延びていたため、調査区境界に沿って半載した。その結果、急激に立ち上がる壁と小さな平坦面のある断面を確認にして土壌であることがわかった。

覆土 5 層に区分した。調査区外に延びる成因を特定できない 2 層の掘上土状を呈する褐色土の堆積があり、それらに覆われるような状況を呈している。その他は自然堆積とみられる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅳ式前後の時期とみられる。

P-18 (図Ⅳ-23、表Ⅳ-1、図版7)

位置 H-7-a・b

規模 104×74/88×62/36cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-95°-W

確認・調査 H-1・3 の H P-5 調査中、墳底に黒褐色土の落ち込みを確認した。半載すると壁、床を確認でき、土壌であることがわかった。確認の状況から H-1・3、H P-5 との先後関係は不明である。土壌の平面形は南北に長い楕円形を呈し、壁は急であるが西側で緩くオーバーハングする。

覆土 4 層に分層した。1 層は埋め立てられたものである可能性がある。

遺物 覆土からⅢ群 a 類土器片 7 点、フレイク・チップ 2 点、安山岩の礫片 3 点が出土している。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅳ式前後の時期とみられる。

(3) 焼土

F-1 (図Ⅳ-23、表Ⅳ-1、図版7)

位置 H-16-d

規模 52×12/3 cm

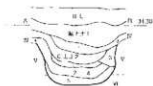
長軸方向 N-139°-W

確認・調査 IV 層上面を精査中に確認した。土器集中 3 に隣接する不明瞭な焼土である。

遺物 出土していない。

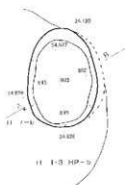
時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅳ式前後の時期とみられる。

P-17



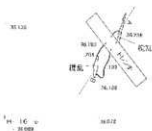
- P-17 1 褐色土 (10YR4/1) 粘土あり し 30%
 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘土あり し 20%
 3 灰褐色土 (10YR4/4) 粘土あり 40% 土中木片
 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土なし し 20%なし 木片あり
 5 灰褐色土 (10YR5/2) 粘土ありなし し 20%なし
 底土 1 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘土なし し 20%なし + 土粒と磨定して得れる
 コームノブタが遺物に散在
 底土 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) コームノブタが散在に散在 粘土あり し 20%なし

P-18



- P-18 1 褐色土 (10YR4/1) 粘土あり し 20%なし 灰褐色土粒を若干含む
 2 褐色土 (10YR4/1) 粘土あり し 20%あり
 3 灰褐色土 (10YR5/1) 粘土あり し 20%なし 粘土付石片
 4 褐色土 (10YR4/7) 粘土あり し 20%なし

F-1



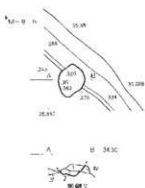
F-2



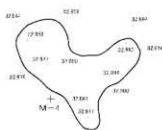
- 1 黒色土 (10YR1/1) 粘土あり し 20%なし 褐色土粒が散在

- 1 褐色土 (10YR4/2) 粘土なし 40% 20%あり

F-3



FC-1



- 1 褐色土 (10YR4/1) 粘土なし し 20%あり
 2 黒色土 (10YR2/1) 粘土なし し 20%あり 灰褐色土粒が散在



図IV-23 P-17・18、F-1~3、FC-1

IV 山越3遺跡の調査

F-2 (図IV-23、表IV-1、図版7)

位置 M-13-d

規模 24×18/4 cm

長軸方向 N-118.5° -W

確認・調査 IV層上面を精査中に確認した。不明瞭な焼土である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

F-3 (図IV-23、表IV-1、図版8)

位置 M-8-b

規模 34×28/12cm

長軸方向 N-150° -W

確認・調査 IV層上面を精査中に確認した。不明瞭な焼土である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

(4) フレイク・チップ集中域

FC-1 (図IV-23、表IV-1、図版8)

位置 L-3-c, L-4-b, M-4-a

規模 130×102cm

確認・調査 IV層上面を精査中に確認した。剥片の分布に粗密はなくまばらである。

遺物 検出面でⅢ群 a 類土器片2点、フレイク108点が出土している。フレイクはすべて同一母岩の頁岩であり、長辺の長さはほぼ5cm未満である。

時期 不明であるが周囲から出土する遺物から縄文時代中期サイベ沢Ⅵ式前後の時期とみられる。

5 包含層出土の遺物

(1) 土器

包含層から出土した土器の総点数は6,972点であるが、うちⅢ群a類に属するものが最も多く全体の9割以上を占める。ついでわずかであるが多い順からⅣ群a類、Ⅱ群b類、Ⅰ群b類と続いている。

Ⅲ群a類の出土状態は段丘平坦面にあたる10～17ラインと段丘緩斜面にあたる8ライン以東に集中している。これは遺構の検出位置には重なっている。

縄文時代早期の土器 Ⅰ群 (図Ⅳ-34-17、図版23、表Ⅳ-6)

2点のみ出土している。17は東釧路Ⅲ式に相当するとみられる底部片である。縄文早期土器の出土は予想していなかったため、この破片の出土したH-15グリッドを中心に早期包含層とみられるV層を念入りに調査したが、この2点以外は出土しなかった。

縄文時代前期の土器 Ⅱ群 (図Ⅳ-34-18、19、図版23、表Ⅳ-6)

円筒下層式に相当するとみられる破片が18点出土している。2は口縁部。縄による刻みのついた太い貼付帯が文様帯と胴部を区画し、文様帯は横位の縄線によって施文される。19は多軸絡条体の回転文、細かい結束第2種羽状縄文によって施文される。

縄文時代中期の土器 Ⅲ群a類 (図Ⅳ-25-44-1～16、20～79 図版19～30 表Ⅳ-5、6)

Ⅲ群a-1類 (図Ⅳ-34-20、21)

20a・bは同一個体とみられるもの。aは口縁部である。貼付帯による文様が施され、貼付帯上には縄の押捺による刻みがつけられ、貼付帯間には三本一組の縄線により装飾される。bは底部である。結束第1種羽状縄文が底部ざりぎりまで横位に施文される。21は口縁部である。口唇は切り出し状に整形され口縁に沿って縄による馬蹄形圧痕文が連続施文される。

Ⅲ群a-3類 (図Ⅳ-34-44-1～16、22～79)

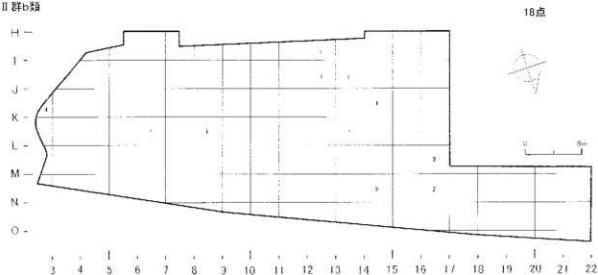
本遺跡出土の土器にはⅢ群a-2類に属すると見られるものも出土している。しかし、後続するⅢ群a-3類と出土層位、出土地点または文様構成においても両者を区別するのは困難であった。よってここでは沈線文で文様を描くものとそうでないものに大別し、後者を①、②の2種に、前者を③～⑥の4種に分け、施文される文様の種類と構成から古い要素とみられる順に報告する。

① 刻みのつけられた貼付帯で文様が描かれるもの (1、22～24)

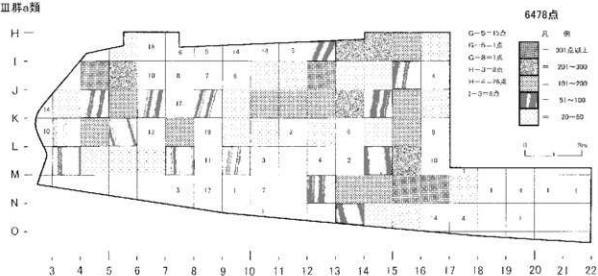
1は4つの台形状突起がつく高さ67.5cmの大型深鉢で、土器集中5で出土した。胴部上半は口縁に向かって緩やかに外反し、胴部は直立して底部付近で急にすぼまる。口縁直下に貼付帯が1条つけられる。突起部は円弧状の貼付帯によって胴部と区画され、その下には短い垂下する貼付帯がつけられる。突起部は横位の貼付帯が4条つけられ、突起の頂部には円弧状の短い貼付帯がつく。すべての貼付帯には平行な縄の押捺がみられる。地文は結束第1種羽状縄文である。22は口縁に沿って横位に縄の押捺のついた2条の貼付帯がつけられる。口唇断面は角があり、上面は平坦で縄の押捺がつけられる。地文は結束第1種羽状縄文である。23は台形突起がつくものである。突起部には3条の貼付帯が

IV 山越3遺跡の調査

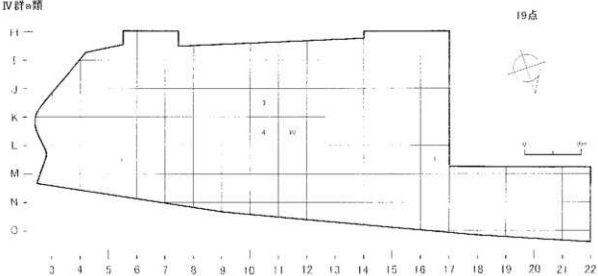
II群の類



III群の類



IV群の類



図IV-24 包含層出土の土器の分布

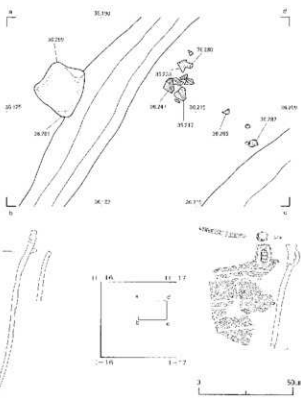
土器集中1



土器集中2

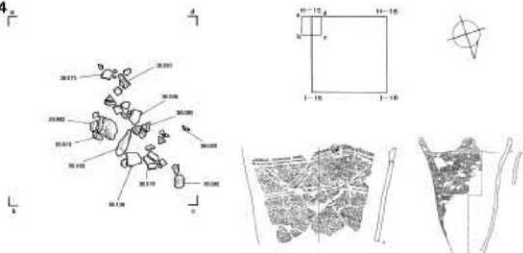


土器集中3

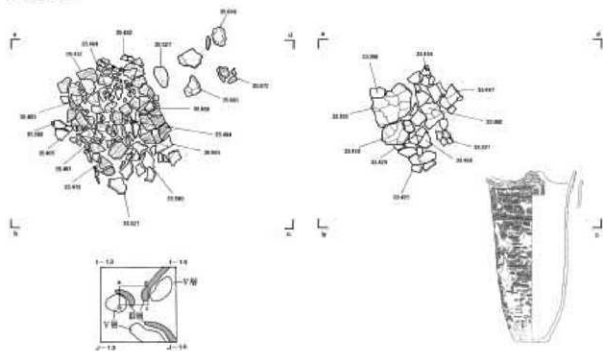


図IV-25 包含層土器出土状況図(1)

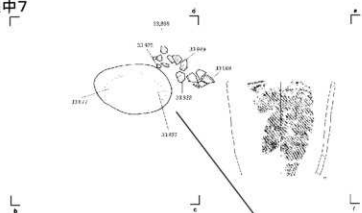
土器集中4



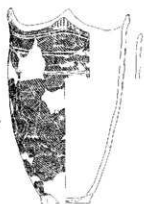
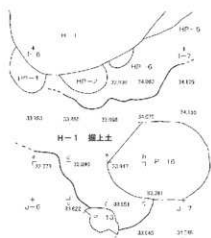
土器集中5



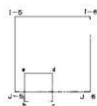
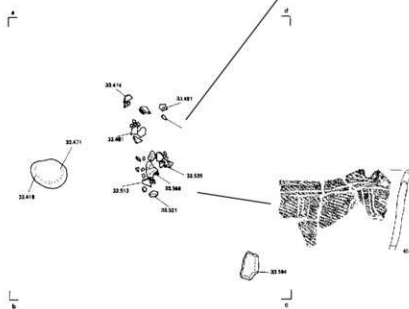
土器集中7



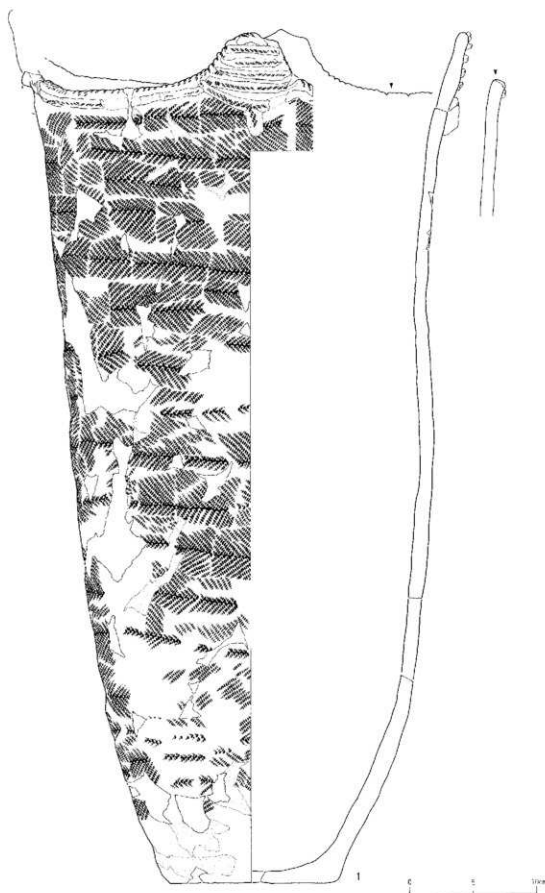
土器集中8



土器集中9

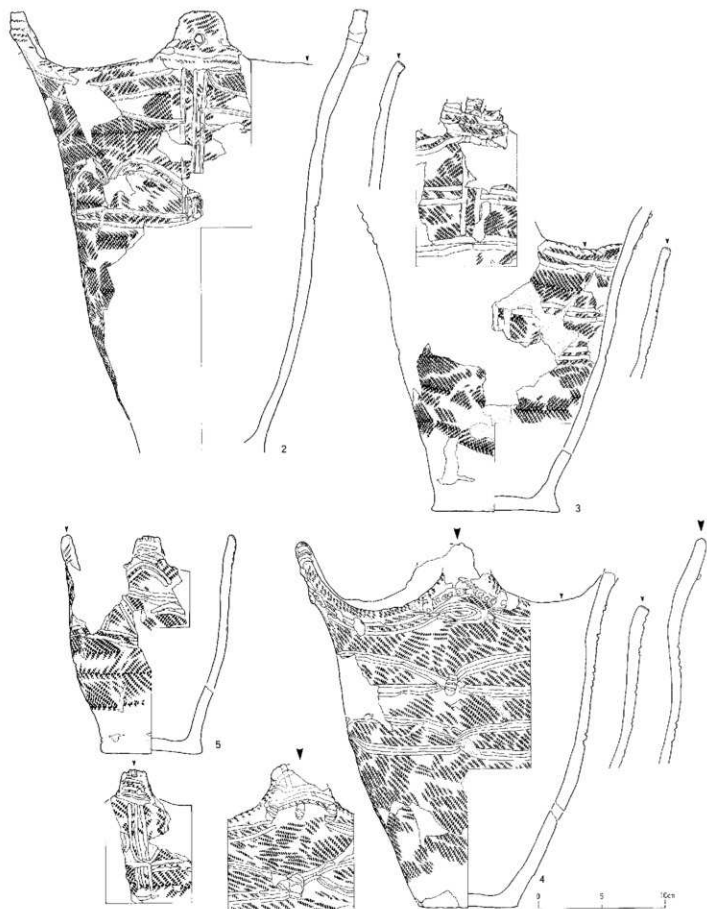


図IV-27 包含層土器出土状況図(3)

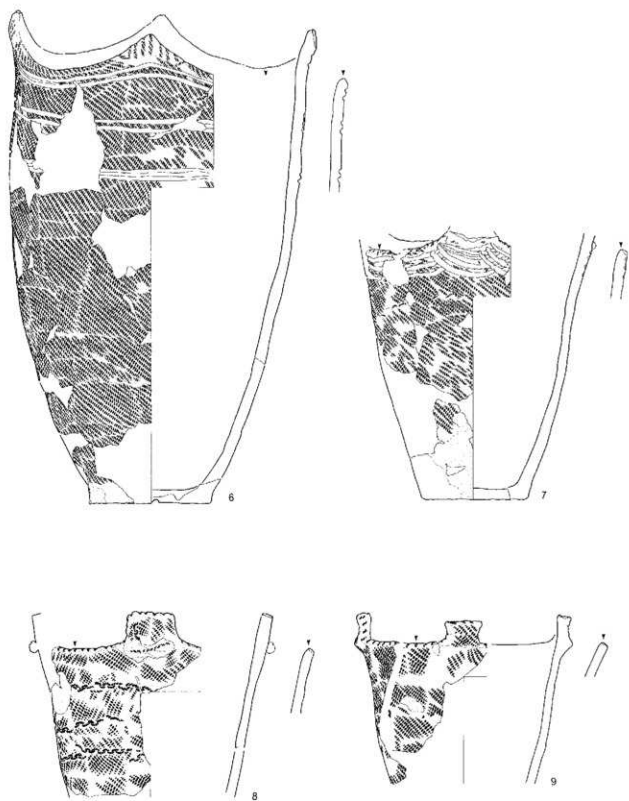


図IV-29 包含層出土の土器(1)

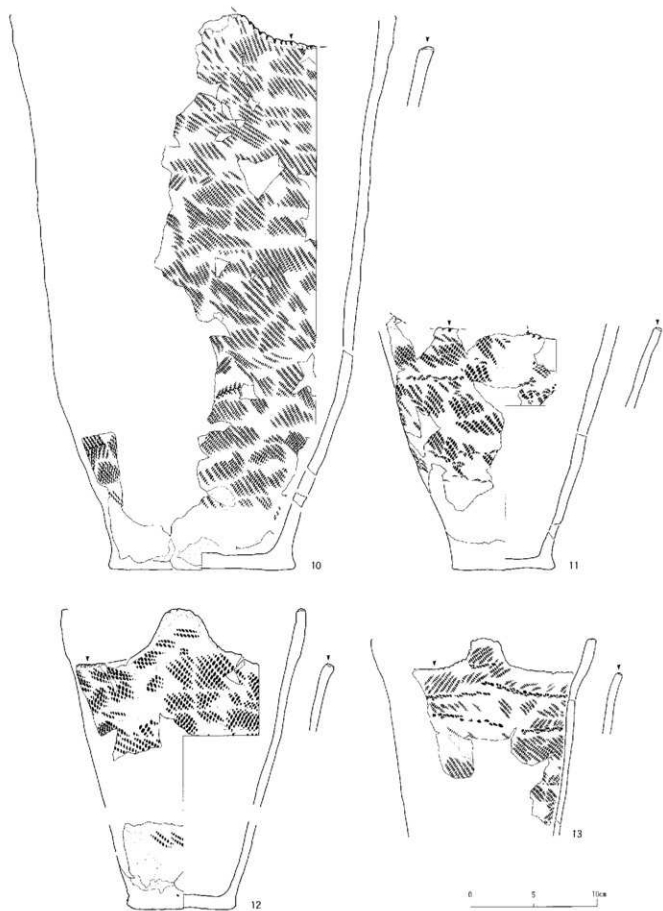
IV 山越3遺跡の調査



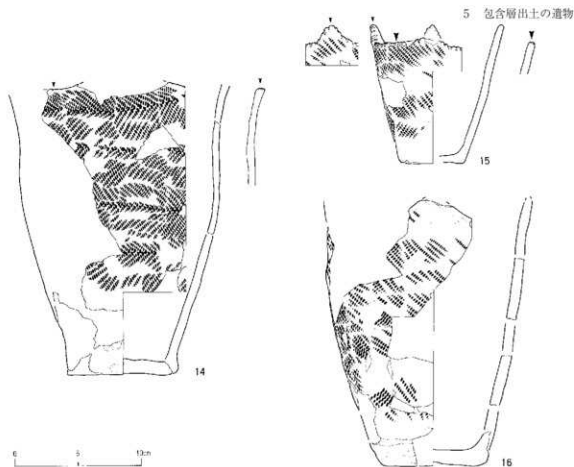
図IV-30 包含層出土の土器(2)



図Ⅳ-31 包含層出土の土器（3）



図IV-32 包含層出土の土器(4)



図Ⅳ-33 包含層出土の土器（5）

29は山形突起のつくもので、粘土紐を貼り付けて肥厚させ、縄が押捺されている。体部は縄文地に棒状工具によるとみられる2条一組の沈線により文様が描かれる。30はボタン状の突起がつくもの。突起の周囲と口唇には縄の押捺による刻みが付けられる。31は剥落しているが、釣り耳状の貼り付けが付けられていたとみられる。体部には2条一組の半截竹管状工具による沈線が口縁に沿って、また貼り付けの下端部をめぐるように施文され、その間に鋸歯状の沈線が描かれる。32は円柱状の突起がつくもの。突起には篋状工具による刻みのついた釣り耳状の貼り付けがつく。33は小ぶりの円形突起がつくもので突起と口縁部には篋状工具による刻みが付けられる。34は直線、直角を基調とした文様が半截竹管状工具による沈線で描かれるものである。口唇には篋状工具による細かい刻みがつく。35 a・bは同一個体。中型の深鉢である。

④ 無文の貼付帯がつけられるもの（36～39）

36は中央が山形に突った台形様の突起である。突起の表と内側の一部に貼り付けによる文様がつけられる。37 a・bは同一個体である。口唇と胴部上位にめぐらされた2本の篋状工具による沈線間に波状の貼り付けが2段施文されている。37 bには垂下する鋸歯状の沈線が施文されている。38、39は突起部分に円形の貼り付けがつくもので、38は表、39は内側に小さな貼り付けがついている。

⑤ 沈線文のみで文様が描かれるもの（5～7、40～44）

5は4つの小ぶりの山形突起がつく小型の深鉢である。胴部上半はやや太い篋状工具による沈線による文様が描かれる。突起の一つには3条の横位の沈線が描かれ、そこから垂下する3条の沈線が描かれるが、他方には弧状の沈線が描かれるのみである。6は土器集中10の復元個体である。4つの山形突起がつく中型の深鉢である。突起部には縄の押捺による沈線がつけられる。胴部の上位には2条1単位の沈線が口縁直下からほぼ等間隔にめぐっている。7は土器集中6の復元個体。小型の深鉢で

ある。胴部と底部は接合していない。欠損しているが山形の突起がつくとみられ、口縁に沿ってつけられる3条1単位の沈線は突起下で弧状の文様を描いている。突起は明確ではないが3つである可能性がある。40a・bは同一個体。突起はM字状を呈し、口縁直下に2条の沈線がめぐり、そこから「ノ」の字状の文様が描かれる。41は口唇が角張り、胴部にのみ半截竹管状工具による直線状の沈線が描かれるものである。42、43は篋状工具による鋸歯状の沈線が加えられる胴部である。全体の構成は不明であるがここに含めた。44は台形の突起部分である。縄文地にやや太い篋状工具による沈線文が施文されるものである。

⑥ 沈線文と管状または半截竹管状工具による刺突文がつけられるもの (45~48)

45は円弧状に描かれる2列の沈線の間に、半截竹管状工具による刺突文が連続して施文される。46は角張る口縁の平坦面に半截竹管状工具による刺突文がつけられるものである。47は半截竹管状工具による2条単位の沈線間に管状工具による刺突文がつけられる。48は縄文地に半截竹管状工具を押し引いて沈線状の文様が描かれるものである。

⑦ 突起類 (49~62)

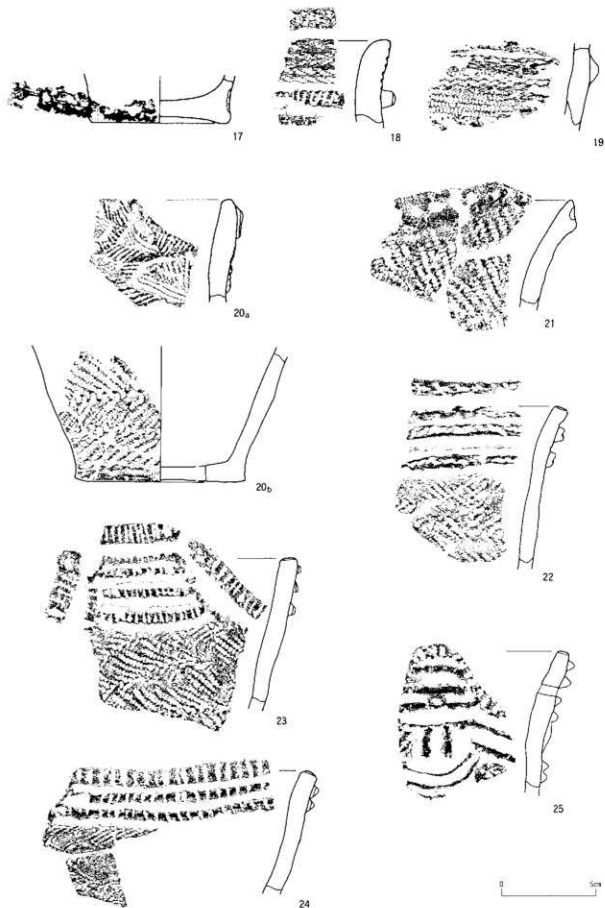
本遺跡では、さまざまな形状をした突起が多数出土した。突起のみの破片については、文様構成による分類は行わず、ここに一括することにした。49~51は縄の押捺がつく貼付帯によって装飾されるものである。52は細い縄線が横位に施文される。53は上面観が楕円形で土器の内面に向かう貫通孔があげられている。54、55は刺突文がつくものである。54は貼付帯にそって半截竹管状工具による連続した刺突文がつけられる。55は棒状工具による刺突により埋められるものである。56は無文の貼付帯が突起に沿ってつけられるものである。57~59は立体的な造形によって突起が作られるものである。59は欠損しているが人差し指大の2つの孔が土器の内側から表面に向かってあげられている。内側の貫通孔の周囲は棒状工具による沈線がめぐらされている。60は石臼状に上端がへこむ2連の突起、61は小型のもの、突起下に横位の貼り付け、突起の頂部に横位の沈線がつけられる。62は円形に整形されるもので、整形後にLR斜行縄文がつけられる。

⑧ 斜行縄文または結束第2種などの縄文のみ施文されるもの (図-8~15、63~66)

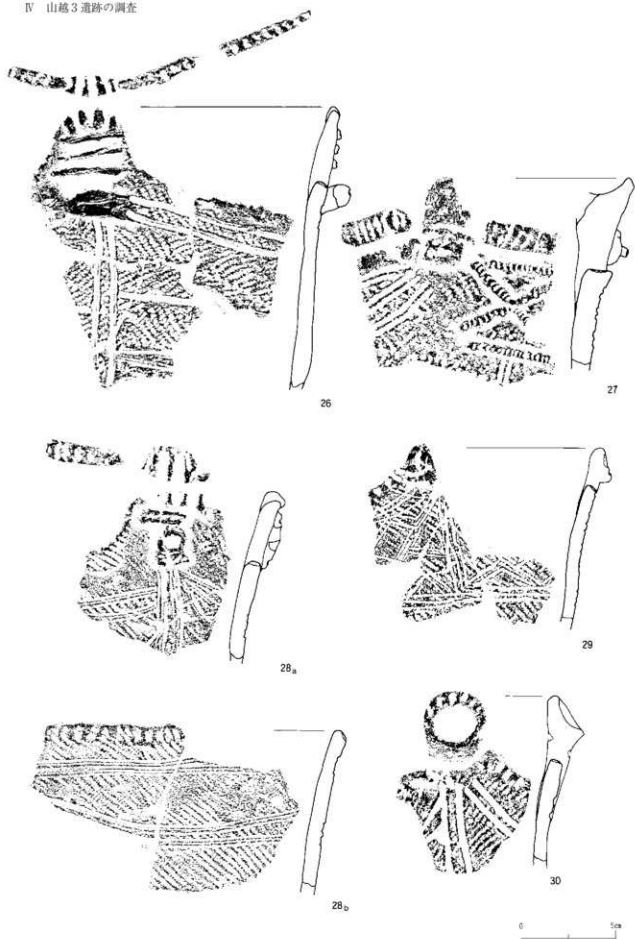
8、9は台形の突起がつく小型の深鉢である。胴部上半のみ復元できた。9は突起部の中央に小さな貼り付けがつく。両者とも口縁から突起部にかけて縄の押捺による刻みがつけられている。地文は8が結束第1種羽状縄文、9が結束第2種羽状縄文である。10~15は口唇に縄の押捺による刻みがつけられるもの。10は大型、11~15は小型の深鉢である。地文は10がRL斜行縄文、11は結束第2種斜行縄文、12はLR斜行縄文、13は結束第2種羽状縄文、14は結束第1種羽状縄文、15がRL斜行縄文である。63a・bは同一個体である。地紋は結束第2種斜行縄文、口唇には縄の押捺による刻みがつく。64、65は突起部に短い貼り付けがつくもの。64は欠損している。地文はLR斜行縄文。66は壺状の器形を呈するとみられるもの。口唇には篋状工具による刻みがつく。地文はLR斜行縄文。Ⅲ群a-3類ではない可能性もあるが、便宜上ここに含めた。

⑨ 縄文のみのもので口唇に沈線のめぐるもの (16、67~74)

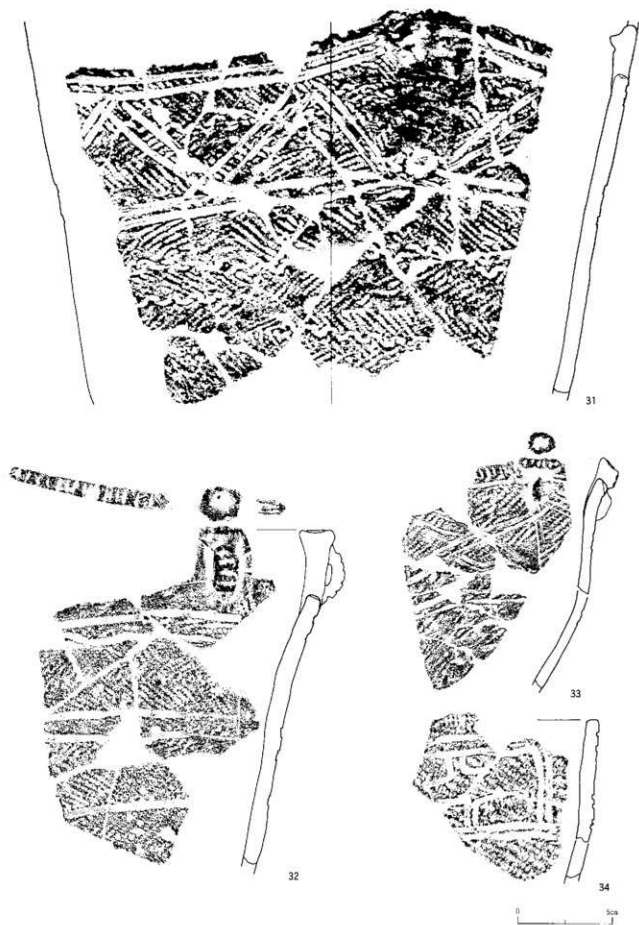
16は4つの山形突起がつく中型の深鉢である。突起に沿ってすりなでられている。地文はLR斜行縄文である。67は貼付帯による装飾がつくが、口縁に沿ってなでつけられているため、ここに分類した。土器の内側にも貼付帯による円弧状の貼り付けがある。68は推定復元であるが、山形突起がつく小型の深鉢である。突起の中央に小さな楕円形の貼り付けがある。地文はRL斜行縄文が器面全体に施文される。69、70は口縁に沿ってなでつけがみられるものである。71、72は口唇を肥厚させ、その部分に沿って沈線が施文されるものである。71は突起部分のみであるが、突起中央に円弧状の沈線が



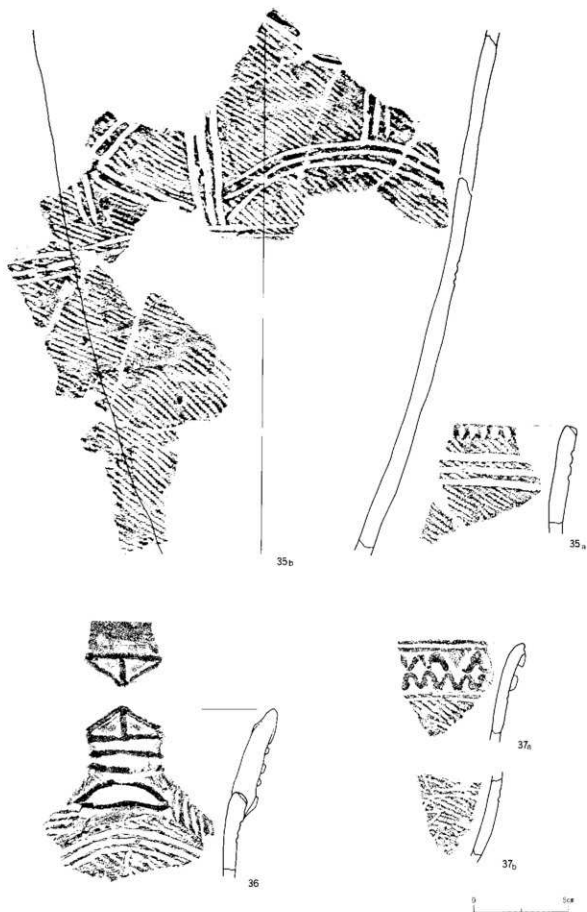
図N-34 包含層出土の土器(6)



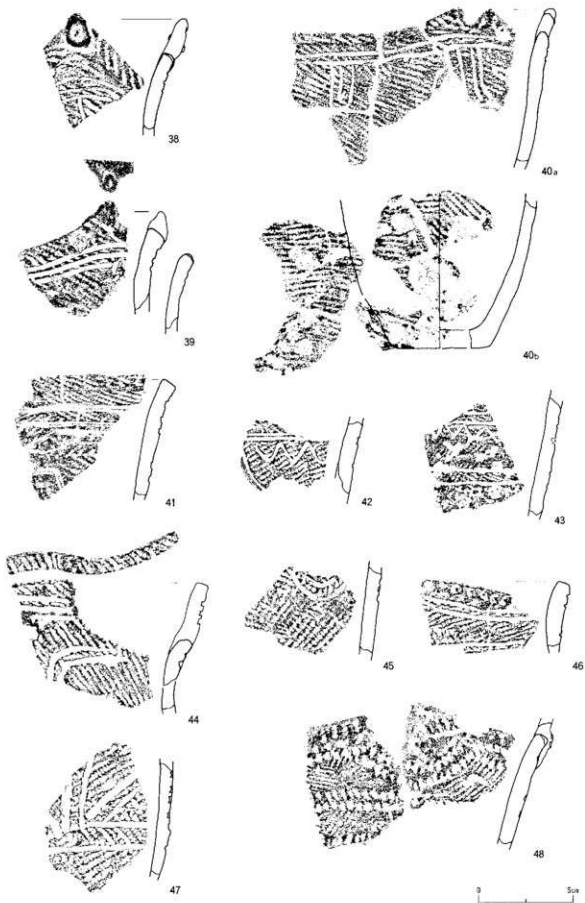
図IV-35 包含層出土の土器(7)



図Ⅳ-36 包含層出土の土器(8)



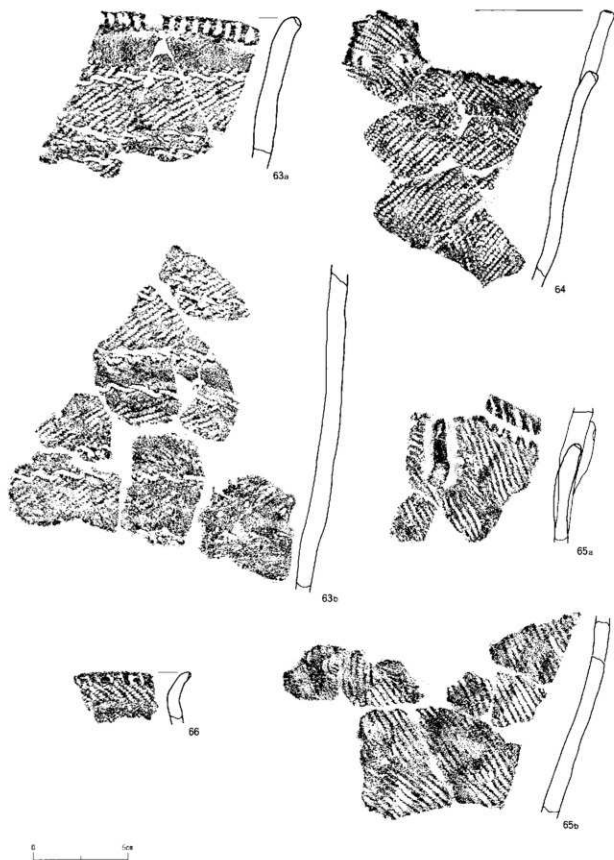
図IV-37 包含層出土の土器(9)



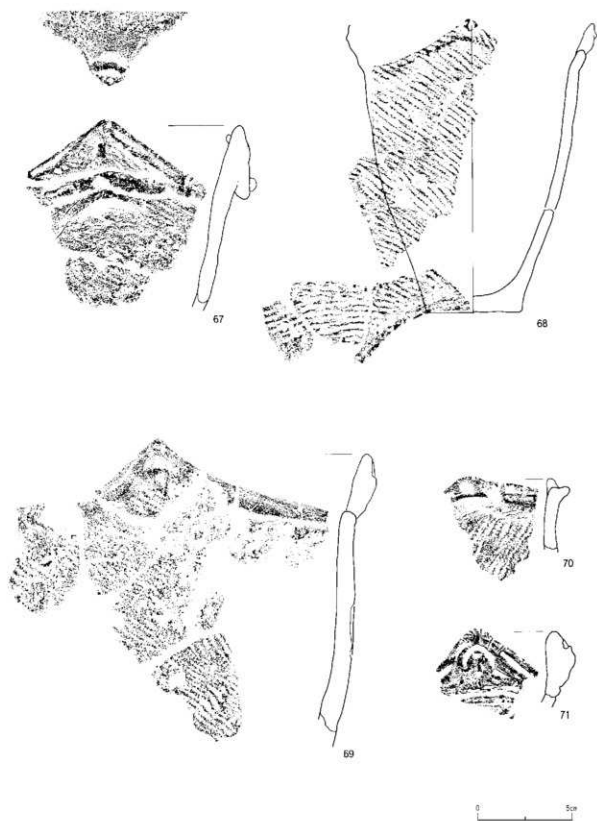
図Ⅳ-38 包含層出土の土器 (10)



図IV-39 包含層出土の土器 (11)



図Ⅳ-40 包含層出土の土器 (12)



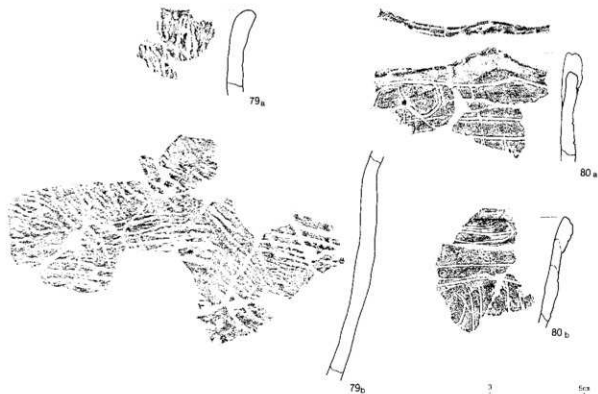
図IV-41 包含層出土の土器 (13)



図Ⅳ-42 包含層出土の土器 (14)



図IV-43 包含層出土の土器 (15)



図Ⅳ-44 包含層出土の土器 (16)

描かれる。73a・b cは同一個体。器面全体に斜行縄文が施文される。74a・bも同一個体。74bは推定復元である。副突起を有する山形突起がつく。口縁に沿って縄線がつけられる。

⑩ 底部片 (75~78)

75~77は底部のみの破片である。75は結束第1種羽状縄文が横位に施文される。底部から2 cmほどの幅で横位にすりなでがみられる。76、77は斜行縄文が施文される。78は上面観が楕円形を呈するものである。

⑪ 撚糸文が施文されるもの (79)

79a・bは同一個体である。Ⅲ群b類とみられるものであるが、これ以外出土していないため、便宜的にここに含めた。撚糸文が不規則に施文される。

縄文代後期の土器 (図Ⅳ-44-80, 図版30, 表6)

Ⅳ群a類土器 (図Ⅳ-44-80a・b)

80a・bは同一個体である。口縁部はすりなでられ、器面に細く浅い沈線文が描かれている。

土器の胎土について

山越3遺跡出土土器の胎土に関して、表Ⅳ-8のように分類し、一覧表中に掲載した。×20のルーペを用い肉眼観察したものである。鉱物に関しては目立つものについて記述した。その分類に関しては小粒のため、角閃石、輝石の区別は明確し得たとは言い切れず、両方の可能性があるものとした。なお、当然のことながら破片資料に関しては、含まれないとした鉱物、骨針も含む可能性がある。

(2) 石器など

包含層から出土した石器の総点数は2,531点であるが、最も多いものは礫・礫片で2,028点ある。そのうちⅦ層起源とみられる礫は2,028点数中1,591点である。

出土した石器等のうち礫を除いた石器類は503点である。剥片石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、の合計点数106点に対し、たたき石、すり石、台石・石皿の礫石器の合計点数は136点と剥片石器の比率は極めて低い。フレイク・チップは251点、石核は2点しか出土していないことからもうかがわれるが、調査区内において積極的に剥片石器の製作を行っていないことが推測できる。このことは北海道南部の縄文時代中期前半に通じていえることであると思われる。なお剥片石器の石材については文章中特に記載がないものは頁岩製である。

【剥片石器群】**石鏃（1～6）（図Ⅳ-47、表7、図版31）**

8点出土している。破片、未製品とみられるものはなく、黒曜石製の比率が高い。6点を図化した。1は菱形三角鏃で両面に入念な細部調整が施される。2は茎がつくもので返しが明瞭ではないものである。一部原石面が残る部分がある。3～5は比較的茎が明瞭に作られるものである。入念な細部調整が両面にわたって施され、直線状に仕上げられる。5は主要剥離面が一部残る。6は尖頭部を欠損しているが、返しが明瞭に作られるものである。石材は1～4までが黒曜石、5、6が頁岩である。

石槍（7）（図Ⅳ-47、表7、図版31）

1点出土している。7はK-4-b区のⅣ層上面で出土したもので、尖頭部を下にした状態で出土している。両面に入念な細部調整が両面に施される。

石錐（8）（図Ⅳ-47、表7、図版31）

1点のみ出土している。8は棒状の剥片の端部を加工し、機能部を作出するものである。頁岩製である。

つまみ付きナイフ（9～13）（図Ⅳ-47、表7、図版31）

6点出土している。5点を図化した。つまみ部が明瞭でなく、あまり加工されないものが多い。9は破片であるが、薄い縦長剥片を用い、背面の両側縁に規則的な細部調整が施されており、腹面の左側縁にも連続する細部調整がみられるものである。10は縦長剥片を素材とし、背面に全周する細部調整のみられるものである。刃部は肉厚で比較的急角度である。11、12は剥片の形状を大きく変えずに作られるもので、11は全周する細部調整がみられるが、12には加工らしき痕跡はつまみ部の整形を除いてほとんどみられない。

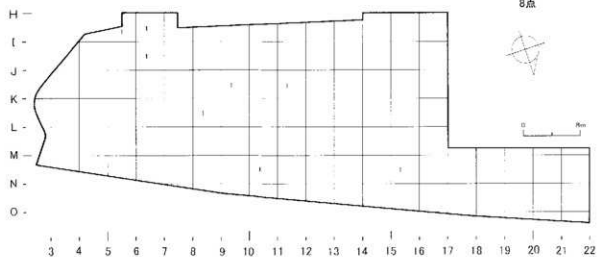
スクレイパー（14～29）（図Ⅳ-47、48、表7、図版31）

29点出土している。15点を図化した。

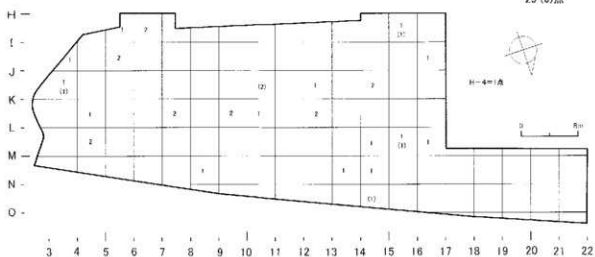
14はいわゆる筥状石器と呼ばれるものである。この1点のみ出土している。横長剥片を素材とし、背面と腹面両側縁に細部調整が施されるものである。

15～20は縦長剥片を素材とし、刃部が外湾するものである。15、16、18は背面に垂直方向の稜線が残る石刃状の剥片を素材とするものである。いずれも背面に細部調整による刃部が作られるが、15は両側縁、16は右、17は左側縁が加工されている。18、19は原石面を残すものである。17は腹面と背面の右側縁に細部調整が施されるもので、腹面側の剥離はやや粗く、階段状を呈している。背面側は比較的丁寧である。19は背面左側縁に細部調整がみられるものである。20は縦横の比率の小さい不定形な剥片を素材としており、背面右側縁に刃部が作出される。

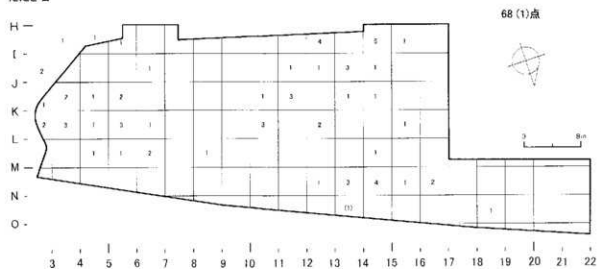
石鏃



スクレイパー



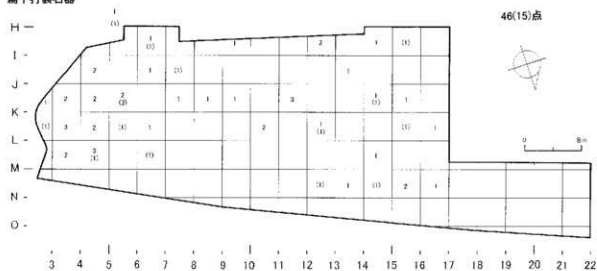
たたき石



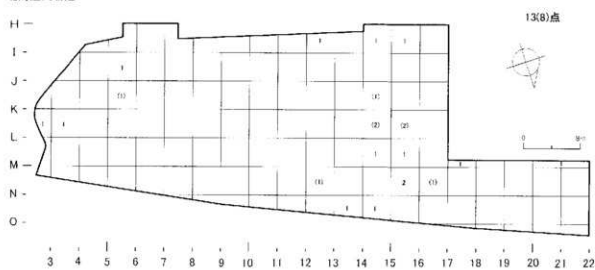
図M-45 包含層出土の石器の分布(1)

IV 山越3遺跡の調査

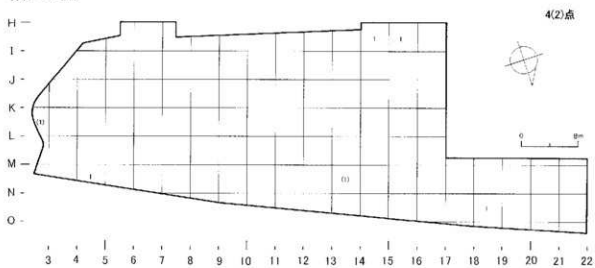
扁平打製石器



北海道式石冠



台石・石皿



図IV-46 包含層出土の石器の分布(2)

21～28は縦長剥片素材のうち、刃部が直線を呈するものである。21～25は背面側に概ね垂直な稜線がのこる石刃状の剥片を素材とするもので、21、22は両側縁、23、24は右側縁、25は左側縁の背面側に刃部が作出されるものである。26、27は素材の原石面が残るもの。28は剥片の右側縁にやや急角度の刃部が作出されるものである。

29は縦長剥片を素材とするもののうち、刃部が内湾するものである。原石面の残る剥片を素材とし、背面右側縁に刃部が作出され、腹面右側縁に加工がみられる。

両面調整石器 (30) (図Ⅳ-49、表7、図版32)

1点のみ出土している。30は素材剥片の両面が調整され四角形に加工される。図の上方は折れているのかもしれない。

石核 (31、32) (図Ⅳ-49、表7、図版32)

2点出土している。すべて図化した。31は子供の拳大の原石を用いている。打面を数回変えているが、剥離は小さく回数も少ない。32は流紋岩であり、石器素材を得たとは考えたいが、直方体を呈する原石の長辺を敲打して剥片が剥離されている。

Rフレイク (33) (図Ⅳ-50、表7、図版32)

7点出土している。1点を図化した。33は縦長剥片を素材とし、腹面の右側縁と左側縁の一部に加工されるものである。打点付近はつまみ付きナイフ状の抉り加工が施される。加工は粗く剥離は階段状を呈する。

Uフレイク (34～37) (図Ⅳ-50、表7、図版32)

54点出土している。4点を図化した。34、35は背面に垂直な稜線が残る石刃状の縦長剥片を素材とするものである。34は左右両側縁に、35は腹面側左側縁に微細剥離がみられる。36は一部に原石面の残る剥片を素材とするもので、連続しない剥離がみられるものである。37は不定形な剥片を素材とするもので、剥片の端部に微細剥離がみられる。

【磨製石器群】

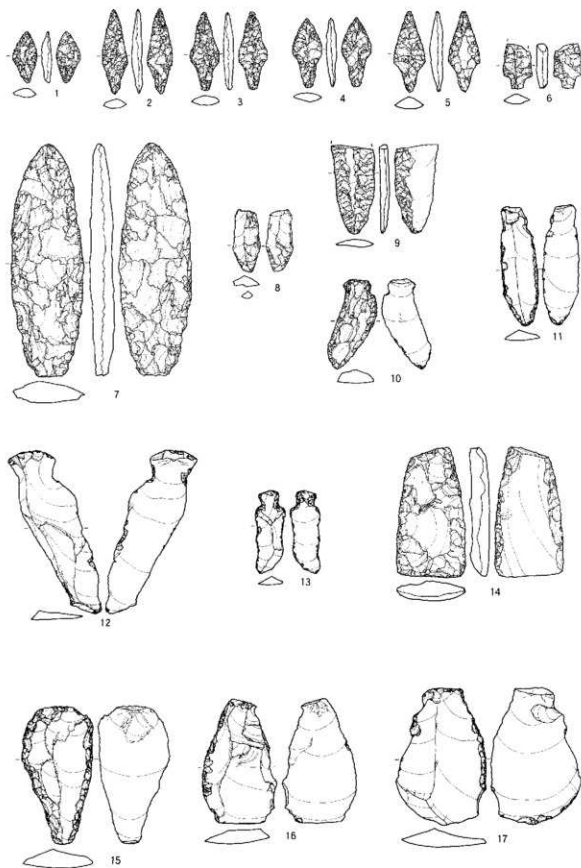
石斧 (38、39) (図Ⅳ-50、表7、図版32)

3点出土している。2点を図化した。38は蛇紋岩を用い、全面を敲打した後、研磨して整形される。39は緑色泥岩製で全面が丁寧に研磨されている。刃部は失われており、基部の敲打痕はたたき石として転用された結果であるかもしれない。

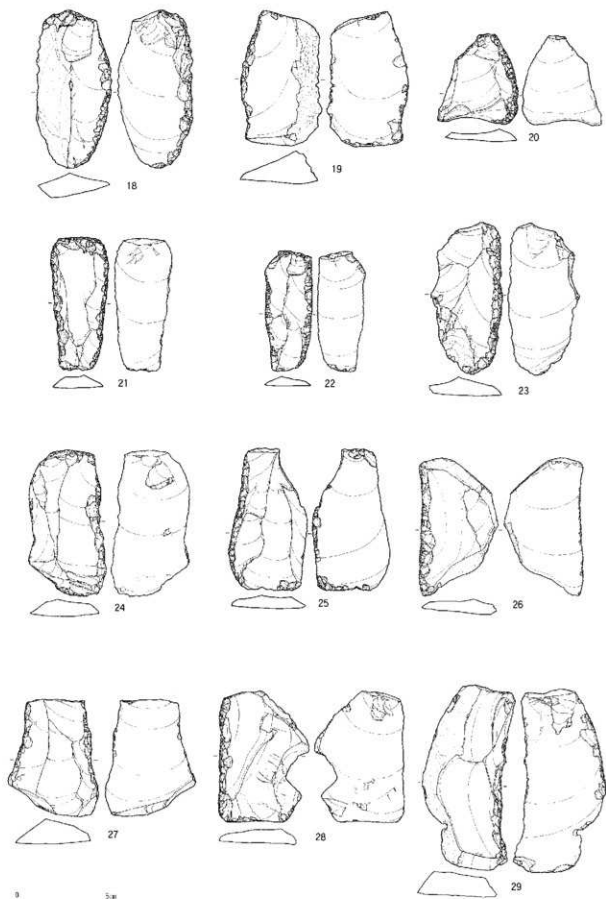
【礫石器群】

たたき石 (40～50) (図Ⅳ-51、表7、図版33)

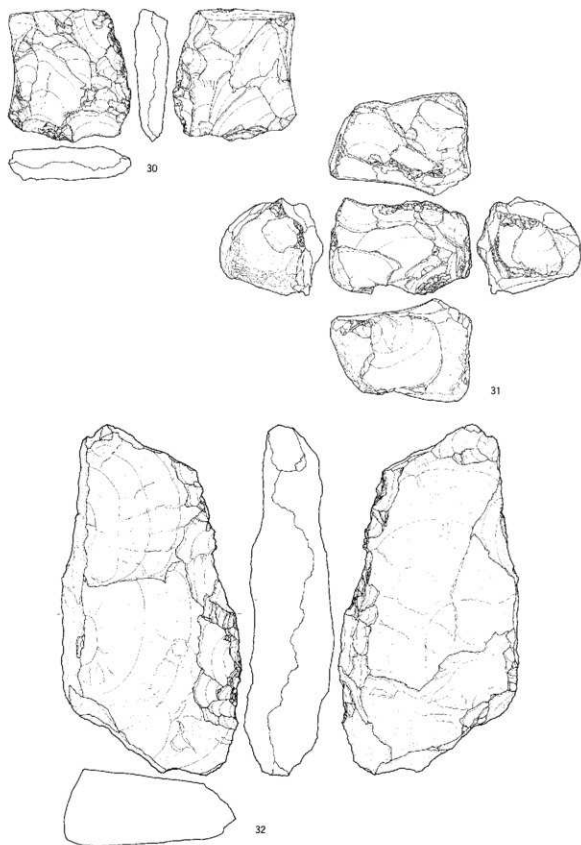
68点出土している。10点を図化した。40～44は棒状の礫の端部を使用するものである。40は断面形が四角形状を呈する粘板岩質の棒状礫を用い、端部を機能部とするものである。敲打痕は弱く明瞭ではない。図の上部と下部にわかれて出土しており、上部はN-14区で出土し、下部は土器集中4に接して出土している。41、42は扁平な礫を素材としたもので、よく敲打され、端部は敲打によって平滑になっている。両者の敲打した面を水平に据えると、礫の長軸は約70°の角度を呈する。43は小さな川原石を素材とし、礫の一端を使用するものである。被熱痕があり、機能部は大きくくぼんでいる。44は長楕円形の礫を素材とし、両端を使用するものである。45は亜円礫の周囲に使用痕がみられるものである。敲打痕は連続せず、周囲を部分的に使用するもので、図の下部が最も顕著な敲打痕があり、やや平坦に変形している。46～49は礫の平坦面に敲打痕のあるものである。46、47は敲打痕が礫の長軸上に並ぶものである。46は礫の平坦面の両面に都合4カ所のやや明瞭な敲打痕があるもので、47は表面のみに敲打痕が2カ所あるものである。48は礫のほぼ中央に明瞭な敲打痕があるものである。敲



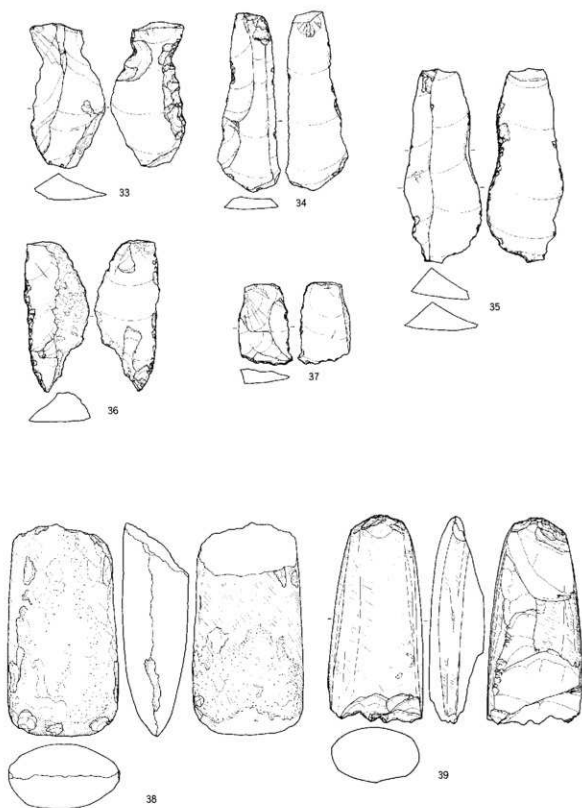
図Ⅳ-47 包含層出土の石器(1)



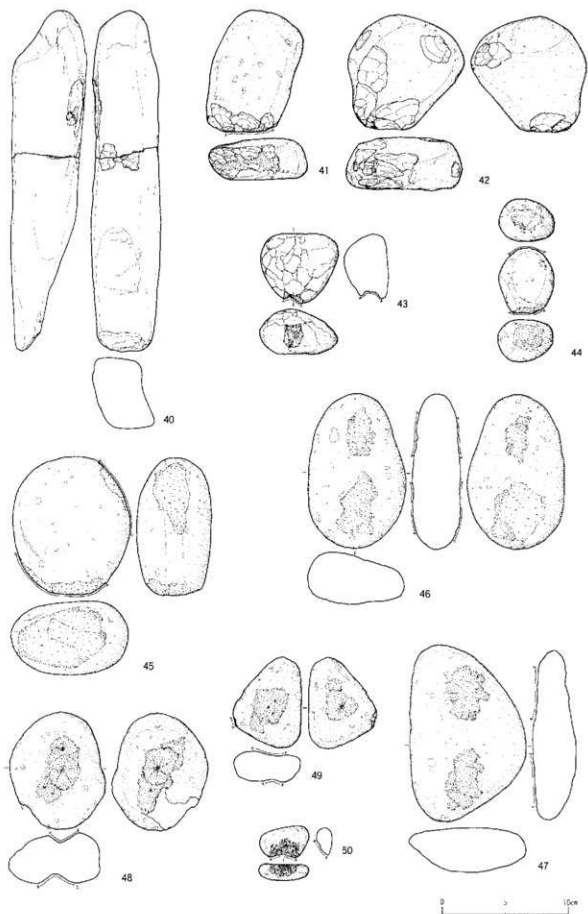
図IV-48 包含層出土の石器(2)



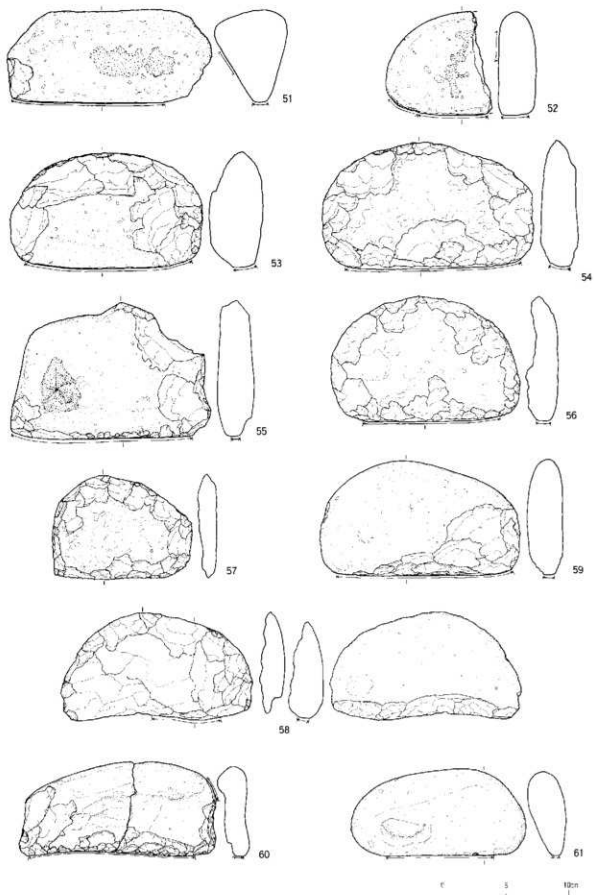
図IV-49 包含層出土の石器(3)



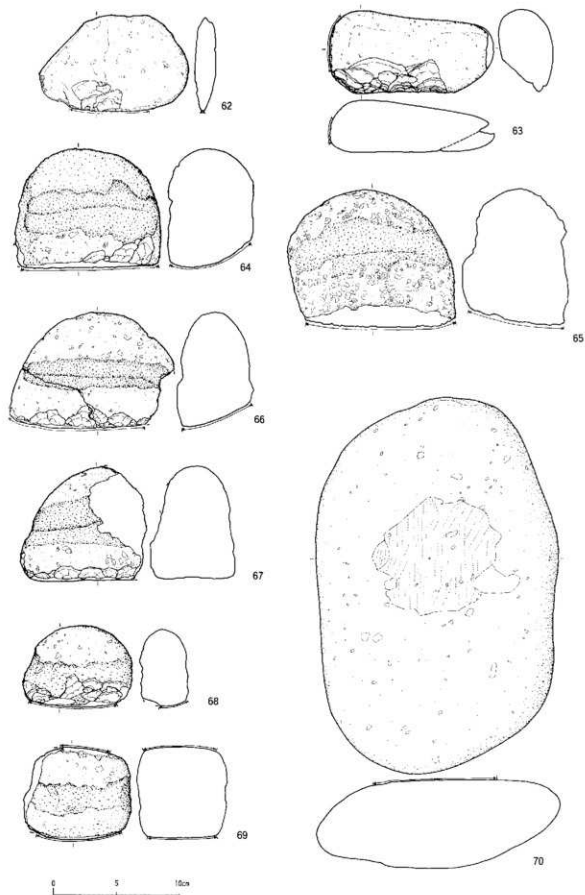
図Ⅳ-50 包含層出土の石器(4)



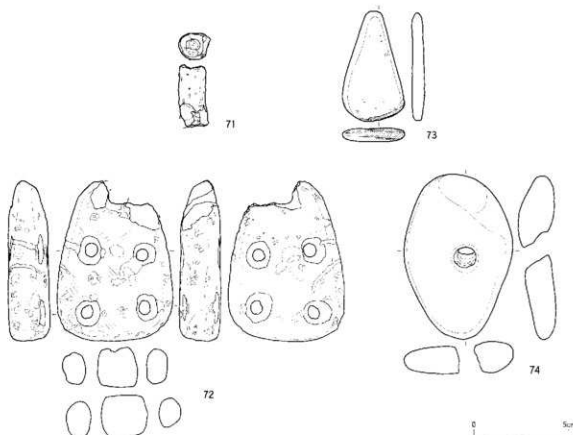
図Ⅳ-51 包含層出土の石器(5)



図IV-52 包含層出土の石器(6)



図IV-53 包含層出土の石器(7)



図Ⅳ-54 包含層出土の石器(8)

打痕は狭い範囲に集中しており、礫の表面から1 cm 程くぼんでいる。49は三角形をした礫の中心付近に敲打痕のあるものである。50は長さ4 cm 程の楕円形礫を素材とし、一端を敲打するものである。敲打痕中には対象物の痕跡とみられる半截竹管状の溝が多数明瞭に残る。

すり石(51、52)(図Ⅳ-52、表7、図版33)

5点出土している。2点を図化した。51は断面が三角形になる礫を用い、稜の一つを使用するものである。52は偏平な礫の長辺を機能部とするものである。

半円状扁平打製石器(53~63)(図Ⅳ-52、53、表7、図版33、34)

53~63半円状扁平打製石器である。46点が出土しており、11点を図化した。

53~55は扁平な礫の周囲に加工が施される狭義の扁平打製石器である。53は比較的厚手のもので機能部を除く礫の周囲を打ち欠いて加工が施される。54は礫の全周を打ち欠いて整形されるものである。55は礫の周囲を部分的に打ち欠いて整形されている。表面の中央部からやや左よりに敲打痕によるくぼみがあるが、先後関係は不明である。たたき石の転用品の可能性がある。56~58は剥片状の礫を素材とするものである。58は裏面左側の自然面とみられる部分に親指の先ほどのくぼみがある。59、60は礫を半割したものを素材とするもので、61、62は楕円形の扁平な礫を用い、長辺の稜線を使用するものである。機能部の幅は狭い。63は加工されているものの使用の痕跡がないものである。棒状の礫の長辺の1つに連続した加工が施される。礫片1点と接合している。使用された痕跡が無く、接合した礫片も同一区で出土していることから、加工時の事故により破棄されたものとみられる。

北海道式石冠(64~69)(図Ⅳ-53、表7、図版34)

13点が出土している。6点を図化した。概ね1/2以下の個体を破片として扱ったが、このうち破

片は8点である。また完形と判断されたものもすべてにおいて機能部に何らかの欠けや大きな剥離がみられる。

64～68は小島分類Ⅰ類（小島 1999）に分類されるもので、64～66は礫の表裏に敲打による溝がつけられ、片減りするものである。67は機能部が平坦であるが、右辺を欠損するものである。68は小型品である。69は小島分類Ⅱ類にあたるものかとみられ、上下両面に機能部のあるものである。

台石・石皿（70）（図Ⅳ-53、表7、図版35）

台石、石皿は前述したⅠ層中に含まれる礫を利用したものがほとんどである。4点出土している。1点を図化した。

70は扁平な礫を用い、礫の中心にあたる部分に機能部があるものである。機能部は円滑に磨かれている。

土・石製品（71～74）（図Ⅳ-54、表7、図版35）

71は土製品としたが、高師小僧かもしれない。72は石製品である。角の丸い釣鐘様の形状で、扁平に加工された溶結凝灰岩を素材とし両面から穿孔されるものである。上端を欠損するが5ヵ所に穿孔されていたとみられる。73は三角形の扁平な礫を用い、一端面に面取り状の擦痕がみられるものである。74は有孔自然石である。虫食い石とも呼ばれる。

表Ⅳ-1 山越3遺跡 遺構一覧

遺構番号	位置	確認面		平面形	長軸方向	出土遺物	時期
		長軸×短軸	床(底)面 単位(cm) 長軸×短軸 / 長軸×短軸 / 深さ				
H-1	H-5-c・d, H-6, 1-5-d, 1-6-a・d	412 × 372/360 × 304/64		楕円形	N-97° -W	Ⅱ a=83 風石=1 Uフレイク=1 フレイク・チップ=10 石片=1 たたき石=3 すり石=1 半円状扁平打製石器=3 北海道式冠=1 台石・石皿=1 鏝・鏝片=157 礫片(安山岩)=23	Ⅱ a-1-3
H-2	G-15-c, G-16-b, H-15-d, H-16-a	(250) × (112)/222 × (92)/48		円形?	N-76.5° -W	Ⅱ a=188 スクレイパー=2 Uフレイク=3 フレイク・チップ=10 半円状扁平打製石器=4 鏝・鏝片=14 礫片(安山岩)=6	Ⅱ a-3
H-3	H-6-a・c・d, H-7-a・b	(356) × (100)/324 × (60)/36		-	N-30° -W	Ⅱ a=23 すり石=1 半円状扁平打製石器=1 鏝・鏝片=125 礫片(安山岩)=4	Ⅱ a-3
P-1	K-14-b・c	142 × 104/110 × 70/22		不整形	N-23° -W	鏝・鏝片=10	Ⅱ a-3
P-2	I-14-c・d	84 × 78/54 × 40/34		楕円形	N-22.5° -W	鏝・鏝片=3 礫片(安山岩)=1	Ⅱ a-3
P-3	L-10-d, L-11-a	(110) × (86)/82 × (62)/40		不整形	N-161° -W	*半円状扁平打製石器=1 鏝・鏝片=1*	Ⅱ a-3
P-4	L-10-d, L-11-a	(60) × (32)/26 × (26)/24		不整形	N-150° -W	-	Ⅱ a-3
P-5	M-17-a・b	(66) × (56)/(40) × (25)/20		楕円形	N-41° -W	-	Ⅱ a-3
P-6	M-18-b・c	84 × 80/60 × 60/3		不整形	N-145° -W	-	Ⅱ a-3
P-7	L-13-a・b	94 × 62/72 × 40/16		不整形楕円形	N-104° -W	-	Ⅱ a-3
P-8	N-19-c	88 × 66/85 × 63/24		円形	N-315° -W	Ⅱ a=18 スクレイパー=1 Uフレイク=1 フレイク・チップ=2 たたき石=1 すり石=1 台石・石皿=1 鏝・鏝片=2	Ⅱ a-3
P-9	M-16	184 × (140)/120 × 114/22		不整形	N-715° -W	Ⅱ a=81 フレイク・チップ=1 鏝・鏝片=4	Ⅱ a-3
P-10	G-6-b・c, H-6-a・d	76 × 70/56 × 54/32		円形	N-11° -W	Ⅱ a=1	Ⅱ a-3
P-11	N-18-a	64 × (36)/44 × (26)/16		円形?	N-6° -W	フレイク・チップ=1 鏝・鏝片=1	Ⅱ a-3
P-12	I-6-c	134 × 118/64 × 66/38		円形	N-66° -W	Ⅱ a=1鏝・鏝片=1	Ⅱ a-3
P-13	J-6-a・d	110 × (66)/20 × (22)/36		楕円形	N-35° -W	Ⅱ a=24	Ⅱ a-3
P-14	K-8-d, L-8-a・d	120 × (104)/(76) × (70)/46		楕円形	N-56° -W	Ⅱ a=25鏝・鏝片=2	Ⅱ a-3
P-15	H-15-a・b	72 × 60/58 × 46/20		楕円形	N-29° -W	-	Ⅱ a-3
P-16	I-6-c・d, 1-7-b	268 × 210/230 × 190/30		楕円形	N-77° -W	Ⅱ a=7 風石=1 Uフレイク=1 フレイク・チップ=1 鏝・鏝片=1	Ⅱ a-3
P-17	G-6-c	86 × (32)/56 × (26)/44		楕円形	N-67.5° -W	-	Ⅱ a-3
P-18	H-7-a・b	104 × 74/88 × 62/36		楕円形	N-162° -W	-	Ⅱ a-3
F-1	H-16-d	52 × 12/3		-	N-130° -W	-	Ⅱ a-3
F-2	M-13-d	24 × 18/4		-	N-118.5° -W	-	Ⅱ a-3
F-3	M-8-b	34 × 28/12		-	N-150° -W	-	Ⅱ a-3
FC-1	L-3-c, L-4-b, M-4-a	130 × 102		-	N-95° -W	Ⅱ a=2 フレイク・チップ=108	Ⅱ a-3

IV 山越3遺跡の調査

表IV-2 山越3遺跡 遺構出土復元土器一覧

H-1 出土復元土器

調査番号	遺構名	分期	番号	縦径長	口径	底径	高さ	目一形状	縦径長	口径長さ	底径長さ	備考
1	H-1	Ⅱa-3		21	(36.1)	-	(21.7)	H-1-191・復元土	52	11	C	H-1-191・復元土
								H-1-19・復元土×5				
								H-1-109P・50・1・復元土×2				
								H-1-261・復元土×1				
								H-1-109P・50・3・復元土×4				
								H-1-109P・130・1・復元土×1				
								H-1-421・30cm×1				
								H-3・12・復元土×1				
								H-3-4・復元土×4				
								H-3-122・復元土×7				
								G-6-a-1・器×1				
								G-6-c-4・器×1				
								H-6-e-e-1・器×1				
								H-6-e-e-6・器×1				
								H-6-4-1・器×1				

H-2 出土復元土器

調査番号	遺構名	分期	番号	縦径長	口径	底径	高さ	目一形状	縦径長	口径長さ	底径長さ	備考
1	H-2	Ⅱa-3		42	24.8	30.8	26.1			12・17	C	縄文前期年代4470±40yBP
												H-2-1・復元土×5
2	H-2	Ⅱa-3		41	(30.0)	-	(50.2)	H-2・22・復元土×3 未付記×2	5	12	A	縄文前期年代4370±40yBP
												H-2-9・復元土×2
3	H-2	Ⅱa-3		37	(38.1)	7.5	(38.4)	H-15-d-9・器風割×1	1	13	C	
												H-2-25・復元土×1

P-9 出土復元土器

調査番号	遺構名	分期	番号	縦径長	口径	底径	高さ	目一形状	縦径長	口径長さ	底径長さ	備考
1	P-9	Ⅱa-3		36	(43.8)	-	(21.6)	P-9-1・上×7	305	15	A	P-9-1・上×7
								M-16-c-4・器×1				
								M-16-d-7・器×1				
								M-16-5・器×1				
								M-16-10・器×2				
								P-9-5・復元土×1				
								P-9-1・上×12				
								M-16-b-3・器風割×1				
								M-16-b-7・器風割×5				
								P-9-1・上×36				
								P-9-5・復元土×2				
								M-15-a-2・器×5				
								M-15-b-1・器×6				
								M-15-1・器×11				
								M-16-b-6・器風割×1				

P-13 出土復元土器

調査番号	遺構名	分期	番号	縦径長	口径	底径	高さ	目一形状	縦径長	口径長さ	底径長さ	備考
1	P-13	Ⅱa-3		90	(23.5)	9.4	(32.4)	J-6-b-13・器×11	86	16	A	J-6-b-13・器×11
								J-6-c-2・器×29				
								J-6-a-12・器×13				
								J-6-a-14・器×8				
								P-13-1・復元土×5				
								J-6-a-14・器×1 (未付記×2)				
								J-6-b-13・器×13				

P-14 出土復元土器

調査番号	遺構名	分期	番号	縦径長	口径	底径	高さ	目一形状	縦径長	口径長さ	底径長さ	備考
1	P-14	Ⅱa-3		50	(28.0)	(14.8)	(27.2)	P-14-1・復元土×8	16	A	P-14-1・復元土×8	
								K-8-b-1・器×3				
								P-14-5・復元土×2				
								P-14-8・復元土×1				
								K-8-b-1・器×5				
								K-8-b-2・器×5				
								K-8-b-5・器風割×9				
								K-8-b-11・器×9				
								K-8-1・器×1				
								K-8-2・1×3				
								L-6-a-5・器×3				
								L-8-a-2・器×2				
								L-8-d-1・1×1				
								L-8-d-1・器×2				
								P-14-1・復元土×2				

2	P-14	Ⅱa		12	9.6	(9.2)		P-4-2・復元土×1	7	16	D	P-4-2・復元土×1
								J-11-e-4・器×1				
								K-4-d-2・器×1				
								L-6-a-5・器×1				
								L-7-b-1・器×1				
								L-8-a-2・器×1				
								L-8-d-4・器×1				

表Ⅴ-3 山越3遺跡 遺構出土拓本掲載土器一覽

H-1 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-10)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
2	Ⅱ	Ⅱ-1	20	Ⅱ上1	1	11	H		
3	Ⅱ	Ⅱ-1	21	Ⅱ上1	1	11	A		
4	Ⅱ	Ⅱ-1	13	Ⅱ上1	1	11	A		
5	Ⅱ	Ⅱ-1	40	Ⅱ上1	2	11	A		
6	Ⅱ	Ⅱ-1	42	Ⅱ上1	2	11	A		
7	Ⅱ	Ⅱ-1	49	Ⅱ上1	4	11	A		

H-2 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-14)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
4	Ⅱ	Ⅱ-1	22	Ⅱ上1	1	13	A		
5	Ⅱ	Ⅱ-2	20	Ⅱ上2	1	13	A		
6	Ⅱ	Ⅱ-2	21	Ⅱ上2	1	13	H		
7	Ⅱ	Ⅱ-2	6	Ⅱ上2	1	13	A		
8	Ⅱ	Ⅱ-2	6	Ⅱ上2	3	13	H		
9	Ⅱ	Ⅱ-2	23	Ⅱ上2	8	13	H		

P-8 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-18)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
1	Ⅱ	Ⅱ-3	Ⅱ	Ⅱ上2	P-8-13、Ⅱ上2×1 P-8-4、Ⅱ上1×1 P-8-20、Ⅱ上2×1	4	14	E	
2	Ⅱ	Ⅱ-3	Ⅱ	Ⅱ上1		1	14	A	
3	Ⅱ	Ⅱ-3	Ⅱ	Ⅱ上1		1	14	H	
4	Ⅱ	Ⅱ-3	Ⅱ	Ⅱ上1	P-8-9、Ⅱ上1×3 P-8-10、Ⅱ上1×2	8	14	A	

P-9 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-20)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
2	Ⅱ	Ⅱ-3	P-9	Ⅱ	2	16			
3	Ⅱ	Ⅱ-3	P-9	Ⅱ	2	16			
4	Ⅱ	Ⅱ-3	H-1	Ⅱ	1	15	A		
5	Ⅱ	Ⅱ-3	P-9	Ⅱ	P-9-5、Ⅱ上1×2	3	15	A	
6	Ⅱ	Ⅱ-3	P-9	Ⅱ	H-10-2、Ⅱ上1	2	15	A	

P-10 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-20)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
1	Ⅱ	Ⅱ	P-10	Ⅱ上2	1	16	A		

P-16 拓本掲載土器一覽 (図Ⅴ-22)

掲載番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	縦径	幅径	口縁径	底径	高さ
1	Ⅱ	Ⅱ-3	P-16	Ⅱ上1	1	16	A		

表Ⅴ-4 山越3遺跡 遺構出土掲載石器一覽

H-1 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
8	たたき石	Ⅱ1	62	フク8	15.8	7.6	3.7	573.2	安山岩	11	
9	たたき石	Ⅱ3	92	フク1	14.5	11.7	3.0	730.2	安山岩	11	
10	すり石	Ⅱ2	75	フク1	8.7	11.6	5.0	615.0	安山岩	11	
11	半円状扁平打製石器	Ⅱ3	68	フク1	10.3	15.9	2.9	590.0	安山岩	12	
12	北海道式石冠	Ⅱ4	2	フク1	9.5	8.8	6.2	665.0	安山岩	12	
13	石皿	X	96	フク1下	36.3	31.3	14.8	27000.0	安山岩	12	

H-2 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
10	スクレイパー-2a	ⅡA 2a	62	フク8下	8.5	5.6	1.2	73.0	頁岩	14	
11	スクレイパー-2c	ⅡA 2c	24	フク8下	8.2	5.8	1.2	61.0	頁岩	14	
12	スクレイパー-3a	ⅡA 3a	25	フク8下	6.3	7.2	0.5	29.0	安山岩	14	
13	半円状扁平打製石器	Ⅱ31	28	フク8下	9.8	15.4	3.0	690.0	安山岩	14	
14	半円状扁平打製石器	Ⅱ31	30	フク8下	9.8	(8.0)	2.0	215.0	安山岩	14	
15	石皿	Ⅱ35	31	フク8下	8.4	12.2	2.7	355.0	安山岩	14	

H-3 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	すり石	Ⅱ2	13	フク2	6.6	8.2	2.3	190.0	安山岩	12	
2	半円状扁平打製石器	Ⅱ3	7	フク2	9.1	13.9	1.7	410.0	安山岩	12	

P-3 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	半円状扁平打製石器	Ⅱ31	2	フク4	11.0	9.2	2.2	270.0	安山岩	14	

P-8 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
5	スクレイパー-2a	ⅡA 2a	19	フク2	6.3	5.3	1.6	47.0	頁岩	15	
6	UフレイクA	ⅡB 2a	18	フク2	7.3	4.0	0.8	25.4	頁岩	15	
7	たたき石	Ⅱ1	17	フク1	14.4	18.1	9.8	2500.0	安山岩	15	
8	石皿	X	11	フク1	19.7	16.9	8.5	4000.0	安山岩	15	

P-16 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
2	UフレイクC	ⅡB 2c	6	覆土	4.9	4.4	0.6	13.0	頁岩	16	

IV 山越3遺跡の調査

表IV-5 山越3遺跡 包含層出土復元土器一覽

陶器番号	分類	組合	縄片数	口径	底径	器高	同一部位	縄片数	回数番号	出土層別	備考	
1	Ⅲa-3	I-13-a-5・Ⅱ×203 H-13-a-3・Ⅱ×1 H-15-a-6・Ⅱ×1	287	36.8	13.5	67.5	I-13-a-3・Ⅱ×1 I-13-a-5・Ⅱ×102 I-13-a-6・Ⅱ×19 不明×11	133	20	E	縄正炭素年代 4910 ± 40yBP	
2	Ⅲa-3	H-15-a-6・Ⅱ×1 H-15-a-11・Ⅱ×139 H-15-a-16・Ⅱ×1 H-15-a-21・Ⅱ×1 I-13-a-3・Ⅱ×1 I-13-a-5・Ⅱ×15 I-13-a-7・Ⅱ×15	60	(28.0)	-	(34.4)	H-14-a-6・Ⅱ×1 H-14-d-4・Ⅱ×2 H-15-a-11・Ⅱ×5 H-15-a-17・Ⅱ×1 I-13-a-3・Ⅱ×2 I-13-a-2・Ⅱ×1 I-13-a-3・Ⅱ×1 I-13-a-5・Ⅱ×6	31	20	A		
3	Ⅲa-3	J-12-d-3・Ⅱ×6 J-14-c-4・Ⅱ×1 J-14-d-3・Ⅱ×4 J-14-d-7・Ⅱ×9 J-14-d-12・Ⅱ×1 J-14-e-1・Ⅱ×11 J-15-10・Ⅱ×2 J-15-1-1×1	35	(23.2)	10.2	(24.1)	J-12-b-15・Ⅱ×1 J-12-d-3・Ⅱ×1 J-12-a-5・Ⅱ×1 M-15-1・1×1 N-17-2・1×1	5	20	A		
4	Ⅲa-3	J-14-4・Ⅱ×32 J-14-5・Ⅱ×8	40	25.4	8.0	29.0			18・20	B		
5	Ⅲa-3	K-8-1・1×1 L-8-a-1・1×1 L-8-d-4・Ⅱ×15 I-5-c-e-6・Ⅱ×3 I-5-c-e-7・Ⅱ×62 I-5-c-e-7・Ⅱ×2 I-5-c-e-9・Ⅱ×50 I-6-d-4・Ⅱ×1	17	(13.9)	8.0	17.3	L-8-d-4・Ⅱ×4		4	20	B	
6	Ⅲa-3	I-5-c-e-6・Ⅱ×3 I-5-c-e-7・Ⅱ×62 I-5-c-e-7・Ⅱ×2 I-5-c-e-9・Ⅱ×50 I-6-d-4・Ⅱ×1	120	24.4	9.6	38.8	I-5-c-e-6・Ⅱ×5 I-5-c-e-7・Ⅱ×66 I-5-c-e-9・Ⅱ×9 I-6-a-1・Ⅱ×2	82	19・21	A	縄正炭素年代 4400 ± 40yBP	
7	Ⅲa-3	J-13-a・1×3 J-13-b-3・Ⅱ×34	37	(18.8)	8.4	(21.3)	I-6-b-3・Ⅱ×1 J-13-a・1×6 J-13-b-1・Ⅱ×1 J-13-b-3・Ⅱ×28 J-14-d-7・Ⅱ×1	47	21	B	口縁割面と底部に分離	
8	Ⅲa-3	J-15-15・Ⅱ×4 K-11-a-1・Ⅱ×3 K-11-a-2・Ⅱ×2 K-11-1・1×1	10	(19.6)	-	(14.6)	J-14-c-5・Ⅱ×1 N-15-5・Ⅱ×1	2	21	C		
9	Ⅲa-3	I-9-d-1・Ⅱ×1 I-9-d-3・Ⅱ×1 J-8-b-1・Ⅱ×3 J-8-2・1×1 J-9-a-1・Ⅱ×1 J-9-b-1・Ⅱ×1 J-9-c-1・Ⅱ×1 J-9-1・1×1 J-10-b-1・Ⅱ×1 J-10-2・1×2 J-12-c-4・Ⅱ×4 J-12-c-14・Ⅱ×1 K-13-a-2・Ⅱ×1	15	(16.9)	-	(13.4)	I-9-d-3・Ⅱ×1 J-9-c-3・Ⅱ×1 J-13-a・1×1 K-15-3・1×3	6	21	C		
10	Ⅲa-3	K-13-b-1・Ⅱ×1 L-6-b-1・1×1 L-16-a-1・Ⅱ×8 L-16-d-1・1×23 L-16-5・1×22	55	(30.4)	14.8	(44.0)	L-16-d-1・1×3 L-16-5・1×4	7	21	A		
11	Ⅲa-3	J-14-4・1×1 J-14-a-1・Ⅱ×2 J-14-a-3・Ⅱ×3 J-14-a-4・Ⅱ×10 J-14-d-3・Ⅱ×6 J-14-d-7・Ⅱ×5	27	(18.4)	8.2	(18.8)	J-14-1・Ⅱ×1 J-14-a-1・Ⅱ×1 J-14-d-3・Ⅱ×1 J-14-d-7・Ⅱ×2	5	21	B		
12	Ⅲa-3	K-8-c-4・Ⅱ×1 L-8-a-1・1×2 L-8-a-2・Ⅱ×1 L-8-d-4・Ⅱ×8 L-8-1・1×1	13	(19.2)	8.6	23.7	L-8-a-1・1×2 L-8-d-4・Ⅱ×8 L-8-c-2・Ⅱ×1 L-8-c-2・Ⅱ×1	13	22	A		
13	Ⅲa-3	J-7-a-3・Ⅱ×21 V-7-e-4・Ⅱ×2	23	(17.7)	-	(15.5)	J-7-a-3・Ⅱ×4 V-7-e-4・Ⅱ×5	9	22	D		
14	Ⅲa-3	J-14-c-1・Ⅱ×1 J-14-c-5・Ⅱ×24 J-14-d-5・Ⅱ×11 J-14-d-7・Ⅱ×1 J-14-d-12・Ⅱ×1	28	(17.4)	(8.8)	(23.0)	J-14-1・Ⅱ×1 J-14-a-1・Ⅱ×1 J-14-d-3・Ⅱ×1 J-14-d-7・Ⅱ×2	15	22	A		
15	Ⅲa-3	I-5-a-1・Ⅱ×1 I-5-a-2・Ⅱ×7 I-5-b-1・Ⅱ×1 I-5-b-2・Ⅱ×3 I-5-b-6・Ⅱ×25 I-16-b-2・Ⅱ×6 J-5-a-9・Ⅱ×1	44	(10.6)	(5.1)	(11.0)	I-5-b-2・Ⅱ×1 I-5-b-6・Ⅱ×1 I-16-b-2・Ⅱ×1	3	22	C		
16	Ⅲa-3	K-8-b-1・Ⅱ×1 K-8-1・1×1 L-8-a-2・Ⅱ×5 L-8-d-1・1×1	8	(16.4)	8.3	(21.0)	K-8-b-1・Ⅱ×1 L-8-a-2・Ⅱ×4 L-15-6・1×1	6	22	A		

表Ⅴ-6 山越3遺跡 包含層出土本掲載土器一覽

図録番号	器名	分類	発掘区	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	図版番号	備考
17	土器-1	土器	Ⅰ-A	K-9-c	1	■	2.7	1.3	0.5	1.2	黒曜石	31
18	土器-1	土器	Ⅰ-A	K-9-c	1	■	4.5	1.3	0.5	2.0	黒曜石	31
19	土器-1	土器	Ⅰ-A	M-16-b	2	■	4.1	1.5	0.5	2.2	黒曜石	31
20a	土器-1	土器	Ⅰ-A	M-14-a	1	■	3.7	1.6	0.5	1.9	黒曜石	31
21	土器-1	土器	Ⅰ-A	J-10-d	2	■	4.2	1.6	0.6	3.1	頁岩	31
22	土器-1	土器	Ⅰ-A	H-6-d	2	■	2.4	1.5	0.6	1.9	頁岩	31
23	土器-1	土器	Ⅰ-B	K-4-b	9	IV上	12.3	3.8	1.1	57.0	黒曜石	31
24	土器-1	土器	Ⅱ	K-7	5	■黒曜	3.3	1.5	0.6	3.0	頁岩	31
25a	土器-1	土器	Ⅲ A	M-14	1	I	4.7	2.3	0.4	4.7	頁岩	31
26	土器-1	土器	Ⅲ A	M-13	2	I	4.7	2.6	0.7	7.7	頁岩	31
27	土器-1	土器	Ⅲ A	I-6-b	6	■	6.4	1.9	0.5	6.7	頁岩	31
28	土器-1	土器	Ⅲ A	L-16-c	2	I	8.6	4.9	0.5	15.4	頁岩	31
29	土器-1	土器	Ⅲ A	L-6-c	4	■	4.4	1.6	0.5	2.4	頁岩	31
30	土器-1	土器	Ⅲ B	K-8	3	I	6.9	3.6	1.1	30.0	頁岩	31
31	土器-1	土器	Ⅲ B	I-17-a	2	■	7.3	3.8	1.0	27.2	頁岩	31
32	土器-1	土器	Ⅲ B	K-13-a	3	■	6.5	3.9	0.8	18.7	頁岩	31
33	土器-1	土器	Ⅲ B	H-16-d	7	■	7.3	4.8	1.0	32.2	頁岩	31
34	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14-a	3	■	8.4	4.0	1.3	47.3	頁岩	31
35	土器-1	土器	Ⅲ B	L-5-b	2	■	7.2	4.3	1.3	54.2	頁岩	31
36	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-c	3	■	4.8	4.2	0.7	12.0	頁岩	31
37	土器-1	土器	Ⅲ B	K-5-b	7	■	7.0	3.0	0.7	23.1	頁岩	31
38	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-d	2	I	6.4	2.5	0.5	11.0	頁岩	31
39	土器-1	土器	Ⅲ B	J-13-c	1	■黒曜	8.0	3.8	1.0	32.4	頁岩	31
40	土器-1	土器	Ⅲ B	J-15-b	4	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
41	土器-1	土器	Ⅲ B	L-15-b	1	■	7.5	4.1	0.7	27.0	頁岩	31
42	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-b	3	■	7.4	4.2	0.8	30.3	頁岩	31
43	土器-1	土器	Ⅲ B	M-15-a	5	■	6.2	4.8	1.4	45.0	頁岩	31
44	土器-1	土器	Ⅲ B	L-17-b	3	■	7.0	4.8	0.8	36.0	頁岩	31
45	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	2	■	9.7	4.7	1.3	73.0	頁岩	31
46	土器-1	土器	Ⅲ B	H-4	2	I	7.1	6.5	1.8	98.0	濃紋岩?	32
47	土器-1	土器	Ⅲ B	J-12-a	3	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
48	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14	1	I	4.7	2.3	0.4	4.7	頁岩	31
49	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	6	■	6.4	1.9	0.5	6.7	頁岩	31
50	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-c	2	I	8.6	4.9	0.5	15.4	頁岩	31
51	土器-1	土器	Ⅲ B	L-6-c	4	■	4.4	1.6	0.5	2.4	頁岩	31
52	土器-1	土器	Ⅲ B	K-8	3	I	6.9	3.6	1.1	30.0	頁岩	31
53	土器-1	土器	Ⅲ B	I-17-a	2	■	7.3	3.8	1.0	27.2	頁岩	31
54	土器-1	土器	Ⅲ B	K-13-a	3	■	6.5	3.9	0.8	18.7	頁岩	31
55	土器-1	土器	Ⅲ B	H-16-d	7	■	7.3	4.8	1.0	32.2	頁岩	31
56	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14-a	3	■	8.4	4.0	1.3	47.3	頁岩	31
57	土器-1	土器	Ⅲ B	L-5-b	2	■	7.2	4.3	1.3	54.2	頁岩	31
58	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-c	3	■	4.8	4.2	0.7	12.0	頁岩	31
59	土器-1	土器	Ⅲ B	K-5-b	7	■	7.0	3.0	0.7	23.1	頁岩	31
60	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-d	2	I	6.4	2.5	0.5	11.0	頁岩	31
61	土器-1	土器	Ⅲ B	J-13-c	1	■黒曜	8.0	3.8	1.0	32.4	頁岩	31
62	土器-1	土器	Ⅲ B	J-15-b	4	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
63	土器-1	土器	Ⅲ B	L-15-b	1	■	7.5	4.1	0.7	27.0	頁岩	31
64	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-b	3	■	7.4	4.2	0.8	30.3	頁岩	31
65	土器-1	土器	Ⅲ B	M-15-a	5	■	6.2	4.8	1.4	45.0	頁岩	31
66	土器-1	土器	Ⅲ B	L-17-b	3	■	7.0	4.8	0.8	36.0	頁岩	31
67	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	2	■	9.7	4.7	1.3	73.0	頁岩	31
68	土器-1	土器	Ⅲ B	H-4	2	I	7.1	6.5	1.8	98.0	濃紋岩?	32
69	土器-1	土器	Ⅲ B	J-12-a	3	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
70	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14	1	I	4.7	2.3	0.4	4.7	頁岩	31
71	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	6	■	6.4	1.9	0.5	6.7	頁岩	31
72	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-c	2	I	8.6	4.9	0.5	15.4	頁岩	31
73	土器-1	土器	Ⅲ B	L-6-c	4	■	4.4	1.6	0.5	2.4	頁岩	31
74	土器-1	土器	Ⅲ B	K-8	3	I	6.9	3.6	1.1	30.0	頁岩	31
75	土器-1	土器	Ⅲ B	I-17-a	2	■	7.3	3.8	1.0	27.2	頁岩	31
76	土器-1	土器	Ⅲ B	K-13-a	3	■	6.5	3.9	0.8	18.7	頁岩	31
77	土器-1	土器	Ⅲ B	H-16-d	7	■	7.3	4.8	1.0	32.2	頁岩	31
78	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14-a	3	■	8.4	4.0	1.3	47.3	頁岩	31
79	土器-1	土器	Ⅲ B	L-5-b	2	■	7.2	4.3	1.3	54.2	頁岩	31
80	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-c	3	■	4.8	4.2	0.7	12.0	頁岩	31
81	土器-1	土器	Ⅲ B	K-5-b	7	■	7.0	3.0	0.7	23.1	頁岩	31
82	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-d	2	I	6.4	2.5	0.5	11.0	頁岩	31
83	土器-1	土器	Ⅲ B	J-13-c	1	■黒曜	8.0	3.8	1.0	32.4	頁岩	31
84	土器-1	土器	Ⅲ B	J-15-b	4	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
85	土器-1	土器	Ⅲ B	L-15-b	1	■	7.5	4.1	0.7	27.0	頁岩	31
86	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-b	3	■	7.4	4.2	0.8	30.3	頁岩	31
87	土器-1	土器	Ⅲ B	M-15-a	5	■	6.2	4.8	1.4	45.0	頁岩	31
88	土器-1	土器	Ⅲ B	L-17-b	3	■	7.0	4.8	0.8	36.0	頁岩	31
89	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	2	■	9.7	4.7	1.3	73.0	頁岩	31
90	土器-1	土器	Ⅲ B	H-4	2	I	7.1	6.5	1.8	98.0	濃紋岩?	32
91	土器-1	土器	Ⅲ B	J-12-a	3	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
92	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14	1	I	4.7	2.3	0.4	4.7	頁岩	31
93	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	6	■	6.4	1.9	0.5	6.7	頁岩	31
94	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-c	2	I	8.6	4.9	0.5	15.4	頁岩	31
95	土器-1	土器	Ⅲ B	L-6-c	4	■	4.4	1.6	0.5	2.4	頁岩	31
96	土器-1	土器	Ⅲ B	K-8	3	I	6.9	3.6	1.1	30.0	頁岩	31
97	土器-1	土器	Ⅲ B	I-17-a	2	■	7.3	3.8	1.0	27.2	頁岩	31
98	土器-1	土器	Ⅲ B	K-13-a	3	■	6.5	3.9	0.8	18.7	頁岩	31
99	土器-1	土器	Ⅲ B	H-16-d	7	■	7.3	4.8	1.0	32.2	頁岩	31
100	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14-a	3	■	8.4	4.0	1.3	47.3	頁岩	31
101	土器-1	土器	Ⅲ B	L-5-b	2	■	7.2	4.3	1.3	54.2	頁岩	31
102	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-c	3	■	4.8	4.2	0.7	12.0	頁岩	31
103	土器-1	土器	Ⅲ B	K-5-b	7	■	7.0	3.0	0.7	23.1	頁岩	31
104	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-d	2	I	6.4	2.5	0.5	11.0	頁岩	31
105	土器-1	土器	Ⅲ B	J-13-c	1	■黒曜	8.0	3.8	1.0	32.4	頁岩	31
106	土器-1	土器	Ⅲ B	J-15-b	4	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
107	土器-1	土器	Ⅲ B	L-15-b	1	■	7.5	4.1	0.7	27.0	頁岩	31
108	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-b	3	■	7.4	4.2	0.8	30.3	頁岩	31
109	土器-1	土器	Ⅲ B	M-15-a	5	■	6.2	4.8	1.4	45.0	頁岩	31
110	土器-1	土器	Ⅲ B	L-17-b	3	■	7.0	4.8	0.8	36.0	頁岩	31
111	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	2	■	9.7	4.7	1.3	73.0	頁岩	31
112	土器-1	土器	Ⅲ B	H-4	2	I	7.1	6.5	1.8	98.0	濃紋岩?	32
113	土器-1	土器	Ⅲ B	J-12-a	3	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
114	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14	1	I	4.7	2.3	0.4	4.7	頁岩	31
115	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	6	■	6.4	1.9	0.5	6.7	頁岩	31
116	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-c	2	I	8.6	4.9	0.5	15.4	頁岩	31
117	土器-1	土器	Ⅲ B	L-6-c	4	■	4.4	1.6	0.5	2.4	頁岩	31
118	土器-1	土器	Ⅲ B	K-8	3	I	6.9	3.6	1.1	30.0	頁岩	31
119	土器-1	土器	Ⅲ B	I-17-a	2	■	7.3	3.8	1.0	27.2	頁岩	31
120	土器-1	土器	Ⅲ B	K-13-a	3	■	6.5	3.9	0.8	18.7	頁岩	31
121	土器-1	土器	Ⅲ B	H-16-d	7	■	7.3	4.8	1.0	32.2	頁岩	31
122	土器-1	土器	Ⅲ B	M-14-a	3	■	8.4	4.0	1.3	47.3	頁岩	31
123	土器-1	土器	Ⅲ B	L-5-b	2	■	7.2	4.3	1.3	54.2	頁岩	31
124	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-c	3	■	4.8	4.2	0.7	12.0	頁岩	31
125	土器-1	土器	Ⅲ B	K-5-b	7	■	7.0	3.0	0.7	23.1	頁岩	31
126	土器-1	土器	Ⅲ B	L-16-d	2	I	6.4	2.5	0.5	11.0	頁岩	31
127	土器-1	土器	Ⅲ B	J-13-c	1	■黒曜	8.0	3.8	1.0	32.4	頁岩	31
128	土器-1	土器	Ⅲ B	J-15-b	4	■	7.8	4.1	0.9	37.0	頁岩	31
129	土器-1	土器	Ⅲ B	L-15-b	1	■	7.5	4.1	0.7	27.0	頁岩	31
130	土器-1	土器	Ⅲ B	H-7-b	3	■	7.4	4.2	0.8	30.3	頁岩	31
131	土器-1	土器	Ⅲ B	M-15-a	5	■	6.2	4.8	1.4	45.0	頁岩	31
132	土器-1	土器	Ⅲ B	L-17-b	3	■	7.0	4.8	0.8	36.0	頁岩	31
133	土器-1	土器	Ⅲ B	I-6-b	2	■	9.7	4.7	1.3	73.0	頁岩	31
134												

IV 山越3遺跡の調査

掲載番号	器種名	分類	発掘区	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	図版番号	備考
31	石椀	VA 1	表採	6		5.5	7.5	5.1	900.0	頁岩	32	
32	石椀	VA 1	I-14	5	I	18.5	9.5	4.8	242.0	頁岩	32	
33	Rフレイク	VB 1	K-5-c	10	III	7.7	3.9	1.4	45.0	頁岩	32	
34	UフレイクA	VB 2 a	I-13-a	4	III黒銅	9.5	3.4	0.7	23.0	頁岩	32	
35	UフレイクA	VB 2 a	L-15-b	2	III	10.3	4.0	1.7	52.0	頁岩	32	
36	UフレイクB	VB 2 b	表採	2		8.0	3.5	1.6	50.0	頁岩	32	
37	UフレイクC	VB 2 c	J-16	2	I	4.3	2.8	0.8	10.0	頁岩	32	
38	石片	VA	表採	4		11.3	5.9	3.5	347.0	片岩	32	
39	石片	VA	表採	8		10.9	5.0	2.9	240.0	緑色頁岩	32	
40	たたき石	III 1	H-15-a	13	III	27.0	6.4	5.6	915.0	砂岩	33	N-14・4と接合
41	たたき石	III 1	J-4-b	1	III	9.7	7.8	3.2	370.0	安山岩	33	
42	たたき石	III 1	H-13-b	4	III	9.1	9.2	4.3	490.0	安山岩	33	
43	たたき石	III 1	H-16-a	15	III	5.5	6.2	3.6	130.0	安山岩	33	
44	たたき石	III 1	I-14	6	I	5.2	4.9	3.4	104.0	安山岩	33	
45	たたき石	III 2	K-13-b	5	III	10.9	9.3	5.9	950.0	安山岩	33	
46	たたき石	III 3	K-7-d	4	III	12.3	7.8	4.1	500.0	安山岩	33	
47	たたき石	III 3	K-6-a	5	III黒銅	14.0	9.3	3.5	528.0	安山岩	33	
48	たたき石	III 3	H-5	2	I	9.3	8.1	4.1	300.0	安山岩	33	
49	たたき石	III 3	J-5	1	I	7.2	5.4	2.5	104.0	安山岩	33	
50	すり石	III 4	K-16	5	I	2.5	3.9	1.3	9.0	砂岩	33	
51	すり石	III 1	J-4-c	2	III	7.4	16.2	5.8	840.0	安山岩	33	
52	すり石片	III 2	I-13-b	1	III	8.2	8.4	3.0	296.0	安山岩	33	
53	半円状扁平打製石器	III 3	L-5-a	3	III	9.1	15.3	4.3	850.0	安山岩	33	
54	半円状扁平打製石器	III 3	K-5-b	3	III	10.1	16.8	3.0	650.0	安山岩	33	
55	半円状扁平打製石器	III 3	I-5-b	8	III黒銅	10.7	15.9	3.0	710.0	安山岩	33	
56	半円状扁平打製石器	III 3	M-16-b	4	III	9.9	15.0	2.5	993.6	安山岩	33	
57	半円状扁平打製石器	III 3	K-13	5	I	8.2	11.1	1.5	222.1	閃緑岩	33	
58	半円状扁平打製石器	III 3	H-15-a	18	III黒銅	8.4	14.9	2.6	341.4	安山岩	34	
59	半円状扁平打製石器	III 3	J-3	3	I	9.2	15.9	2.3	966.6	安山岩	34	
60	半円状扁平打製石器	III 3	G-6-b	6	III	7.5	15.6	2.6	372.6	安山岩	34	
61	半円状扁平打製石器	III 3	G-6-c	3	III	7.0	13.8	3.1	411.0	安山岩	34	
62	半円状扁平打製石器	III 3	K-5-c	6	III	7.7	11.8	1.7	211.5	安山岩	34	
63	半円状扁平打製石器	III 3	J-4-b	7	III	6.5	12.9	4.2	448.6	安山岩	34	
64	北海道式石刃	III 4	K-3-d	6	III	9.5	11.5	6.8	900.0	安山岩	34	
65	北海道式石刃	III 4	N-15	4	I	10.9	13.4	8.4	1240.0	流紋岩	34	
66	北海道式石刃	III 4	M-16	7	III	9.3	13.1	5.7	825.0	安山岩	34	
67	北海道式石刃	III 4	I-6-c	5	III	9.0	10.1	6.7	680.0	安山岩	34	
68	北海道式石刃	III 4	H-16-5		I	6.7	8.7	4.2	284.0	安山岩	34	
69	北海道式石刃	III 4	N-14-8		III	7.3	8.5	7.3	670.0	安山岩	34	
70	石鏝	X	N-19-2		I-III	40.1	25.9	9.5	15000.0	安山岩	35	
71	土製品片	K-14-d		1	IV	3.4	1.7	1.4	6.8	-	35	
72	石製品	M-15-d		2	III	8.5	6.2	2.3	74.0	軽石	35	
73	石製品	L-6-a		2	III	5.8	3.4	0.8	16.0	泥岩	35	
74	有孔自然石	I-13-a		7	III	8.8	5.8	1.8	110.0	砂岩	35	

表IV-8 山越3遺跡土器胎土観察表

	繊維の量	海綿骨針	鉱物	砂粒	焼成 (良・不良)	時期
胎土A	無いか少量	なし	- (見えない)	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土B	無いか少量	あり (少量)	-	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土C	無いか少量	あり (少量)	輝石 角閃石 (少量)	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土D	あり	なし	角閃石 輝石 (多量)	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土E	無いか少量	なし	輝石 角閃石 (少量) 石英 (少量)	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土F	なし	あり	輝石 角閃石 (少量)	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	III群 a-3類
胎土G	なし	なし	輝石 角閃石 (少量) 長石 (少量)	細粒の砂を若干含む	良好	IV群 a類
胎土H	若干あり	なし	-	概ね5mm以下の砂粒、 白色岩片を含む	良好	I群 b類 II群 b類 III群 a-3類
胎土I	多量	なし	石英 (少量) 磁鉄鉱 (少量)	なし	良好	II群 b類
胎土J	無いか少量	なし	石英 (多量)	なし	良好	III群 a-3類

V 山越4遺跡の調査

1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）八雲南工区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。工区予定中央線上の中心杭であるSTA.593とSTA.594とを結び延長して、これを基準のMラインとした。Mラインから平行に4m毎に南西へ向かってL、K、J…とし、同様に北東へ向かってN、O、P…とした。アルファベットのZの次はA2、B2とした。更に、STA.593を通りそれに直交する線をOラインとし、同様に4m毎に北西に向かって1、2、3…とした。そして、これらの交差する地点に杭を打設した（図V-1・2）。

なお、Mラインの真北はN-292.5°-Wである。

この方眼の平面直角座標は第Ⅺ系で以下のとおりである（旧測量法、日本測地系による）。

STA.593 （調査区杭番号M-0） X=-197807.633 Y=7875.852

STA.593+40 （調査区杭番号M-10） X=-197792.018 Y=7839.026

STA.594 （調査区杭番号M-25） X=-197768.603 Y=7783.804（調査範囲外）

2 発掘調査の方法

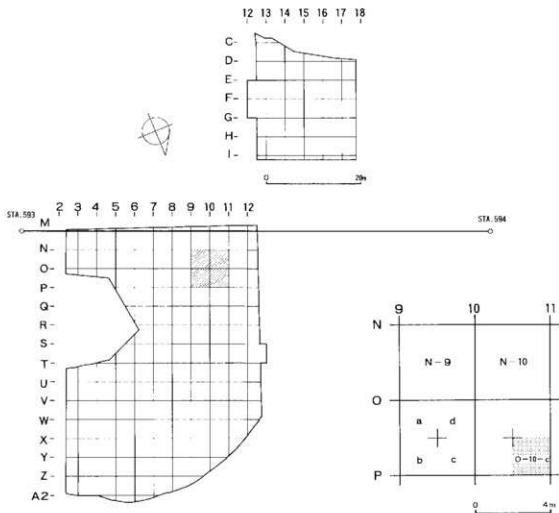
発掘調査に先行し重機により耕作土、表土を除去した。表土除去の段階でA地区は耕作による削平がほとんどなく駒ヶ岳火山灰（Ko-d）以下のⅢ層の残りが非常に良好であったが、M-Tラインにかけての南半分では立木伐間時の抜根による攪乱が多く見られた。B地区は全体の2分の1程度に耕作による攪乱が見られたが、最も削平された部分でも黒色土（Ⅲ層）の途中までであり包含層の残存状況は良好であった。

調査計画を立てるため、先ず当初発掘調査面積の12.5%程度、8グリットに1グリットの割合の調査を分散して行った。その結果を基に、調査方法を検討し地区毎に分けて調査を実施した（図V-3）。

まず、A地区のおおむね6ラインより東側の傾斜下方部分では多くの遺物が黒色土（Ⅲ層中）にあること、急傾斜のため原位置を保っているものは無く斜面に散在するように出土することが分かった。この区域については黒色土（Ⅲ層）は移植ゴテを用いた調査を行い遺物の取り上げは4m四方の1グリット単位で行った。それ以下のⅥ層までは重機を使用して掘り下げ、遺構確認調査を実施した。なお、少数ではあるが遺物が出土するⅣ・Ⅴ層については土ごと平坦部に移動し、スコップ・移植ゴテを併用し遺物回収を行った。この部分の遺物については北東斜面出土として一括して取り上げた。

次に、11ラインよりも西側の調査区端にあたる部分の多くは遺物出現率が少なく、出土した場合でもほとんどが黒色土（Ⅲ層）中からのものであった。この部分についてはⅢ層までは移植ゴテを用いた調査を行った。遺物の取り上げは1グリットを4分割した小発掘区単位で行った。それ以下のⅥ層までは重機を使用して掘り下げ、遺構確認調査を実施した。Ⅳ・Ⅴ層については土ごと平坦部に移動し、スコップ・移植ゴテを併用し遺物回収を行った。この部分の遺物については西部分出土として一括して取り上げた。

また、無名沢の流路にあたるM-O-3・4グリットでは、一部を開削調査した際にはほぼ1個体の土器が見つかるように出土した。この区域については、遺物は斜面上方から廃棄されたもので原位置を保っていないと推測されること、常時水が流れる状況であり手掘りによる調査は不可能と判断し、



図V-1 発掘区設定図

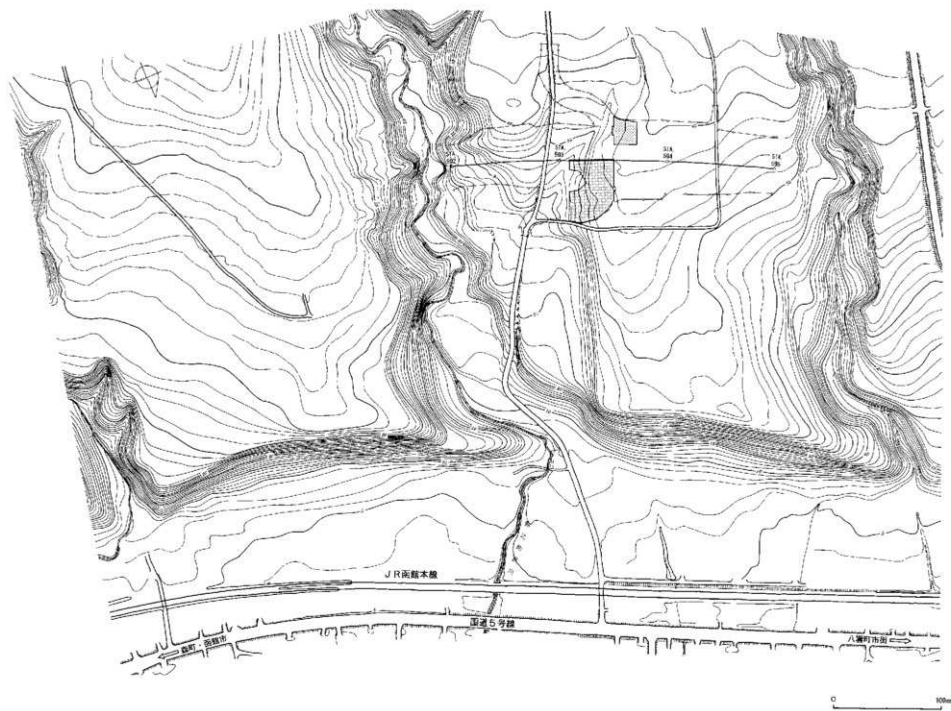
重機を併用しての遺物回収に努めた。この遺物については南東斜面出土として一括して取り上げた。

その他のA地区についてはⅥ層上面まで移植ゴテで5cm毎に掘り下げ、小発掘区単位で遺物を取り上げるとともに、その掘り下げ回数についても明記した(例:Ⅲ層2回目など)。また、掘り下げる毎に遺構の確認に勤め、遺構の遺物については全点の出土位置、標高、層位を計測して取り上げを行った。

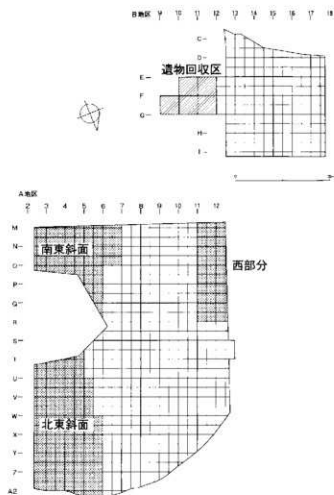
なお、S-12区調査中に後北式土器がまとまって出土し調査区外へ及んでいた。この部分については一部調査区を拡張した。

B地区でも12.5%程度の調査を行った結果、出土状況に濃淡はあるものの、ほぼ全域に渡って遺物が出土した。そのため、Ⅲ層は移植ゴテ、Ⅳ・Ⅴ層は移植ゴテ・スコップを併用した調査を実施した。また、E・F-12区調査中に遺物の分布が調査区外へ広がることが確認された。そのため、12ラインまで発掘区を拡張した。さらに下方の斜面にも遺物が散在していたが、原位置を保っていないものと判断し、Ⅲ層のみスコップを用い遺物回収に努め、1グリッド単位でⅢ層一括として取り上げた。この部分についてはⅢ層までの掘り下げであったため、標高などの計測は実施していない。

旧石器確認調査のためA・B両地区とも幅1mのトレンチを設定し、Ⅵ層から更に50cmほど掘り下げた部分がある。しかし、旧石器時代の遺物は確認できなかった。



図V-2 遺跡周辺の地形と発掘区



図V-3 調査区の区分

3 基本土層

土層は八雲町教育委員会によるこれまでの調査（『栄浜』1983など）、および当センターによる八雲町シラリカ2遺跡（北理調報142、2000）、山崎5遺跡（北理調報165、2002）の調査に準じて6層に分層した（図V-4）。ただし、各層位内での細分は一致していないものもある。

調査区には耕作や抜根による攪乱が見られたが、全般的に土層区分の残りは良い。駒ヶ岳火山灰の下に黒～暗褐色土の土層が見られる部分が多く、これをⅡb層とした。また、旧石器確認調査のためⅥ層よりも掘り下げ調査した部分では、濁川テフラ（Ng）、クッタラテフラ（Kt）が確認できた。そのため、便宜的にⅦ～Ⅹ層まで分層した部分がある（図V-6）。

Ⅰ層：表土、黒褐色土（10YR2/2）。駒ヶ岳火山灰（Ko-d）が少量混じる。

耕作土、黒褐色土（7.5YR3/2）。駒ヶ岳火山灰およびロームブロックが少量混じる。

Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰、Ko-d。

Ⅱb層：黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりやや強、粘性弱。B-Tmが下に混じる。いわゆる褐色風成層に類似する。

Ⅲ層：黒色土（10YR1.7/1）。しまり弱、粘性弱。乾燥するとクラックが入る。

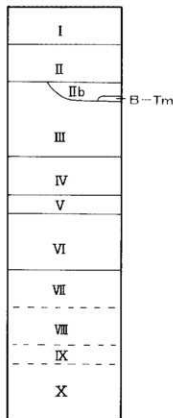
V 山越4遺跡の調査

IV 層：黒褐色土（10YR2/3）。しまり弱、粘性やや強。ボール状となった暗褐色火山灰（Ko-g）が少量混じる。

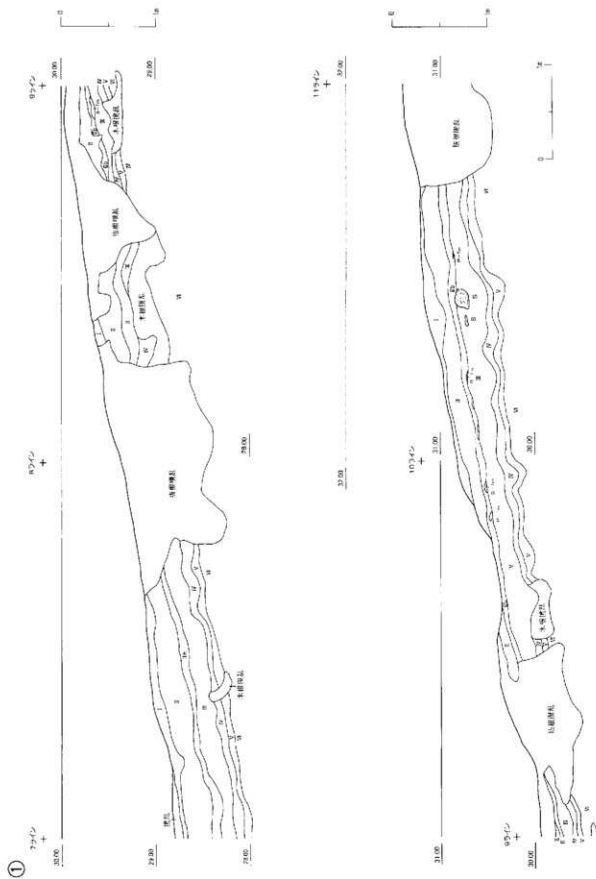
V 層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）。しまりやや強、粘性強。漸移層。

VI 層：褐色土（10YR4/6）。しまり強、粘性強。ローム。

遺物の本来的包含層はⅢ層上面（続縄文時代）、Ⅲ層（縄文時代後期）、Ⅲ～Ⅳ層上面（縄文時代中期）、Ⅲ層下位～Ⅳ層（縄文時代前期）、Ⅴ層（縄文時代早期？）である。斜面部分では包含層が流出している部分やより厚く堆積している部分があり、それに伴い遺物も移動しているため、本来的包含層から出土しないものもあった。



図V-4 山越4遺跡の基本層序



図V-5 土層断面図(1)

4 A地区の遺構と遺構出土の遺物

A地区は2ヶ所に分かれる調査区のうち、北側に位置しており、住居跡4軒、土壇9基、焼土2ヶ所、炭化物集中1ヶ所、フレイク・チップ集中域1ヶ所の遺構が検出された(図V-8)。遺構の分布は、大きく標高35~37m周辺の傾斜の転換点付近と標高37m以上の台地の平坦部に分かれる。前者には住居跡とP-1~4・8・9、FC-1が、後者にはP-5~7、F-2・3、C-1が存在する。

住居跡はいずれも斜面部分にあり、斜面上方の掘り込みは比較的明瞭であるが、傾斜下方は不明瞭なものもあった。H-1・2は表土除去時に既に窪んでいたもので、炉跡や柱穴も確認できた明瞭な住居跡である。一方、H-3・4は攪乱で壊されている部分が多く確認が理れたものである。このうちH-4は炉跡が検出できたものの、掘り込みが浅く柱穴も不明瞭なもので、H-1・2とは性格が異なり、比較的短期間使用された仮小屋のものではないかと推測される。

土壇の内、P-1~3は台石をはさんで並んで検出されたものである。台石を用いた作業に関連する遺構と推測される。フレイク・チップ集中はH-2に近接して確認されたもので、同一母岩と推測される豊泉産の黒曜石が狭い範囲にまとまっていた。

これらの遺構の多くは縄文時代中期前半のものである。しかし、土壇・焼土の一部や炭化物集中には人為的なものか疑問なものがあり、それらの時期は不明である。

(1) 住居跡

H-1 (図V-9~12、図版40~42・55・56、表V-1・6~9)

位置 Z-7-c・d、Z-8

規模 453×423 / (236×224) / 75cm

平面形 楕円形?

長軸方向 —

確認・調査 火山灰除去時にKo-dとII b層が半円形にまとまって堆積しているのを確認した。発掘区北端に沿ってトレンチを入れると、平坦な床と明瞭な壁を確認したので住居跡とした。全体の2分の1ほどの調査で、残りは調査区外に及んでいる。

覆土 全体で8層に分層した。自然堆積である。Ⅲ層を主体とする黒色土(1層)、ロームが若干混じる黒褐色土(2~4層)、ロームブロックが多く混じる暗褐色土(5層)、ロームが主体となる暗~褐色土(6~8層)の大きく4層に大別でき、遺物の取り上げはこの大別に従った。よって取り上げの1層=覆土1層、同2層=2~4層、同3層=5層、同4層=6~8層に相当する。また斜面上方では壁の崩落と推測されるロームが主体となる層が比較的厚く堆積していた。

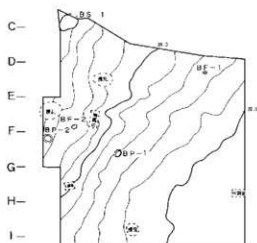
壁・床面 斜面上方の壁は明瞭に確認できた。なお、一部に古い風倒木による攪乱が見られ、判然としなかった部分もあった。床面は若干傾斜している。

炉 調査区内では炉は確認できなかった。

付属ビット・柱穴 調査区内では主柱穴2ヶ所(HP-2・3)、付属土壇1基(HP-1)、出入り口に関連すると推測される小土壇3基(HP-4・6・7)、その他1基(HP-5)の合計7基が検出された。HP-1からミニチュア土器とたたき石が検出された。HP-4・6・7は壁近くから検出されたものである。中央に位置するHP-4が浅いくぼみで、このHP-4をはさんで壁の内外にあるHP-6・7が深くしっかりとした小土壇であることや、住居の壁際から検出されたその配置から、出入り口に関連するものと推測できる。

4 A地区の遺構と遺構出土の遺物

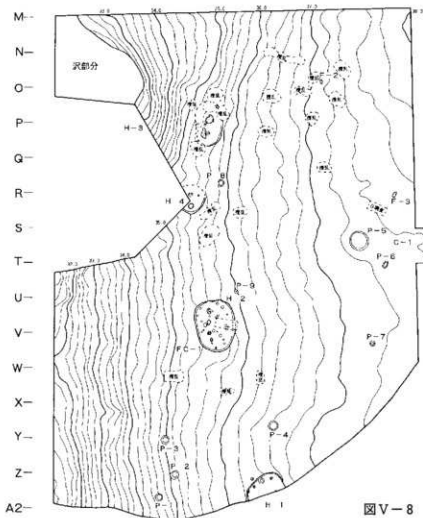
B地区 12 13 14 15 16 17 18



0 20m

A地区

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12



図V-8 最終面の地形と遺構位置図

遺物出土状況 取り上げの覆土2層から土器20点・石器など26点、覆土3層から土器5点・石器など58点、覆土4層から土器10点・石器など23点、付属土壌から土器11点・石器など7点、床面から土器3点・石器など1点の合計164点が出土した。

遺物 (土器) 1は覆土2層出土の破片が接合したもので、4ヶ所の小型山形突起のあるミニチュア土器。胴部にはL R斜行縄文が施文され、図裏側には幅狭の沈線文が施されている。口唇部には刻みがある。2は付属土壌H P-1床面から出土したミニチュア土器(図V-9、図版41-2・3)で口縁部を欠失している。無文地に斜め方向の直線もしくは弧状の沈線文が施文されている。3は覆土2層から多くの破片が出土し、一部遺構外包含層出土のものと接合し復元できたもの。4ヶ所の小型山形突起があり、胴部には結束第1種羽状縄文がやや乱雑に施文されている。口唇部には刻みがある。4・5は同一個体で口唇部直下に幅8mmほどの貼付文が巡るもの。薄手で胴部には地文施文後に綾絡文が施されている。6は横・斜め方向に沈線文の施文されたもの。7~10は口縁部付近に地文の縄文のみが見えるもの。7は突起部に孔があり、円筒形の粘土が貼付けられたもので、その貼付の周縁には地文と同一原体の燃系の圧痕がある。地文は結束第1種羽状縄文である。8~10は地文が斜行縄文で床面から出土したもの。9・10は同一個体である。11・12は同一個体で無文のもの。12が覆土中出土、11が包含層出土の口縁部。口唇部の断面形は角形で、器面は縦方向に磨きされている。13は貼付文のある胴部破片で、貼付文上には燃系が押捺されている。14は床面出土の胴部破片で斜行縄文が施文されている。15・16は底部でいずれも底面近くが外側に張り出すもの。15は床面出土のミニチュア土器の底部。16は包含層出土の底部に、覆土の破片が接合したもの。条痕様の沈線文が一部に見られる。いずれの土器もⅢ群a-3類である。

(石器) 17~19はスクレイパー。17は縦長剥片を用い両側縁に外湾する刃部を作出したもの(ⅢB2a)、18は一側縁に直線状の刃部を作出したもの(ⅢB2b)。19は横長剥片を用い、上下二側縁に外湾気味の刃部が作出されたもの(ⅢB3a)。20は付属ピットであるH P-1の覆土下位から出土したもので、下端にたたき痕のあるたたき石(Ⅶ1)。21は同じH P-1の床面から出土したもので、擦痕は不明瞭であるが扁平礫の一部が平滑で、すり石として使用したと推測されるもの(Ⅷ5)。22は小型の台石(X)である。23は壁際に流れ込むようにして出土した石皿(X)で、石材の關係で擦痕は不明瞭であるが、使用面が若干くぼんでいるもの。石材は17~19が頁岩、20~23は安山岩である。

時期 床面および付属土壌H P-1出土の遺物から縄文時代中期前半のⅢ群a-3類、サイベツⅦ式に相当する時期の遺構である。なお、H P-1床面および柱穴H P-2覆土4層から検出された炭化物の補正放射性炭素年代はそれぞれ4370±40yBP(YK 4-1)、4400±40yBP(YK 4-2)である(第Ⅵ章1参照)。

H-2 (図V-13~24、図版42~45・57~60、表V-1・6~9)

位置 U-6・7、V-6・7

規模 582×556/448×412/59cm

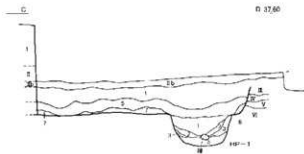
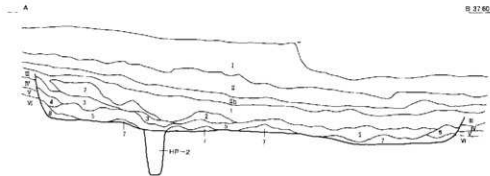
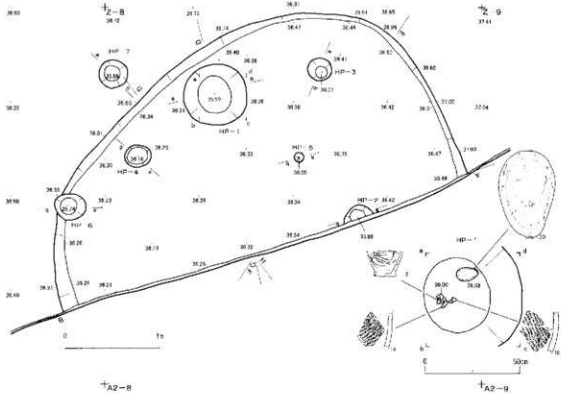
平面形 楕円形

長軸方向 N-16.5°-E

確認・調査 Ko-d層除去時に楕円形にややくぼんだ部分を確認した。グリッドラインに沿ってトレンチを入れると、遺物がまとまる部分があり、また西側に明瞭な壁を確認したので住居跡とした。

覆土 全体で8層に分層した。自然堆積である。Ⅱb層を主体とする黒褐色土(1層)、Ⅲ層を主体とする黒色土(2層)、ロームが若干混じる黒褐色土(3層)、ロームブロックが多く混じるやや明る

H-1



H-1

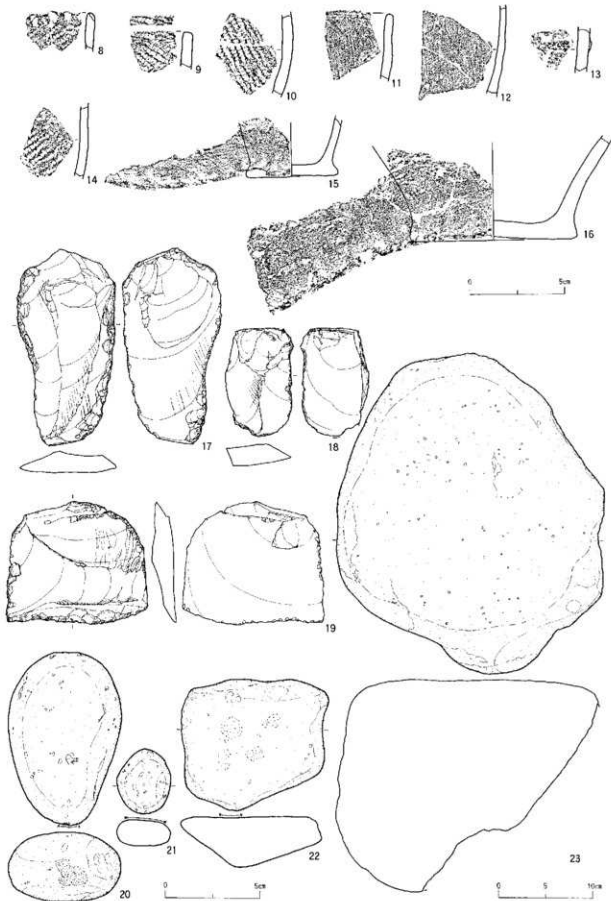
- | | |
|-------------------|--|
| 1 藍褐色土 (0.9YR2/1) | ・滑りややれ、粘りなし(固) |
| 2 藍褐色土 (0.9YR2/2) | ・滑り弱、粘りや強い、ロームが混じる。一部ごく少量の8-10mm程度の(骨の骨) |
| 3 藍褐色土 (0.9YR2/3) | ・滑り弱、粘りや強い、ロームが混じる(骨の骨) |
| 4 黄褐色土 (0.9YR3/4) | ・滑り最弱、粘り強い、浮いた土 (M(V-V)) |
| 5 黄褐色土 (0.9YR3/3) | ・滑りややれ、粘り強い、部分の厚10cm以上のローム/コックが混じる
灰化無機土が少量混じる(固+V) |
| 6 黄褐色土 (0.9YR2/3) | ・滑り弱い、粘りや強い、粘りに弱く、ロームブロックが混じらない(固+V) |
| 7 藍褐色土 (0.9YR3/4) | ・滑り強い、粘り強い、ロームが少量の塊状上に混じる(固) (骨) |
| 8 褐色土 (0.9YR4/4) | ・滑りややれ、粘り強い、ロームに少量の腐植土 (骨の骨)(骨の骨) |
| 9 藍褐色土 (0.9YR2/2) | ・滑りややれ、粘り強い、粘りに弱く、シロクガの腐植土に混じる |

図V-9 H-1 (1)

V 山越4遺跡の調査

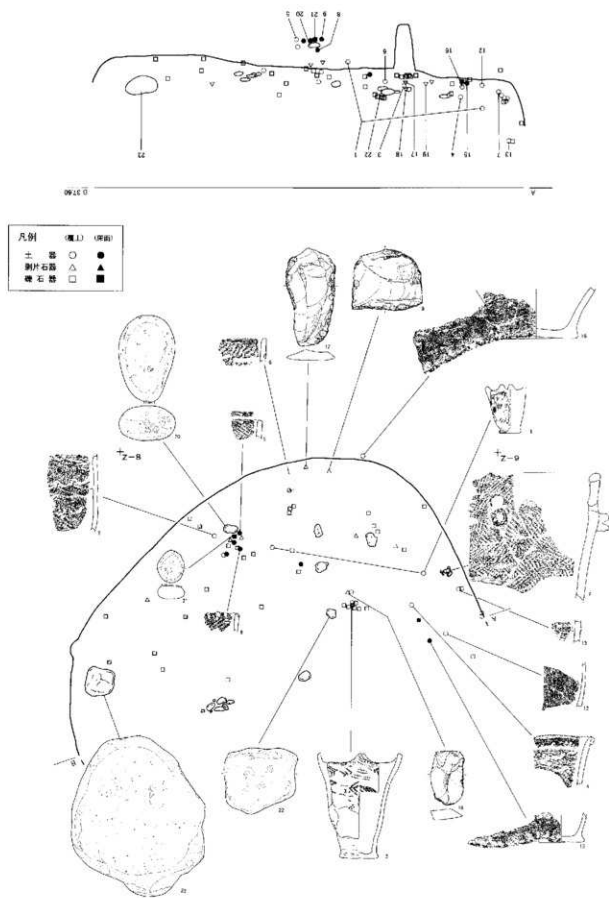


図V-10 H-1 (2) とH-1出土の遺物 (1)



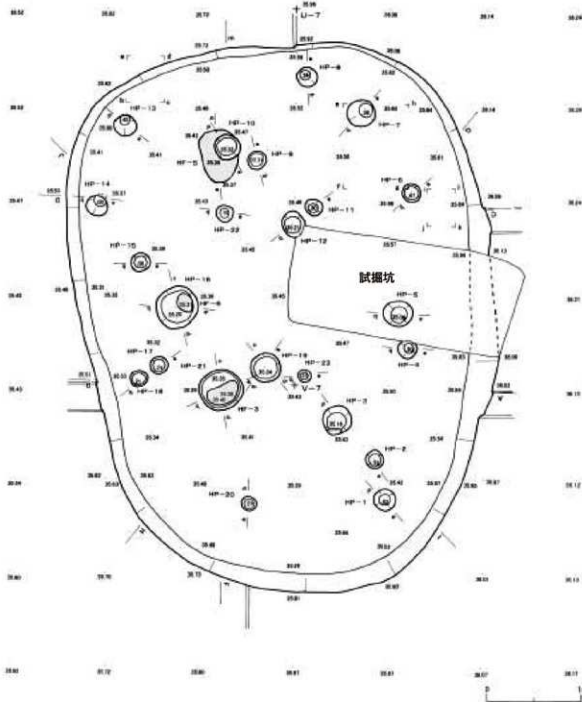
図V-11 H-1出土の遺物(2)

V 山越4遺跡の調査



図V-12 H-1 遺物出土状況図

H-2

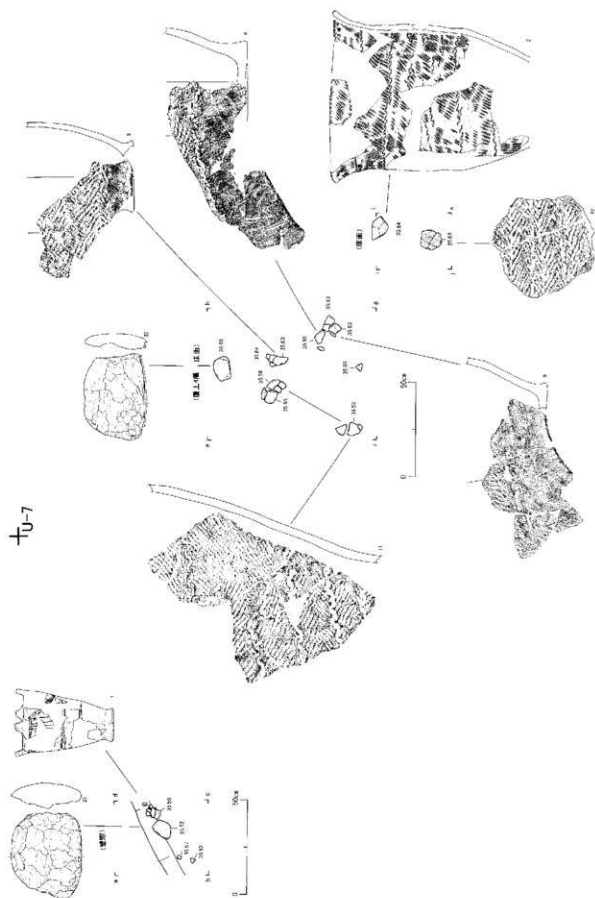


図V-13 H-2 (1)

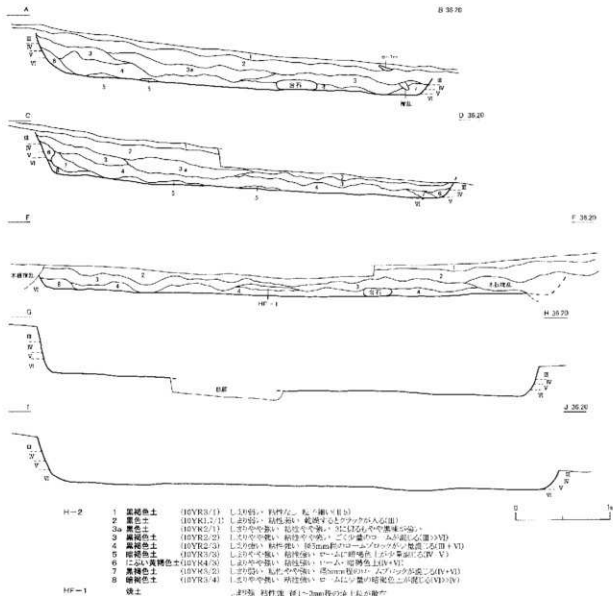
い黒～暗褐色土（4～8層）の大きく4層に大別でき、遺物の取り上げはこの大別に従った。よって取り上げの1層＝覆土1層、同2層＝2層、同3層＝3層、同4層＝4～8層に相当する。

なお、4層上面に焼土や遺物がまとまる部分があり（図V-18）、住居廃絶後のくぼみを利用していたと推測される。

壁・床面 傾斜上面の西側の壁は明瞭であった。北側には風倒木攪乱があり、一部不明瞭な部分もあった。床面はやや傾斜している。



図V-14 H-2層土4層・床面遺物出土状況図



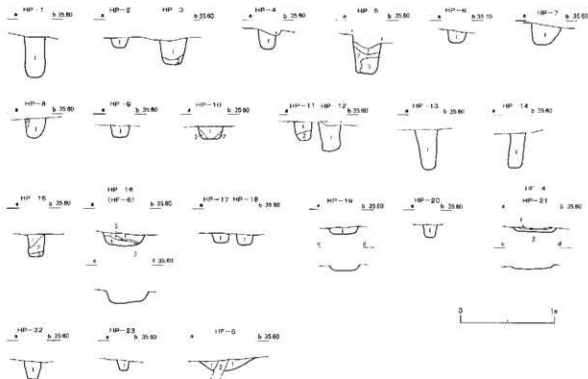
図V-15 H-2 (2)

炉 床面の炉は1ヶ所(HF-5)である。この他に、浅い付属土壌中の焼土2ヶ所(HF-4・6)が検出された。HF-5は確認面が床面よりやや低いこと、付属土壌に切られていることから古手の地床炉と推測される。HF-4・6はそれぞれ、浅い皿状の土壌であるHP-21・16中の焼土である。これらは床面を浅く掘り窪めた炉と考えられる。HF-1～3は覆土4層上面の焼土で、この住居廃絶後の埋まり切らない窪みを利用した際のものと考えられる(図V-18)。

付属ビット・柱穴 付属ビット・柱穴は合計23基が確認できた。この内、主柱穴と推測される深いものはHP-1・5・12～15の6基である。これらは規則的な配列を取らない。その周囲には浅い小土壌が散在している。また、直径30cm以上で浅い皿状の土壌はHP-16・19・21の3基である。この内2基からは焼土が確認された。

遺物出土状況 覆土2層から土器19点・石器など14点、覆土3層から土器42点・石器など22点、覆土4層から土器18点・石器など16点、付属土壌から土器7点・石器など13点、床面から土器18点・石器

V 山越4遺跡の調査

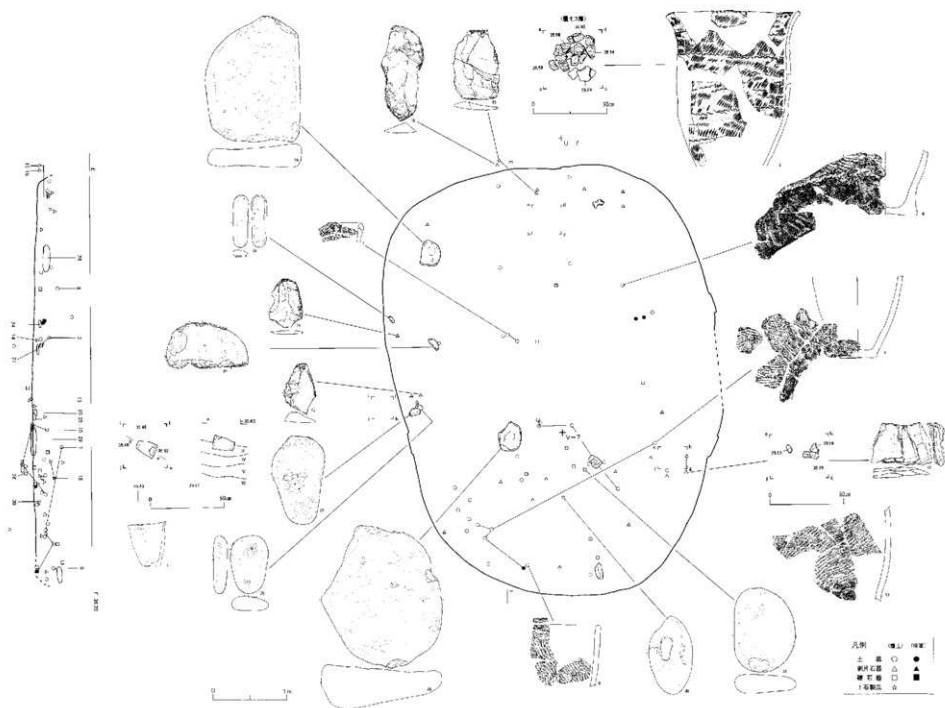


HP-1	1	反黄褐色土 (10YR6/2)	土が弱い、粘土や中強い、炭化物がごく少量混じる
HP-2	1	黄褐色土 (10YR5/1)	土がやや中強い、粘土や中強い、ロームブロックが多少混じる
HP-3	1	黒色土 (10YR2/1)	土が強い、粘土質の
	2	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	土が強い、粘土質、ごく少量の黒色土が混じる
HP-4	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、厚10mm程度のロームブロックが混じる
HP-5	1	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	土が強い、粘性強い
	2	黄褐色土 (10YR5/3)	土が強い、粘性強い、ごく少量の黒褐色土が混じる
HP-6	1	黄褐色土 (10YR5/3)	土が強い、粘性強い、ロームが混じる
HP-7	1	黒褐色土 (10YR3/2)	土が強い、粘性や中強い、厚2-3mmのロームブロックが少量混じる
HP-8	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、ロームが少量混じる
	2	暗褐色土 (10YR3/3)	土がやや強い、粘性強い、黒色土が少量混じる
HP-9	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性や中強い、ごく少量の炭化物が混じる
	2	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性や中強い、黒土が混じる
HP-10	1	暗褐色土 (10YR3/4)	土が強い、粘性強い、暗褐色土が混じる
HP-11	1	黒褐色土 (10YR3/2)	土がやや強い、粘性強い、ロームが混じる
	2	暗褐色土 (10YR3/3)	土がやや強い、粘性強い、厚約10mm程度のロームブロックが混じる
HP-13	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、ロームが少量混じる
HP-14	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、厚10mm程度のロームブロックが少量混じる
HP-15	1	黄褐色土 (10YR5/2)	土がやや中強い、粘性強い、ごく少量のロームが混じる
HP-16	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性や中強い
	2	遺土、にぶい黄褐色土 (5YR4/4)	土が弱い、粘性や中強い (HP-6)
	3	暗褐色土 (10YR3/4)	土がやや中強い、粘性や中強い、黒土が混じる
	4	暗褐色土 (10YR3/3)	土がやや中強い、粘性強い
HP-17	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、ロームが少量混じる
HP-18	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土がやや強い、粘性強い、ロームが少量混じる
HP-19	1	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、厚10mm程度のロームブロックが少量混じる
HP-20	1	黄褐色土 (10YR5/3)	土が強い、粘性強い、炭化物が少量混じる
HP-21	1	黄土、暗褐色土 (5YR3/4)	土が強い、粘性強い、炭化物が混じる (HP-4)
	2	暗褐色土 (10YR3/3)	土が強い、粘性強い、ロームが混じる
HP-22	1	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	土が強い、粘性強い、厚約10mm程度のロームブロック及び炭化物が混じる
HP-23	1	暗褐色土 (10YR3/4)	土がやや中強い、粘性強い、厚10mm程度のロームブロックが混じる
HP-5	1	黄土、にぶい黄褐色土 (5YR4/4)	土が強い、粘性強い
	2	暗褐色土 (10YR3/4)	土が強い、粘性強い、厚30-40mm程度の黒土が混じる

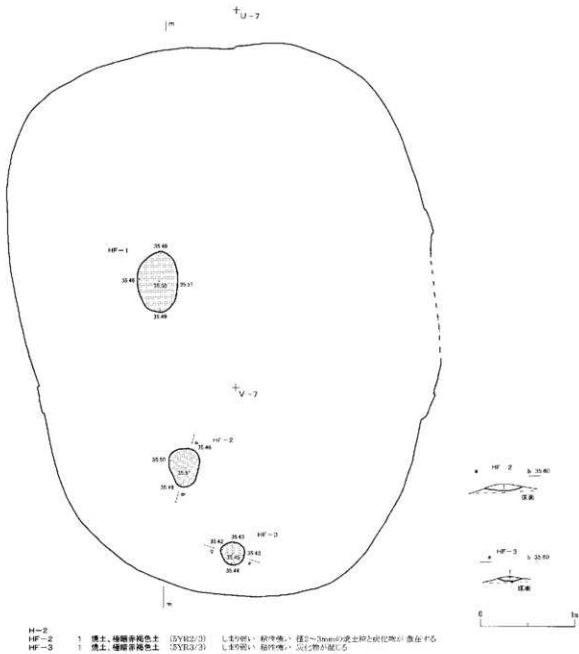
図V-16 H-2 (3)

など3点の合計175点が出土した。

遺物 (土器) 1は底部が壁際の覆土3層から23の半円状扁平打製石器と近接して出土したものと(図V-14)。包含層出土の口縁部破片とは接合せず、文様パターンや口径により推定復元した。4ヶ所の小型山形突起を持つやや小型の土器で、無文地に横走する2本単位の沈線文が3段巡り、他に突起から垂下する4本単位の沈線、相対する突起間を弧状につなぐ3本単位の沈線により文様が構成されている。胴部の器面は凹凸が著しい。2は床面および覆土出土の破片が接合し復元できたもの(図V-17)。口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形である。接合しなかったが、小型の弁状突起も出土している。口唇部の断面形は角形で、刻みがある。胴部にはLR斜行縄文が施文され、その上に縦絡文が施

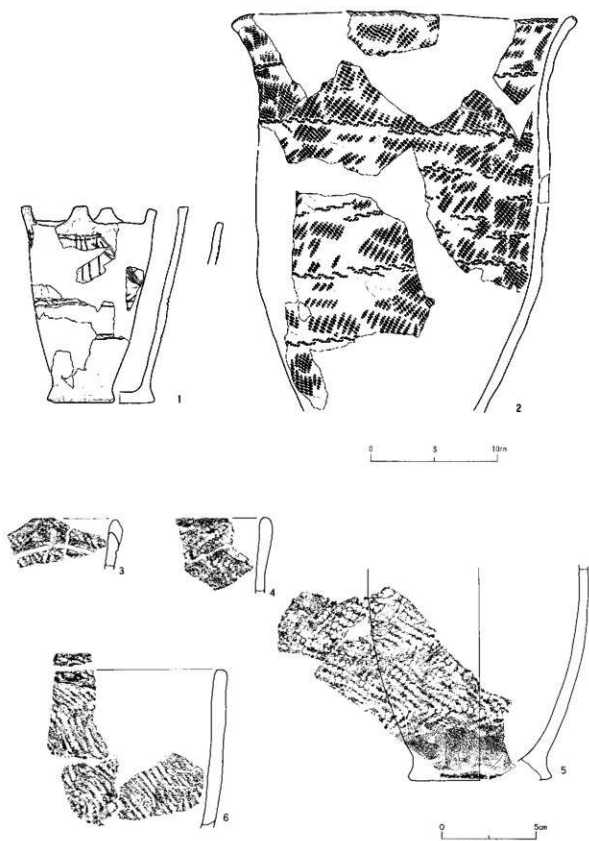


図V-17 H-2 遺物出土状況図

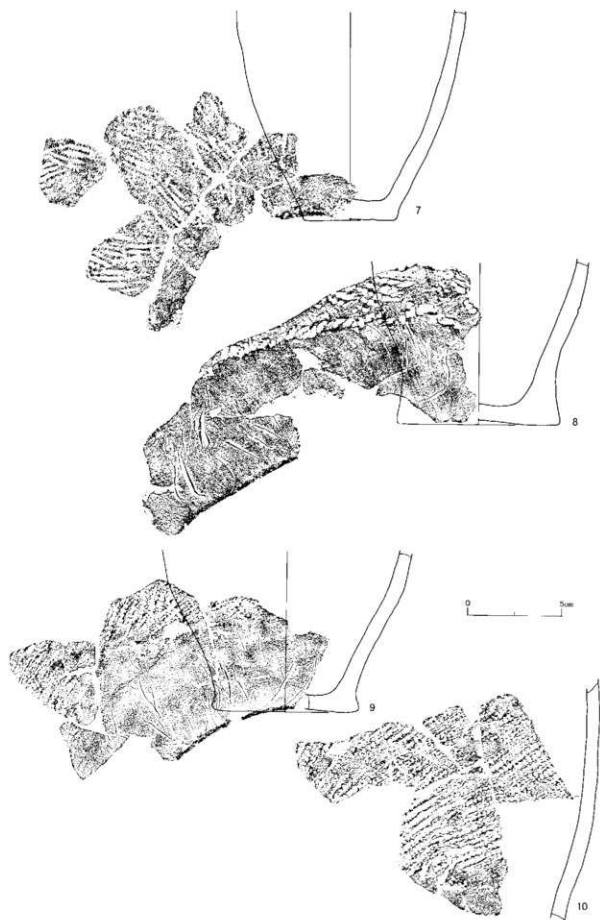


図V-18 H-2覆土中検出の焼土

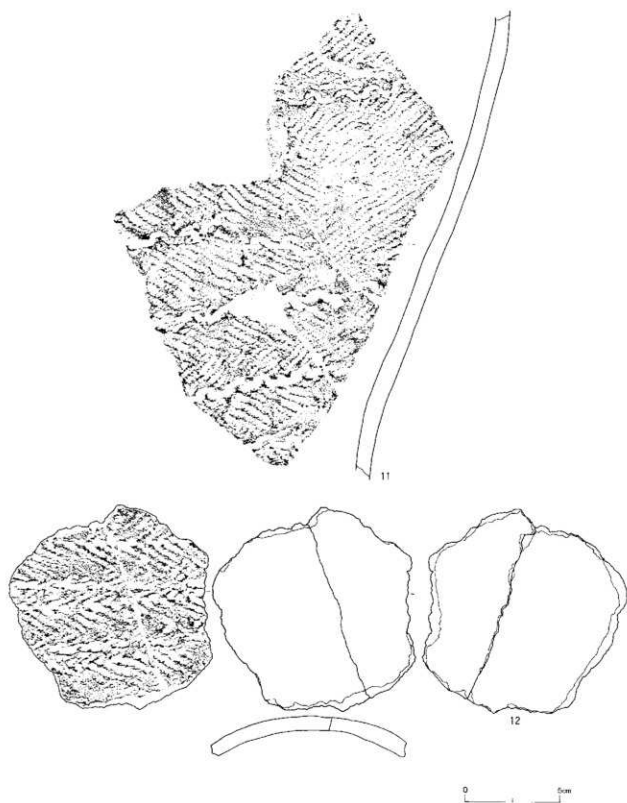
されている。内面は艶磨きされ平滑である。3は沈線文の施文された波頂部の破片。4・5は同一個体で口縁部の4が隣接した包含層から、底部の5が覆土4層から出土した。結束第1種羽状縄文が施文されており、底部付近は横方向に調整され、地文の一部が磨り消されている。6・7も同一個体で、覆土2層・床面・柱穴出土の破片と包含層の破片が接合したものの。R Lの原体を用いた縄文が口縁部では斜行、底部付近では縦走気味に施文されている。口縁部断面形は角形に近く、口唇部にも縄文が回転施文されている。8は他の底部とは異なり、縦方向に丁寧に艶磨きされ光沢のあるもの。無文部と地文との境界にはきつく結節した結節部を回転施文している。9は底部で、地文のL R斜行縄文施文後、横方向に艶磨き調整されたもの。10は付属土坑H P-19覆土の破片を中心に一部包含層と接合した、L R Lの複節斜行縄文が施文された底部に近い破片。11は床面から出土した、L R・R Lの燃



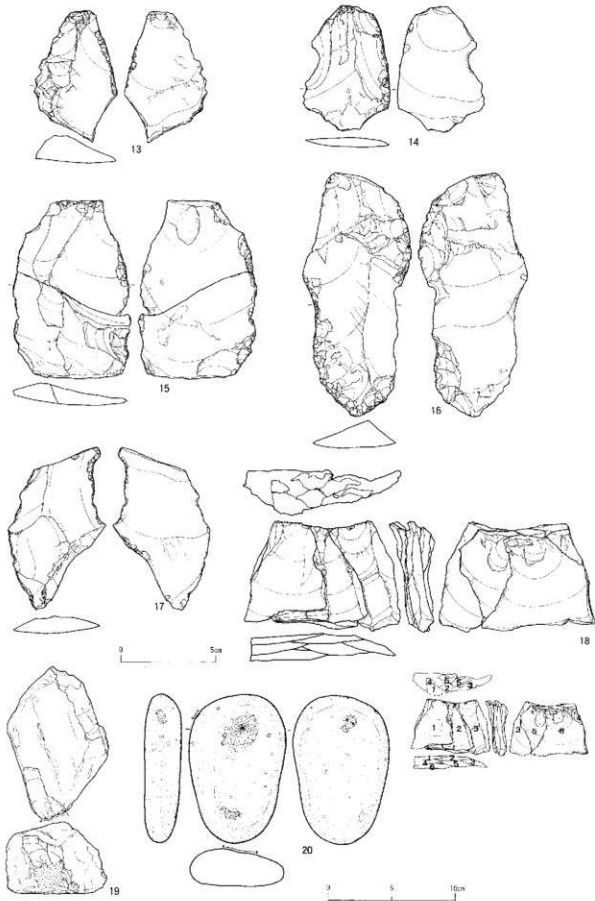
図V-19 H-2出土の遺物(1)



図V-20 H-2出土の遺物(2)

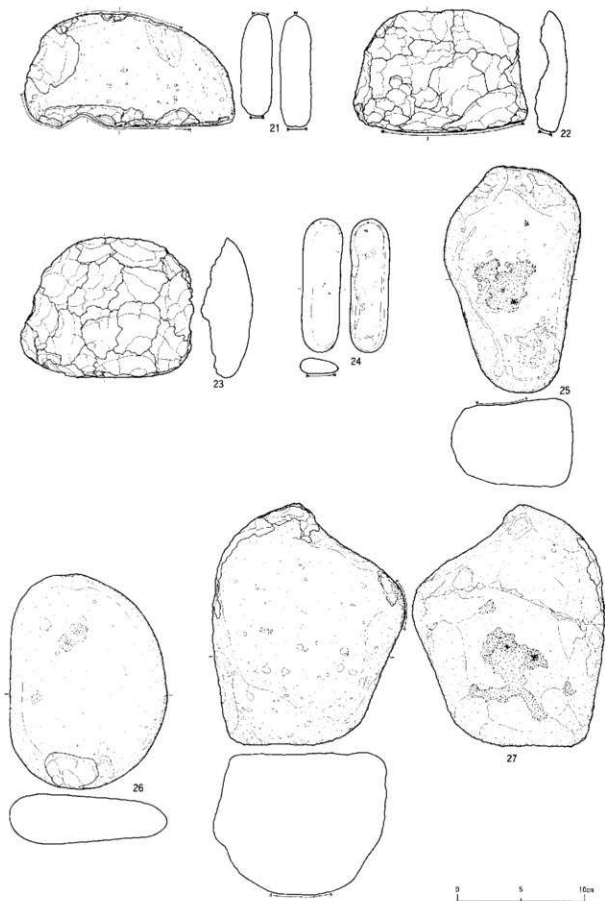


図V-21 H-2出土の遺物(3)

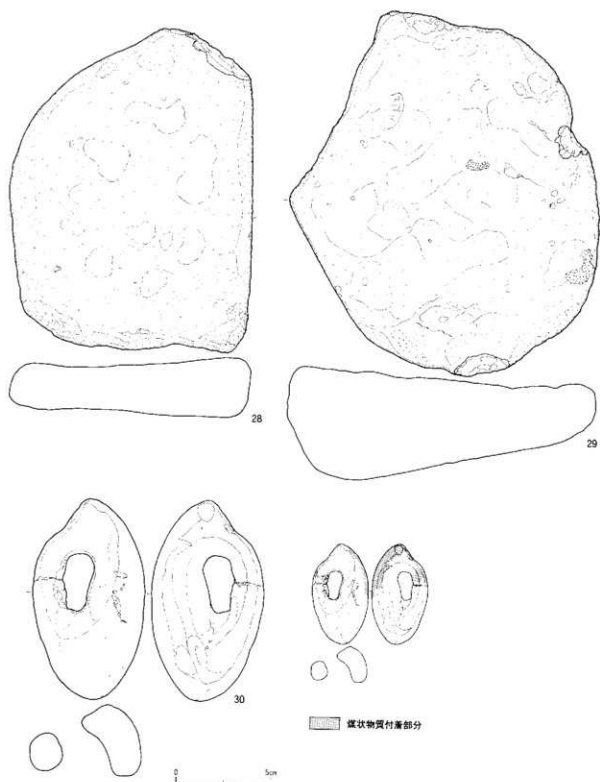


図V-22 H-2出土の遺物(4)

V 山越4遺跡の調査



図V-23 H-2出土の遺物(5)



図V-24 H-2出土の遺物(6)

りの異なる原体を用いた羽状縄文施文後に綾絡文が施された胴部破片。12も床面から出土した土製円盤の可能性のある破片。結束第1種羽状縄文上に綾絡文が施文されている。11・12はともに厚手で、大型の土器と推測され、内面は縦方向に丁寧に調整されている。5・8・9・11・12および22の半円状扁平打製石器は近接して出土した(図V-14、図版44-1・3・4)。

出土した土器はいずれもⅢ群a-3類と考えられる。このうち、2・11・12は同類の中でも古手のサイベ沢Ⅶa式と推測されるが、胎土などからⅢ群a-2類サイベ沢Ⅶ式の可能性もある。

(石器) 13~16は縦長剥片を用いたスクレイパーで、13~15は刃部が直線状のもの(ⅢB2b)、16は内湾気味のもの(ⅢB2c)。13は礫表皮面を、15は節理面を残す。17はRフレイク(VB1)。18は床面直上に近い覆土4層で出土した6点の剥片が接合したものの。図の1→6の順に剥片剥離を行っている。ただし、3と4については切り合い関係だけでは不明で、順番が逆転する可能性もある。6点の剥片の内2・3・5については側縁に微細な刃こぼれ状の剥離が見られ、Uフレイク(VB2)とした。19は柱穴であるHP-1の覆土中から出土したたたき石(Ⅶ1)。20はたたき痕の内の一ヶ所は浅いが、素材となる礫の形態などからくはみ石に類似するもの(Ⅶ4)。21~23は半円状扁平打製石器(Ⅶ3)。21は腹背両面に礫面を残し、周縁の一部を打ち欠いたもの。平坦なすり面があり、一部は抉りとなっている。22・23は図裏面に礫面を残し、片面の全面を打ち欠いたもので、22には平坦なすり面がある。24は扁平棒状礫の片面が平滑で、すり石(Ⅶ5)と推測したもの。25~29は台石(X)。27は柱穴であるHP-1の覆土中出土で、19のたたき石とセットになると推測できるもの。29は住居跡床面の中央部から据え置かれたように出土したもの(図版44-5)。使用面に明瞭なたたき痕は見られないが凹凸が多く、加撃物の設置などにこの凹凸を利用したものと推測される。焼成を受け、器表面の一部が剥離している。30は有孔自然石で、焼成を受けており、図網掛け部分に煤状の物質が付着している。石材は13~18が頁岩、19が珪岩、20~23・25~29が安山岩、24・30が凝灰岩である。

時期 床面出土の遺物から縄文時代中期前半のⅢ群a-2~3類、サイベ沢Ⅶ式~サイベ沢Ⅶa式に相当する時期の遺構である。なお、掘り込みを持つ炉と推測した付属土壇HP-16覆土中から検出された炭化物の補正放射性炭素年代は4430±40yBP(YK4-3)で(第Ⅵ章1参照)、H-1よりもやや古手の住居跡とした考古学的所見と矛盾しない。

H-3 (図V-25~29、図版45・46・61・62、表V-1・6~9)

位置 O-6・7、P-6・7

規模 一×(494) / (305×293) / 37cm

平面形 楕円形

長軸方向 N-27°-E

確認・調査 周囲に抜根攪乱および風倒木痕が集中していたため確認が遅れた。O-6区調査中に石組炉が検出されたため住居跡とした。ベルトを設定し更に掘り進めたが、攪乱が多く傾斜上方の壁が一部確認できたのみであった。床面も風倒木の影響を受け平坦ではなく、また斜面下方では確認できなかった。

覆土 全体で6層に分層した。自然堆積である。Ⅱb層を主体とする黒褐色土(1層)、Ⅲ層を主体とする黒色土(2層)、ロームが若干混じる黒褐色土(3層)、ロームブロックが多く混じるやや明るい黒~暗褐色土(4~6層)の大きく4層に大別でき、遺物の取り上げはこの大別に従った。

壁・床面 壁は斜面上方でのみ確認できたが、多くは抜根攪乱、風倒木攪乱により不明瞭であった。床面も風倒木攪乱により凹凸が見られた。

炉 石組炉1ヶ所（HF-1）、地床炉1ヶ所（F-1=HF-2とする）が検出された。石組炉は礫3個で囲まれていたが、他に炉石の抜き取り痕と推測される小さな窪みが4ヶ所確認できた（炉③～⑥）。F-1（HF-2）は住居跡と確認する以前に調査したものである。H-3床面よりも若干レベルが高いが、周囲の床面は攪乱により一定していないのでこの住居に伴うものと推測した。

付属ピット・柱穴 付属土壌2基（HP-1・3）、柱穴と推測される小土壌2基（HP-2・4）が確認できた。HP-1の覆土中からスクレイパー・礫が出土した。HP-3の覆土にはF-1（HF-2）に由来する焼土粒・炭化物が混じっている。柱穴と推測されるHP-2・4は規則的な配列をとらない。

遺物出土状況 覆土2層から土器2点・石器など1点、覆土3層から土器32点・石器など11点、覆土4層から石器など4点、付属土壌から土器1点・石器など1点、床面から土器18点・石器など14点、HF-1焼土中から土器5点・石器など7点、の合計96点が出土した。

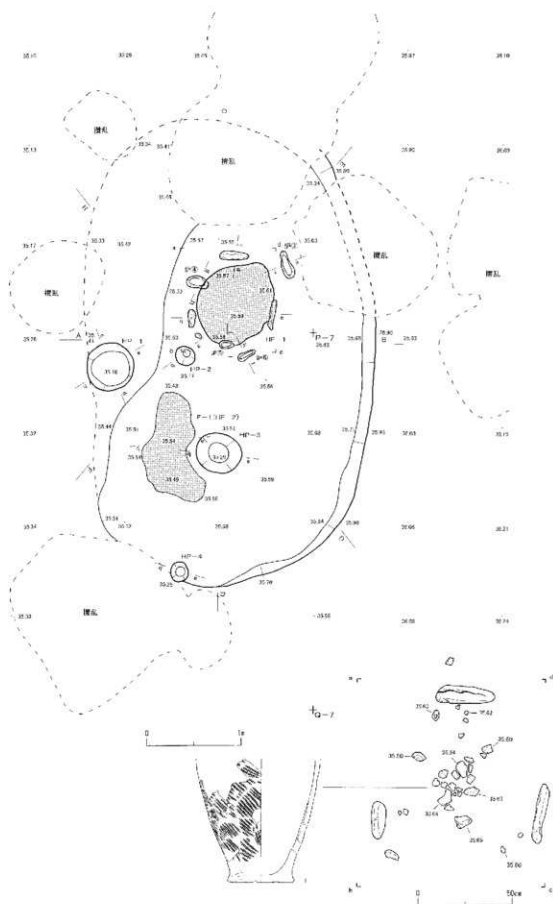
遺物（土器） 1は石組炉上からまとまって出土したもの（図V-25）に、床面及び炉の焼土中出土の破片が接合したもの。厚手で胴部にはRL斜行縄文が施文されている。内面は縦方向に非常に丁寧に篋磨き調整され、凹凸は見られない。2～4は同一個体で、2が床面から出土した。3・4は大型の弁状突起部で無文地に太い貼付帯で文様が構成されるもの。文様帯には撚りの異なる2条の縄線文が横走り、その間に撚糸を用いた馬蹄形圧痕文が施文されている。5・6も同一個体で、5が付属土壌HP-1覆土中から10のスクレイパーとともに出土した。平縁で、肥厚した口縁部の撚糸圧痕上および地文上に波状で幅広の貼付帯が施文されている。地文は無節と単節の原体を用いた結第1種羽状縄文で、内面は横方向に丁寧に篋磨き調整され平滑である。2～6の貼付帯上には縦方向の撚糸圧痕が密に施されている。1～6はⅢ群a-1類である。7は床面から出土したⅣ群a類土器。口縁部の無文部分に2条のLRの縄線文がめぐり、胴部には同一原体の斜行縄文が施文されている。小突起があり、口唇部にも縄文が施文されている。胎土には砂が多く入っている。

（石器）8は床面から出土した有茎凸基の石鏃（IA5）。先端部には回転使用によると推測される摩滅が見られ、石錐に転用している。9～12はスクレイパー。9は床面から出土したもので両側縁にある刃部が外湾するもの（ⅢB2a）。10は付属土壌であるHP-1の覆土下位から出土したもので刃部が直線状のもの（ⅢB2b）。下端部には剥離面を残す。11・12は横長剥片を用いたもので、11は刃部が外湾するもの（ⅢB3a）、12は二側縁に直線状の刃部が作出されたもの（ⅢB3b）。13・14はUフレイク（VB2）で、使用によると推測される微細な剥離のあるもの。この内13は床面出土である。15は扁平礫の周縁に不明瞭なたたき痕のあるたたき石（Ⅷ2）。16は床面から出土した、全面敲打整形されたと推測される北海道式石冠の頭部（Ⅷ4）。17・18は台石（X）で、いずれも石組炉の炉石に転用されていたもの。17は浅いたたき痕のあるもの、18はたたき痕が不明瞭で使用面の凹凸の著しいもの。

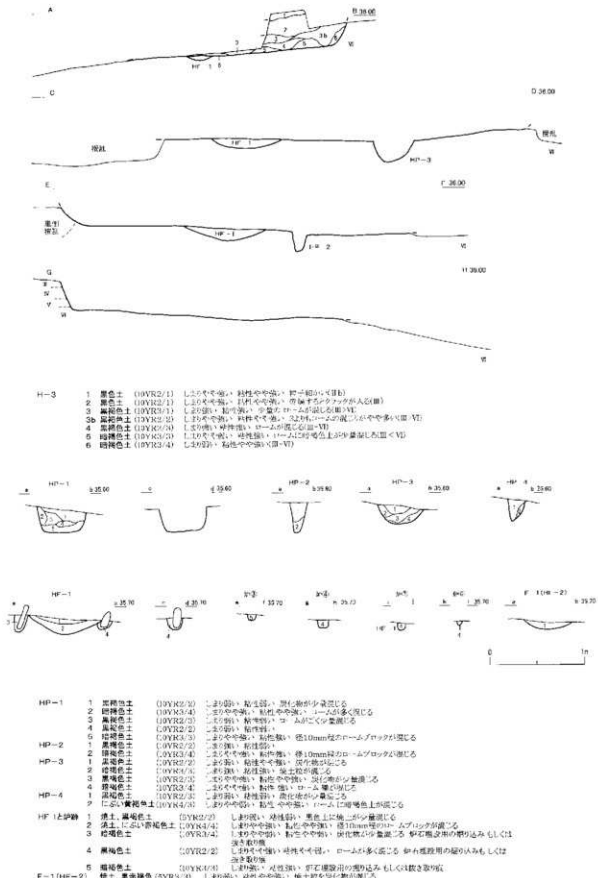
石材は8～13が頁岩、14は凝灰岩、15～18は安山岩である。

時期 床面およびHP-1覆土、石組炉上出土の土器からⅢ群a-1類、円筒土器上層b式に相当する時期の遺構と推測される。

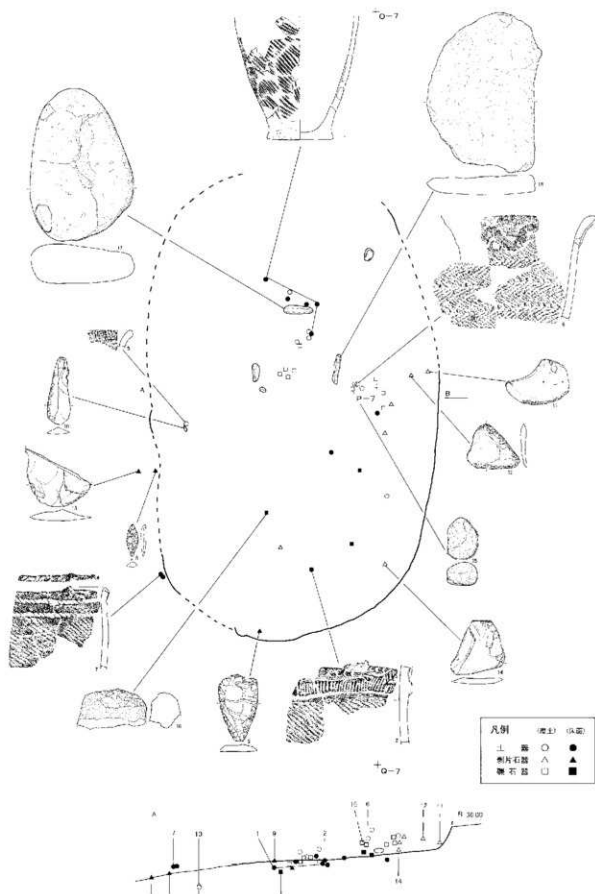
H-3



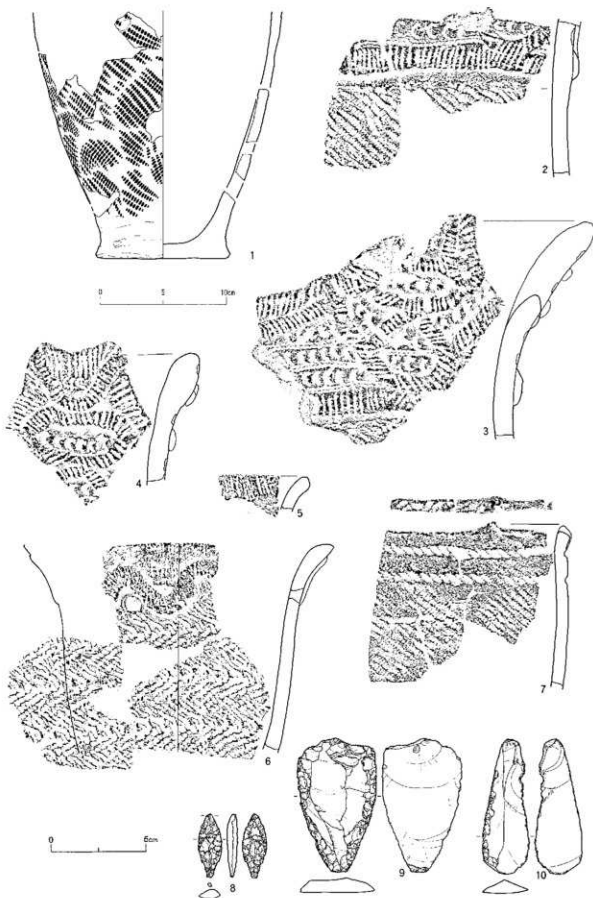
図V-25 H-3 (1)



図V-26 H-3 (2)

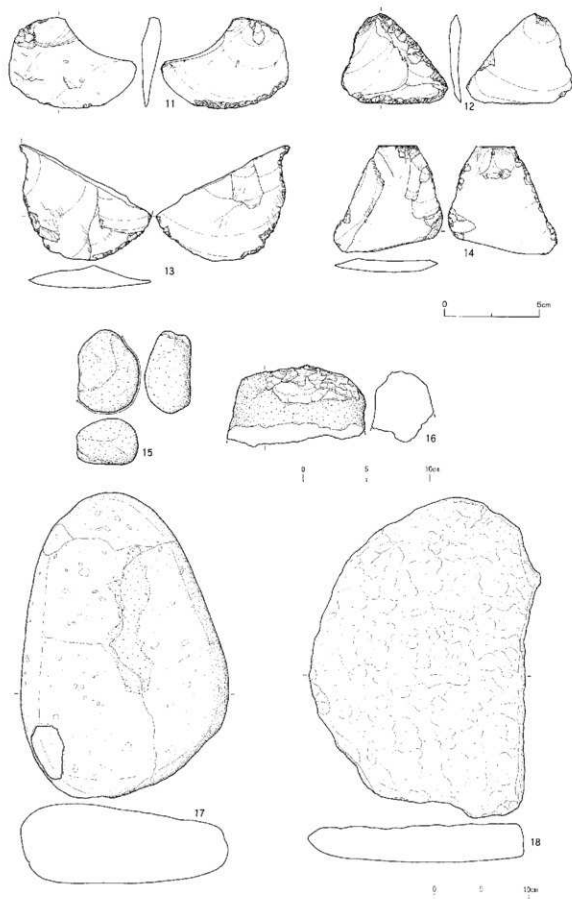


図V-27 H-3遺物出土状況図



図V-28 H-3出土の遺物(1)

V 山越4遺跡の調査



図V-29 H-3出土の遺物(2)

H-4 (図V-30~32、図版46・47・63、表V-1・6~9)

位置 R-6 (R-5、Q-6)

規模 (264×240) / (233×217) / 35cm

平面形 円形?

長軸方向 —

確認・調査 抜根攪乱・風倒木痕が多くQ-6区では確認できなかった。R-6区をIV層上面まで掘り下げた際に黒~暗褐色土の落ち込みが確認されたのでベルトを設定し掘り下げた。床面は不明瞭で、壁も立ち上がりがわずかに確認できる程度であった。しかし、焼土(HF-1)および柱穴と想定できる深い小土壇(HP-1)が確認できたので、その面を床面とする住居跡とした。住居跡は調査区外に広がり、全体の4分の3程度の調査であった。

覆土 全体で4層に分層した。自然堆積である。遺物の取り上げも分層に準じた。

壁・床面 壁の多くは攪乱などにより確認できなかった。確認できた部分でも掘り込みが浅いこともあり、不明瞭であった。床面はしまりが弱く不明瞭で傾斜している。

炉 中央ではなく壁近くで確認した。地床炉である。

付属ビット・柱穴 付属土壇1基(HP-2)、主柱穴1基(HP-1)、その他小土壇1基(HP-3)の3基が検出された。HP-1・2の覆土には炭化物が混じっている。

遺物出土状況 覆土1層から土器10点・石器など7点、覆土2層から石器など1点、覆土3層から土器14点・石器など4点、覆土4層から石器など1点、覆土中から土器2点・石器など4点、付属土壇から石器など1点、床面から石器など1点、の合計45点が出土した。

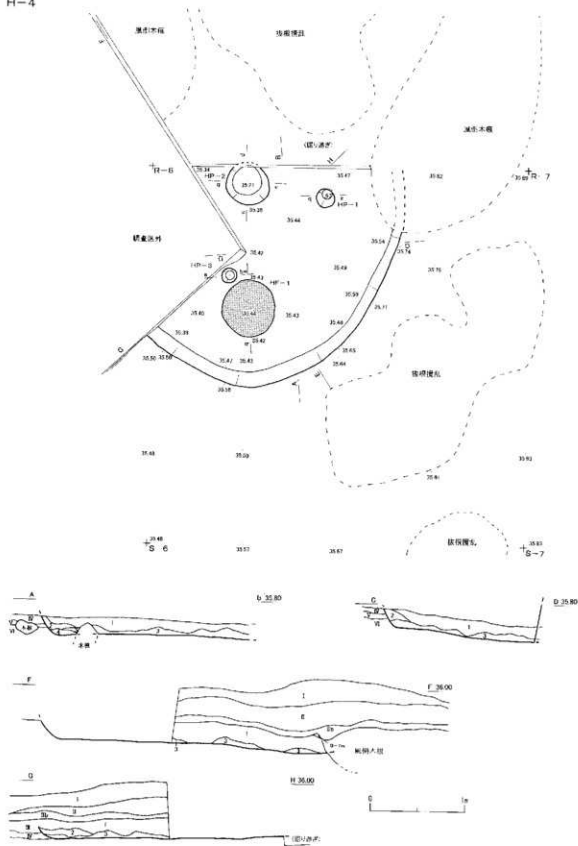
遺物 (土器) 1は住居跡に近接してまとまって出土した破片と覆土中の破片が接合したもの(図V-31)。口縁部と底部は接合せず、文様パターンから推定復元した。口縁部が外反し胴部が大きく膨らむ器形である。無文地にやや幅狭の貼付文で文様が構成されるもので、弧状の貼付文に沿うように3本一組の縄線文が施文されている。口唇部にも斜め方向の貼付文があり、小型突起下には橋状把手も見える。文様帯下端には2条の平行する貼付帯が巡り、その間には棒状工具による刺突文が施されている。2・3は同一個体で肥厚する口唇部が「く」字状に開き、そこに「<」・「C」状に粘土紐を貼り付けたもの。平緑のⅢ群a-2類土器の口唇部に施文される波状の貼付文に類似するものと推測される。胴部には斜行縄文が施文されている。4は斜行縄文が施文されたもの。取り敢えず土製品としたが、ミニチュア土器の底部もしくは剥落した突起部の可能性がある。1はⅢ群a-1類、2・3はⅢ群a-2類、4はⅢ群a-3類と推測される。

(石器) 5は縦長剥片を用いた内湾気味の刃部を作出したスクレイパー(ⅢB2c)。6・7は図裏面に礫面を残し、片面の全面を打ち欠き整形した半円状扁平打製石器(Ⅲ3)。8は包含層U-5-c区出土の半円状扁平打製石器片(図網掛け部分)と接合したもの。両者ともに平坦なすり面がある。礫を縦割りにしてそれぞれに使用面を作出していることがわかる。石材は5が頁岩、6・7は安山岩である。

時期 床面からの出土遺物が無く不明である。覆土中出土の遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群a-1類もしくはa-2類、サイベ沢V式あるいはⅥ式に相当する時期の遺構の可能性がある。

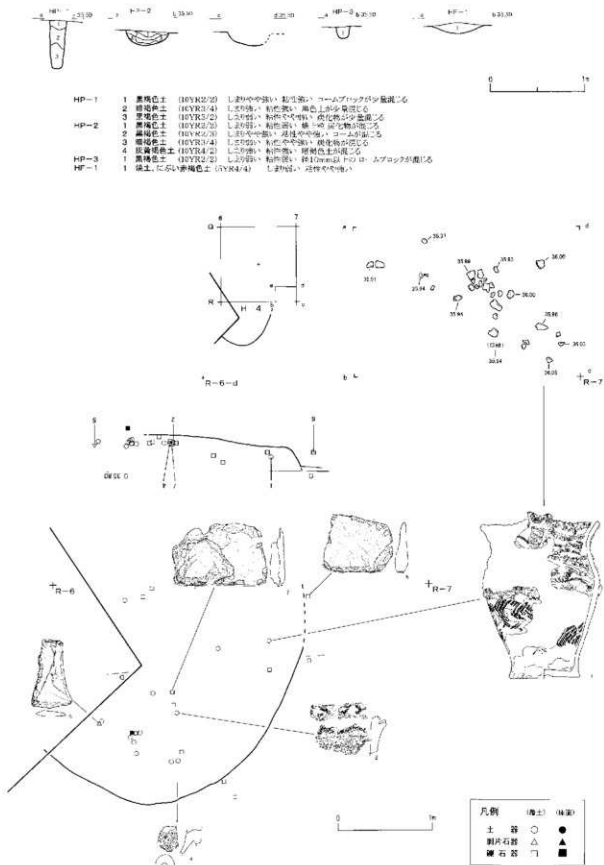
V 山越4遺跡の調査

H-4

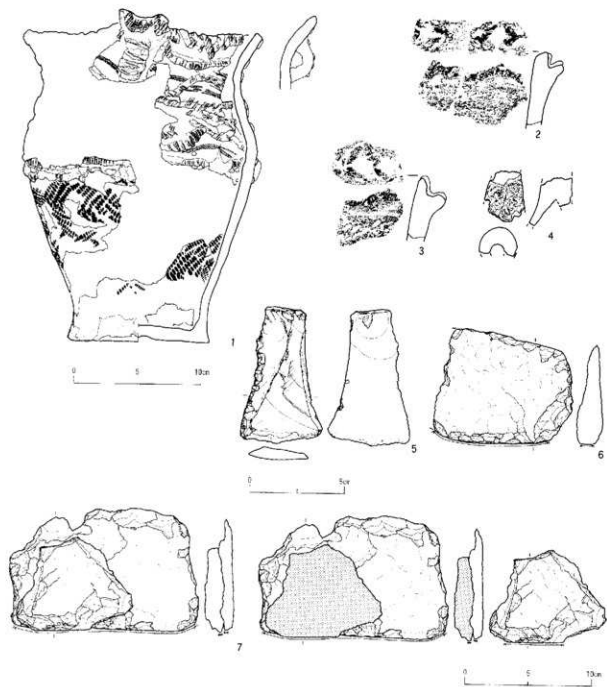


- H-4
- 1 黒色土 (HVR2/1) 土層が薄い、粘性強(VI)
 - 2 暗褐色土 (HVR3/3) 土層がやや厚い、粘性中強(VI)
 - 3 暗褐色土 (HVR3/4) 土層がやや厚い、粘性中強(VI)、ロームが多少見られる(VI)
 - 4 灰黄褐色土 (HVR4/2) 土層がやや厚い、粘性強、暗褐色土が少量見られる(VI)

図V-30 H-4 (1)



図V-31 H-4 (2)と遺物出土状況図



図V-32 H-4出土の遺物

(2) 土壌

P-1 (図V-33、図版47・48、表V-2)

位置 Z-6-c 規模 76×74/62×56/43cm

平面形 円形 長軸方向 ー

確認・調査 P-1-3はともにVI層まで掘り下げた際に円形の黒色土の落ち込みとして確認した。半載したところ、垂直な壁と平坦な墳底面が確認できたので遺構とした。また、P-1に近接して作業面を水平にし置かれたように台石が出土した(包含層出土石器140)。そのため、P-1-3は台石を用いる作業に関連する一連の土壌であると推測される。

覆土 8層に分層した。自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 遺物が出土しなかったので詳細は不明であるが、周辺の遺物や近接して出土した台石から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-2 (図V-33、図版47・48、表V-2)

位置 Z-6-a、Y-6-d 規模 102×65/93×63/53cm

平面形 円形 長軸方向 ー

確認・調査 VI層まで掘り下げた際に円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、垂直な壁と平坦な墳底面が確認できたので遺構とした。

覆土 7層に分層した。自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 P-1と関連する土壌と推測され、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-3 (図V-33、図版47・48、表V-2)

位置 Y-6-a・b、X-6-c・d 規模 89×64/88×66/33cm

平面形 円形 長軸方向 ー

確認・調査 VI層まで掘り下げた際に円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、垂直な壁と平坦な墳底面が確認できたので遺構とした。

覆土 4層に分層した。自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 P-1と関連する土壌と推測され、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-4 (図V-34、図版49、表V-2)

位置 X-8-c 規模 109×80/105×88/61cm

平面形 円形 長軸方向 ー

確認・調査 IV層上面で円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、垂直な壁と平坦な墳底面が確認できたので遺構とした。床面からやや浮いた位置に炭化物がままとっていた。この炭化物の補正放射性炭素年代は4180±40yBP (YK 4-4)である(第VI章1参照)。

覆土 9層に分層した。埋め土である。

遺物 出土しなかった。

時期 遺物が出土しなかったので不明であるが、周辺の遺物や放射性炭素年代から、縄文時代中期の

遺構と推測される。

P-5 (図V-34・35、図版49・63、表V-2・6・9)

位置 S-10-c・d、S-11-a・b **規模** 218×187/202×177/36cm

平面形 円形 **長軸方向** ー

確認・調査 S-10区をⅥ層上面まで掘り下げた際に黒褐色土の落ち込みを確認した。調査区に沿ってトレンチを入れると不明瞭ではあったが立ち上がりが確認できたので遺構とした。皿状で円形の土壌である。また、覆土2層上面から石鏃1点が出土した。自然堆積の上位から出土したもので、この遺構に伴うものではない。なお、近接してP-6、C-1が検出された。

覆土 7層に分層した。自然堆積である。

遺物 1は覆土2層から出土した凸基有茎の石鏃(IA5)である。一次剥離面を残し、基部を欠損する。石材は黒曜石で、原産地分析によると赤井川産(第Ⅵ章3、分析番号77744)である。

時期 石鏃はこの土壌に直接伴うものではないので不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-6 (図V-34・35、図版49・63、表V-2・6・9)

位置 S-10-c、T-11-d **規模** 81×62/53×36/31cm

平面形 楕円形 **長軸方向** N-42°-E

確認・調査 Ⅴ層上面で楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、垂直な壁と平坦な壙底面が確認できたので遺構とした。覆土2層からUフレイクが出土した。

覆土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物 1は覆土2層から出土したUフレイク(VB2)で、両側縁に使用によると推測される微細な剥離がある。石材は頁岩である。

時期 Uフレイクはこの土壌に直接伴うものではないので不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-7 (図V-35、図版50、表V-2)

位置 V-11-a **規模** 58×40/48×28/16cm

平面形 円形 **長軸方向** ー

確認・調査 Ⅵ層上面で円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ立ち上がりが確認できたので遺構とした。

覆土 1層で分層できなかった。埋め戻しと推測できる。

遺物 出土しなかった。

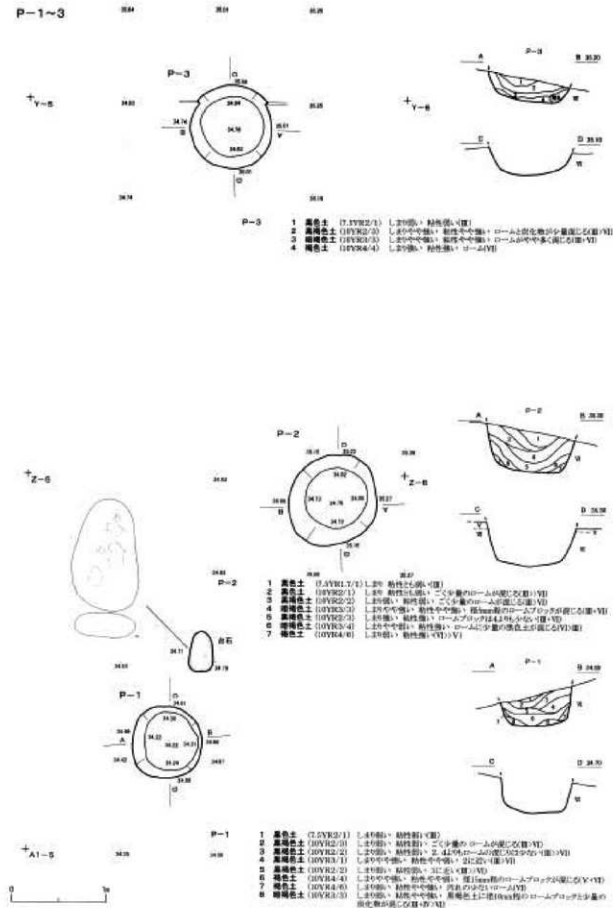
時期 遺物が出土しなかったので不明であるが、埋め土がⅢ層主体であることや周辺の遺物から縄文時代中期前半の遺構と推測される。

P-8 (図V-36、図版50・63、表V-2・6・8)

位置 Q-7-b **規模** 73×54/71×55/28cm

平面形 円形 **長軸方向** ー

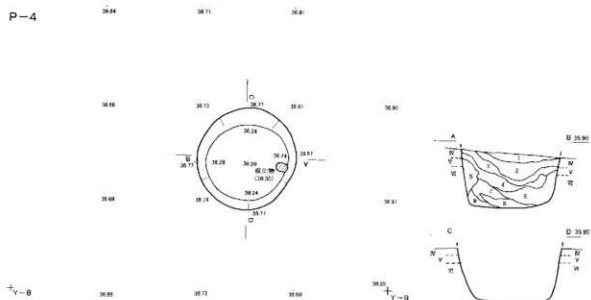
確認・調査 Ⅵ層上面で円形の暗褐色土の落ち込みを確認した。半載したところ垂直な壁と平坦な壙



図V-33 P-1~3

V 山越4遺跡の調査

P-4



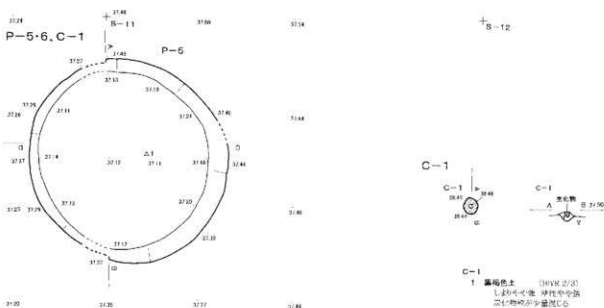
+Y-8

+Y-9



P-4

- 1 黒色土 (0YR2/1) 土砂や中砂、粘り強い(層+H1)
- 2 黒色土 (0YR1.7/1) 土砂や中砂、粘り強い、黄色の斑状土層
- 3 黒色土 (0YR2/1) 土砂や中砂、粘り強い、ごく少量のロームが混入(斑状土層)
- 4 黒褐色土 (0YR2/2) 土砂や中砂、粘り強い、ごく少量のロームが混入(斑状土層)
- 5 暗褐色土 (0YR3/3) 土砂や中砂、粘り強い、ロームが混入(層+V+VI)
- 6 暗褐色土 (0YR3/4) 土砂や中砂、粘り強い、ロームが混入(層+V+VI)
- 7 黄褐色土 (0YR5/2) 土砂や中砂、粘り強い、ごく少量のロームが混入(層+VI)
- 8 赤色土 (0YR2/1) 土砂や中砂、粘り強い、ごく少量のロームが混入(層+VI)
- 9 暗褐色土 (0YR3/3) 土砂や中砂、粘り強い、ごく少量のロームが混入(層+VI)



P-5・6, C-1

P-5

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

C-1

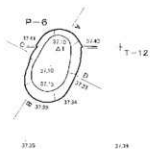
C-1

C-1

C-1

+Y-11

+Y-12

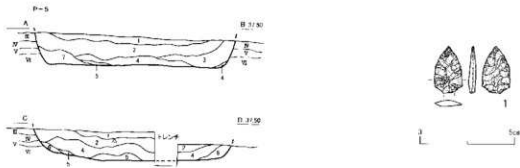


P-6

+Y-12

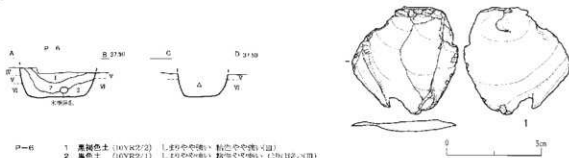
図V-34 P-4~6, C-1

P-5



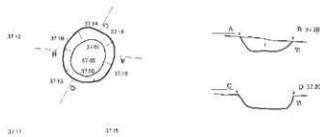
- P-5
- 1 黒色土 (DYK2/1) L土の強い、粘り強い(Ⅱ)
 - 2 黒色土 (DYR2/1) L土のやや強い、粘りやや強い、緑色のローム(Ⅱ)
 - 3 黒褐色土 (DYR2/3) L土のやや強い、粘りやや強い、ロームが少く粗じ(Ⅱ)(Ⅲ)
 - 4 黒褐色土 (DYR2/3) L土のやや強い、粘りやや強い、ロームが多し粗じ(Ⅱ)(Ⅲ)
 - 5 灰褐色土 (DYK2/4) L土の強い、粘り強い、緑褐色土に多く少量の黒色土が混じる(Ⅲ)(Ⅳ)
 - 6 黒褐色土 (DYR2/3) L土のやや強い、粘り強い、ロームが少く粗じ(Ⅱ)(Ⅲ)
 - 7 黒褐色土 (DYR2/3) L土の強い、粘りやや強い、黒褐色土に黒褐色土のロームが少量混じる(Ⅲ)(Ⅳ)

P-6



- P-6
- 1 黒褐色土 (DYK2/2) L土のやや強い、粘りやや強い(Ⅱ)
 - 2 黒色土 (DYR2/1) L土のやや強い、粘りやや強い、L土のローム(Ⅱ)
 - 3 黒褐色土 (DYR2/3) L土の強い、粘りやや強い、ロームが少く粗じ(Ⅱ)(Ⅲ)

P-7

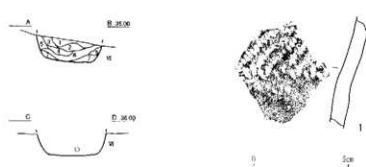
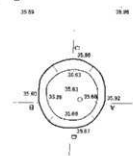
T_{V-11}

- P-7
- 1 黒色土 (DYR2/1) L土の強い、粘りやや強い、ごく少量のロームが混じる

図V-35 P-5・6とP-5・6出土の遺物、P-7

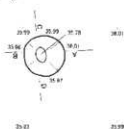
V 山越4遺跡の調査

P-8



- P-8
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 土が細かい、粘性ややまい、径2-3mm位のローム/ブロックが少量混入している(VI)
 - 2 暗褐色土 (10YR3/4) 土が細かい、粘性強い、ロームに黒色土が少量混入している(VI)
 - 3 黒褐色土 (10YR3/2) 土が細かい、粘性強い、ロームが少量混入している(VI)
 - 4 黒褐色土 (10YR3/2) 土が細かい、粘性強い、径2mm位のロームが混入している(VI)
 - 5 暗褐色土 (10YR3/4) 土が細かい、粘性強い、ロームに黒色土が少量混入している(VI)
 - 6 黒褐色土 (10YR3/2) 土が細かい、粘性強い、径2mm位のロームが少量混入している(VI)
 - 7 暗褐色土 (10YR3/3) 土が細かい、粘性強い、径10mm位のローム/ブロックが少量混入している(VI)

P-9



- P-9
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) 土が細かい、粘性強い、炭化物が混入している(VI)
 - 2 黒褐色土 (10YR2/2) 土が細かい、粘性ややまい、ロームが多く混入している(VI)
 - 3 暗褐色土 (10YR3/2) 土が細かい、粘性ややまい、ローム/ブロックが混入している(VI)

図V-36 P-8・9

底面が確認できたので遺構とした。H-4に隣接し関連するものと推測される。覆土6層から土器が1点出土した。

覆土 7層に分層した。自然堆積である。

遺物 1は覆土6層から出土した底部付近の土器。結束第1種羽状縄文が施文され、底部付近は無文である。胎土からⅢ群a-2類に相当すると推測した。

時期 覆土下位の遺物およびH-4との関連から、Ⅲ群a-1~2類サイベ沢V~VI式に相当する中期前半の遺構と推測される。

P-9 (図V-36、図版50、表V-2)

位置 T-7-c **規模** 44×10/43×16/24cm

平面形 円形 **長軸方向** —

確認・調査 VI層上面で円形の黒色土の落ち込みを確認した。半截したところ立ち上がり方が確認できたので遺構とした。坑底面は平坦ではなく尖り気味である。隣接するH-2との関連が想定される。

覆土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 覆土下位の遺物およびH-2との関連が推測されることから、Ⅲ群a-3類サイベ沢VII a式に相当する中期前半の遺構と推測される。

(3) 焼土

F-2 (図V-37、図版51、表V-3)

位置 N-9-c 規模 47×(26) / 5cm

長軸方向 N-24.5° - E

確認・調査 Ⅲ層を10cmほど掘り下げた際に焼土粒と炭化物が散在していた。あまり明瞭なまともりではなかったため、一部を掘り下げてしまった。

時期 検出層位や、周辺出土の遺物から縄文時代中期前半の遺構である。

F-3 (図V-37、図版51、表V-3)

位置 Q-11-c、Q-12-b 規模 53×33 / 10cm

長軸方向 N-47° - E

確認・調査 風倒木痕の落ち込みを掘り下げている際に確認した。焼土の確認面が平坦ではなく、しまりも弱いため、風倒木にかかる焼土と考えられ、人為的なものとは推測し難い。

時期 不明。

(4) 炭化物集中

C-1 (図V-34、図版51、表V-3)

位置 S-11-c・d 規模 17×15 / 10cm

長軸方向 —

確認・調査 V層で木がそのまま炭化したようにまとまった炭化物を確認した。その検出状況から Ko-d 降下以前の炭化物集中であるが、人為的なものではない可能性がある。この炭化物の補正放射性炭素年代は3560±40yBP (YK 4-5) である (第VI章1参照)。

時期 遺物を伴わないので具体的な所属時期は不明であるが、検出状況や放射性炭素年代からこの遺跡の主体となる縄文時代中期よりは新しいものと推測される。

(5) フレイク・チップ集中域

FC-1 (図V-37、図版51、表V-3)

位置 V-6-a 規模 19×17 / 5cm

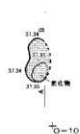
確認・調査 Ⅲ層を15cmほど掘り下げた際に黒曜石のフレイク・チップが狭い範囲にまとまっていた。同一母岩と思われる黒曜石のフレイクで、原産地分析によると豊泉産である (第VI章3、分析番号77747)。H-2に近接しており、関連するものと推測される。

遺物 移植ベラによりフレイク59点を取り上げ、土壌水洗により細かいチップ421点を回収した。他に鏝1点、土壌水洗により回収した土器の破片10点の合計491点が出土した。また、同一層位で近接して包含層復元土器8が出土した (図V-37)。

時期 土壌水洗により回収した土器片および確認面、近接して出土した土器、H-2との関連から縄文時代中期前半、サイベ沢Ⅵ式もしくはサイベ沢Ⅶa式に相当する時期の遺構と推測される。

V 山越4遺跡の調査

F-2



F-2 1 積土、暗赤褐色土 (SVR3/2) 積土層が存在しており、その堆積の積土上を掘られる上層の 一部に炭化物の多量あり

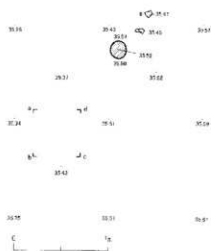
F-3



F-3 1 積土 1.物置、泥性や中強い、炭削木遺中の積土

FC-1

↑_{V-e}



5 B地区の遺構と遺構出土の遺物

B地区はA地区の南側に位置し、土壇2基、焼土2ヶ所、集石1ヶ所を確認した(図V-8)。BF-1を除き調査区西側の傾斜下方に位置する。土壇・焼土は覆土中もしくは周辺の遺物から縄文時代中期前半の遺構と推測される。集石は湧水地点で確認されたものである。当初は水場遺構とも想定したが、伊達市北黄金貝塚で見られたような定型的な礫石器が無かったこと、周辺の遺物も少ないこと、礫の全てが褐色を呈し地山の礫に類似しており他所から持ち込まれたような明瞭な礫がなかったことから、湧水に侵食されて地山の礫が現れ、まとまっているように見えたものと推測でき、人為的な遺構の可能性は少ない。

(1) 土壇

BP-1 (図V-38、図版52・63、表V-4・6・11)

位置 F-14-b 規模 85×68/70×55/31cm

平面形 楕円形 長軸方向 N-59° -E

確認・調査 V層上面で楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ垂直な壁と平坦な壇底面が確認できたので遺構とした。掘り込みはクツラテフラ(Kt)に及んでいる。覆土1層と2層からそれぞれ土器片が1点出土した。

覆土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物 1は覆土1層出土の突起部分で、縄文施文後に斜め方向に沈線文を施したものの突起部直下の貼付文は剥離している。口唇部には捻糸を挿入している。2は覆土2層出土のRL斜行縄文が施文された胴部破片。1・2はいずれもⅢ群a-3類に相当する土器である。

時期 覆土中および周辺の遺物から、中期前半のⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅷ式に相当する時期の遺構と推測される。

BP-2 (図V-38、図版53・63、表V-4・6・10・11)

位置 E-12-a 規模 100×79/97×72/41cm

平面形 円形 長軸方向 —

確認・調査 VI層上面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。半載したところ垂直な壁と平坦な壇底面が確認できたので遺構とした。覆土1層から3点、2層から2点、3層から1点の土器片が出土した。

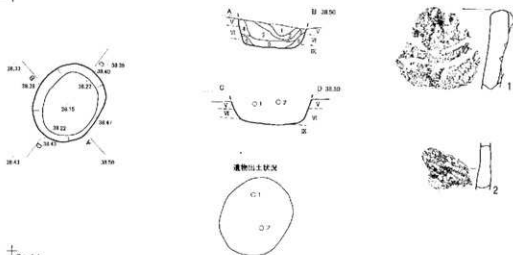
覆土 6層に分層した。自然堆積で、炭化物が混じっている。

遺物 1は覆土出土の土器片とBF-2に近接して出土した土器集中とが接合し復元できたもの(図V-39)。口縁部と底部は接合せず、推定復元した。山形突起が4ヶ所あり、頸部がややくびれ、胴部が若干膨らむ器形である。底面近くは横方向に寛磨き調整され無文で、外側に張り出さない。器面全面には摺りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文が施文され、その上から綾絡文も施されている。口唇部にも縄文が回転施文され、断面形は丸みを帯びている。2はやや太めの原体によるLR斜行縄文が施文されたもの。3は底部付近の無文の破片である。1~3はいずれもⅢ群a-3類に相当する土器である。

時期 覆土中および周辺の遺物から、中期前半のⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅷ式に相当する時期の遺構である。

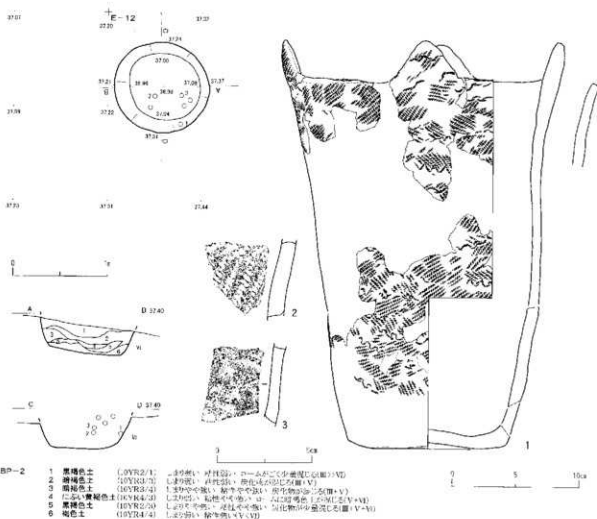
V 山越4遺跡の調査

BP-1



- BP-1
- | | | | |
|---|------|--------------|------------|
| 1 | 黒色土 | (7.5YR1.7/1) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 2 | 黒褐色土 | (10YR2/2) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 3 | 黒褐色土 | (10YR3/1) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 4 | 黒褐色土 | (10YR3/2) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 5 | 黒色土 | (10YR2/1) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 6 | 暗褐色土 | (10YR3/4) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |

BP-2



- BP-2
- | | | | |
|---|------|-----------|------------|
| 1 | 黒褐色土 | (10YR2/1) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 2 | 暗褐色土 | (10YR3/2) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 3 | 黒褐色土 | (10YR3/1) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 4 | 暗褐色土 | (10YR4/2) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 5 | 黒褐色土 | (10YR2/2) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |
| 6 | 褐色土 | (10YR4/4) | 土質 粘り強い(Ⅲ) |

図V-38 BP-1・2とBP-1・2出土の遺物

BF-1

+D-16



+D-17



36.84

36.84

BF-1 1 焼土、暗赤褐色土 (5YR3/2) のすく、不明物
径10mm程度の塊(粒)が散在。炭化塊を多く含む



BF-2

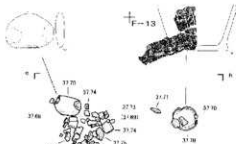
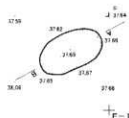
* F

7 d



BF-2 1 焼土、暗赤褐色土 (5YR3/2) L.25 敷付土の中強い
径10mm程度の塊土の存在

b L



b L



37.09

図V-39 BF-1・2

(2) 焼土

BF-1 (図V-39、図版53、表V-5)

位置 D-16-d 規模 51×26/6 cm

長軸方向 N-77°-W

確認・調査 Ⅲ層下位で確認した。薄く不明瞭な焼土で大きく2カ所に分かれる。周辺に遺物は少ない。

時期 周辺出土の遺物が少なく不明であるが、検出層位から縄文時代中期前半の遺構と推測される。

BF-2 (図V-39、図版53、表V-5)

位置 E-12-c 規模 70×40/3 cm

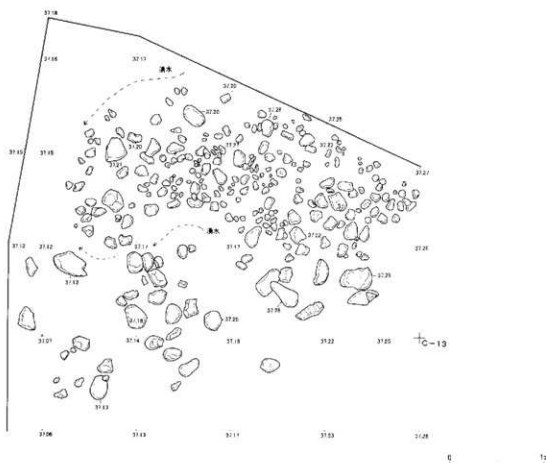
長軸方向 N-84.5°-E

確認・調査 Ⅳ層上面で確認した。炭化物は少なく、焼土粒が散在する不明瞭な焼土である。焼土の北側に近接し土器2個体と石製品(B地区包含層還元土器5・7、石器148)が、南側にはすり石(B地区包含層石器96)とBP-2出土の破片と接合した1個体(BP-2還元1)および底部破片(B地区包含層拓本土器53)が出土した(図V-39)。

時期 検出層位や、周辺出土の遺物から中期前半のⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅷ式に相当する時期の遺構である。

BS-1

*B-12-c



図V-40 BS-1 (1)

(3) 集石

BS-1 (図V-40・41、図版54、表V-5)

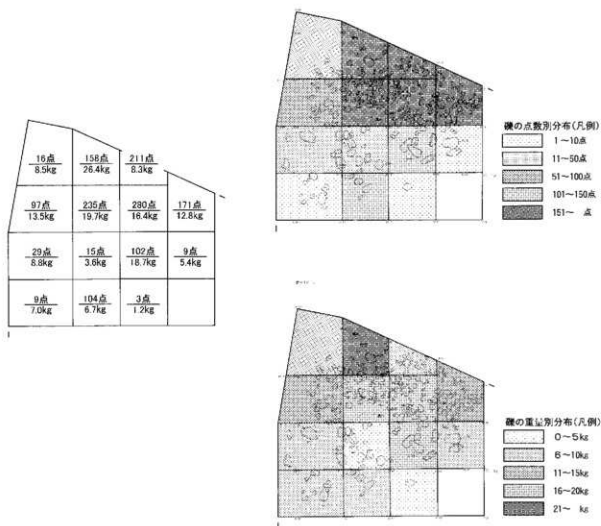
位置 B-12

規模 (400) × 340 / — cm

確認・調査 Ⅲ層を10cmほど掘り下げた際に礫がまとまっているのを確認した。更に10cm掘り下げ全体が現れた。湧水地点に近く、常に水が流れている地点である。湧水上流ほど小さな礫がまとまる傾向がある。礫は50cmメッシュで取り上げた。礫の点数および重量の分布は図V-41に示した。礫に典型的な石器が無いこと、周辺に遺物がほとんど見られないこと、集石の礫は褐色のものが多く地山の礫に類似すること、から人為的な集石の可能性は低いと考えられる。おそらく、湧水により地山が侵食され自然礫が現れ、さらに流れにより上方から礫が集まったものと推測される。

遺物 礫は合計1,439点が出土し、総重量は156.7kgである。石材は安山岩である。

時期 不明である。



図V-41 BS-1 (2)

6 包含層出土の遺物

土器の概要

今回の調査により包含層から出土した土器総数は6,239点である。内訳は縄文時代中期のⅢ群 a 類が全体の95.6%を占める5,965点で最も多く、次いで続縄文時代後葉のⅥ群 c 類が231点と続き、縄文時代後期初頭のⅣ群 a 類が167点、前期後半のⅡ群 b 類が121点、後期中葉のⅣ群 b 類が11点、不明が8点である。この内、A地区出土は3,322点、B地区出土は2,925点である。分類毎の破片数の分布は図V-42~44に示した。Ⅲ群 a 類土器はA地区では住居跡周辺にまとまり、その下方斜面にも散在する傾向がある。B地区ではE・F-10~12区とG-15・16区周辺に大きく分布が分かれる。Ⅱ群 b 類土器はM-8区のはほぼ1グリットにまとまる。Ⅳ群 a 類土器はH-4周辺とT-10区に分布が分かれる。Ⅳ群 b 類はU-7区、Ⅵ群 c 類はS-12区から出土した。

A地区では縄文時代中期のⅢ群 a 類が主体となるものの、円筒土器上層 b 式~サイベ沢Ⅵ式・見晴町式までの広い時期にわたる土器が出土している。また、Ⅲ群 a-1 類の上層 b 式はB地区に近い調査区にまとまる傾向がある。これに対して、B地区は合計4点のⅡ群 b 類・Ⅳ群 a 類土器を除き、全てが沈線文もしくは縄文が施文されたサイベ沢Ⅵ式土器が主体となる。A地区とB地区では土器の様相に若干の違いが見られることから、包含層出土の土器についてはA地区・B地区に分けて記載することにする。

(1) A地区出土の土器

A地区包含層からはⅢ群 a 類土器2,802点、Ⅵ群 c 類土器231点、Ⅳ群 a 類土器158点、Ⅱ群 a 類土器120点、Ⅳ群 b 類土器11点の合計3,322点が出土した。ここでは、主体となる縄文時代中期の土器から記載することとする。

縄文時代中期の土器

Ⅲ群 a-1 類 (図V-45・49・50-1・2・10~22、図版64・66・67・74、表V-13・14)

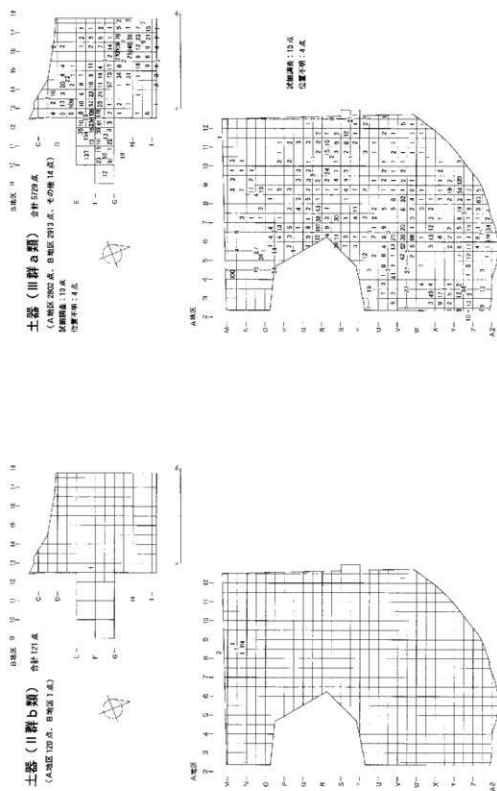
サイベ沢Ⅵ式に相当するもの。円筒土器上層 b 式・c 式に相当するものである。主にO~UラインにかけてのH-3・4周辺および南西斜面に多く分布する。文様構成や部位から a~e 類に細分した。厚手で内面は非常に丁寧に調整され平滑である。胎土には砂が入っているものが多い。

a 類 無文地に太い貼付帯で文様が構成されるもの (1・2、10~12)

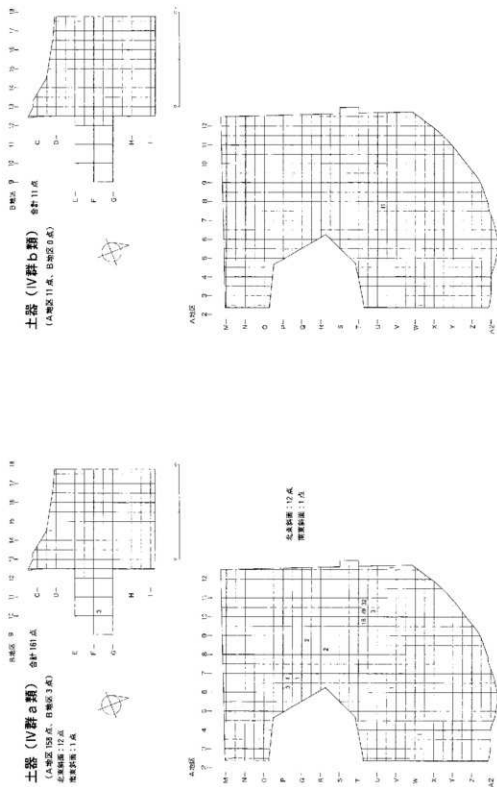
貼付帯上には燃糸による刻みが密に施されている。1・2、10・11は口唇部が肥厚するもの。

1は南西斜面下の無名沢の流路からまとまって出土したもの。口縁部がわずかに外反し、胴部は屈曲のない筒型の器形である。突起部直下に垂下する2本と文様帯を区画する横走る貼付帯がある。3本一組の縄線文が横走り、その間に燃糸による馬蹄形圧痕文が押し引風風に押捺されている。胴部にはLR斜行縄文が施文され、その上から綾絡文が施されている。2は急斜面のN-5-b区から口縁部が、その斜面下から胴部が出土し接合したもの(図V-45)。外反する大きな弁状突起が4ヶ所あり、胴部は屈曲無筒型にすままる。突起部及びその直下と文様帯区画の横走る貼付帯がある。貼付帯に沿って3本一組の縄線文が施文され、その間には笥状工具による刺突文が施されている。胴部には結束第1種羽状縄文が底面近くまで施文されている。10は3本一組の縄線文が貼付帯に沿って施文され、その間に燃糸による馬蹄形圧痕文が押捺されている。11は口縁部から斜め方向に「U」字状の貼付文があるもの。文様帯には縄端の圧痕がある。12は口唇部に波状の貼付帯があるもの。

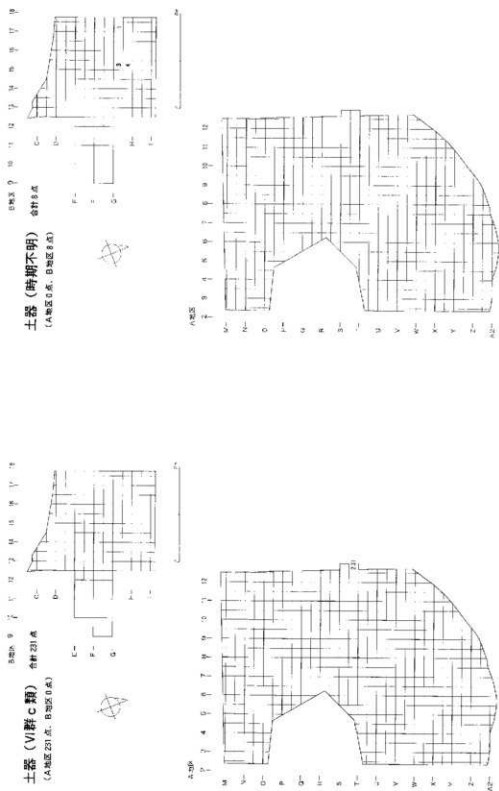
b 類 縄文地に太い貼付帯で文様が構成されるもの (13)



図V-42 包含層出土の土器の分布(1)

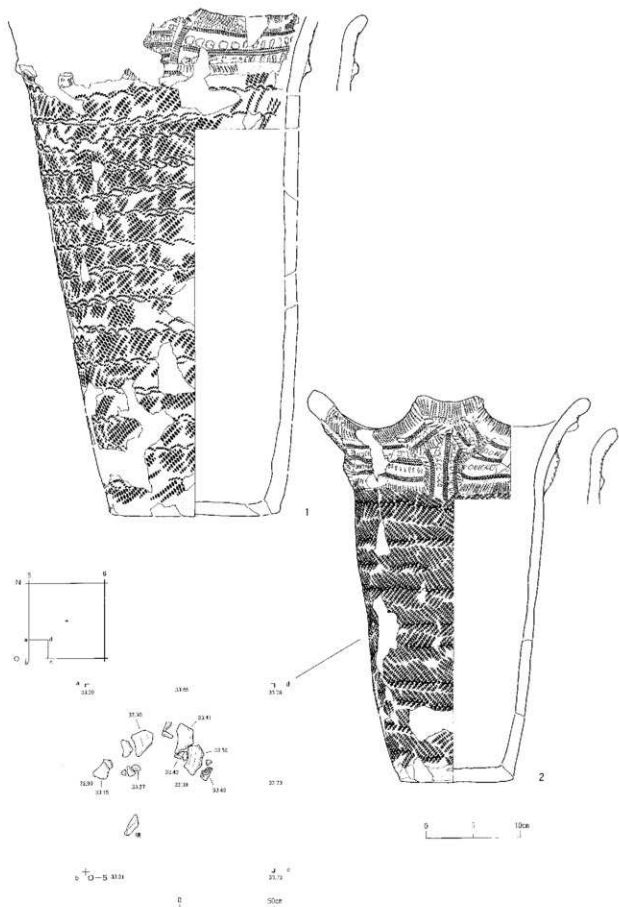


図V-43 包含層出土の土器の分布(2)

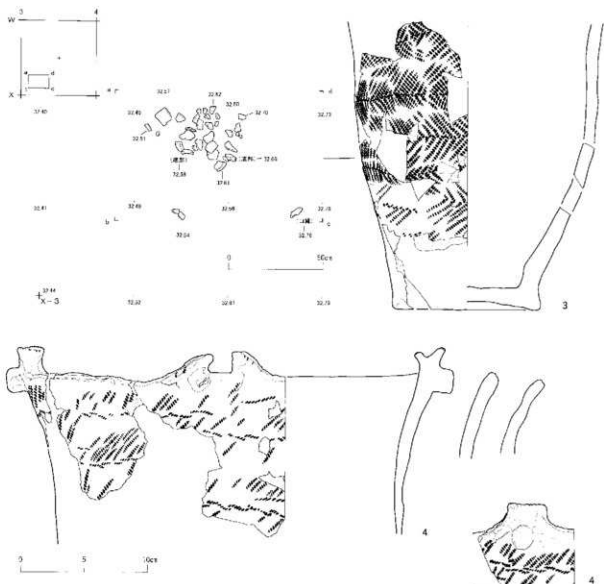


図V-44 包含層出土の土器の分布 (3)

V 山越4遺跡の調査



図V-45 A地区包含層出土の土器 III群(1)



図V-46 A地区包含層出土の土器 III群(2)

13は結束第1種羽状縄文施文後、器面の摩滅が著しく判然としなが、横走する貼付帯が剥落しており、その下に「J」字状の貼付帯が施文された胴部。

c類 無文地に比較的に細めの貼付帯で文様が構成されるもの(14~17)

14・15は貼付帯上に摺糸の刻みのあるもの。14の貼付帯間には摺糸による馬蹄形疋痕文が押捺されている。15は小型山形突起部で、その直下には粘土塊が貼り付けられ、無文部および横走する貼付帯下には丸棒状工具による刺突文がある。16・17は同一個体で貼付帯が無文のもの。網目状および2条の横走する貼付帯間には篋状工具による刺突文がある。

d類 無文地に刺突文のあるもの(18)

18は大きく外反する無文の口縁部に、先の割れた角形の工具により弧状の文様が施文されたもの。

e類 胴部・底部(19~22)

19は結束第1種羽状縄文の施文された胴部。20・21は同一個体で結束第1種羽状縄文が底面近くまで施文されたもの。22は器面の摩滅が著しいが、21と同じく縄文が底面近くまで施文されたものと推測される。いずれも底面は外側に張り出さず、胎土には砂が多く入っている。

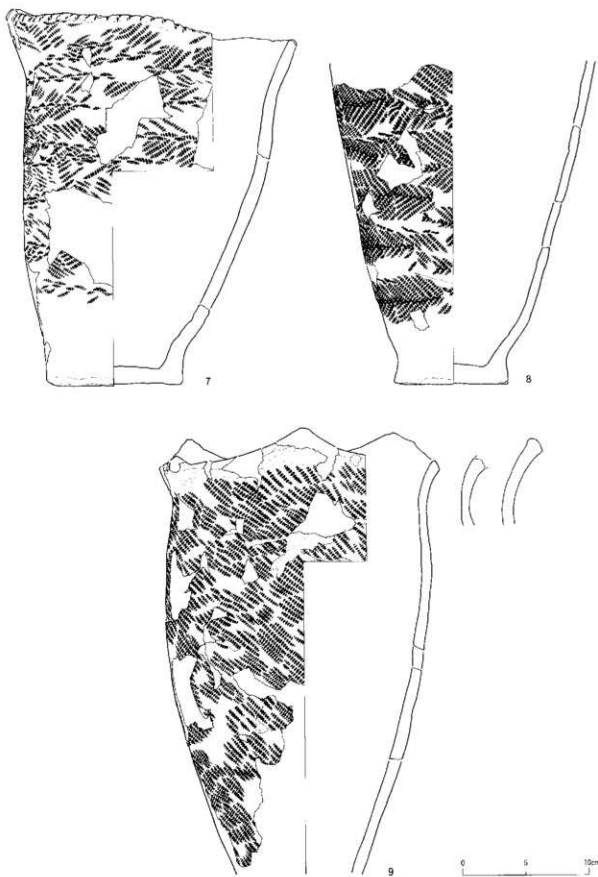
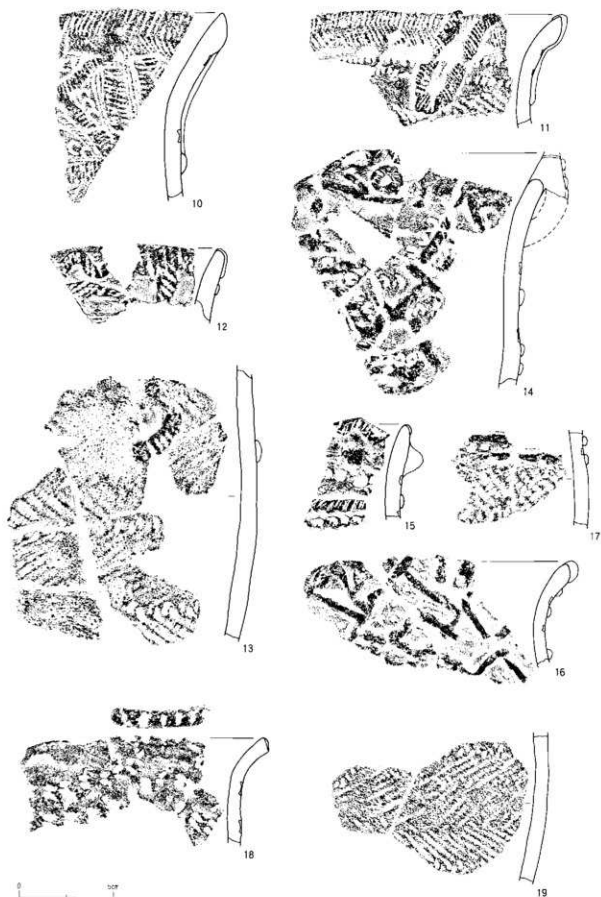
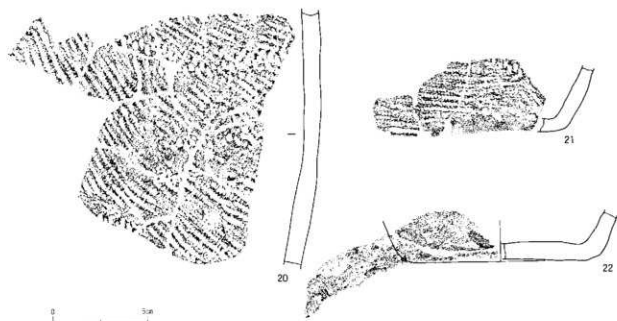


図 V-48 A 地区包含層出土の土器 Ⅲ群 (4)



図V-49 A地区包含層出土の土器 III群(5)



図V-50 A地区包含層出土の土器 III群(6)

III群 a-2類 (図V-46・51~54-3・4・23~44、図版64・67~69、表V-13・14)

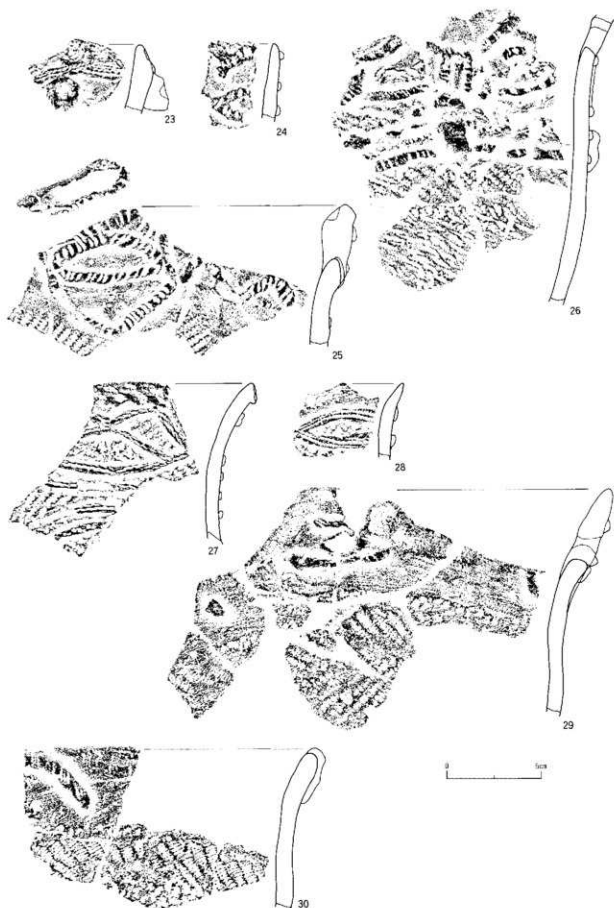
サイベ沢Ⅵ式に相当するもの。円筒土器上層d式に相当するものである。おもにQ~RラインにかけてのH-4周辺に多く分布する。地文が結束第1種・第2種羽状縄文や綾絡文で、地文上や無文の口唇部に貼付帯が施文されるもの。貼付帯上には直交もしくは平行する撚糸の押捺もしくは工具による刻みがある。最近ではサイベ沢Ⅶa式に分類される場合も多い(『鳴川右岸遺跡』北理調報87、1993など)。文様構成や部位からa~e類に細分した。内面は非常に丁寧に調整され平滑である。胎土には小石が入っているものが多い

a類 無文地に比較的細めの貼付帯で文様が構成されるもの(3・23~25)

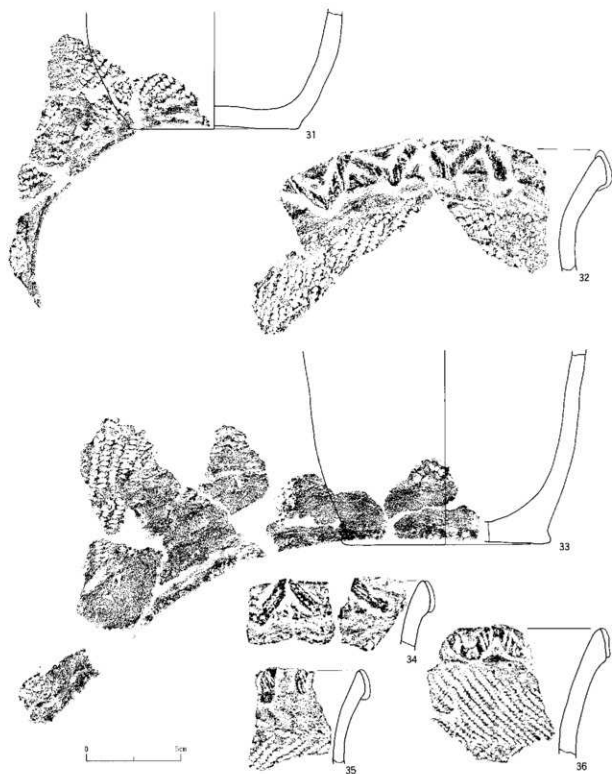
貼付帯はいずれも突起部もしくは突起部直下に限られる。23は口縁部の断面形が切り出しナイフ形でその口唇部、および円筒形の粘土塊の正面部には撚糸を丸めたものを押捺している。24は小型弁状突起部。3・25は同一個体で、W-3-b区の斜面下でまとまって出土したもの(図V-46)であるが接合しなかった。突起部およびその直下の三角形の無文部に貼付帯があり、無文の口唇部にも鋸歯状に貼付帯が施文されている。突起部分の口唇部および貼付帯上には刻みがある。3は厚手で結束第1種羽状縄文が施文されている。

b類 縄文地に比較的細めの貼付帯で文様が構成されるもの(26~28)

26は突起部から垂下、および横走る2本一組の貼付帯があり、その間を埋めるように弧状の貼付帯で文様が構成されるもの。口縁部文様帯では斜行縄文上に綾絡文が、文様帯下の胴部下半には撚り戻しの縄文が施文されている。27は口縁部断面形が切り出しナイフ型で、連続する弧状の貼付帯があるもの。28は口縁部断面形が尖り気味となるもので、口唇部直下には貼付帯上と同じ2本一組の縄線文がある。

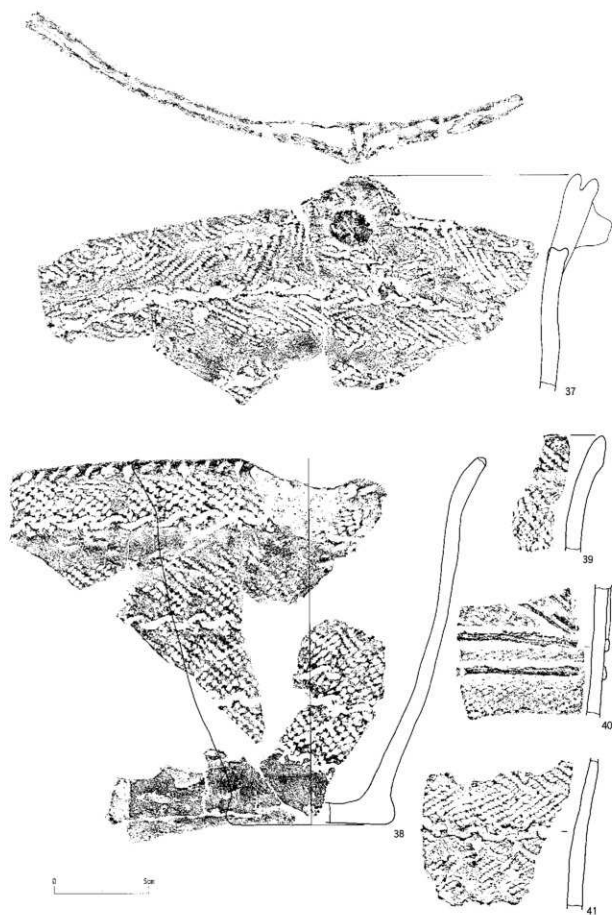


図V-51 A地区包含層出土の土器 III群(7)

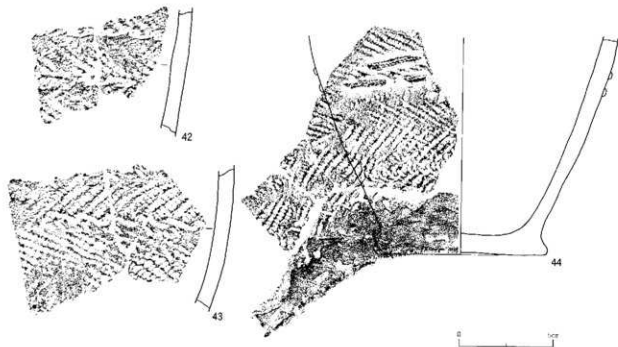


図V-52 A地区包含層出土の土器 III群(8)

V 山越4遺跡の調査



図V-53 A地区包含層出土の土器 III群(9)



図V-54 A地区包含層出土の土器 III群 (10)

c類 口唇部を肥厚させ、口唇部の狭い無文帯に貼付帯で文様が構成されるもの (29~36)

口縁部断面形は切り出しナイフ形で外反し、口唇部の狭い無文帯に貼付帯のあるものが多い。

29~31は同一個体で、弁状突起部では孔を囲むように、口唇部から口縁部にかけての無文部には山形の貼付帯があるもの。口縁部断面形は丸みを帯びている。0段多条の結束第1種羽状縄文が底面近くまで施文されている。32・33も同一個体で、胴部にはL R斜行縄文が施文され、底面近くは外側に張り出す。34は無文部ではなく、口唇部に縄文施文後に貼付帯を施したもの。35は縦方向に貼付帯があるもの。36には結束第1種羽状縄文が施文されている。

d類 口縁部近くに地文の縄文のみが見えるもの (4・37~39)

4はL R斜行縄文施文後、綾絡文を施したもので、小型弁状突起と上向きに開いた「C」字状の2種2対の突起を持つ。口縁部断面形は角形に近く、口唇部をわずかに肥厚させて丸棒状工具による溝の沈線を施している。37は結束第1種羽状縄文施文後、綾絡文を施したもの。口唇部の形状は4に類似する。38・39はL R斜行縄文の施文後に綾絡文の施されたもの。38は口縁部と底部が接合せず図上復元したもので、内面の調整が非常に丁寧なことから本類に分類した。

e類 胴部・底部 (40~44)

全体の器形や文様構成は不明であるが、III群 a-3類よりも比較的厚手で内面が丁寧に調整されており、III群 a-1類に比べて胎土に砂が少ないものをIII群 a-2類とした。40~43は胴部破片。40は縄文地に細めの貼付帯が施されたもの。地文はL R斜行縄文でその上に綾絡文が施文される。41は結束第2種羽状縄文を、42は結束第1種羽状縄文を、43は燃りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文施文後に綾絡文を、施文したもの。44は底部で、縄線文の施文された、少なくとも横走する2条の貼付帯のあるもの。胴部には燃りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文が施文されている。

Ⅲ群 a-3 類 (図V-47・48・55-58-5-9・45-104、図版64・65・70-73、表V-13・14)

サイベ沢Ⅷ式・見晴町式に相当するもの。一部に榎林式の影響を受けていると推測されるものもあるが、取り敢えず本類に分類した。A地区の全域に分布するが、なかでもU-Zラインにかけての南半部に比較的多く見られる傾向がある。文様構成や部位などから a-g 類に細分される。口唇部は縄文が回転施文されているもの、捻糸が押捺されているもの、刻みが施されているもの、無文のものがある。また、口唇部断面形は切り出しナイフ形のもの、角形に近いもの、丸形に近いもの、尖り気味のものがある。内面は篋状工具で丁寧に調整され平滑であるが、Ⅲ群 a-2 類よりは凹凸が目立つものが多い。胎土には量の多少はあるがいずれも海綿骨針が入っている。

a 類 貼付帯で文様が構成されるもの (5・45-49)

5は無名沢に近いM-4-a区の緩斜面で散在して出土したもの(図V-47)。胴部が大きく膨らむ器形で、結束第1種羽状縄文施文後に「X」字状や突起部から垂下すると推測される無文の貼付帯を施すもの。一部には貼付帯に沿って、縦もしくは斜め方向の沈線文もあるが非常に浅いため、貼付帯を調整したものとも考えられる。45・46は同一個体で縄文地に貼付帯のあるもの。貼付帯が細いこと、および胎土から取り敢えず本類とした。地文はLR斜行縄文上に綾絡文を施している。47-49は突起部に貼付文のあるもの。48には0段多条のRL斜行縄文が施文されている。

b 類 沈線文で文様が構成されるもの (50-56)

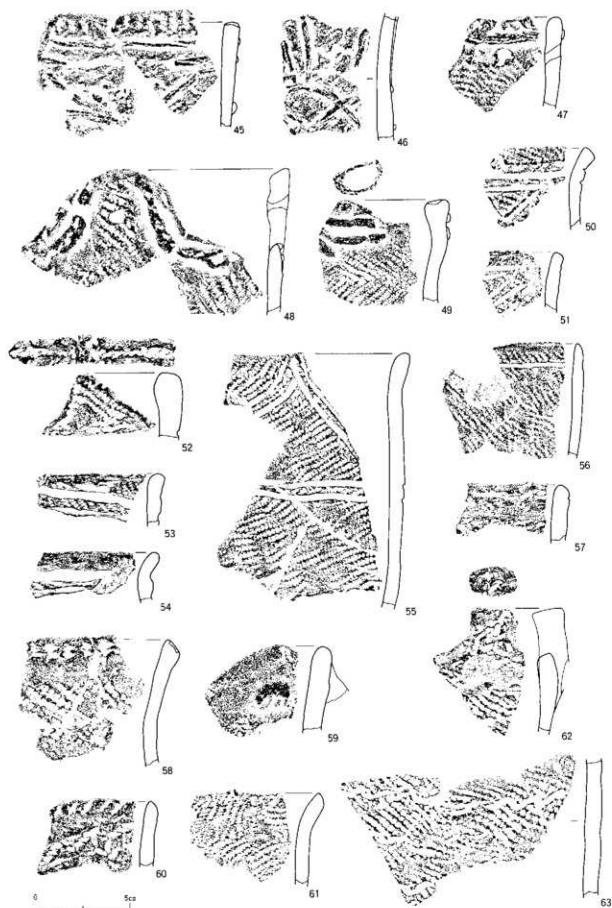
50・51は口唇部断面形が切り出しナイフ形に近いもので、口唇部には縄文が回転施文されている。52は口唇部断面形が角形に近い突起部で、口唇部には地文と同じRLの原体による縄線文が施文されている。53-55は断面形が丸形に近いもの。いずれも2本一組の沈線文が施文されている。56は口唇部断面形が尖り気味のもので、浅い1条の沈線文が横走している。

c 類 縄線文で文様が構成されるもの (57)

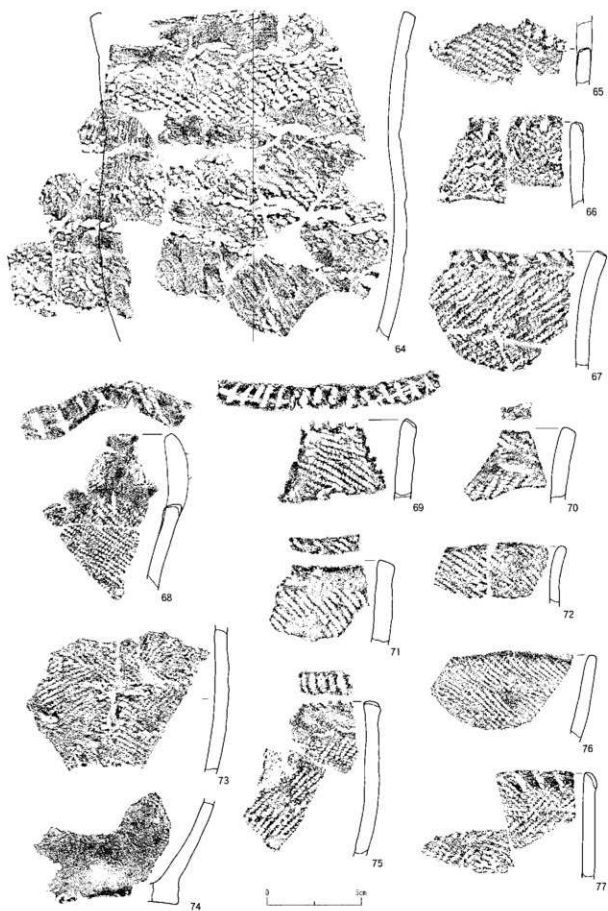
57はLRの原体を用いた縄線文が口唇部直下を横走するもの。胴部は摩滅が著しく判然としなが、縄線文と同じ原体を用いた斜行縄文施文後、綾絡文が施されているように見える。

d 類 口唇部近くに地文の縄文のみが見えるもの (6・7・58-87)

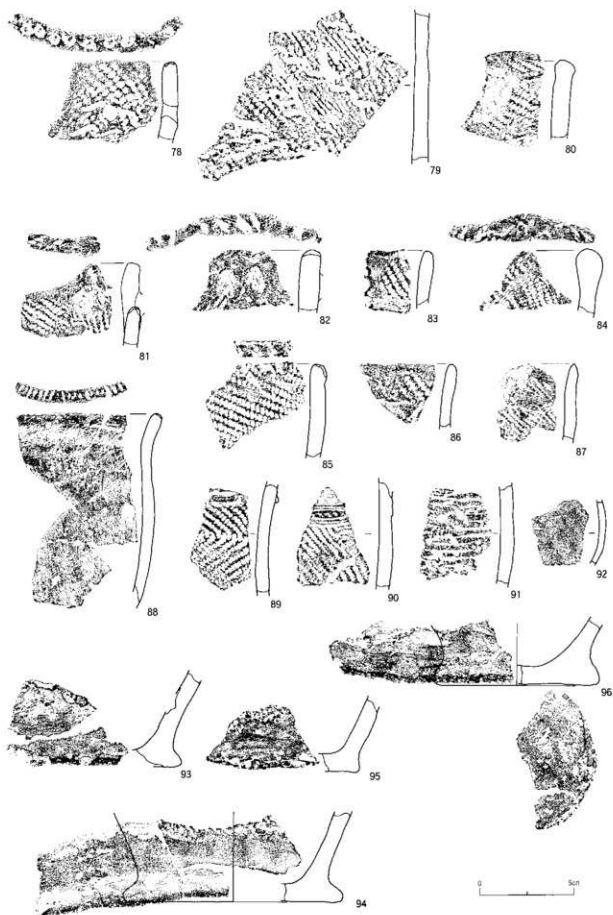
6・58-61は口唇部断面形が切り出しナイフ形のもの。6はH-1近くのY-8・9区出土の破片が接合したもの(図V-47)。4ヶ所の小型弁状突起があり、胴部にはRL斜行縄文施文後、綾絡文が施されている。口唇部には捻糸と棒状工具による刻みがある。58・59は同一個体で胴部には結束第1種羽状縄文が施文されている。60は綾絡文が、61は斜行縄文がやや乱雑に施されたもの。62-71は口唇部断面形が角形に近いもの。62・63は同一個体でH-1に近接してまとまって出土した。RL斜行縄文施文後、綾絡文が施されており、突起部上面には縄端の押捺もある。64・65はLR斜行縄文施文後に綾絡文が、66はRL・LRの捻りの異なる原体を用いた羽状縄文施文後に綾絡文が、67はLR・L複節斜行縄文が、68-71は斜行縄文が施されたもの。64は地文上に糸痕も見える。68・69は突起部である。7・72-86は口唇部断面形が丸形に近いもの。7は捻りの異なる2種類の原体を回転施文し、部分的に羽状縄文を形成し、更にその上に結束第2種の結束部を回転した綾絡文を施すもの。口唇部は波状口縁気味で、底面付近は外側に張り出さず、胎土には砂が多く入っている。72-74は同一個体で、結束第1種羽状縄文が施文されたもの。底部は無文で底面付近は外側に張り出している。75・76は結束第1種斜行縄文が、77は捻りの異なる原体を用いた羽状縄文が、78-80は斜行縄文施文後に綾絡文が施されたもの。78・79は同一個体で口唇部には中空の円筒形工具を用いた刺突文がある。81-86は斜行縄文が施文されたもの。81-84は突起部で、81・82は貼付文が剥落している。87は口唇部断面形が尖り気味のもので、口唇部は無文である。



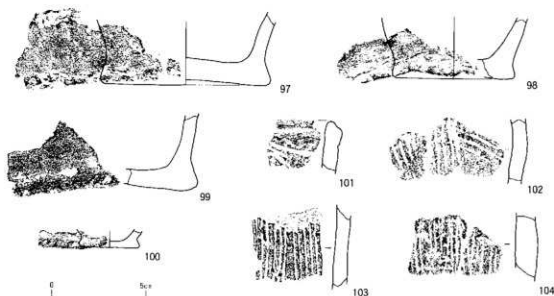
図V-55 A地区包含層出土の土器 III群(11)



図V-56 A地区包含層出土の土器 III群 (12)



図V-57 A地区包含層出土の土器 III群 (13)



図V-58 A地区包含層出土の土器 Ⅲ群(14)

e類 無文のもの(88)

88は器面が縦方向に調整され無文で、口唇部には刻みがあるもの。

f類 胴部・底部(8・89~100)

89は結束第1種羽状縄文施文後、横走る細い貼付帯のあるもの。器壁が比較的薄手であることから本類に分類した。90は框状の工具による幅広く浅い沈線文が施文されたもの。91はニシンタイプの魚骨回転文が施文されたもの。92は無文のミニチュア土器の胴部。8・93~100は底部で、いずれも底面付近は横方向に調整され無文で外側に張り出す。8はFC-1の近くからまとまって出土したもの(図V-37)。比較的厚手で胴部には結束第1種羽状縄文が施文され、その上から部分的に綾絡文も施されている。底部は削り取られたように急にすばまっている。93は綾絡文がわずかに伺える。胎土には小石が入っており、Ⅲ群a-2類の可能性もある。94・95は斜行縄文施文後、底部を調整したもの。96は底面の一部にLR原体の圧痕がある。97~100は底面に近い無文部分のみが見える底部。100はミニチュア土器の底部。

g類 榎林式の影響を受けていると推測されるもの(9・101~104)

9は口縁部が外反し頸部がくびれ胴部が膨らむ器形で、地文のRL斜行縄文のみが施文されたもの。口縁部は断面形が切り出しナイフ形に肥厚し、口唇部とその直下は無文である。残存する突起は3ヶ所、その中間にも小突起がつくようである。内面は丁寧に調整されているが凹凸がある。101は口縁部が若干肥厚し、口唇部に沈線文の施文されたもの。小破片で、この1点のみの出土である。胎土などは他の沈線文が施文されたⅢ群a-3類土器に類似する。102~104は条痕文の施文された胴部破片。104は厚手で胎土に繊維が多く入っている。

縄文時代前期の土器(図V-59-1・2、図版73、表V-15・16)

円筒土器下層d1式に相当する土器1個体がM-8区から出土した。1は胴部から底部にかけてややすばまる筒型の器形で、底部付近まで多軸絡条体回転文が整然と施文されたもの。底部はやや上げ底気味で、胎土には繊維が多く入っている。2は同一個体の口縁部。少なくとも3条の横走る縄文が施され、口唇部には摺糸が押捺されている。小破片で図示できなかったが、口頸部には低い隆帯

V 山越4遺跡の調査



図V-60 A地区包含層出土の土器 その他(2)

が巡り、その下には綾絡文が施文されている。

縄文時代後期の土器 (図V-59・60-3~12、図版73、表V-15・16)

Ⅳ群a類 天祐寺式に相当する土器 (3~11)

P-6区とT-9・10区を中心に8個体が出土した。口縁部に低い貼付帯が巡るもの、折り返し状口縁となるもの、横走する縄線文が施文されるものがある。いずれも胎土には砂が多く入っている。

3はH-2に隣接して出土した無文の土器(図V-17)。口縁部がやや肥厚し、胴部がやや膨らむ器形である。器内外面とも調整は粗く、凹凸を残している。胎土に砂が多く繊維がほとんど見られないこと、口唇部の一部が平坦に調整されていることから本類に分類した。4は口縁部に少なくとも2段の貼付帯が巡り、一番上の貼付帯上とその下で施文方向の異なる同一原体を用いた羽状縄文を構成するもの。5~9は貼付帯の下位がややくびれ無文となるもの。口唇はいずれも指頭により調整され、平坦である。10は口縁部の無文帯に2条の縄線文が施文されたもの。9・10はA地区平坦部のT-10-a区でややまとまり出土した(図V-59)。11は南東斜面から回収した底部。やや上げ底気味で、底面近くまで斜行縄文が施文されている。

Ⅳ群b類 鯉淵式に相当する土器 (12)

U-7-d区から1個体の口縁部が出土した。12は口縁部が開き、頸部がくびれる深鉢である。燃りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文が密に施文されている。胎土には小石が多く入っている。

続縄文時代の土器 (図V-60-13~14、図版74、表V-16)

Ⅵ群c類、後北C1式の深鉢形土器1個体がS-12-c区から出土した(図V-60)。風倒攪乱の影響を受け、器表面が摩滅しているものが多く接合しなかった。13・14は胴部上半の破片で、微隆起線で文様が施文されている。15は胴部下半で、横走および弧状の微隆起線の下に縞縄文が施されている。

(2) B地区出土の土器

B地区包含層からはⅢ群a-3類土器2,913点、Ⅳ群a類土器3点、Ⅱ群b類土器1点、不明土器8点の合計2,252点が出土した。ここでも、主体となる縄文時代中期の土器から記載することとする。なお、Ⅱ群a類土器は胎土に繊維を多く含むものであるが、器表面の摩滅が著しく図示できなかった。

縄文時代中期の土器 (図V-61~68-1~60、図版75~80、表V-17・18)

中期の土器は全てⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅷ式に相当するものである。文様構成や部位からa~e類に細分した。口唇部は縄文が回転施文されているもの、捺糸が押捺されているもの、刻みが施されているもの、無文のものがある。また、口縁部の断面形は切り出しナイフ形のもの、角形に近いもの、丸形に近いもの、尖り気味のものがある。内面は筥状工具で丁寧に調整されており、胎土には量の多少はあるが海綿骨針が入っているものが多い。

a類 貼付文で文様が構成されるもの (1・11~22)

突起部やその直下にのみに貼付文がある。このうち15は縄線文と、19~22は沈線文との組み合わせになる。口唇部は1が無文、21は刻みで、他は全て捺糸の押捺が施されている。

1はF-10区でまともって出土したもの。4ヶ所の突起部を持ち、頸部のくびれはあまりなく、底部が急にすぼまる器形で、底面付近はゆるやかに外側に張り出している。口唇直下に粘土紐を貼り付けている。胴部にはR L斜行縄文が丁寧に施文され、底部付近は無文である。11~14は突起部分。15・16は同一個体で、胴部にはR L斜行縄文が施され、突起部には同一原体の縄線文がある。17・18は突起部直下に貼付文のあるもの。17はボタン状の貼付文が2つ並んでおり、胴部には結束第2種羽状縄文が施文されている。18は貼付が剥離したもの。22は突起部上面に深い刺突がある。

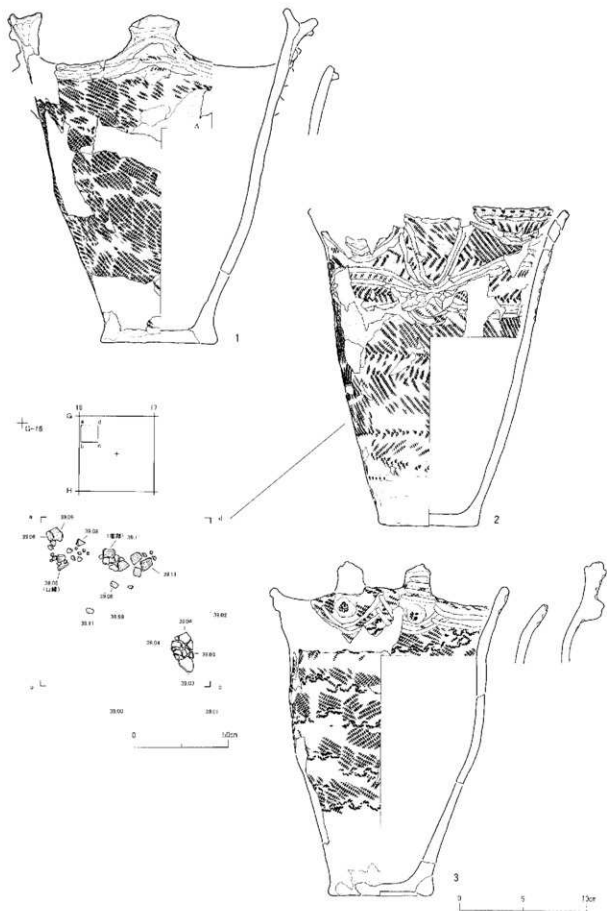
b類 沈線文で文様が構成されるもの (2~4、23~31)

沈線文は2本一組の場合が多い。口唇部には2・23は円形刺突文が、24・27~29・31は刻みが、3・4・25・30は捺糸の押捺が施されており、26は無文である。

23は口縁部の断面形が切り出しナイフ形のもので口唇部に中空の棒状工具を用いた2列の円形刺突文が施文されている。24は細長い孔のある突起部。2・25~30は口縁部の断面形が角形に近いもの。2はG-16-a区でまともって出土したもの(図V-61)。突起部を欠失するが、口縁部が外反し、あまり屈曲無く底部まですぼまる器形で、底面近くは外側に張り出さない。2本一組による沈線文が、突起部直下では「U」字状に、突起間では弧状に施文されている。胴部には0段多条の原体を用いた結束第1種羽状縄文が施文されている。26は口唇部直下の器面に地文と同じ原体を用いたR Lの捺糸が斜めに連続して押捺されている。27~29は同一個体で2種2対の突起のあるもの。3・4・31は口縁部の断面形が丸形に近いもの。3はおもにE・F-10区でまともって出土した。おそらく2種2対の突起部を持つものと推測され、底部近くにゆるやかにすぼまる器形である。底面近くは丁寧に調整され無文で、あまり外側には張り出さない。地文は捺糸の異なる2種類の原体を回転施文し、部分的に羽状縄文を形成しており、更にその上に縦絡文を施している。4はG-16区でまともって出土したもの。あまり屈曲無く底部まですぼまる器形で、底面近くはわずかに外側に張り出す。沈線文は胴部最大径部分で横走するほかは、突起部とそこから垂下するものに限られる。地文はR L斜行縄文で、底面近くの無文部の幅は広い。31は突起部である。

c類 縄線文で文様が構成されるもの (32~33)

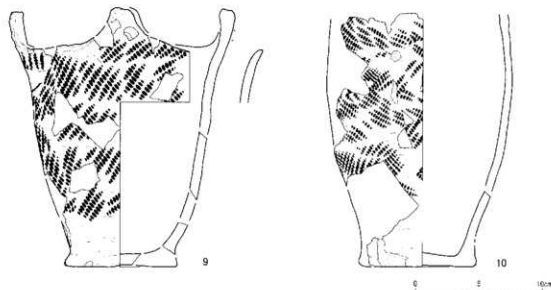
32・33は同一個体で、山形口縁部分に縦に並ぶ4つのボタン状粘土の貼付があるものと推測される。縄線文は2本一組で、山形口縁下部は幾何学的に、その他は弧状に交差している。



図V-61 B地区包含層出土の土器(1)



図V-62 B地区包含層出土の土器(2)

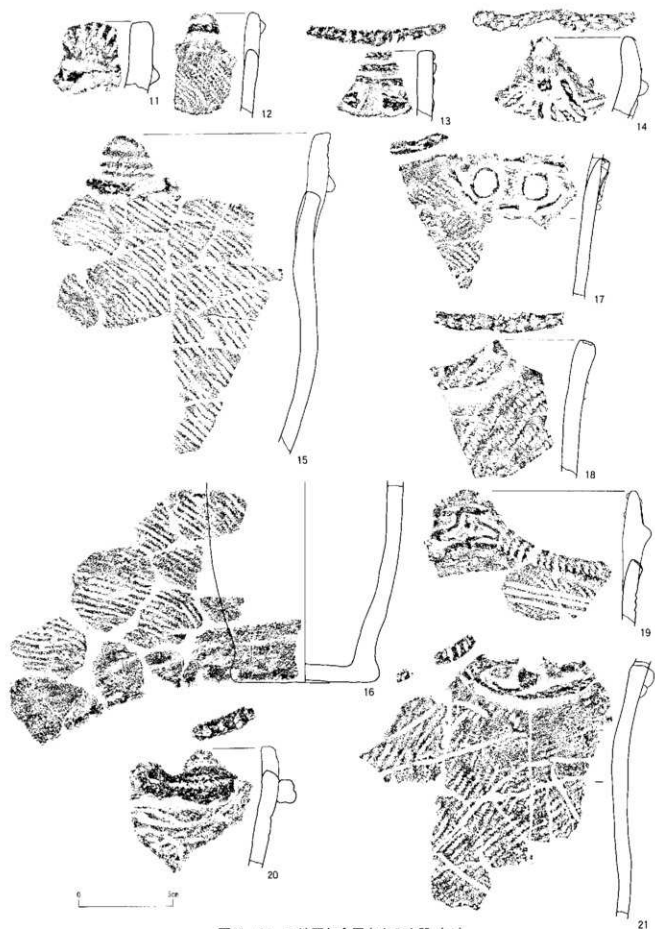


図V-63 B地区包含層出土の土器(3)

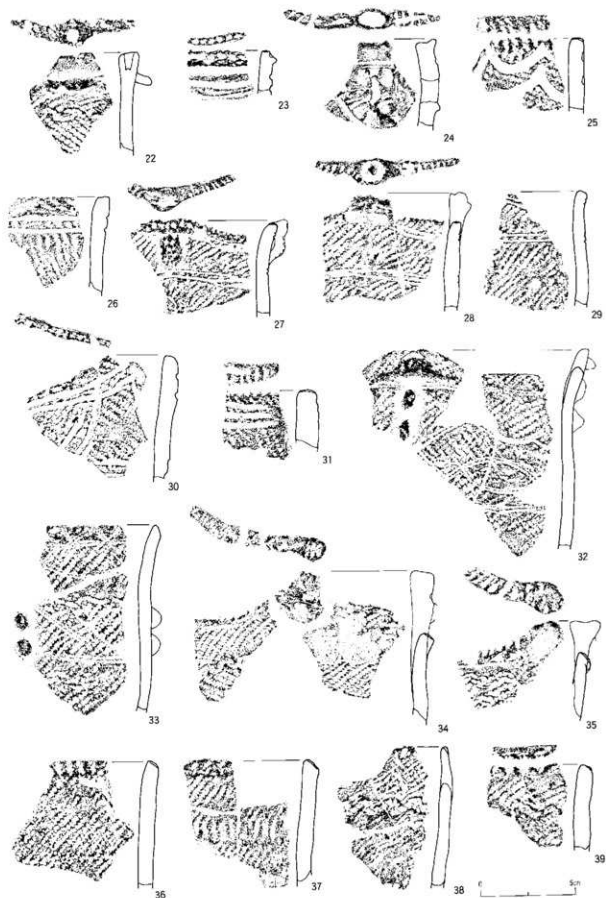
d類 口縁部近くに地文の縄文のみが見えるもの(5~9, 34~50)

地文の縄文には結束第2種羽状縄文、結束第1種斜行縄文、綾絡文、撚りの異なる原体を用いた羽状縄文、斜行縄文がある。

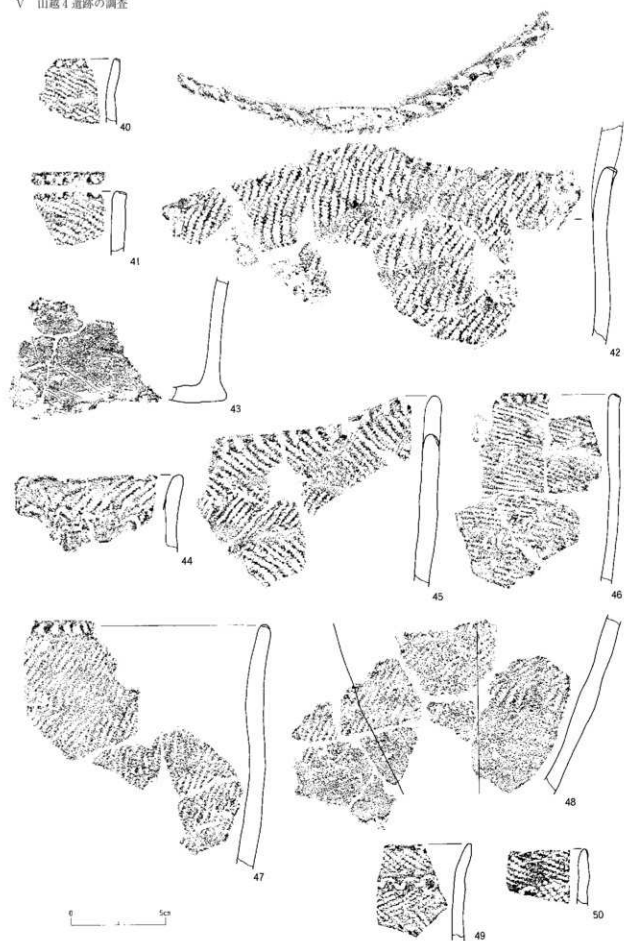
34~37は口縁部の断面形が切り出しナイフ形に近いもの。34は結束第2種の羽状縄文が、35は綾絡文が、36は結束第1種の斜行縄文が施文されたもの。37はLR斜行縄文と縦走気味の0段多条LRの2種類の原体を交互に施文したもの。5・6、38~43は口縁部の断面形が角形に近いもの。5は4ヶ所の突起部を持ち、中央より下位に胴部最大径のある器形で、地文は結束第1種羽状縄文である。38~40は斜行縄文上に綾絡文が、6・41・42は斜行縄文が施文されたもの。42・43は同一個体である。6は口縁部からゆるやかにすぼまる器形で、地文は無節Lの斜行縄文上に綾絡文が施文されている。7・8、44~48は口縁部の断面形が丸形に近いもの。44は綾絡文が、45は撚りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文が、7・8、46~48は斜行縄文が施文されたもの。7はE-12区でまとまって出土したもの。4ヶ所の山形突起を持ち、頸部のくびれがほとんど無く底部までゆるやかにすぼまる器形で、底面近くは外側に張り出さない。器内外面とも凹凸が著しく、胎土には小石が多く入っている。口唇部は指頭により調整され無文で、断面形が角張っている部分も多い。地文はLR斜行縄文で乱雑に施文されており、胴下半は横走気味である。地文施文後、部分的に横方向に調整された擦痕もある。8は小型の土器で、4ヶ所の突起を持ち、口縁部から底部まで屈曲無く直線的にすぼまる器形である。地文はRL斜行縄文で、口唇部には刻みがある。47・48は同一個体で、底部付近は無文である。9・49・50は口縁部の断面形が尖り気味のもの。口唇部は無文である。49は結束第2種羽状縄文が、50は綾絡文が施文されたもの。9はE-11区でまとまって出土した、0段多条のLR斜行縄文が施文されたもの。底面近くで急にすぼまる器形のため、寸詰まりな印象を受ける。底面近くは削り取られたように内湾している。



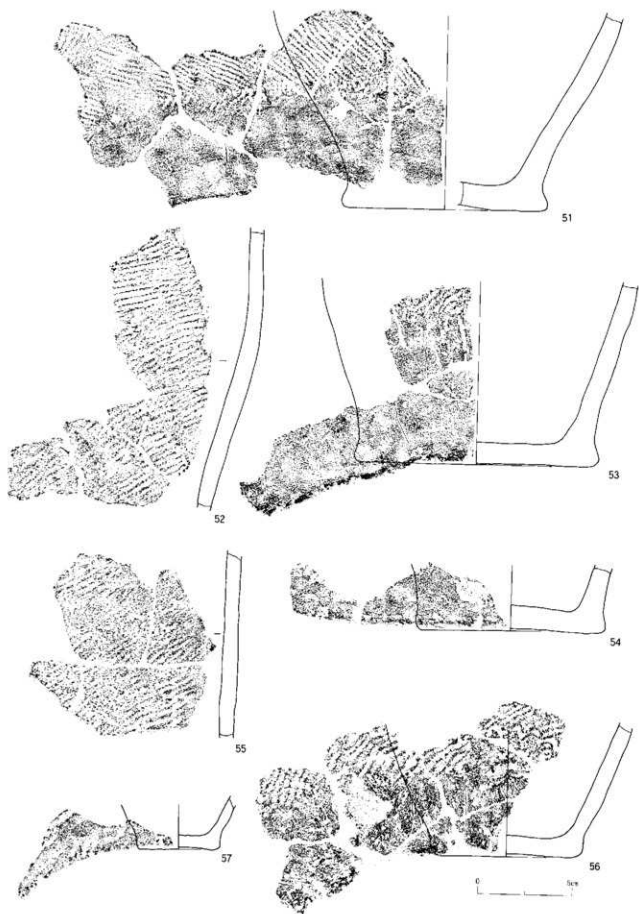
図V-64 B地区包含層出土の土器(4)



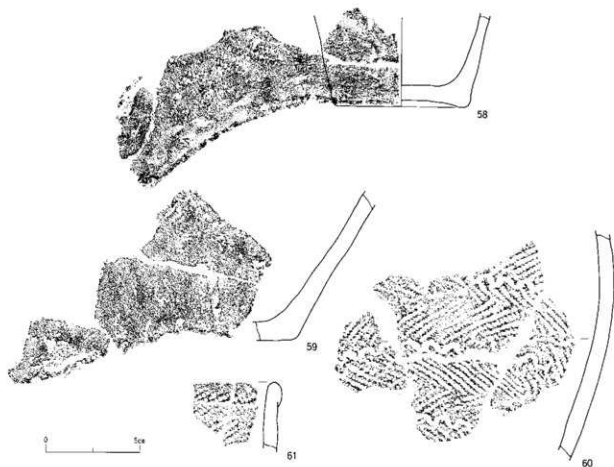
図V-65 B地区包含層出土の土器(5)



図V-66 B地区包含層出土の土器(6)



図V-67 B地区包含層出土の土器(7)



図V-68 B地区包含層出土の土器(8)

e類 底部・胴部(10・51~60)

底部はいずれも篋状工具で横方向に丁寧に調整されており無文である。地文施文後に調整したと推測され、地文が見えるものではいずれも下端が磨り消されている。底面付近が外側に張り出すもの、垂直気味のもの、ほぼ直線的にすぼまるものがある。また、底面は不明の59を除いて全て上げ底もしくは上げ底気味である。これらの内、52・53、55・56は同一個体である。10・51~54は底面付近が外側に張り出すもの。10はG-16区から出土した、口縁部を欠失したもの。胴部が若干膨らむ器形で、撚りの異なる2種類の原体を用いた羽状縄文が施文されている。51は比較的厚手で胴部には結束第1種羽状縄文が施文され、その上から綾絡文も施されたもの。52・53は焼土BF-2付近から出土したもの(図V-39)。55~57は底面付近が垂直気味となるもの。56は斜行縄文上に綾絡文が施文されている。57は底径4.5cmの小型の底部。58・59は底面付近がほぼ直線的にすぼまるもの。

60は結束第2種の羽状縄文が施文された胴部破片。内面は篋状工具で縦方向に調整されている。

縄文時代後期の土器(図V-68-61、図版80、表V-18)

IV群a類、天祐寺式に相当する土器1個体がF-10区から出土した。61は口縁部に貼付帯が巡り、口唇部の断面形が丸みを帯びるもの。斜行縄文は貼付帯上と器面に同時施文されている。

(3) 石器など

今回の調査により包含層から出土した石器、礫・礫片、土製品の総数は1,609点である。地区毎の内訳はA地区1,192点、B地区414点、表採など3点である。石器については地区を分けて記載はしていない。B地区出土のものは掲載番号の右上に「B」を付し、更に本文や表で触れている。

剥片石器群では石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核、Rフレイク、Uフレイク、フレイクが出土した。石槍またはナイフ、両面調整石器は出土していない。磨製石器群では石斧が出土した。擦り切り残片、研磨石材、石のみは出土していない。礫石器群ではたたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿が出土した。石鋸、砥石、石錐、加工痕・使用痕のある礫は出土していない。

石器群毎の内訳はA地区では剥片石器群428点、磨製石器群11点、礫石器群753点である。B地区では剥片石器群113点、磨製石器群2点、礫石器群251点で土製品4点、石製品1点、その他43点である(表V-12)。

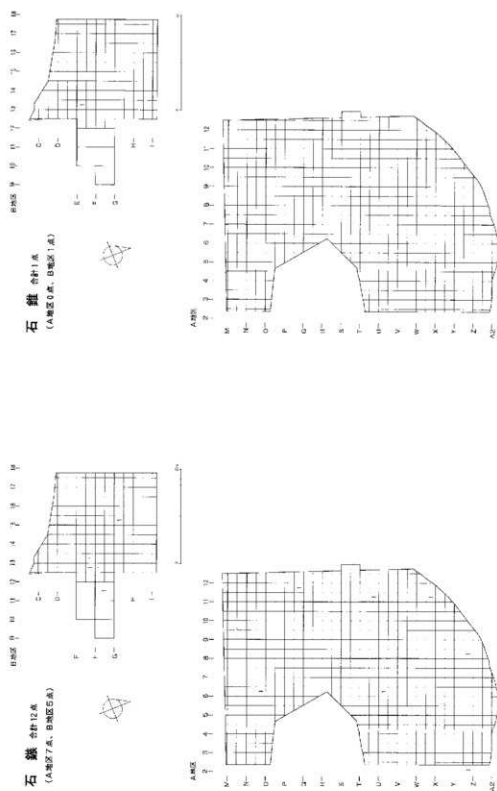
包含層に占める器種毎の割合は剥片石器群ではフレイクが67.2%を占め、スクレイパー10.9%、Uフレイク10.3%と続く。フレイクを除く剥片石器群の割合はスクレイパー33.1%、Uフレイク31.5%、Rフレイク12.4%、原石8.4%、石鏃6.7%、石核4.5%、つまみ付きナイフ2.8%、石錐0.6%である。R・Uフレイクが多く、フレイクの一部を加工したり、そのまま用いる傾向が強いと言える。

礫石器群では礫・礫片が62.6%、台石・石皿や北海道式石冠などの礫石器が破損もしくは被熱した際の剥片と推測される安山岩片(安山岩のフレイク)が9.9%と大きな割合を占める。礫・礫片、安山岩片を除く礫石器群の割合は台石・石皿36.2%、たたき石22.8%、半円状扁平打製石器22.8%、北海道式石冠14.5%、すり石3.6%である。

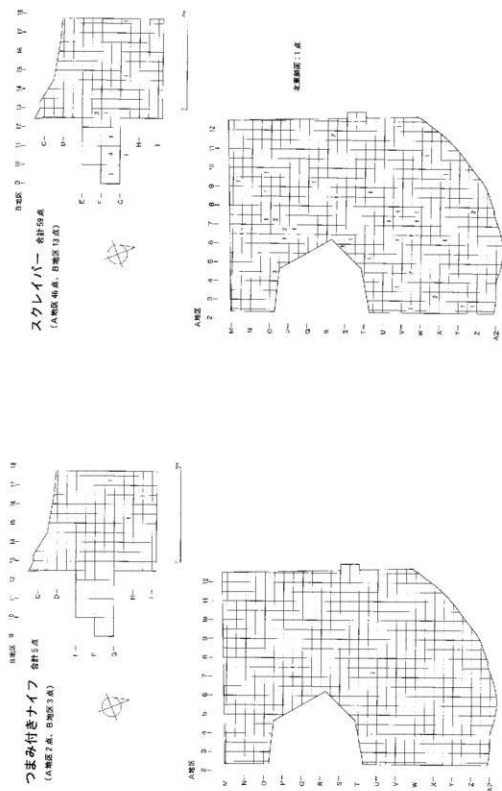
器種毎の点数分布は図V-69～79に示した。B地区はA地区と比べて調査面積が狭く、それに比例して一部を除いていずれの器種も出土点数が少ない傾向がある。しかし、調査面積や遺物点数の比例分を勘案してもなお、相対的にB地区の方が出土点数の多いものとして石鏃、つまみ付きナイフ、Rフレイクが挙げられる。逆にB地区での出土点数が少ないものとして、たたき石、北海道式石冠がある。このような傾向は住居跡を中心とする遺構の出現率と密接な関連があると推測される。すなわち、礫石器がより多く出土するA地区は、住居跡やP-1～3に代表されるような台石を用いた作業場があることからより定住的な様相を示していると言える。それに対して、B地区は土壙と焼土のみが存在し、石鏃・つまみ付きナイフなどの剥片石器群が多く、たたき石・北海道式石冠が少ないことから、主に狩猟に関連するキャンプ地としての傾向が強いと推測されるのである。B地区において、石核が少ないこと、剥片の一部を加工したり使用したRフレイク・Uフレイクが多いことも相対的な非定住性の傍証となろう。

剥片石器群の石材は頁岩がほとんどを占め、黒曜石が少数、玄武岩が1点あった。黒曜石の原産地分析の結果については第Ⅵ章3で報告されている。分析した10点の内豊泉産4点、赤井川産4点、白滝産2点であった。この他については肉眼観察を行った結果、最も遺跡に近い胆振地方豊浦町の豊泉産がほとんどを占め、次に近い後志地方赤井川村産が少数あった。磨製石器群では緑色泥岩が多く、蛇紋岩、砂岩が1点あった。礫石器群では安山岩が多く、凝灰岩が続く。

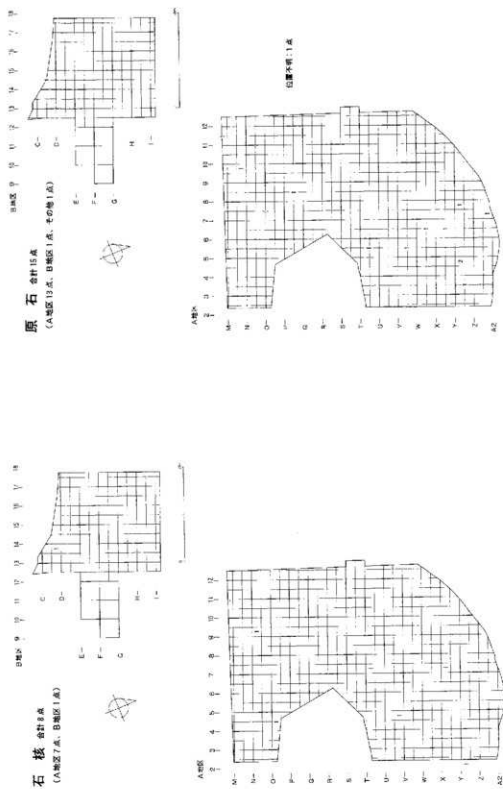
この礫石器の石材は、同じ八雲町内でも遊楽部川をはさんで北側の山崎4遺跡・山崎5遺跡などでは流紋岩が比較的多く使われる(「ボンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡」北理調報155、「山崎4遺跡」北理調報162、「山崎5遺跡」北理調報165)のに対して、南側の本遺跡ではほとんどが安山岩で流紋岩が少ない傾向がある(第Ⅶ章2参照)。



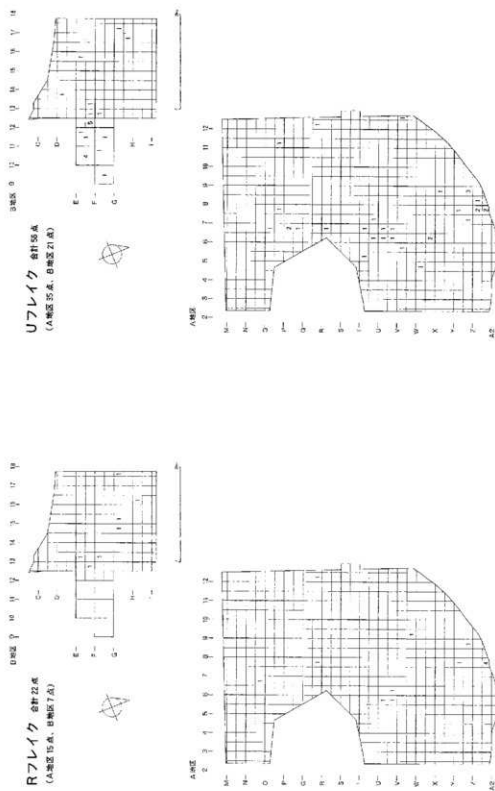
図V-69 包倉層出土の石器の分布(1)



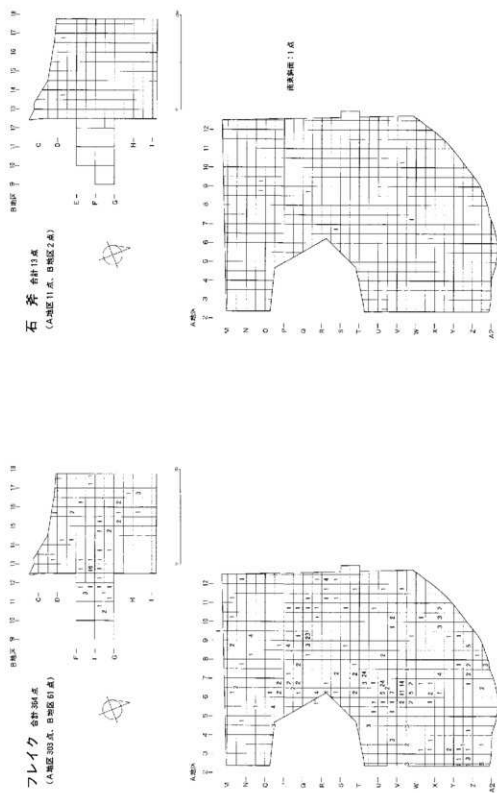
図V-70 包含層出土の石器の分布(2)



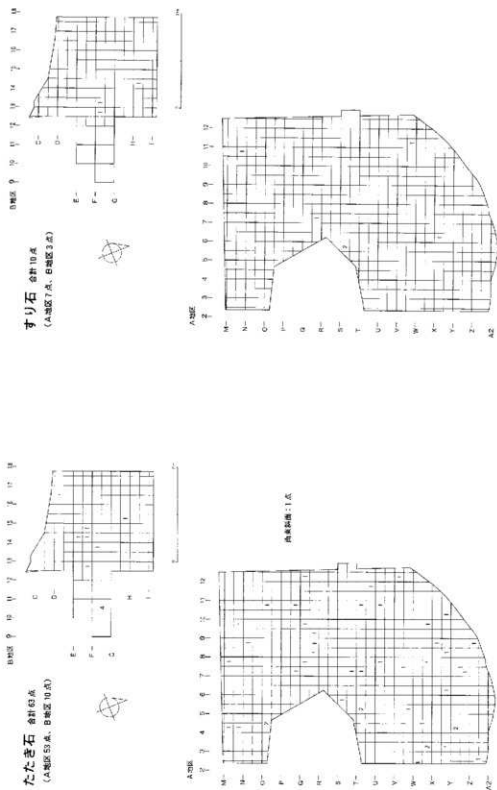
図V-71 包含層出土の石器の分布(3)



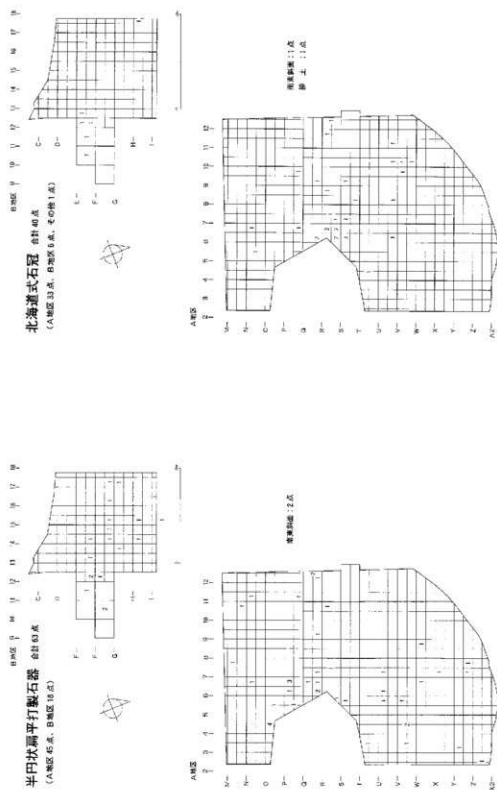
図V-72 包含層出土の石器の分布(4)



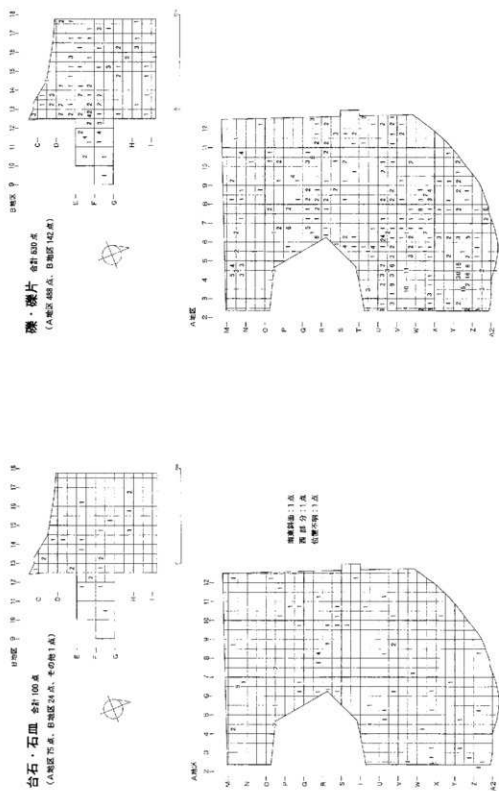
図V-73 包含層出土の石器の分布(5)



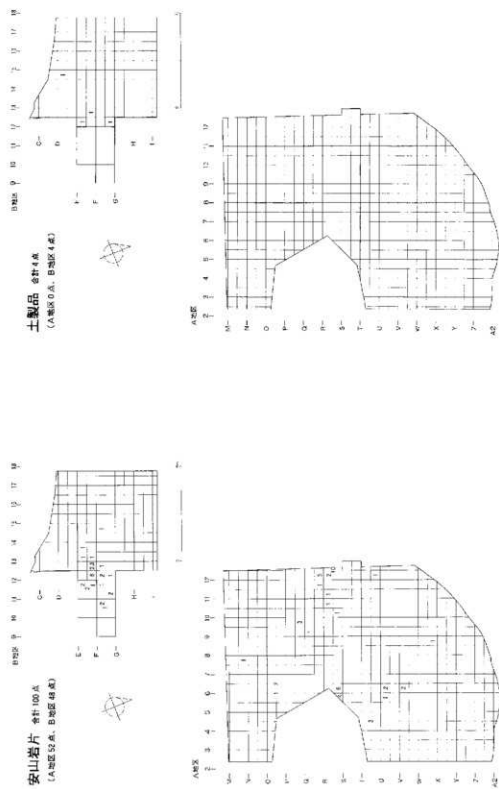
図V-74 包含層出土の石器の分布(6)



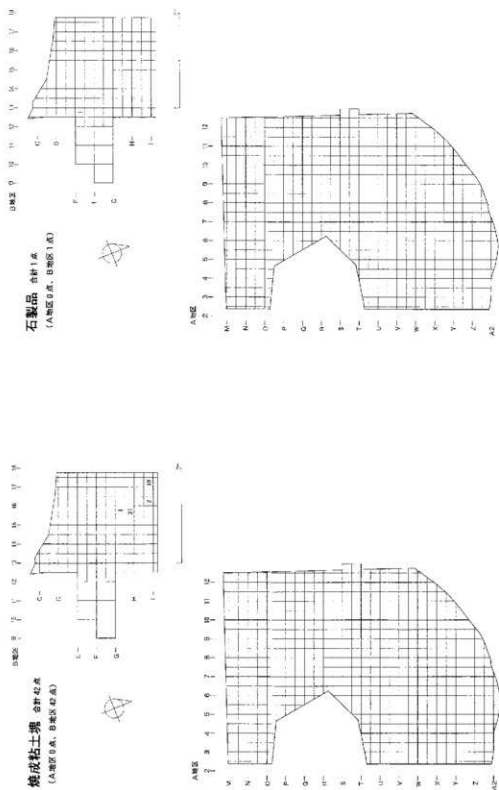
図V-75 包含層出土の石器の分布(7)



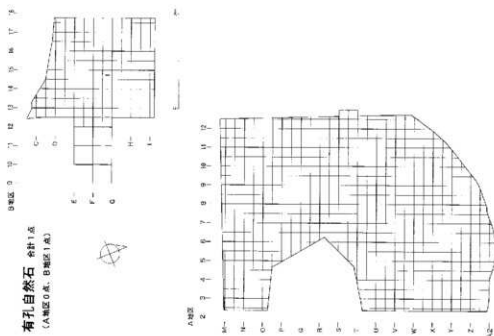
図V-76 包含層出土の石器の分布(8)



図V-77 包含層出土の石器の分布(9)



図V-78 包含層出土の石器の分布 (10)



図V-79 包舎層出土の石器の分布 (11)

〔剥片石器群〕

石鏃 (図V-80、図版82、表V-19)

12点が出土し、全てを図示した。出土点数の分布は図V-69に示した。B地区により多くまとまる傾向がある。A地区では11ライン以上の平坦部と傾斜の転換点に分布する。

1は五角形に近い無茎族 (IA 2 b)。2~12は有茎鏃 (IA 5) で、2~6はかえしが不明瞭のもの、7~11は凸基、12は凹基である。2~5・7~11は一次剝離面を残す。

石材は1・7が黒曜石で、原産地分析によるといずれも赤井川産である (Ⅵ章3、分析番号77745・77746)。2は玄武岩で、その他は全て頁岩である。

石錐 (図V-80、図版82、表V-19)

1点がB地区E-13-a区から出土した。13は剥片に機能部を作出したものの (II 1) で、先端部には回転使用によると推測される摩滅が見られる。石材は頁岩である。

つまみ付きナイフ (図V-80、図版82、表V-19)

5点が出土した。分類別の内訳はⅢ群A 1 c類4点、Ⅲ群A 4類1点である。この内、全体の形が分かる4点を図示した。出土点数の分布は図V-70に示した。A地区では傾斜の転換点付近、B地区では平坦部に分布する。

14~16は片面の周縁を加工したものの (ⅢA 1 c) で、14は一側縁、15・16は両側縁に刃部を作出したものの。16は下端部に節理面を残す。17は素材の剥片の形状を大きく変えず、つまみ部を作出した小型のもの (ⅢA 4) で、一側縁に使用によると推測される刃こぼれ状の剝離が見られる。

石材はいずれも頁岩である。

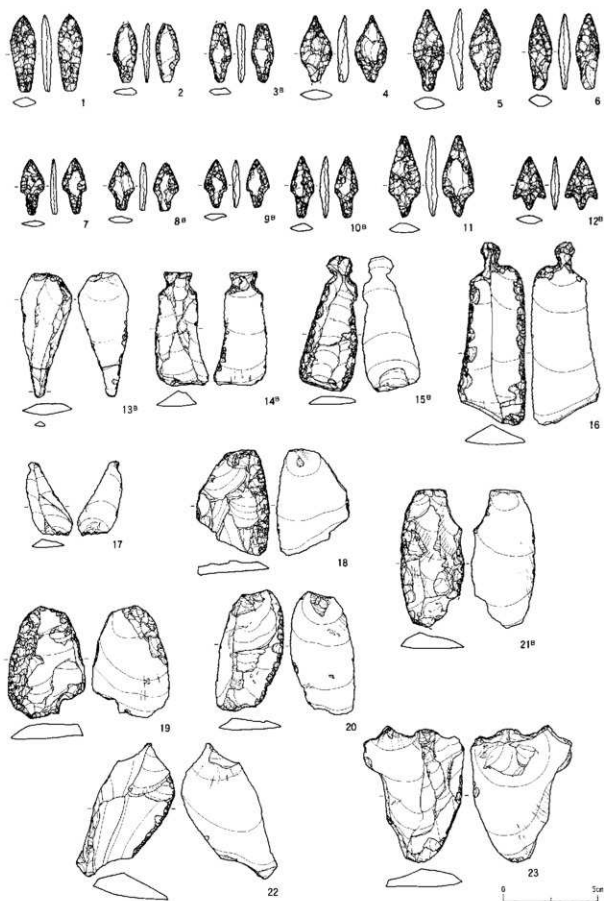
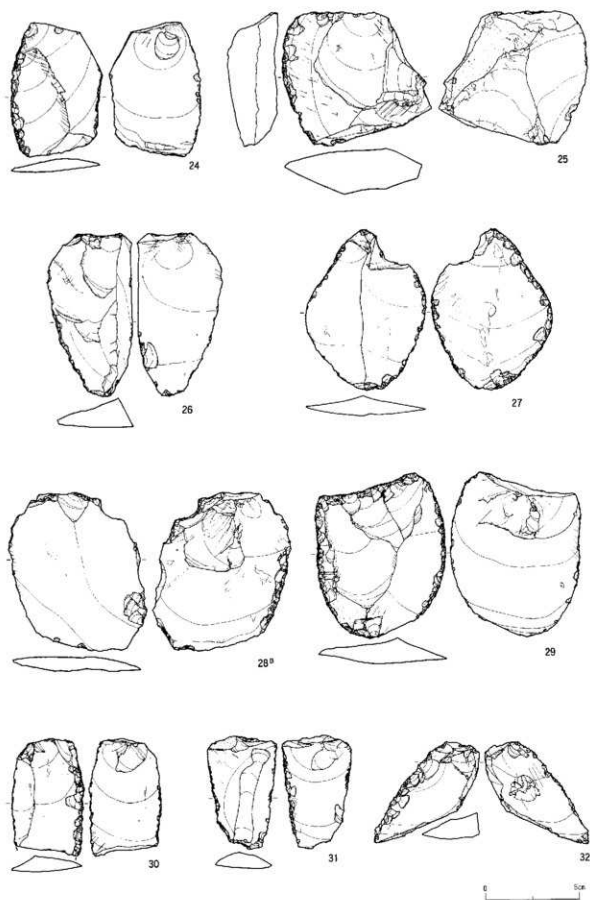
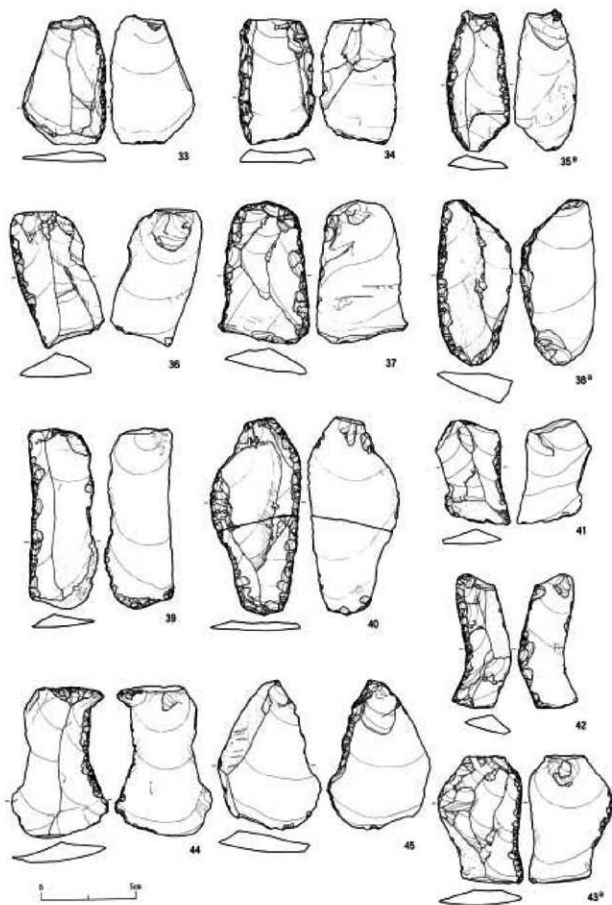


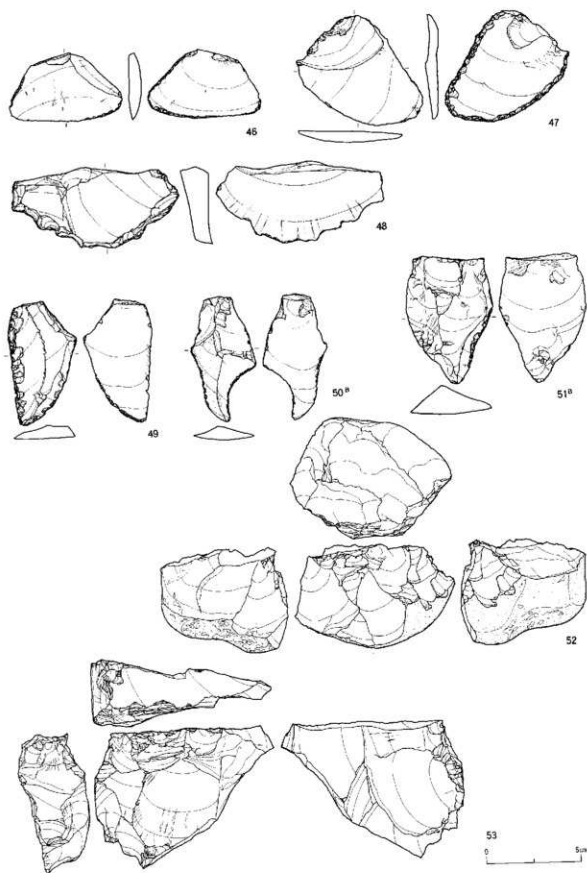
図 V-80 包含層出土の石器 (1)



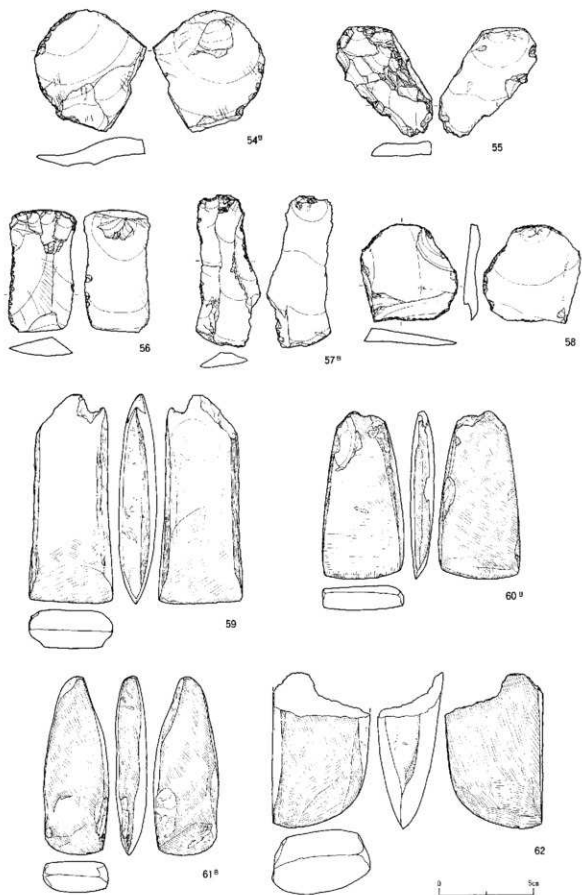
図V-81 包含層出土の石器(2)



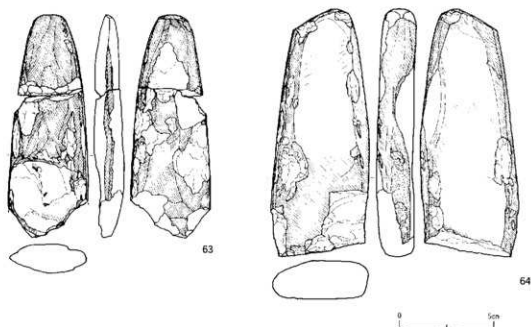
図V-82 包含層出土の石器(3)



図V-83 包含層出土の石器(4)



図V-84 包含層出土の石器(5)



図V-85 包含層出土の石器(6)

スクレイパー (図V-80-83、図版82・83、表V-19)

59点が出土した。分類別の内訳はⅢ群B 2 a類18点、Ⅲ群B 2 b類22点、Ⅲ群B 2 c類9点、Ⅲ群B 3 a類3点、Ⅲ群B 6類3点、Ⅲ群B 9類4点である。この内34点を図示した。出土点数の分布は図V-70に示した。A地区は調査区全域に散在しているが、傾斜の転換点付近およびその斜面下部部に、B地区では緩斜面下部に分布する傾向がある。25を除き全て片面加工である。

18-29は縦長剥片を用い側縁を加工したもので刃部が外湾するもの(ⅢB 2 a)。21・27・29は両側縁に刃部が作出されたもの。25は石核の残核を用いたもの。20・24・25は礫表皮面を、23・29は節理面を残す。30-40は刃部が直線状のもの(ⅢB 2 b)。30・31・34・35・37・40は両側縁に刃部が作出されたもの。39は礫表皮面を、33-36は節理面を残す。41-45は刃部が内湾するもの(ⅢB 2 c)。42は両側縁に、44は下縁の一部にも刃部が作出されたもの。42・43・45は節理面を残す。46-48は横長剥片を用い、刃部が外湾するもの(ⅢB 3 a)。48は厚手の剥片を用い、刃部は粗く作出されており鋸歯状となっている。49-51は先端部のあるもの(ⅢB 6)で、49・50は両側縁に刃部が作出されている。

石材は全て頁岩である。

石核 (図V-83、図版83、表V-19)

8点が出土した。いずれも剥片剥離後の残核と考えられる。この内2点を図示した。出土点数の分布は図V-71に示した。A地区の傾斜の転換点付近からその下位に分布する傾向がある。なお、原石はA地区の傾斜の転換点から斜面下方を中心として16点出土した(図V-71)。いずれも小さなもので石核として利用できずに廃棄されたものと推測される。

52は剥片剥離技術として打面と作業面を固定するもの。礫素材で礫表皮面を残し、推測される原石の大きさはソフトボール大である。53は少なくとも2回の打面転移のあるもの。52・53はいずれも剥離面打面である。石材は頁岩である。

Rフレイク (図V-84、図版83、表V-19)

22点が出土し、この内5点を図示した。刃部の作出が連続的でないもの、また素材となる剥片の側縁部分が薄く、そのためスクレイパーとは異なり刃部の角度が急角度とならないものをRフレイクとした。出土点数の分布は図V-72に示した。A・B両地区とも散在しているが、遺構付近にまとまる傾向がある。

54は刃部が外湾するもの、55・56は直線状のもの、57は内湾するもの、58は横長剥片を用いたものである。54・55は礫表面を残す。石材は全て頁岩である。

【磨製石器群】**石斧** (図V-84・85、図版84、表V-19)

13点出土した。分類別の内訳はVI群A1類1点、VI群A4類6点、破片・未成品などのVI群A9類6点である。この内、6点を図示した。出土点数の分布は図V-73に示した。A・B両地区とも特徴的な分布を示さない。

59は擦り切り技法により製作されたもの(VI A1)で、両刃で直刃である。中期の包含層であるⅢ層より下位のV層出土であること、石材およびその製作方法から、中期よりも古い遺物の可能性がある。60～64は全面磨製(VI A4)で、成・整形方法が不明のもの。60は片刃で円刃のもので、焼成を受けている。61は両刃で円刃のもの、62は両刃で偏刃のもの。刃部の研ぎ出しは斜め方向が主である。63・64は刃部を欠損するものである。63は折れ面にたたき痕があり周縁にも剥離が多く見られるため、刃部欠損後にたたき石として利用したものと推測される。

石材は60が蛇紋岩、64が砂岩で、その他は緑色泥岩である。

【礫石器群】**たたき石** (図V-86～88、図版84・85、表V-19)

63点が出土した。分類別の内訳はⅦ群1類40点、Ⅶ群2類7点、Ⅶ群3類13点、Ⅶ群4類3点である。この内26点を図示した。出土点数の分布は図V-74に示した。A地区では調査区の全域に散在しているが、傾斜の転換点およびその下位斜面に比較的多く分布している。B地区では主に調査区中央のE・Fラインの下位緩斜面にまとまっている。

65～77は棒状礫もしくは扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの(Ⅶ1)。71・75は広い範囲にたたき痕が見られ、一部は周縁にも及んでいる。76・77は三角形あるいは四角形状の扁平礫を用い、その複数の頂点にたたき痕のあるもの。78～82は扁平礫の周縁にたたき痕のあるもの(Ⅶ2)。79・80は側縁に、78・81・82は側縁と端部にたたき痕がある。80は側縁に打ち欠き状のたたき痕があるもので、すり石未成品の可能性もある。83～88は扁平礫の腹背面にたたき痕のあるもの(Ⅶ3)。長軸長が短く、たたき痕が基本的に腹背面のいずれかもしくは両面の各1ヶ所で、たたき痕も浅いものを本類とし、Ⅶ群4類と区別した。86・88は片面に、その他は両面にたたき痕のあるもの。88は上下両端にもたたき痕がある。

89～91はくぼみ石と称されるもの(Ⅶ4)。出土した全てを図示した。いずれも長円形の扁平礫を用い、長軸上に2ヶ所並んだ、深くくぼみ状のたたき痕があるもの。

石材はいずれも安山岩である。

すり石 (図V-88~92、図版85~87、表V-19) すり石については細分ごとに記述する。

断面三角形の礫の稜にすり面のあるもの (Ⅶ1) (図V-88、図版85、表V-19)

断面三角形の礫の稜にすり面のあるすり石は1点がB地区のH-14-a区から出土した。92は厚みがあるため本類に分類したが、典型的なものとは異なりⅦ群2類に類似する。石材は安山岩である。

扁平礫の側面にすり面のあるもの (Ⅶ2) (図V-88、図版85、表V-19)

5点が出土し、破片を除く4点を図示した。機能部の打ち欠きが顕著でないもの、周縁の打ち欠きが全周せず長軸両端のみのものは本類に分類した。Ⅶ群1・2・5・9類を合わせた出土点数の分布は図V-74に示した。点数が少ないこともあり、まともは見られない。

93は平坦なすり面が見られず、未成品と推測される。94~97は平坦なすり面のあるもの (Ⅶ2) で、いずれも長軸両端もしくは一端に打ち欠きがある。石材はいずれも安山岩である。

半円状扁平打製石器 (Ⅶ3) (図V-88~90、図版86・87、表V-19)

63点が出土し、この内ほぼ全体の形がわかる21点を図示した。多くは扁平礫を用い、周縁もしくは片面・両面の全面を半円状に打ち欠いて整形し弦をするものである。なかには平坦なすり面が無く断面形が「V」字状になるものもある。周縁の打ち欠きが全周していないものもあるが、機能部の打ち欠きが顕著なものは本類に分類した。出土点数の分布は図V-75に示した。A地区では調査区全域に散在して出土しているが、平坦部に少なく、傾斜の転換点から斜面下位にかけて多く分布する傾向がある。B地区ではA地区に近い部分にまとまる傾向がある。

98~102は腹背面ともに礫面を残し周縁の全周もしくは一部を打ち欠いたもの。いずれも平坦なすり面がある。98は本遺跡出土中で最も小型のもの。103は腹背面ともに礫面を残し全周を打ち欠いたもので、未成品と推測される。98・99・102は焼成を受けている。

104~114は図裏面に礫面を残し、図正面の全面を打ち欠いたもの。106・110・111・113・114は打ち欠いた面を研磨整形している。104~109は平坦なすり面がなく、断面形が「V」字状になるもの。110~114は平坦なすり面のあるもの。105は焼成を受けている。

115・116は腹背面のほぼ全面を打ち欠き整形したもので、いずれも平坦なすり面がある。115は焼成を受けている。

117は1点だけ出土した板状節理の礫を用いたものである。小型で薄く、すり面はないが、形状が類似することから、取り敢えず半円状扁平打製石器とした。

石材は97が凝灰岩、109がデイスサイトで、その他はいずれも安山岩である。

北海道式石冠 (Ⅶ4) (図V-90・91、図版87、表V-19)

40点が出土し、この内、ほぼ全体の形がわかる14点を図示した。完全な形をとどめているものは少なく、多くは機能部に直行して欠損している。扁平礫を半割し鉢巻状の把握部のみを作出した小型のものが多く、全面敲打整形のものは少ない。出土点数の分布は図V-75に示した。住居跡や焼土などの遺構周辺に多く分布する傾向がある。

118~128は把握部のみを敲打し溝を作出しているもの。127・128はこの中では比較的大型のものである。把握部が全周するものは118・119・125・127~130で、121~124・126は全周しないもの、120は欠損部分があり不明なもの。123は136の台石とセットになって出土したもの (図版52-4)。

129・130は全面敲打整形のもの。129は焼成を受け、器表面が薄く剥離している。131は未成品と推

測されるもので、扁平礫を半割し、周縁を粗く打ち欠いている。

石材は129が凝灰岩で、その他はいずれも安山岩である。

円礫などの一部にすり面のあるもの (Ⅶ5) (図V-92、図版87、表V-19)

2点がA地区の斜面下位から出土し、全てを図示した。132は下側縁が平滑で稜が見られるもの。133は腹背両面が平滑なもの。いずれも擦痕は不明瞭であるが、すり石の一種と推測した。石材は132が凝灰岩、133は安山岩である。

台石・石皿 (図V-92~95、図版88~90、表V-19)

100点が出土した。この中には使用痕が見られないが、形態・出土状況から台石と推定したものも含んでいる。この内12点を図示した。出土点数の分布は図V-76に示した。A地区では平坦部と斜面下位に、B地区では緩斜面下位に分布する傾向がある。

134~140は台石(X)。134は円形で深くほみ状の使用部があるもの。137は石皿のくぼみを再利用して台石としたもので、一部にすり面が残る。138は一部に不明瞭な擦痕があるもの。139は焼成を受け、器表面が剥離しているもので、一部に炭化物が付着している。140はP-1・2の間から使用部を上にして出土したもの(図V-33)。浅く不明瞭なたたき痕が見られる。

141~145は石皿(X)。141はすり面が凹状になるもの。平滑であるが、擦痕は不明瞭である。142~145は平坦なすり面をもつもの。このうち、143はすり面が若干くぼんでいる。144はA・B地区から出土した破片が接合したもの。焼成を受け、色調は赤褐色を呈しており、器表面の剥落が著しい。145は欠損部分の稜が丸みを帯びており、その部分を研磨した可能性がある。

石材はいずれも安山岩である。

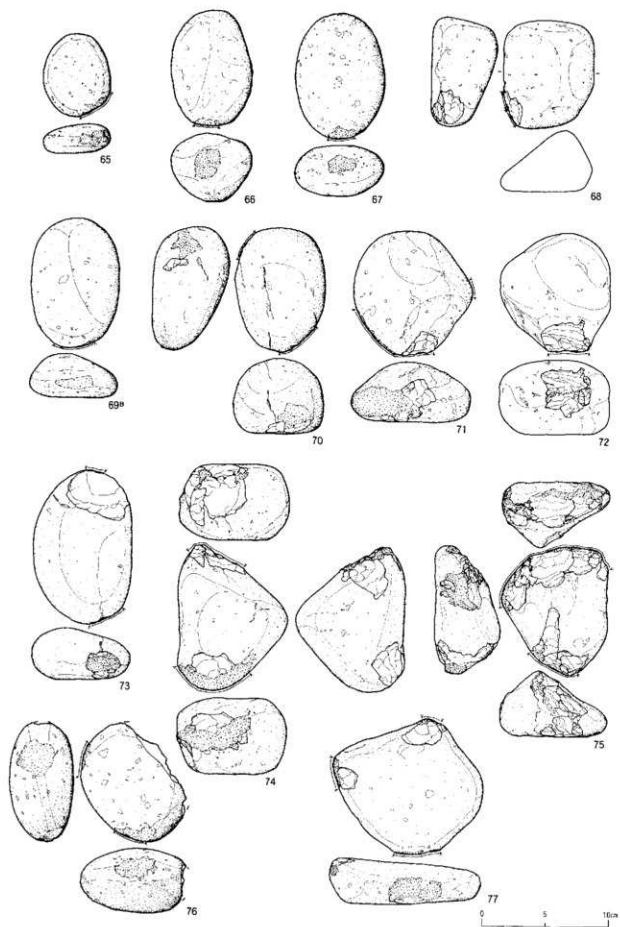
土製品 (図V-95、図版90、表V-19)

146は板状土偶に類似する土製品で、B地区のE-12-a区から胴相当部分が、E-12-c区から足相当部分が、F-12-b区から腕相当部分が出土し接合したもの。無文で、腕に相当する部分から胸部分にかけて断面長方形の棒状工具を刺し込んだまま焼成した孔が見られる。胴部分は風倒攪乱の影響を受け器表面が摩滅しているが、足相当部分は篋状工具で磨かれており光沢がある。片腕部分および足相当部分の一部が欠損している。胎土には少量の繊維が入っており、焼成は良好でⅢ群a-3類土器に近似している。

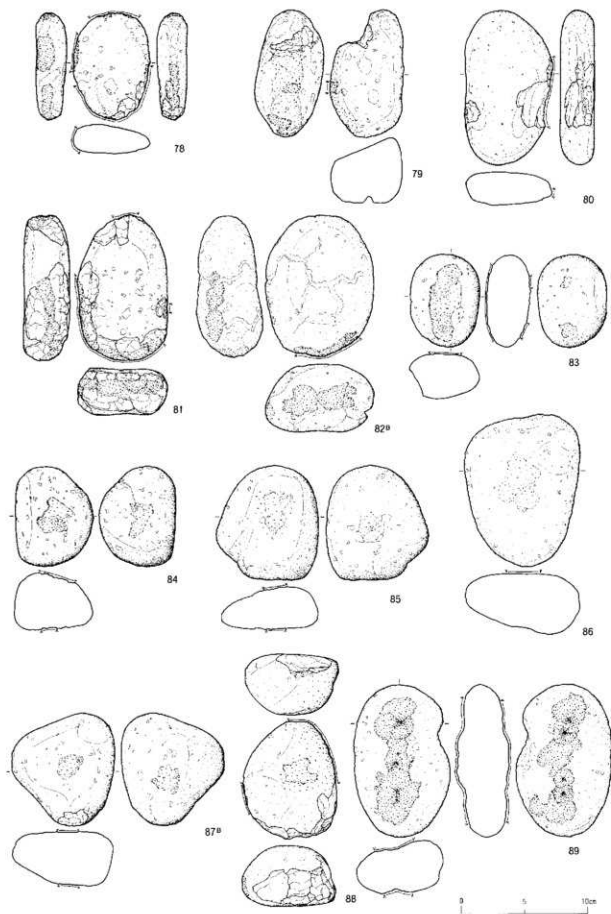
147は土製円盤で、B地区のD-14-d区から出土したもの。R L斜行縄文が施文されたⅢ群a-3類土器の周縁を打ち欠いて円形に整形している。胎土には海綿骨針と少量の繊維が入っている。

石製品 (図V-95、図版90、表V-19)

148は小型石斧状の石製品で、B地区のBF-2に近接したE-12-d区から出土したもの(図V-39)。全面が研磨され整形されたもので、刃部は作出されていない。石材は砂岩である。

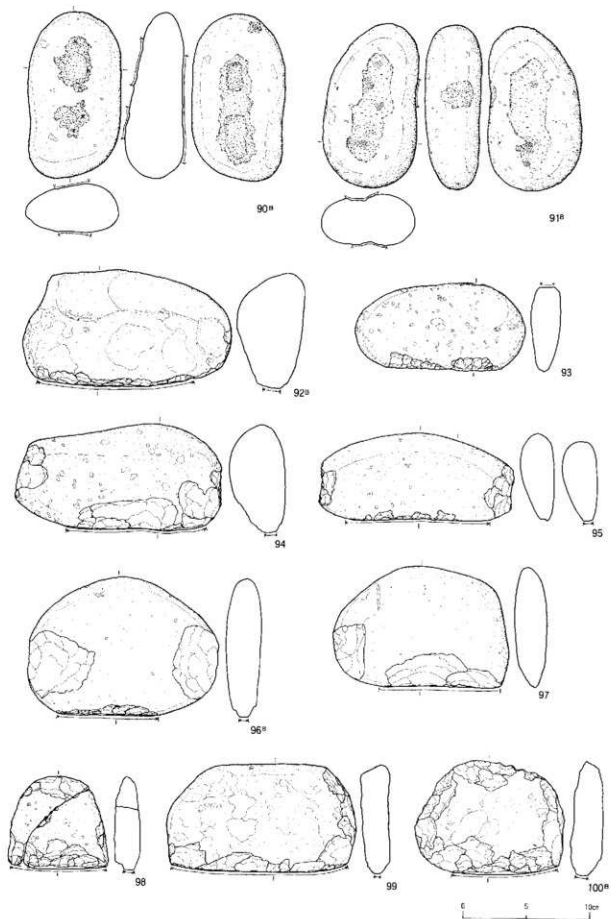


図V-86 包含層出土の石器(7)

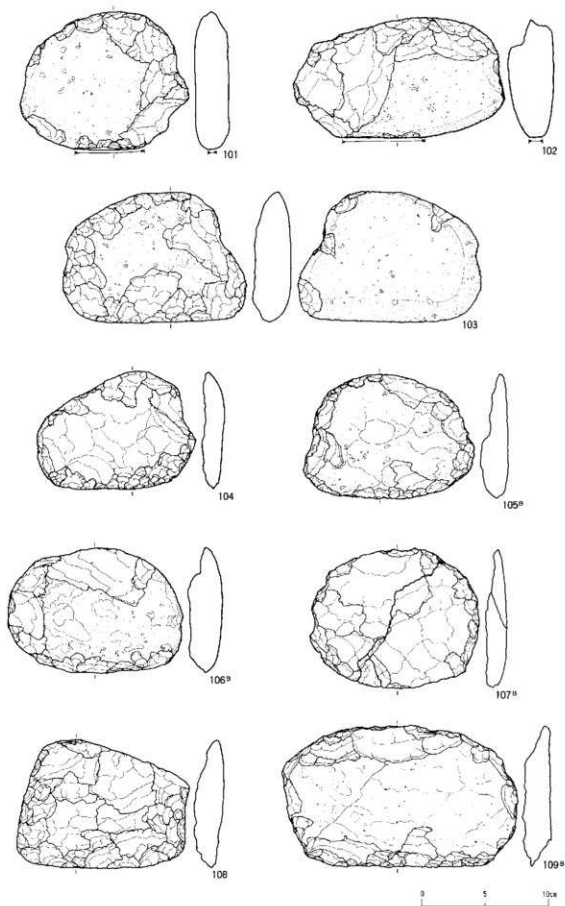


図V-87 包含層出土の石器(8)

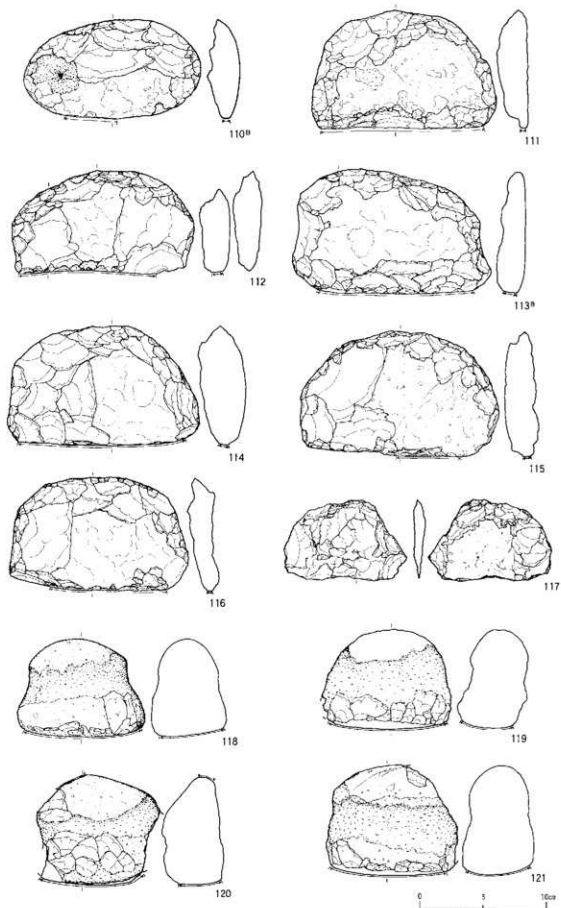
V 山越4遺跡の調査



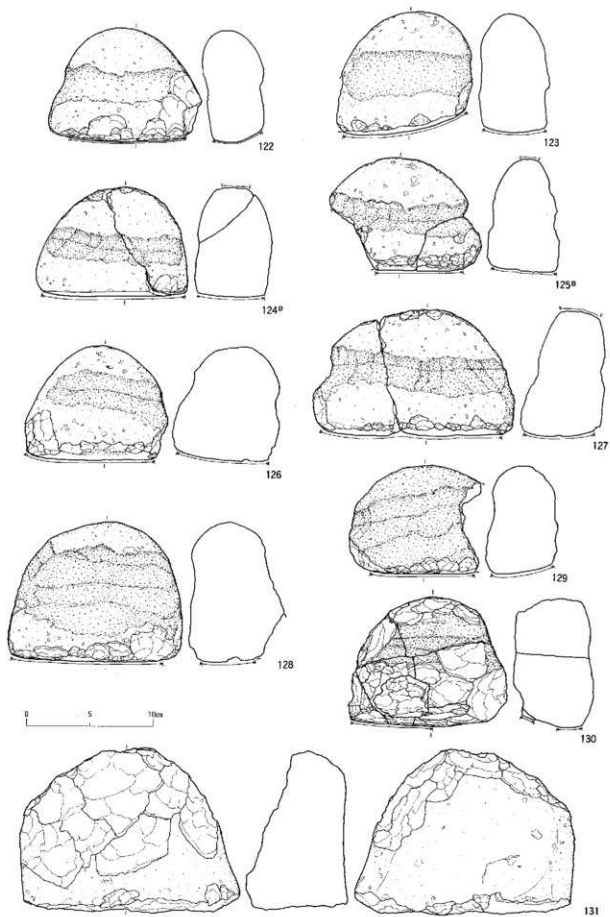
図V-88 包含層出土の石器(9)



図V-89 包含層出土の石器 (10)

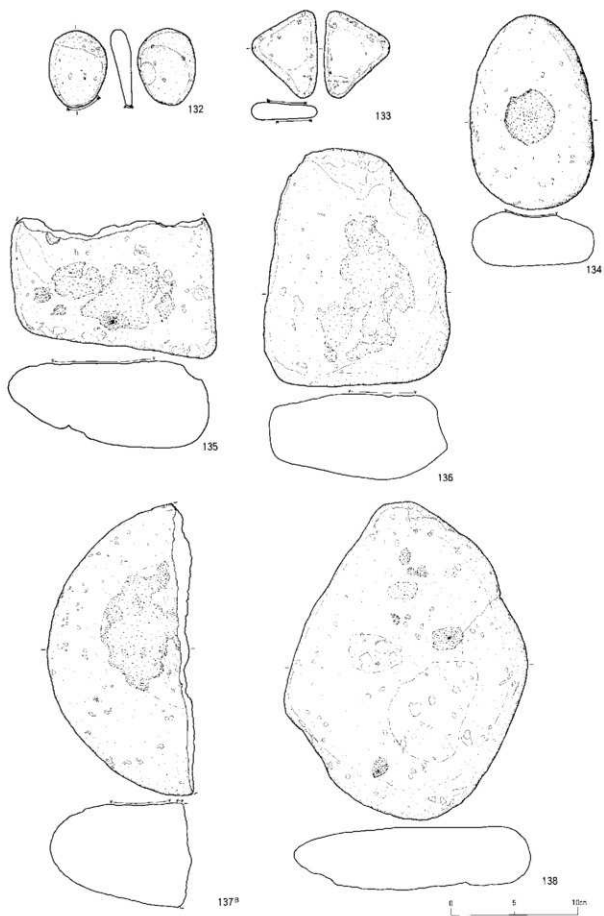


図V-90 包含層出土の石器(11)

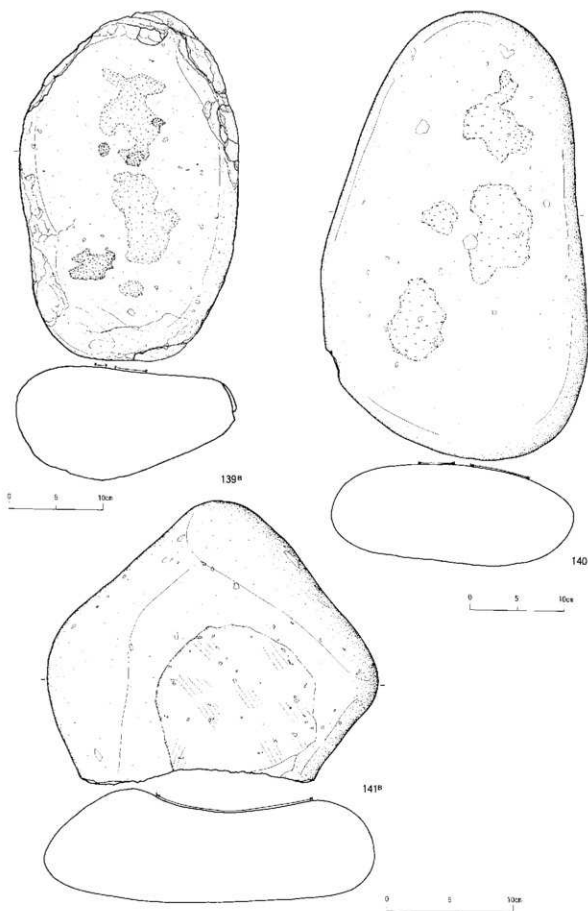


図V-91 包含層出土の石器 (12)

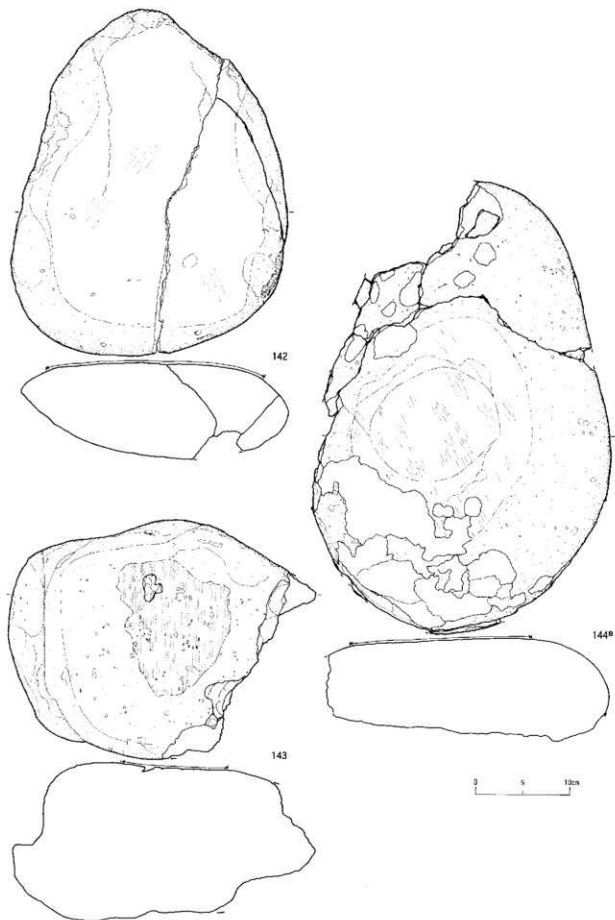
V 山越4遺跡の調査



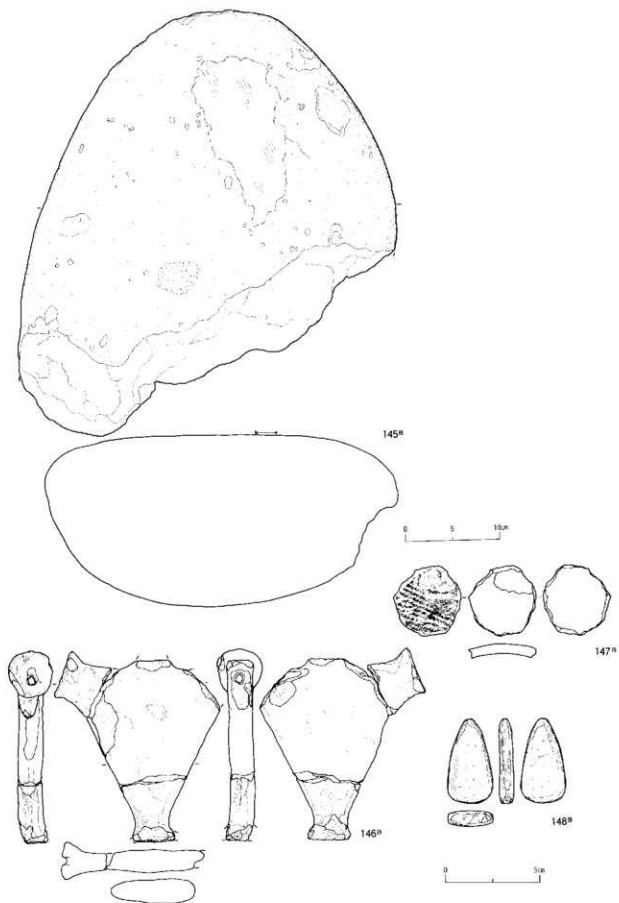
図V-92 包含層出土の石器 (13)



図V-93 包含層出土の石器 (14)



図V-94 包含層出土の石器 (15)



図V-95 包含層出土の石器 (16)・土製品・石製品

V 山越4遺跡の調査

表V-1 山越4遺跡 A地区遺構規模一覧(1)住居跡

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸×短軸	長軸×短軸	深さ					
H-1	Z-7-e・d, Z-8	453×423	(226)×(224)	75	楕円形?	—	Ⅱa-3	土器49点,石器など15点	調査区外に広がる
H-2	U-6-f, V-6-7	582×556	448×412	59	楕円形	N-16.5°-E	Ⅱa-3?7	土器104点,石器など71点	床面に白石,廻りくぼめた炉石籠炉を有する
H-3	O-6-f, P-6-7	—	(496)×(205)	(203)	楕円形	N-27°-E	Ⅱa-1	土器52点,石器など44点	
H-4	R-6(R-5, Q-6)	(264)×(240)	(223)×(217)	35	円形?	—	Ⅱa-1-2	土器26点,石器など19点	立ち上がり不明瞭

表V-2 山越4遺跡 A地区遺構規模一覧(2)土壇

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸×短軸	長軸×短軸	深さ					
P-1	Z-6-c	76×74	62×56	43	円形	—	中期前半	なし	近接して台石出土
P-2	Z-6-a, Y-6-d	102×65	93×63	53	円形	—	中期前半	なし	近接して台石出土
P-3	Y-6-a・b, X-6-e・d	89×64	88×66	33	円形	—	中期前半	なし	近接して台石出土
P-4	X-8-c	109×80	105×88	61	円形	—	中期前半	なし	C14年代4380±40 y BP
P-5	S-10-c・d, S-11-a・b	218×187	202×177	36	円形	—	中期前半	石籠1	P-6, C-11に隣接
P-6	S-10-c, T-11-d	81×62	53×36	31	楕円形	N-42°-E	中期前半	Uフレイク1	P-5, C-11に隣接
P-7	V-11-a	58×40	48×28	16	円形	—	中期前半	なし	埋め戻し
P-8	Q-7-b	73×54	71×55	28	円形	—	Ⅱa-1-2	土器1	H-4と関連か
P-9	T-7-c	44×10	43×16	24	円形	—	Ⅱa-3?7	なし	H-2と関連か

表V-3 山越4遺跡 A地区遺構規模一覧(3)焼土・炭化物集中・フレイク・チップ集中

遺構	位置(調査区)	規模		確認面	時期	遺物	備考	
		長軸	短軸					
F-2	N-9-c	47	× (26)	5	中期前半	なし		
F-3	Q-11-c, Q-12-b	53	× 33	10	風割木炭中	?	なし	風割木炭中
C-1	S-11-c・d	17	× 15	10	V層	?	なし	C14年代3500±40 y BP
FC-1	V-6-a	19	× 17	5	層層3回目	Ⅱa-3?7	土器30,フレイク48	急激な埋戻石

表V-4 山越4遺跡 B地区遺構規模一覧(1)土壇

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸×短軸	長軸×短軸	深さ					
B P-1	F-14-b	85×68	70×55	31	楕円形	N-59°-E	Ⅱa-3	土器2	調査区外に広がる
B P-2	E-12-a	100×79	97×72	41	円形	—	Ⅱa-3	土器6	B P-2近隣の土壇と接合

表V-5 山越4遺跡 B地区遺構規模一覧(2)焼土・集石

遺構	位置(調査区)	規模		確認面	時期	遺物	備考	
		長軸	短軸					
B F-1	D-16-d	51	× 26	6	層層下位	中期前半	なし	周囲に遺物なし
B F-2	E-12-c	70	× 40	3	層層上層	Ⅱa-3	なし	周囲に土器,すり石散在
B S-1	B-12	1400	× 340	—	層層2回目	不明	層1211	人為的なものではない可能性

表V-6 山越4遺跡 遺構出土遺物点数一覧

遺構名	土器				燧石				燧石群				その他				合計				
	厚野土器	石籠	石籠	石籠	燧石	燧石	燧石	燧石	燧石群	燧石群	燧石群	燧石群	燧石群	燧石群	燧石群	燧石群					
H-1	49				3	1	2	4	3	1							94				
H-2	194				4	1	4	5	19	2	1	5					175				
H-3	52	6	1		4		1	2	2			1					96				
H-4	28				1							2	2				45				
P-5		1															1				
P-6									1								1				
P-8	3																3				
FC-1	10								80								90				
小計	242	6	2		12		3	4	10	305	6	2	7	3	12	139	35	3	4	974	
B P-1	2																				2
B P-2	6																				6
BS-1																					1439
小計	8																				1439
合計	250	6	2		12		3	4	10	305	6	2	7	3	12	139	35	3	1	4	2021

V 山越4遺跡の調査

表V-9 山越4遺跡 A地区 遺構出土掲載石器一覧

H-1 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
17	II-1	スタレナイバー	20	層位2b	覆土4	10.1	3.5	1.2	74.4	頁岩	59		
18	II-1	スタレナイバー	42	層位2b	覆土2	5.8	3.6	1.2	26.7	頁岩	59		
19	II-1	スタレナイバー	82	層位3a	覆土4	6.5	7.5	1.3	66.4	頁岩	59		
20	II-1	たたく石	23	層位1	層位1	13.7	9.0	5.5	8910	安山岩	59		
21	II-1	たたく石	75	層位5	層位1	5.2	4.3	2.1	71.6	安山岩	59		
22	II-1	打石	41	X	層位1	10.4	11.2	4.0	710.0	頁岩	59		
23	II-1	打石	41	X	層位2	34.1	26.5	22.5	2430.0	安山岩	59		

H-2 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
13	II-2	スタレナイバー	14	層位2b	覆土2	7.0	4.4	1.5	43.6	頁岩	59		
14	II-2	スタレナイバー	17	層位2b	覆土2	6.7	4.6	0.5	25.3	頁岩	59		
15	II-2	スタレナイバー	24	層位2b	覆土4	9.5	6.3	1.2	89.3	頁岩	59		長-247、覆土3と接合
16	II-2	スタレナイバー	23	層位2c	覆土4	13.0	3.8	1.5	107.4	頁岩	59		
17	II-2	打フレイク	37	V B1	覆土3	8.7	5.2	1.0	35.7	頁岩	59		
18-1	II-2	フレイク	26	V C	覆土3				14.1	頁岩	59		18-1-6接合
18-2	II-2	打フレイク	83	V B2	覆土4				11.1	頁岩	59		18-1-6接合
18-3	II-2	打フレイク	80	V B2	覆土4				6.9	頁岩	59		18-1-6接合
18-4	II-2	打フレイク	27	V C	覆土4				10.9	頁岩	59		18-1-6接合
18-5	II-2	打フレイク	82	V B2	覆土4				14.8	頁岩	59		18-1-6接合
18-6	II-2	フレイク	81	V C	覆土4				18.7	頁岩	59		18-1-6接合
19	II-2	たたく石	87	層位1	層位1	12.1	8.1	5.7	610.0	頁岩	59		
20	II-2	たたく石	12	層位4	覆土2	11.8	7.7	5.0	380.0	安山岩	59		
21	II-2	半円状扁平打石	16	層位3	覆土2	9.2	16.7	2.5	560.0	安山岩	59		
22	II-2	半円状扁平打石	27	層位3	覆土4	9.8	13.9	2.6	380.0	安山岩	59		
23	II-2	半円状扁平打石	67	層位3	覆土3	11.1	13.6	4.2	629.8	安山岩	59		
24	II-2	打石	102	X	覆土2	19.7	3.3	1.2	68.8	凝灰岩	59		
25	II-2	打石	11	X	覆土2	18.0	10.8	7.0	1280.0	安山岩	60		
26	II-2	打石	80	X	覆土2	17.1	12.5	4.0	1330.0	安山岩	60		
27	II-2	打石	89	X	層位1	18.2	15.3	11.3	630.0	安山岩	60		
28	II-2	打石	19	X	覆土2	24.8	25.8	5.2	500.0	安山岩	60		
29	II-2	打石	100	X	層位3	26.7	33.0	12.1	1700.0	安山岩	60		
30	II-2	石丸状物	36	X	覆土3	10.6	6.0	3.8	177.5	凝灰岩	60		凝灰

H-3 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
8	II-3	打石	49	I A 5	層位1	3.4	1.1	0.5	3.0	頁岩	62		山越4埋蔵
9	II-3	スタレナイバー	51	層位2a	層位1	7.1	4.2	0.8	29.8	頁岩	62		
10	II-3	スタレナイバー	49	層位2b	層位1	7.1	2.5	0.7	10.6	頁岩	62		
11	II-3	スタレナイバー	14	層位3a	覆土4	4.8	6.7	1.0	25.8	頁岩	62		
12	II-3	スタレナイバー	18	層位3b	覆土3	4.8	5.8	0.7	13.0	頁岩	62		
13	II-3	打フレイク	11	V B2	層位1	6.1	7.0	1.2	42.2	頁岩	62		
14	II-3	打フレイク	9	V V B2	覆土4	5.7	5.7	0.7	28.2	頁岩	62		
15	II-3	たたく石	34	層位2	覆土3	6.5	4.8	3.6	142.6	安山岩	62		
16	II-3	長条状石片	14	層位4	層位1	6.5	10.0	4.8	201.0	安山岩	62		
17	II-3	打石	56	X	層位1	22.4	22.0	8.4	800.0	安山岩	62		長-323、覆土3と接合
18	II-3	打石	55	X X	層位1	34.0	24.6	4.1	530.0	安山岩	62		台石を台石に転用

H-4 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
3	II-4	スタレナイバー	9	層位2c	覆土1	7.2	4.3	0.7	18.5	頁岩	63		
6	II-4	半円状扁平打石	14	層位3	覆土4	9.0	10.0	2.0	305.4	安山岩	63		
7	II-4	半円状扁平打石	23	層位3	覆土1	9.8	15.0	2.3	549.0	安山岩	63		長さ6.6、覆土3と接合

P-5 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
1	P-5	打石	2	I A 5	層位2	2.5	1.3	0.4	1.1	頁岩	63		赤土埋

P-6 掲載石器

掲載番号	遺構名	器種名	遺物番号	分層	単位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	掲載番号	接合	備考
1	P-6	打フレイク	1	V B3	覆土2	5.3	5.0	0.7	16.1	頁岩	63		

表V-10 山越4遺跡 B地区 遺構出土復元土器一覧

B P-2 出土復元土器

掲載番号	遺構名	分層	接合	縦径(1)	口径(1)	底径(1)	底径(2)	高さ(1)	高さ(2)	口縁径	縦径(2)	口径(2)	底径(2)	備考
1	層位P-2	層位a-3		100	22.4	12.6	(30.3)			層位P-2-4・覆土1 層位P-2-5・覆土1×1 E-11-4・層位1×1 E-13-a-9・層位4×1 E-13-b-6・層位3×1 E-13-b-15・層位2×1 E-12-d-1・層位1×2 P-10-a-4・層位2×1 P-11-a-5・層位2×1 P-11-b-1・層位3×3 P-11-d-5・層位3×2 P-12-a-2・層位1×1 P-12-d-1・層位2×1 P-12-d-4・層位3×11 P-12-d-9・層位3×9 P-12-d-18・層位2×10 P-13-a-4・層位3×1 P-13-a-7・層位3×4 P-13-a-8・層位1×1 E-13-a-1・層位1×1	77	60	層位P-2に接続して出土した焼酎と接合	

調査年度	区画	分期	層名	発見数	100gあたり	100gあたり	発見率	同一層位	発見数	100gあたり	備考	
3	B	Ⅱa-3	E-10-2・遺/3×5	47	19.1	8.3	26.1	D-14-c-1・遺/2×1	38	75		
			E-10-4・遺/2×2									
			F-10-b-2・遺/2×1									
			F-9-1・遺/3×4									
			F-9-2・遺/2×1									
			F-9-3・遺/4×2									
			F-9-b-3・遺/4×2									
			F-10-4・遺/4×6									
			G-10-1・遺/3×2									
			未記載×1									
4	B	Ⅱa-3	G-16-a-1・遺/1×1	28	17.4	8.6	(18.3)	G-16-a-3・遺/1×2	12	75		
			G-16-b-3・遺/1×4									
			G-16-b-4・焼乱×1									
			G-16-d-1・遺/1×15									
			G-16-d-2・遺/3×6									
			G-16-d-4・遺/1×1									
			D-15-a-4・遺/3×3									
			D-15-a-2・遺/2×2									
			E-11-d-1・遺/2×5									
			E-12-a-2・遺/2×2									
E-12-a-1・遺/1×2												
E-12-a-3・遺/2×4												
E-12-c-5・遺/2×8												
E-12-c-10・遺/3×2												
E-12-c-6・遺/2×3												
E-12-c-19・遺/3×1												
E-12-c-23・遺/4×1												
E-12-d-1・遺/1×1												
E-12-d-3・遺/2×1												
E-12-1・焼乱×1												
E-13-b-6・遺/3×1												
E-13-b-15・遺/2×1												
E-11-1・焼乱×1												
5	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	39	23.1	9.6	26.3	E-12-a-2・遺/3×1	30	75	目F-2に隣接して出土	
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-b-5・遺/2×1									
			G-16-c-1・遺/1×4									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-12-c-10・遺/3×2									
			E-12-c-6・遺/2×3									
			E-12-c-19・遺/3×1									
			E-12-c-23・遺/4×1									
E-12-d-1・遺/1×1												
E-12-d-3・遺/2×1												
E-12-1・焼乱×1												
E-13-b-6・遺/3×1												
E-13-b-15・遺/2×1												
E-11-1・焼乱×1												
6	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	32	(15.3)	7.4	(15.4)	G-16-c-1・遺/1	4	75		
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-b-5・遺/2×1									
			G-16-c-1・遺/1×4									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-11-c-5・遺/2×1									
			E-12-c-10・遺/3×2									
			E-12-c-6・遺/2×3									
			E-12-c-19・遺/3×1									
E-12-c-23・遺/4×1												
E-12-d-1・遺/1×1												
E-12-d-3・遺/2×1												
E-12-1・焼乱×1												
E-13-b-6・遺/3×1												
E-13-b-15・遺/2×1												
E-11-1・焼乱×1												
7	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	54	20.9	8.2	27.4	E-12-c-5・遺/2×2	6	75	目F-2に隣接して出土	
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-b-5・遺/2×1									
			G-16-c-1・遺/1×4									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-11-c-5・遺/2×1									
			E-12-c-10・遺/3×2									
			E-12-c-6・遺/2×3									
			E-12-c-19・遺/3×1									
E-12-c-23・遺/4×1												
E-12-d-1・遺/1×1												
E-12-d-3・遺/2×1												
E-12-1・焼乱×1												
E-13-b-6・遺/3×1												
E-13-b-15・遺/2×1												
E-11-1・焼乱×1												
8	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	15	10.8	5.5	11.2	E-12-b-1・遺/2×1	8	75		
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-b-5・遺/2×1									
			G-16-c-1・遺/1×4									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-12-b-2・遺/2×4									
			E-12-b-5・遺/2×1									
			F-11-d-2・遺/3×2									
			E-11-7・遺/4×2									
E-12-b-5・遺/2×2												
F-11-c-1・遺/3×1												
F-11-d-2・遺/3×4												
F-11-d-3・遺/2×5												
E-12-a-3・遺/4×1												
E-11-1・遺/3×6												
E-11-d-1・遺/2×2												
E-12-b-5・遺/2×1												
F-12-a-4・遺/2×1												
9	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	49	17.8	8.9	20.4	E-11-1・遺/3×7	20	75		
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-b-5・遺/2×1									
			G-16-c-1・遺/1×4									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-15-d-1・遺/1×2									
			G-16-b-1・遺/1×10									
			G-16-b-2・遺/2×13									
			G-16-c-2・遺/2×1									
G-16-d-2・遺/2×1												
G-16-d-3・遺/1×10												
G-12-a-1・遺/3×1												
10	B	Ⅱa-3	G-16-b-1・遺/1×13	27	(14.0)	9.3	(20.0)	G-15-d-1・遺/1×2	38	75		
			G-16-b-2・遺/2×11									
			G-16-c-1・遺/1×1									
			G-16-d-3・遺/1×1									
			G-16-1・焼乱×1									
			E-15-d-1・遺/1×2									
			G-16-b-1・遺/1×10									
			G-16-b-2・遺/2×13									
			G-16-c-2・遺/2×1									
			G-16-d-2・遺/2×1									
G-16-d-3・遺/1×10												
G-12-a-1・遺/3×1												

表V-18 山越4遺跡B地区包含層出土 拓本掲載土器一覧

調査年度	区画	層名	発見数	100gあたり	100gあたり	発見率	同一層位	発見数	100gあたり	備考
35	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
36	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
37	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
38	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
39	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
40	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
41	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
42	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
43	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
44	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
45	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
46	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
47	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
48	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
49	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
50	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
51	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
52	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
53	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
54	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
55	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
56	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
57	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
58	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
59	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
60	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
61	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
62	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
63	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
64	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
65	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
66	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
67	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
68	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
69	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
70	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
71	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
72	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
73	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
74	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
75	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
76	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
77	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
78	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
79	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
80	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
81	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
82	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
83	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
84	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
85	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
86	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
87	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
88	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
89	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
90	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
91	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
92	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
93	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
94	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
95	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
96	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
97	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
98	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
99	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり
100	Ⅱa-3	F-10	1	0.1	0.1	0.1	0.1	1	0.1	100gあたり

V 山越4遺跡の調査

表V-19 山越4遺跡 包含層出土掲載石器一覧

図録番号	器物名	分類	層位	遺跡番号	層別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	容積(g)	石質	図録番号	種別	備考
1	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-11-a	1	新第3層	4.1	1.4	0.3	2.3	緑色頁岩	55	石鏃	包含層
2	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-8-b	2	新第3層	5.1	1.3	0.4	1.4	赤褐色頁岩	56	石鏃	包含層
3	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-10-b	7	新第3層	5.1	1.2	0.4	1.5	頁岩	57	石鏃	包含層
4	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-11-b	1	新第3層	3.6	1.6	0.5	2.7	頁岩	58	石鏃	包含層
5	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-6-a	2	新第3層	4.3	1.6	0.6	3.6	頁岩	59	石鏃	包含層
6	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-2-b	2	新第3層	4.0	1.2	0.6	2.5	頁岩	60	石鏃	包含層
7	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-11-b	2	新第3層	2.9	1.2	0.5	0.9	緑色頁岩	61	石鏃	包含層
8	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-12-a	2	新第3層	2.6	1.4	0.6	1.6	頁岩	62	石鏃	包含層
9	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-12-a	11	新第3層	2.6	1.2	0.4	0.8	頁岩	63	石鏃	包含層
10	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-15-a	7	新第3層	3.3	1.2	0.4	1.3	頁岩	64	石鏃	包含層
11	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-6-b	1	新第3層	4.3	1.7	0.5	3.0	頁岩	65	石鏃	包含層
12	石鏃	ⅠA.5	Ⅱ-11-d	7	新第3層	2.8	1.8	0.4	1.3	頁岩	66	石鏃	包含層
13	石鏃	Ⅱ	Ⅱ-13-a	6	新第3層	6.6	2.7	0.7	10.0	頁岩	67	石鏃	2点検査
14	つば丸付石ナイフ	ⅡA.1.1	Ⅱ-13-b	2	新第3層	6.0	2.8	0.8	11.8	頁岩	68	石ナイフ	包含層
15	つば丸付石ナイフ	ⅡA.1.1	Ⅱ-17-b	1	新第3層	7.2	3.0	0.5	16.2	頁岩	69	石ナイフ	包含層
16	つば丸付石ナイフ	ⅡA.1.1	Ⅱ-7	1	新第3層	6.7	3.6	1.0	16.4	頁岩	70	石ナイフ	包含層
17	つば丸付石ナイフ	ⅡA.4	Ⅱ-7-b	2	新第3層	3.9	2.4	0.4	2.6	頁岩	71	石ナイフ	包含層
18	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-3-a	6	新第4層	1.6	3.9	0.7	14.1	頁岩	72	スチレイバー	包含層
19	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-3-a	4	Ⅱ-V層	6.0	4.1	0.9	28.8	頁岩	73	スチレイバー	包含層
20	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	6	新第4層	6.6	3.5	0.6	15.7	頁岩	74	スチレイバー	包含層
21	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	7	新第4層	7.4	3.4	0.9	19.8	頁岩	75	スチレイバー	包含層
22	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	4	新第3層	7.2	5.1	1.4	36.0	頁岩	76	スチレイバー	包含層
23	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-a	3	新第3層	7.2	5.4	1.0	43.2	頁岩	77	スチレイバー	包含層
24	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-3-b	11	新第4層	7.2	4.9	0.7	32.0	頁岩	78	スチレイバー	包含層
25	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-a	4	新第3層	7.2	4.0	0.7	33.0	頁岩	79	スチレイバー	包含層
26	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-c	1	新第3層	6.7	4.5	1.6	41.0	頁岩	80	スチレイバー	包含層
27	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-2	2	新第3層	6.6	4.1	1.3	46.2	頁岩	81	スチレイバー	包含層
28	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-10	2	新第3層	6.3	7.4	0.8	46.8	頁岩	82	スチレイバー	包含層
29	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	2	新第3層	6.7	4.9	1.4	43.8	頁岩	83	スチレイバー	包含層
30	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	5	新第3層	6.3	3.9	0.9	36.1	頁岩	84	スチレイバー	包含層
31	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-d	3	新第3層	6.0	3.7	0.9	22.8	頁岩	85	スチレイバー	包含層
32	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-6	1	新第3層	5.4	3.5	1.6	28.0	頁岩	86	スチレイバー	包含層
33	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-c	2	新第4層	6.8	4.4	0.8	28.6	頁岩	87	スチレイバー	包含層
34	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-4	2	新第3層	6.6	4.0	0.7	27.2	頁岩	88	スチレイバー	包含層
35	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-12-a	7	新第3層	1.3	3.3	0.8	16.7	頁岩	89	スチレイバー	包含層
36	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-12	2	新第3層	7.3	4.9	1.3	39.0	頁岩	90	スチレイバー	包含層
37	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-6-b	7	新第3層	7.6	4.9	1.3	48.9	頁岩	91	スチレイバー	包含層
38	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-12-d	11	新第4層	8.9	4.0	1.6	46.2	頁岩	92	スチレイバー	包含層
39	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-c	1	新第3層	6.6	3.7	0.7	28.9	頁岩	93	スチレイバー	包含層
40	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-b	2	新第3層	10.3	4.9	0.5	27.2	頁岩	94	スチレイバー	包含層
41	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-3-b	1	新第3層	5.5	4.0	0.8	14.2	頁岩	95	スチレイバー	包含層
42	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-6-b	9	新第3層	7.1	3.2	1.0	30.1	頁岩	96	スチレイバー	包含層
43	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-10-d	5	新第3層	6.8	4.5	0.9	36.8	頁岩	97	スチレイバー	包含層
44	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-7-b	3	新第3層	6.0	5.2	1.1	32.2	頁岩	98	スチレイバー	包含層
45	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-6	1	新第3層	6.0	5.5	1.1	32.2	頁岩	99	スチレイバー	包含層
46	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-4	2	新第3層	3.9	6.0	0.7	15.7	頁岩	100	スチレイバー	包含層
47	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-9-c	1	新第3層	6.1	6.0	0.8	28.1	頁岩	101	スチレイバー	包含層
48	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-8	3	新第3層	8.9	4.6	1.7	39.8	頁岩	102	スチレイバー	包含層
49	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-10-d	1	新第3層	6.9	2.6	0.8	20.1	頁岩	103	スチレイバー	包含層
50	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-11-d	6	新第4層	7.0	3.5	0.8	13.7	頁岩	104	スチレイバー	包含層
51	スチレイバー	ⅡB.2.1	Ⅱ-10-d	7	新第4層	7.2	4.7	1.6	43.4	頁岩	105	スチレイバー	包含層
52	短剣	ⅡA.1	Ⅱ-7-a	4	新第3層	5.8	6.7	6.7	342.8	頁岩	106	短剣	包含層
53	短剣	ⅡA.1	Ⅱ-9-a	2	新第3層	7.7	9.6	5.8	396.0	頁岩	107	短剣	包含層
54	斧ツレタ	ⅡB.1	Ⅱ-12-c	1	新第3層	6.0	1.6	0.6	3.6	頁岩	108	斧ツレタ	包含層
55	斧ツレタ	ⅡB.1	Ⅱ-7-c	2	新第3層	6.0	5.2	0.9	27.3	頁岩	109	斧ツレタ	包含層
56	斧ツレタ	ⅡB.1	Ⅱ-9-b	3	新第3層	6.5	3.4	1.0	36.7	頁岩	110	斧ツレタ	包含層
57	斧ツレタ	ⅡB.1	Ⅱ-10-a	6	新第3層	6.1	3.4	0.8	24.0	頁岩	111	斧ツレタ	包含層
58	斧ツレタ	ⅡB.1	Ⅱ-7-c	5	新第3層	5.2	5.2	0.9	25.4	頁岩	112	斧ツレタ	包含層
59	短剣	ⅡA.1	Ⅱ-6-c	2	Ⅱ-V層	11.3	4.5	2.1	158.4	緑色頁岩	113	短剣	包含層
60	短剣	ⅡA.4	Ⅱ-14-d	1	新第3層	6.4	1.3	2.4	36.0	緑色頁岩	114	短剣	包含層
61	短剣	ⅡA.4	Ⅱ-13-d	2	新第3層	9.3	3.5	1.7	46.3	緑色頁岩	115	短剣	包含層
62	短剣	ⅡA.4	Ⅱ-3	6	新第4層	19.2	5.1	3.5	198.4	緑色頁岩	116	短剣	2点検査
63	短剣	ⅡA.4	Ⅱ-6-c	3	新第3層	11.0	4.3	1.6	101.6	緑色頁岩	117	短剣	包含層
64	短剣	ⅡA.4	Ⅱ-7-b	6	新第3層	12.2	5.3	2.1	272.1	緑色頁岩	118	短剣	包含層
65	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-8-c	1	新第3層	6.5	3.5	2.4	112.2	安山岩	119	たたき石	包含層
66	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-4-a	3	新第3層	8.2	4.5	3.5	158.0	安山岩	120	たたき石	包含層
67	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-8-c	1	新第3層	10.0	7.1	4.1	260.2	安山岩	121	たたき石	包含層
68	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-7-d	3	新第3層	6.6	7.2	5.2	405.4	安山岩	122	たたき石	包含層
69	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-10-d	10	新第3層	10.2	7.0	3.3	347.4	安山岩	123	たたき石	包含層
70	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-8-d	2	Ⅱ-V層	9.9	7.2	6.0	371.8	安山岩	124	たたき石	包含層
71	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-9-b	2	新第3層	9.9	9.5	4.7	596.0	安山岩	125	たたき石	包含層
72	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-3-a	2	新第3層	9.4	8.8	5.9	690.0	安山岩	126	たたき石	包含層
73	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-3-b	6	新第3層	11.3	7.8	4.9	590.0	安山岩	127	たたき石	包含層
74	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-3-b	9	新第5層	11.6	8.7	6.1	726.0	安山岩	128	たたき石	包含層
75	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-9-c	2	新第3層	10.1	8.3	5.2	484.0	安山岩	129	たたき石	包含層
76	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-6-c	2	新第3層	9.4	10.1	5.2	480.4	安山岩	130	たたき石	包含層
77	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-8-b	2	新第4層	10.8	12.0	3.6	399.8	安山岩	131	たたき石	包含層
78	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-3-b	6	新第3層	6.5	6.1	2.4	138.4	安山岩	132	たたき石	包含層
79	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-7	2	Ⅱ-V層	10.2	2.9	5.2	256.0	安山岩	133	たたき石	包含層
80	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-3-d	1	新第3層	6.9	6.1	3.1	156.8	安山岩	134	たたき石	包含層
81	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-4	9	新第3層	11.4	7.1	3.7	415.4	安山岩	135	たたき石	包含層
82	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-15-b	3	新第3層	11.2	8.6	3.4	495.0	安山岩	136	たたき石	包含層
83	たたき石	Ⅱ	Ⅱ-7-d	1	新第3層	7.8	5.5	3.1	197.4	安山岩	137	たたき石	包含層

調査番号	品名	分類	図記号	遺物番号	単位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	調査番号	組合	備考
84	たたき石	埴3	T-4	2	遺物13051	7.9	6.1	4.3	270.2	安房石	85		
85	たたき石	埴3	遺物2	4	遺物	8.0	8.1	3.3	286.7	安房石	85		
86	たたき石	埴3	T-11-c	1	遺物23051	12.1	9.2	4.8	430.0	安房石	85		
87	たたき石	埴3	T-10-c	3	遺物13051	6.9	6.1	4.3	430.0	安房石	85		自然出土
88	たたき石	埴2	T-7-a	3	遺物13051	9.3	7.4	4.7	388.8	安房石	85		奥段にわたる連続品
89	たたき石	埴4	T-10-d	2	遺物13051	10.0	7.6	4.2	457.8	安房石	85		
90	たたき石	埴4	T-14-a	7	埴物	13.2	7.4	3.9	660.0	安房石	85		自然出土
91	たたき石	埴4	T-14-c	4	遺物23051	13.0	7.3	4.1	500.0	安房石	85		自然出土
92	埴子石	埴1	T-14-a	1	960.0	9.1	16.5	0.4	960.0	安房石	85		自然出土
93	埴子石	埴2	T-5-a	4	遺物23051	4.7	13.4	2.3	284.2	安房石	85		
94	埴子石	埴2	T-10-c	3	遺物13051	6.9	6.1	4.3	430.0	安房石	85		
95	埴子石	埴2	T-3-a	3	遺物13051	6.9	15.4	2.7	436.4	安房石	85		
96	埴子石	埴2	T-12-d	13	遺物43051	10.9	15.2	2.8	660.0	安房石	85		
97	埴子石	埴2	Q-6-c	4	遺物43051	9.5	13.9	2.6	582.2	磯原石	85		
98	埴子石	埴2	O-4	13	遺物	7.4	8.0	2.0	342.8	安房石	86	O-4.3.3.組合	
99	埴子石	埴2	T-6-d	5	遺物43051	8.6	15.0	2.5	391.8	安房石	86		
100	埴子石	埴2	C-18-a	4	遺物13051	8.1	12.2	2.6	496.6	安房石	86		自然出土
101	埴子石	埴2	遺物2	7	8-V	10.9	13.4	2.7	522.0	安房石	86		
102	埴子石	埴2	O-7-a	2	遺物13051	8.3	16.7	3.7	646.0	安房石	86		
103	埴子石	埴2	T-6-d	3	遺物13051	10.3	14.3	3.0	620.0	安房石	86		表成山
104	埴子石	埴2	T-7-c	4	遺物23051	9.3	12.6	1.9	287.2	安房石	86		
105	埴子石	埴2	C-17-a	3	遺物13051	8.8	13.5	2.2	283.8	安房石	86		自然出土
106	埴子石	埴2	T-5-a	2	遺物23051	8.9	13.9	2.7	254.8	安房石	86		自然出土
107	埴子石	埴2	T-12-b	13	遺物23051	11.1	12.5	1.7	286.4	安房石	86	T-12-d.20.組合	
108	埴子石	埴2	O-12-b	3	遺物13051	10.1	13.2	2.4	286.0	安房石	86		
109	埴子石	埴2	T-3-b	10	遺物63051	11.1	18.6	3.3	433.0	アヤツ石	86		自然出土
110	埴子石	埴2	T-6-d	7	遺物43051	7.8	14.0	2.6	336.6	安房石	86		
111	埴子石	埴2	T-6-d	10	遺物33051	9.3	14.7	2.5	480.0	安房石	86		
112	埴子石	埴2	T-4	13	遺物43051	6.1	14.4	2.4	200.8	安房石	86		
113	埴子石	埴2	T-13-a	2	遺物13051	8.6	15.2	2.3	428.4	安房石	86		
114	埴子石	埴2	T-6-d	11	遺物53051	9.5	15.2	3.8	276.0	安房石	86		自然出土
115	埴子石	埴2	X-7-a	3	V	8.9	15.7	2.7	467.2	安房石	87		
116	埴子石	埴2	O-4	11	遺物	8.9	14.2	2.3	355.8	安房石	87		
117	埴子石	埴2	X-6-d	3	遺物23051	6.4	9.9	1.9	36.0	安房石	87		
118	埴子石	埴4	O-6-b	3	遺物13051	7.7	10.0	2.8	640.0	安房石	87		
119	埴子石	埴4	T-9-d	2	遺物23051	7.9	10.1	2.5	497.2	安房石	87		
120	埴子石	埴4	T-3-c	3	遺物13051	8.7	9.8	4.8	164.4	安房石	87		表-5-c.表土組合
121	埴子石	埴4	遺物2	1	遺物	8.4	10.3	3.6	240.0	安房石	87		
122	埴子石	埴4	T-7-a	1	遺物13051	6.9	12.0	4.9	737.0	安房石	87		
123	埴子石	埴4	T-10-b	6	遺物23051	9.9	10.4	3.6	720.0	安房石	87		120の右石と連続品
124	埴子石	埴4	T-17-d	2	遺物23051	8.7	11.9	6.1	980.0	安房石	87	T-15.1.表土組合	自然出土
125	埴子石	埴4	T-11-d	3	遺物23051	8.0	12.0	5.8	780.0	安房石	87	T-11.5.表土組合	自然出土
126	埴子石	埴4	T-10-a	2	遺物13051	9.1	12.2	8.3	1130.0	安房石	87		
127	埴子石	埴4	表-7	1	遺物	10.0	15.9	6.7	1210.0	安房石	87	T-6-a.表土組合	
128	埴子石	埴4	T-6-a	7	V	11.0	12.7	7.5	1330.0	安房石	87		
129	埴子石	埴4	Q-9-b	5	遺物23051	8.5	10.4	5.7	580.0	磯原石	87		
130	埴子石	埴4	T-11-d	3	遺物23051	10.3	12.5	6.2	1130.0	安房石	87	T-11-d.1.表土組合	
131	埴子石	埴4	T-4	12	遺物23051	13.2	17.5	6.1	2250.0	安房石	87		表成山
132	埴子石	埴5	T-3	4	遺物23051	6.1	4.6	1.6	15.1	磯原石	87		
133	埴子石	埴5	X-6-a	3	遺物13051	6.8	5.2	1.8	64.9	安房石	87		
134	埴石	X	埴-6	3	遺物23051	11.2	16.2	7.0	1870.0	安房石	88		
135	埴石	X	O-6-b	4	遺物13051	11.5	9.7	4.4	900.0	安房石	88		123の右石と連続品
136	埴石	X	T-10-b	7	遺物23051	10.0	14.8	6.9	2860.0	安房石	88		123の右石と連続品
137	埴石	X	O-18-c	6	遺物23051	23.1	11.3	8.3	2310.0	安房石	88		自然出土
138	埴石	X	Z-2-a	2	遺物23051	25.2	19.3	5.0	3600.0	安房石	88		
139	埴石	X	T-12-b	15	遺物23051	21.1	23.2	12.0	14000.0	安房石	89		表成山
140	埴石	X	Z-3-a	2	V	47.5	28.5	10.7	2180.0	安房石	89		T-1-3の右石と連続品
141	埴石	X	T-16-a	4	遺物13051	22.6	26.1	8.9	7900.0	安房石	89		
142	埴石	X	O-18-c	4	遺物23051	27.4	21.9	7.6	4500.0	安房石	89		T-4-d.2.表土組合
143	埴石	X	T-6-b	1	遺物13051	25.4	22.4	10.8	10000.0	安房石	89		
144	埴石	X	T-14-a	6	遺物23051	48.2	31.8	10.9	23000.0	安房石	90		表成山
145	埴石	X	T-6-d	8	遺物43051	45.0	40.2	18.2	40000.0	安房石	90		自然出土
146	土製土(土製?)	X	T-12-a	6	遺物13051	8.6	18.0	2.3	68.4	90			表成山
147	土製土	O	T-14-d	2	遺物33051	3.8	3.6	0.8	6.5	90			表成山
148	石製土	X	T-12-d	6	遺物23051	4.5	2.4	1.2	11.1	磯原石	90		表成山

VI 自然科学的分析

1 山越3・4遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代

(独地球科学研究所)

報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C年代 “measured radiocarbon age”
 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
 半減期はリビーの5568年を用いた。

補正 14C age (y BP) : 補正 14C年代 “conventional radiocarbon age”
 試料の炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分を知り
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
 試料の ^{13}C 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
 暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。
 この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
 で表現する。

$$\delta^{13}\text{C}(\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}[\text{標準}] = 0.0112372$ である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース(“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。
 “The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993. A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon data, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄
 acid washes : 酸洗浄
 acid etch : 酸によるエッチング
 none : 未処理

調製・その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
 Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
 Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
 Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

C14年代測定結果

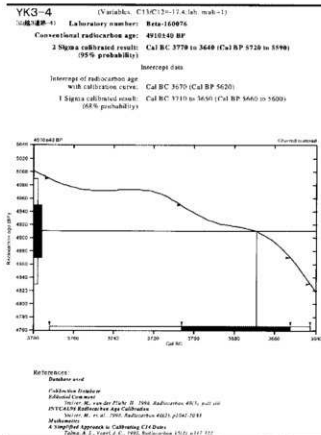
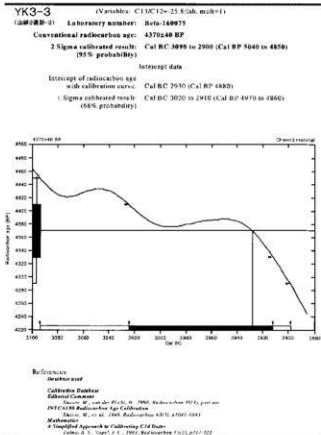
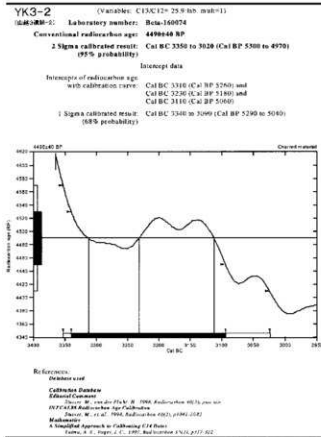
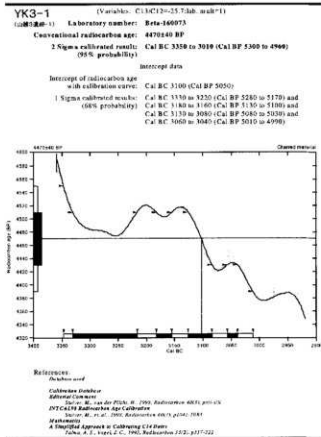
試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 160073	4480 \pm 40	-25.7	4470 \pm 40
試料名 (18565) YK3-1			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 160074	4500 \pm 40	-25.9	4490 \pm 40
試料名 (18566) YK3-2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 160075	4380 \pm 40	-25.8	4370 \pm 40
試料名 (18567) YK3-3			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 160076	4790 \pm 40	-17.4	4910 \pm 40
試料名 (18568) YK3-4			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 160077	4400 \pm 40	-25.2	4400 \pm 40
試料名 (18569) YK3-5			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta-	\pm		\pm
試料名 (18570) YK3-6			
測定方法、期間			
試料種、前処理など			

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

VI 自然科学的分析

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 160079	4370 \pm 40	-25.9	4360 \pm 40
試料名 (18571) YK4-1			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 160080	4400 \pm 40	-25.0	4400 \pm 40
試料名 (18572) YK4-2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 160081	4430 \pm 40	-26.5	4410 \pm 40
試料名 (18573) YK4-3			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 160082	4180 \pm 40	-26.9	4150 \pm 40
試料名 (18574) YK4-4			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 160083	3560 \pm 40	-27.1	3530 \pm 40
試料名 (18575) YK4-5			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

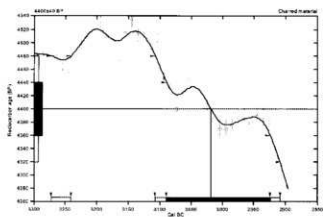
年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。



VI 自然科学的分析

YK3-5 (Variables: C13X12= 25.2 lab. mod=1)

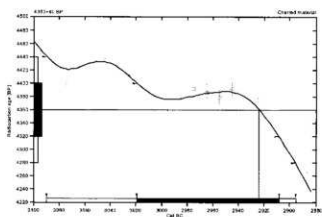
試料番号: YK3-5 Laboratory number: Beta-160977
 Conventional radiocarbon age: 4480±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3270 to 3240 (Cal BP 5220 to 5190) and
 (95% probability)
 Cal BC 3110 to 2910 (Cal BP 5040 to 4840)
 Interscept data
 Interscept of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 3020 (Cal BP 4970)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3090 to 3020 (Cal BP 5040 to 4870)
 (68% probability)



References:
 Stuiver and
 Reimer
 Radiocarbon
 Calibration Curve
 Stuiver M. van der Pligst, B. 2003. Radiocarbon 46(3), part 1
 INTCAL Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver M. et al. 1998. Radiocarbon 40(3), p1947-2033
 Watahara
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taha, A. J., Vogel, J. C., 1991. Radiocarbon 33(2), 417-322

YK4-1 (Variables: C13X12= 25.9 lab. mod=1)

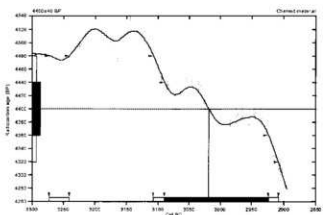
試料番号: YK4-1 Laboratory number: Beta-160979
 Conventional radiocarbon age: 4360±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3090 to 2900 (Cal BP 5040 to 4840)
 (95% probability)
 Interscept data
 Interscept of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 2970 (Cal BP 4870)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3020 to 2910 (Cal BP 4970 to 4840)
 (68% probability)



References:
 Stuiver and
 Reimer
 Radiocarbon
 Calibration Curve
 Stuiver M. van der Pligst, B. 2003. Radiocarbon 46(3), part 1
 INTCAL Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver M. et al. 1998. Radiocarbon 40(3), p1947-2033
 Watahara
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taha, A. J., Vogel, J. C., 1991. Radiocarbon 33(2), 417-322

YK4-2 (Variables: C13X12= 25 lab. mod=1)

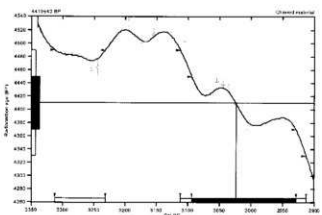
試料番号: YK4-2 Laboratory number: Beta-160980
 Conventional radiocarbon age: 4490±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3370 to 3240 (Cal BP 5220 to 5190) and
 (95% probability)
 Cal BC 3110 to 2910 (Cal BP 5040 to 4840)
 Interscept data
 Interscept of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 3020 (Cal BP 4970)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3090 to 2920 (Cal BP 5040 to 4870)
 (68% probability)



References:
 Stuiver and
 Reimer
 Radiocarbon
 Calibration Curve
 Stuiver M. van der Pligst, B. 2003. Radiocarbon 46(3), part 1
 INTCAL Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver M. et al. 1998. Radiocarbon 40(3), p1947-2033
 Watahara
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taha, A. J., Vogel, J. C., 1991. Radiocarbon 33(2), 417-322

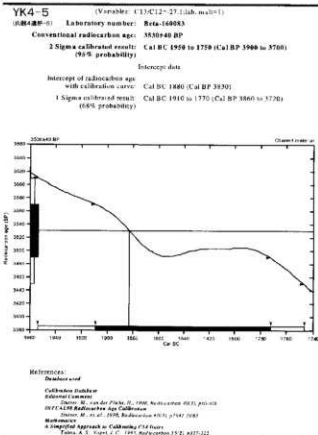
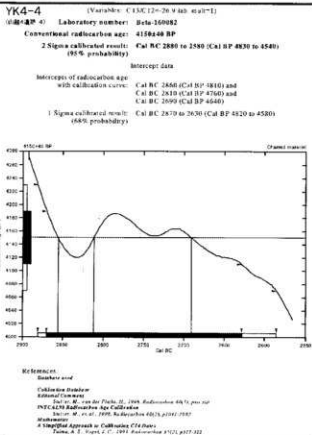
YK4-3 (Variables: C13X12= 26.5 lab. mod=1)

試料番号: YK4-3 Laboratory number: Beta-160981
 Conventional radiocarbon age: 4410±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3310 to 3250 (Cal BP 5260 to 5180) and
 (95% probability)
 Cal BC 3110 to 2910 (Cal BP 5040 to 4840)
 Interscept data
 Interscept of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 3020 (Cal BP 4970)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3060 to 2970 (Cal BP 5040 to 4860)
 (68% probability)



References:
 Stuiver and
 Reimer
 Radiocarbon
 Calibration Curve
 Stuiver M. van der Pligst, B. 2003. Radiocarbon 46(3), part 1
 INTCAL Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver M. et al. 1998. Radiocarbon 40(3), p1947-2033
 Watahara
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taha, A. J., Vogel, J. C., 1991. Radiocarbon 33(2), 417-322

1 山越3・4遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代



八雲町山越3遺跡・山越4遺跡の放射性炭素年代

遺跡	番号	放射性炭素年代	遺構名など	遺物番号	層位	遺構・遺物の時期	備考
山越3遺跡	YK3-1	4470 ± 40yBP	H-2		床面	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-13-1)に付着した炭化物
	YK3-2	4490 ± 40yBP	H-2		床面	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-13-1)に付着した炭化物
	YK3-3	4370 ± 40yBP	H-2		覆土8層下	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-13-2)に付着した炭化物
	YK3-4	4910 ± 40yBP	土器集中5	I-13-a-9	群層(風割表面)	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-29-1)に付着した炭化物
	YK3-5	4400 ± 40yBP	土器集中10	I-5-c-9	群層(風割表面)	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-31-6)に付着した炭化物
	YK3-6	測定不能	土器集中10	I-5-c-9	群層(風割表面)	縄文時代中期群葬a-3期	土器(図IV-31-6)に付着した炭化物
山越4遺跡	YK4-1	4360 ± 40yBP	H-1	77	HP-1床面	縄文時代中期群葬a-3期	付属土塊埋底面出土
	YK4-2	4400 ± 40yBP	H-1	81	HP-2覆土4層	縄文時代中期群葬a-3期	付属土塊覆土中出土
	YK4-3	4410 ± 40yBP	H-2	90b	HP-16覆土	縄文時代中期群葬a-3期	柱穴中出土
	YK4-4	4150 ± 40yBP	P-4	1	覆土9層	縄文時代中期前半	埋め土下位出土
	YK4-5	3530 ± 40yBP	C-1	2	群層	不明	包含層検出の炭化物集中

2 山越4遺跡から出土した炭化植物種子

* 吉崎昌一・** 椿坂恭代

(1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：山越4遺跡（B-16-46）

遺跡の所在：北海道山越郡八雲町山越336-1ほか

調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査担当者：遠藤香澄・藤原秀樹

調査期間：平成12年（2000年）9月1日～10月31日

遺跡の年代：縄文時代中期前半

検出遺構：竪穴住居跡4軒、土壇11基、焼土3ヶ所、黒曜石フレイク・チップ集中1ヶ所、集石1ヶ所、などが検出された。

遺跡の立地：八雲町の市街地から南東約5kmを流れる弥之助川左岸の噴火湾を望む段丘上にあり、無名沢に面した南東向きの緩斜面に位置する。標高は約32～38mである。

(2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、縄文時代中期前半のH-2、H-3、H-4竪穴住居各遺構と屋外で検出された焼土などから土壌を採取しフローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察並びに撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表VI-1に示しておいた。

(3) 検出された種子

タデ科 POLYGONACEAE (図版1)

2号竪穴住居跡（H-2）から1粒出土している。種子は三稜形で小型である。保存状態がきわめて悪いため種までの分類は出来なかった。計測値は長さ1.2mm、幅0.85mm。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版2)

種子は半横広卵形。表面は浅い凹みによる網目模様があり粗面である。フレイク・チップ集中域（FC-1）からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. が1粒検出されている。計測値は長さ3.9mm、幅2.3mm、長さ1.3mm。

クリ属 *Castanea* Mill. (図版3 a、3 b)

竪穴住居跡（H-3・4）と焼土（F-1）から8片出土している。いずれも子葉の破片である。

不明1 (図版4 a、4 b)

各遺構から堅果類の表皮と考えられる破片が少数出土している。資料の保存状態が悪いため詳細な分類は出来なかった。

不明2は資料の保存状態が悪く分類できなかったものを一括して扱った。

(4) 若干のコメント

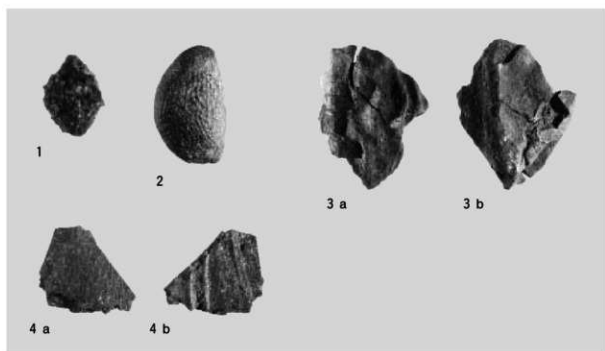
同地域の平成11年度調査結果と同様に、かなりの土壌が採取されているのだが、植物種子の検出量が少ない。したがって、種子の検出量の少なさは、第一には炭化・酸化種子の保存が難しい土壌であった可能性がある。第二には植物遺体そのものが少なかった可能性も考えられる。しかし、検出された植物遺体としてはクリが多く見られたので、この時期にはクリを積極的に採取していた可能性が考えられる。ほぼ同時期の北海道南茅部町大船遺跡や有名な青森県三内丸山遺跡でもクリの積極的な採取がみられる。利用規模の差はあれ、この遺跡においてもクリ利用の重要性がうかがいしれることに注目しておきたい。山越4遺跡周辺のクリ資源の密度などが花粉分析などによって確認されることが望ましい。

* 札幌国際大学

** 札幌国際大学 / 吉崎研究室考古植物研究会

表Ⅴ-1 山越4遺跡炭化種子出土表

資料番号	遺構名 (出土区)	層位	資料採取位置	土壌採取量 (g)	遺構の時期	土器形式	タデ科 (粒)	キハダ属 (粒)	クリ属 (片)	不明1 (片)	不明2 (片)
2	H-2	竪穴住居跡	HF-1(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式	1			2	1
3	H-2	竪穴住居跡	HF-2(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式				2	
4	H-2	竪穴住居跡	HF-2(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式				5	
5	H-2	竪穴住居跡	HF-2(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式				8	
6	H-3	竪穴住居跡	HF-1(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式			1		
7	H-3	竪穴住居跡	HF-1(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式			1		
8	H-4	竪穴住居跡	HF-1(焼土)	500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫V-VI式			1	1	
9	F-1	焼土		500	縄文時代中期				1		
10	F-1	焼土		500	縄文時代中期				4	1	
11	F-2	焼土		500	縄文時代中期						1
12	BF-1	焼土		500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式					4
13	BF-2	焼土		500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式					1
14	FC-1	フレイク・チップ集中		500	縄文時代中期中葉	サイベ沢貫式		1		9	
				6300			1	1	8	28	7



出土資料

1 タデ科、 2 キハダ属、 3 a、 b クリ属子葉 4 a、 b 不明 1

3 平成12年度山越4遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原材産地分析

薬科 哲男（京都大学原子炉実験所）

(1) はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により黒曜石およびサヌカイト製造物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、十分条件を満たす。ただ一カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では「石器とある産地の原石が一致したからと言っても、他の産地にも一致する可能性があるために、一致した産地のものと言い切れないが、しかし一致しなかった場合その産地のものではないと言い切れる」が大原則である。

考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材が一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にする産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石器原材であっても、遺跡近くの似た組成の原石産地の石材と思いきり誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを自然の法則に従って地形学で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証明がないために、A産地だと言い切れない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言い切れる。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地（A、B、C、D・・・）の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを、産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれと対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原産地と現代人が分析のために採取した原産地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従っ

て、分析した有限個の原石から産地全体の無限に近い個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT²乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある石器原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎にもとめられるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析を行なった試料は、八雲町山越4遺跡から出土した黒曜石製石器、石片の合計10個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

(2) 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊状試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図VI-1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表VI-2に示す。この原石群に原石産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると202個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2 kmにある採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2 kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は色に関係なく赤石山群(旧白滝第1群)にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った(旧白滝第2群)、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転礫は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが肌肌で区別できる。幌加沢よりの転礫の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群それぞれ分類された。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒

曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまともり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜町恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。この原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴がみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の大釈迦群（旧浪岡群）は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石中では5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。

(3) 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かず産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した山越4遺跡から出土した黒曜石製石器、剥片の分析結果を表VI-3に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表VI-3の試料番号7774番の遺物ではRb/Zrの値は0.901で、赤井川第1群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 0.969 ± 0.060 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.1σ 離れている。ところで赤井川原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.1\sigma$ のずれより大きいものが27個ある。すなわち、この遺物が、赤井川第1群の原石から作られていたと仮定しても、 1.1σ 以上離れる確率は27%であると言える。だから、赤井川第1群の平均値から 1.1σ しか離れていないときには、この遺物が赤井川第1群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤石山群に比較すると、赤石山群の平均値からの隔たりは、約 6σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 6σ 以上離れている確率は、百万分の一であると言える。このように、百万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が

作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は赤井川第1群に27%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから赤井川第1群原石が使用されいと断定され、さらに赤石山群に一万分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから赤石山原石でないと断定される」。遺物が一ヶ所の産地（赤井川産地）と一致したからと言って、例えば赤井川第1群と赤石山群の原石は成分が異なっても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中で分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（赤井川産地）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表VI-2の202個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて赤井川産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならぬ。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4,5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石裂では202個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち、赤井川産原石と判定された遺物について、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表VI-4に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラツキ範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としての0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値を記した。この遺物については、記入されたD²の値が原石群の中で最も小さなD²値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。赤井川および十勝産原石を使用した遺物の判定は複雑である。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈逾より産出する黒曜石で作られた戸門第一、鷹森山、大釈逾の各群の組成が赤井川第一、二群、十勝三股群に比較的似ているために、遺物の産地を同定したときに、戸門原産地と赤井川または十勝産地、またこれら3ヶ所の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群(50%)と第2群(50%)の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。今回分析した遺物のなかに全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないことから戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈逾産原石は非常に小さく、分析した遺物よりも小さい原石であり、本遺跡で使用された可能性は低いと推測さ

れた。鷹森山産地の原石、赤井川産原石と十勝産原石を使用した遺物の産地分析では、これら産地に同定された遺物の帰属確率の差は十分の一〜百分の一がほとんどで、遺物の中には、赤井川、十勝、鷹森山の各群の帰属確率の差がほとんどない遺物があり原産地の特定に苦慮するが、この場合は、客観的な産地分析法により赤井川産、十勝産、鷹森山産と限定したうえで、肉眼観察により遺物と似た原石が赤井川産地、十勝産地、鷹森山産地のいずれに多かを考慮して原産地を判定した遺物も一部ある。また、白滝地域のあじさい滝、八号沢、白土沢、梶加沢の一部の原石は、相互に元素比組成が似ていて産地分析の結果で区別できない遺物がみられ場合があり、梨肌表面の遺物を八号沢、白土沢地区の原石、滑らかな表面の遺物をあじさい滝または梶加沢地区の原石と肉眼で判断し、判定の欄に記した。

今回分析を行なった山越4遺跡から出土した黒曜石製石器、石片の合計10個の結果中で産地が特定された遺物について、赤井川産と同定された遺物は4個(40%)、豊泉産が4個(40%)、赤石山産は2個(20%)であった。今回分析した遺物の各産地原石使用頻度は無作為で抽出したのではなく、肉眼観察で分類したため、遺跡で多く使用された原石の産地と交流、交易が活発であると推測する資料として、使用頻度から推測する交流の活発さは求められないが、同定された産地地方と交流があり産地地方の生活情報、文化情報が八雲町山越4遺跡に伝播していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。これら産地分析の結果は、他の出土遺物の様式学と組み合わせ、総合的に考古学することにより、本遺跡の性格を考察する上に貴重な資料を与えることができると思われる。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8: 61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10, 11: 53-81: 33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社

表VI-3 山越4遺跡出土黒曜石製石器、石片の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比										
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
77744	0.261	0.072	0.081	2.100	0.901	0.386	0.255	0.058	0.033	0.358	
77745	0.262	0.073	0.105	2.273	1.038	0.457	0.246	0.043	0.030	0.339	
77746	0.258	0.073	0.067	2.193	0.978	0.453	0.238	0.038	0.023	0.344	
77747	0.483	0.154	0.083	1.731	0.419	0.559	0.183	0.023	0.038	0.445	
77748	0.181	0.064	0.056	2.865	1.330	0.275	0.338	0.039	0.027	0.334	
77749	0.191	0.063	0.080	2.930	1.347	0.297	0.343	0.046	0.025	0.322	
77750	0.259	0.072	0.132	2.620	1.055	0.453	0.227	0.080	0.029	0.367	
77751	0.512	0.153	0.045	1.882	0.436	0.593	0.182	0.022	0.036	0.467	
77752	0.463	0.144	0.065	1.895	0.468	0.638	0.174	0.015	0.034	0.437	
77753	0.498	0.162	0.071	1.675	0.442	0.602	0.169	0.022	0.034	0.444	
JG-1	0.776	0.215	0.097	4.266	1.023	1.356	0.346	0.088	0.033	0.316	

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表V-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差地

原産地	分析標本	元 素 比											
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K			
北 海 道	名寄第一	114	0.079 ± 0.011	0.21 ± 0.005	0.025 ± 0.007	2.01 ± 0.063	0.614 ± 0.032	0.571 ± 0.022	0.129 ± 0.017	0.024 ± 0.016	0.023 ± 0.002	0.41 ± 0.010	
	35	0.209 ± 0.015	0.103 ± 0.005	0.021 ± 0.006	1.774 ± 0.055	0.686 ± 0.044	0.265 ± 0.011	0.301 ± 0.022	0.028 ± 0.020	0.028 ± 0.017	0.284 ± 0.010		
	赤石川	130	0.173 ± 0.014	0.061 ± 0.003	0.079 ± 0.013	2.714 ± 0.142	1.349 ± 0.059	0.220 ± 0.019	0.341 ± 0.029	0.043 ± 0.020	0.028 ± 0.012	0.274 ± 0.010	
		27	0.138 ± 0.004	0.021 ± 0.002	0.102 ± 0.015	3.049 ± 0.181	1.851 ± 0.098	0.097 ± 0.016	0.485 ± 0.029	0.197 ± 0.019	0.027 ± 0.010	0.208 ± 0.006	
	白土石	27	0.138 ± 0.004	0.022 ± 0.002	0.102 ± 0.015	3.121 ± 0.127	1.848 ± 0.093	0.101 ± 0.015	0.438 ± 0.021	0.197 ± 0.019	0.027 ± 0.010	0.208 ± 0.006	
		33	0.139 ± 0.009	0.025 ± 0.001	0.099 ± 0.015	2.975 ± 0.162	1.797 ± 0.077	0.104 ± 0.017	0.410 ± 0.027	0.193 ± 0.027	0.027 ± 0.010	0.209 ± 0.007	
	木古川	25	0.108 ± 0.016	0.059 ± 0.005	0.079 ± 0.011	2.739 ± 0.099	0.865 ± 0.062	0.088 ± 0.012	0.397 ± 0.028	0.027 ± 0.016	0.027 ± 0.010	0.271 ± 0.010	
		29	0.142 ± 0.010	0.023 ± 0.005	0.101 ± 0.014	3.078 ± 0.125	1.787 ± 0.078	0.115 ± 0.015	0.437 ± 0.023	0.198 ± 0.014	0.027 ± 0.010	0.205 ± 0.011	
	北海道	近支川第一	30	0.019 ± 0.013	0.165 ± 0.006	0.081 ± 0.010	3.286 ± 0.117	0.684 ± 0.031	0.941 ± 0.032	0.166 ± 0.020	0.029 ± 0.016	0.029 ± 0.012	0.427 ± 0.008
		第二	107	0.017 ± 0.011	0.099 ± 0.005	0.067 ± 0.009	2.773 ± 0.097	0.812 ± 0.057	0.618 ± 0.034	0.197 ± 0.024	0.041 ± 0.019	0.033 ± 0.012	0.442 ± 0.010
		第三	117	0.014 ± 0.012	0.088 ± 0.005	0.066 ± 0.014	2.765 ± 0.125	0.814 ± 0.098	0.053 ± 0.042	0.199 ± 0.039	0.029 ± 0.008	0.034 ± 0.012	0.443 ± 0.011
		枕川	51	0.209 ± 0.017	0.122 ± 0.006	0.078 ± 0.011	1.614 ± 0.096	0.995 ± 0.057	0.438 ± 0.023	0.220 ± 0.024	0.023 ± 0.011	0.022 ± 0.016	0.274 ± 0.013
		第二	25	0.108 ± 0.016	0.059 ± 0.005	0.079 ± 0.011	2.739 ± 0.099	0.865 ± 0.062	0.088 ± 0.012	0.397 ± 0.028	0.027 ± 0.016	0.027 ± 0.010	0.271 ± 0.010
		第三	31	0.253 ± 0.018	0.122 ± 0.006	0.077 ± 0.009	1.613 ± 0.090	1.017 ± 0.045	0.439 ± 0.025	0.223 ± 0.025	0.029 ± 0.016	0.033 ± 0.013	0.270 ± 0.013
		第四	15	0.110 ± 0.015	0.088 ± 0.005	0.068 ± 0.009	2.740 ± 0.072	0.812 ± 0.019	0.812 ± 0.019	0.129 ± 0.028	0.022 ± 0.023	0.039 ± 0.014	0.283 ± 0.011
		野村・野川	60	0.228 ± 0.008	0.128 ± 0.005	0.045 ± 0.008	1.813 ± 0.082	0.814 ± 0.034	0.654 ± 0.020	0.179 ± 0.023	0.044 ± 0.020	0.030 ± 0.012	0.412 ± 0.010
		野村・野川	18	0.064 ± 0.016	0.138 ± 0.005	0.049 ± 0.008	1.728 ± 0.072	0.449 ± 0.024	0.847 ± 0.023	0.133 ± 0.019	0.026 ± 0.014	0.032 ± 0.013	0.456 ± 0.010
		ナシツツマツボ	68	0.075 ± 0.016	0.119 ± 0.011	0.051 ± 0.011	2.555 ± 0.096	0.538 ± 0.028	0.677 ± 0.047	0.167 ± 0.027	0.037 ± 0.020	0.030 ± 0.010	0.287 ± 0.013
	小 樽 市	第一	69	0.256 ± 0.018	0.141 ± 0.003	0.068 ± 0.010	2.281 ± 0.097	1.087 ± 0.055	0.424 ± 0.023	0.234 ± 0.020	0.034 ± 0.015	0.029 ± 0.012	0.296 ± 0.013
		第二	41	0.099 ± 0.020	0.124 ± 0.007	0.052 ± 0.010	2.635 ± 0.181	0.832 ± 0.061	0.737 ± 0.044	0.159 ± 0.029	0.039 ± 0.023	0.033 ± 0.012	0.442 ± 0.015
第三		28	0.095 ± 0.026	0.144 ± 0.012	0.056 ± 0.010	3.028 ± 0.251	0.782 ± 0.040	0.734 ± 0.051	0.197 ± 0.028	0.038 ± 0.022	0.034 ± 0.012	0.449 ± 0.009	
第四		10	0.254 ± 0.029	0.029 ± 0.004	0.086 ± 0.010	2.213 ± 0.104	0.969 ± 0.090	0.428 ± 0.021	0.249 ± 0.024	0.058 ± 0.023	0.027 ± 0.012	0.271 ± 0.010	
青 島 市	第一	30	0.258 ± 0.005	0.172 ± 0.002	0.080 ± 0.010	2.807 ± 0.083	0.970 ± 0.045	0.438 ± 0.026	0.245 ± 0.021	0.021 ± 0.029	0.023 ± 0.017	0.271 ± 0.010	
	第二	75	0.473 ± 0.019	0.148 ± 0.007	0.069 ± 0.015	1.794 ± 0.072	0.438 ± 0.057	0.687 ± 0.028	0.137 ± 0.020	0.023 ± 0.015	0.022 ± 0.010	0.499 ± 0.013	
	第三	49	0.277 ± 0.009	0.132 ± 0.006	0.015 ± 0.008	1.223 ± 0.066	0.535 ± 0.019	0.512 ± 0.010	0.177 ± 0.019	0.029 ± 0.015	0.029 ± 0.012	0.282 ± 0.010	
	第四	18	0.285 ± 0.028	0.087 ± 0.005	0.103 ± 0.012	1.834 ± 0.182	2.043 ± 0.224	1.473 ± 0.207	0.209 ± 0.096	0.065 ± 0.011	0.031 ± 0.014	0.347 ± 0.011	
	第五	35	0.190 ± 0.015	0.075 ± 0.003	0.040 ± 0.008	1.575 ± 0.066	1.241 ± 0.046	0.314 ± 0.014	0.111 ± 0.012	0.076 ± 0.021	0.021 ± 0.012	0.348 ± 0.010	
	第六	27	0.346 ± 0.022	0.132 ± 0.007	0.231 ± 0.019	2.268 ± 0.085	0.865 ± 0.044	1.106 ± 0.056	0.309 ± 0.028	0.179 ± 0.011	0.028 ± 0.013	0.499 ± 0.013	
	第七	36	0.080 ± 0.008	0.097 ± 0.011	0.013 ± 0.002	0.697 ± 0.021	0.128 ± 0.006	0.092 ± 0.002	0.064 ± 0.007	0.023 ± 0.004	0.026 ± 0.012	0.279 ± 0.010	
	第八	41	0.077 ± 0.005	0.088 ± 0.003	0.013 ± 0.002	0.291 ± 0.018	0.124 ± 0.005	0.020 ± 0.002	0.019 ± 0.005	0.034 ± 0.006	0.027 ± 0.015	0.274 ± 0.009	
	第九	28	0.297 ± 0.011	0.099 ± 0.003	0.068 ± 0.012	2.338 ± 0.225	1.098 ± 0.082	0.521 ± 0.094	0.277 ± 0.062	0.028 ± 0.023	0.028 ± 0.012	0.282 ± 0.013	
	第十	28	0.084 ± 0.006	0.194 ± 0.004	0.053 ± 0.002	0.691 ± 0.021	0.122 ± 0.006	0.002 ± 0.002	0.040 ± 0.010	0.025 ± 0.005	0.025 ± 0.012	0.269 ± 0.017	
青 島 市	第一	33	0.344 ± 0.017	0.132 ± 0.007	0.232 ± 0.023	2.281 ± 0.143	0.861 ± 0.052	1.081 ± 0.060	0.300 ± 0.017	0.186 ± 0.027	0.027 ± 0.012	0.496 ± 0.018	
	第二	47	0.252 ± 0.017	0.068 ± 0.009	0.079 ± 0.033	2.548 ± 0.131	1.149 ± 0.099	0.568 ± 0.138	0.288 ± 0.037	0.040 ± 0.008	0.028 ± 0.015	0.283 ± 0.010	
	第三	36	0.673 ± 0.019	2.703 ± 0.149	3.267 ± 0.217	21.648 ± 1.300	0.090 ± 0.021	1.798 ± 0.102	0.135 ± 0.015	0.169 ± 0.011	0.023 ± 0.012	0.568 ± 0.098	
	第四	67	0.253 ± 0.016	0.078 ± 0.008	0.077 ± 0.029	2.539 ± 0.148	1.147 ± 0.096	0.538 ± 0.097	0.288 ± 0.035	0.067 ± 0.040	0.029 ± 0.013	0.285 ± 0.013	
	第五	41	0.895 ± 0.243	0.284 ± 0.015	0.311 ± 0.088	7.070 ± 0.256	0.096 ± 0.014	1.621 ± 0.093	0.244 ± 0.042	0.027 ± 0.015	0.124 ± 0.014	1.049 ± 0.044	
	第六	45	0.290 ± 0.009	0.087 ± 0.004	0.029 ± 0.017	1.671 ± 0.077	1.503 ± 0.072	0.839 ± 0.054	0.286 ± 0.025	0.108 ± 0.014	0.028 ± 0.016	0.287 ± 0.010	
	第七	45	0.290 ± 0.009	0.087 ± 0.004	0.029 ± 0.017	1.671 ± 0.077	1.503 ± 0.072	0.839 ± 0.054	0.286 ± 0.025	0.108 ± 0.014	0.028 ± 0.016	0.287 ± 0.010	
	第八	41	0.285 ± 0.021	0.123 ± 0.007	0.182 ± 0.016	1.906 ± 0.096	0.966 ± 0.099	1.022 ± 0.071	0.276 ± 0.030	0.119 ± 0.033	0.023 ± 0.012	0.443 ± 0.014	
	第九	48	0.285 ± 0.008	0.116 ± 0.005	0.049 ± 0.017	1.806 ± 0.054	0.580 ± 0.025	0.441 ± 0.023	0.212 ± 0.020	0.066 ± 0.015	0.023 ± 0.013	0.460 ± 0.010	
	青 島 市	第一	25	0.038 ± 0.003	0.187 ± 0.012	0.032 ± 0.007	1.784 ± 0.081	0.330 ± 0.016	0.413 ± 0.021	0.209 ± 0.018	0.043 ± 0.014	0.041 ± 0.013	0.294 ± 0.014
第二		22	0.615 ± 0.055	0.180 ± 0.016	0.038 ± 0.007	1.751 ± 0.082	0.330 ± 0.023	0.411 ± 0.021	0.209 ± 0.018	0.043 ± 0.014	0.041 ± 0.013	0.294 ± 0.014	
第三		20	0.296 ± 0.046	0.177 ± 0.018	0.056 ± 0.008	1.723 ± 0.072	0.231 ± 0.019	0.420 ± 0.025	0.229 ± 0.016	0.044 ± 0.013	0.029 ± 0.014	0.286 ± 0.010	
第四		21	2.174 ± 0.068	0.349 ± 0.017	0.057 ± 0.009	2.544 ± 0.149	0.118 ± 0.019	0.616 ± 0.021	0.138 ± 0.015	0.029 ± 0.013	0.023 ± 0.013	0.566 ± 0.040	
第五		37	4.828 ± 0.295	1.430 ± 0.194	0.178 ± 0.017	11.382 ± 1.130	0.168 ± 0.018	1.288 ± 0.063	0.153 ± 0.015	0.027 ± 0.014	0.027 ± 0.012	0.729 ± 0.022	
第六		40	0.728 ± 0.067	0.290 ± 0.010	0.044 ± 0.007	2.016 ± 0.119	0.381 ± 0.025	0.402 ± 0.028	0.190 ± 0.017	0.023 ± 0.014	0.026 ± 0.012	0.516 ± 0.012	
第七		36	0.381 ± 0.014	0.136 ± 0.005	0.102 ± 0.011	1.729 ± 0.079	0.471 ± 0.027	0.699 ± 0.027	0.247 ± 0.021	0.099 ± 0.028	0.036 ± 0.013	0.304 ± 0.012	
第八		23	0.317 ± 0.016	0.120 ± 0.008	0.114 ± 0.014	1.833 ± 0.089	0.645 ± 0.039	0.696 ± 0.030	0.303 ± 0.034	0.107 ± 0.026	0.023 ± 0.012	0.471 ± 0.009	
第九		49	0.318 ± 0.020	0.120 ± 0.005	0.118 ± 0.014	1.805 ± 0.099	0.641 ± 0.039	0.664 ± 0.045	0.293 ± 0.039	0.034 ± 0.016	0.026 ± 0.012	0.476 ± 0.012	
第十		39	0.285 ± 0.254	2.219 ± 0.027	0.228 ± 0.019	9.267 ± 0.811	1.493 ± 0.083	0.829 ± 0.052	0.429 ± 0.016	0.044 ± 0.013	0.029 ± 0.014	0.572 ± 0.009	
青 島 市	第一	41	2.056 ± 0.084	0.691 ± 0.019	0.076 ± 0.007	2.612 ± 0.104	0.062 ± 0.007	0.680 ± 0.029	0.232 ± 0.011	0.011 ± 0.010	0.080 ± 0.015	1.126 ± 0.011	
	第二	31	1.963 ± 0.071	0.285 ± 0.019	0.056 ± 0.007	2.139 ± 0.097	0.073 ± 0.008	0.625 ± 0.015	0.154 ± 0.010	0.011 ± 0.009	0.067 ± 0.015	0.904 ± 0.020	
	第三	31	1.209 ± 0.078	0.294 ± 0.018	0.041 ± 0.006	1.697 ± 0.098	0.067 ± 0.009	0.551 ± 0.023	0.138 ± 0.011	0.019 ± 0.009	0.087 ± 0.014	0.904 ± 0.018	
	第四	35	1.213 ± 0.164	0.314 ± 0.028	0.031 ± 0.004	1.699 ± 0.167	0.113 ± 0.007	0.391 ± 0.022	0.143 ± 0.011	0.019 ± 0.009	0.067 ± 0.014	0.963 ± 0.023	
	第五	49	0.119 ± 0.008	0.052 ± 0.004	0.297 ± 0.028	3.21 ± 0.519	0.829 ± 0.049	0.134 ± 0.020	0.547 ± 0.034	0.087 ± 0.027	0.025 ± 0.014	0.429 ± 0.016	
	青 島 市	第一	12	0.279 ± 0.013	0.050 ± 0.014	0.044 ± 0.008	1.999 ± 0.075	0.999 ± 0.027	0.641 ± 0.049	0.196 ± 0.014	0.191 ± 0.011	0.027 ± 0.012	0.271 ± 0.009
		第二	49	0.719 ± 0.017	0.332 ± 0.008	0.054 ± 0.011	1.984 ± 0.132	0.413 ± 0.028	0.640 ± 0.030	0.118 ± 0.025	0.051 ± 0.011	0.030 ± 0.013	0.309 ± 0.014
		第三	45	0.441 ± 0.032	0.108 ± 0.014	0.079 ± 0.023	2.251 ± 0.128	0.784 ± 0.135	1.222 ± 0.098	0.127 ± 0.041	0.067 ± 0.063	0.055 ± 0.014	0.412 ± 0.025
		第四	171	0.138 ± 0.009</									

VI 自然科学的分析

原 産 地 名	分析 標数	元 素 比									
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Nb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
石川県 鹿野山	17	0.070 ± 0.014	0.087 ± 0.004	0.090 ± 0.009	2.090 ± 0.187	0.626 ± 0.028	0.534 ± 0.022	0.172 ± 0.020	0.052 ± 0.018	0.021 ± 0.002	0.096 ± 0.017
	18	0.097 ± 0.017	0.123 ± 0.008	0.098 ± 0.006	1.629 ± 0.161	0.643 ± 0.031	0.603 ± 0.019	0.163 ± 0.023	0.061 ± 0.014	0.028 ± 0.002	0.091 ± 0.011
	21	0.030 ± 0.018	0.123 ± 0.008	0.098 ± 0.006	1.261 ± 0.081	0.608 ± 0.021	0.798 ± 0.039	0.080 ± 0.020	0.062 ± 0.013	0.028 ± 0.002	0.281 ± 0.008
兵庫県 香取群 * 第一層	30	0.016 ± 0.005	0.062 ± 0.002	0.045 ± 0.007	1.828 ± 0.056	0.883 ± 0.034	0.260 ± 0.012	0.037 ± 0.012	0.139 ± 0.014	0.041 ± 0.007	0.065 ± 0.005
	40	0.028 ± 0.012	0.090 ± 0.004	0.068 ± 0.009	1.784 ± 0.096	0.813 ± 0.045	0.302 ± 0.012	0.012 ± 0.018	0.134 ± 0.014	0.026 ± 0.012	0.446 ± 0.012
鳥取県 加茂群 * 第一層	30	0.166 ± 0.006	0.093 ± 0.008	0.014 ± 0.003	0.899 ± 0.021	0.278 ± 0.017	0.009 ± 0.003	0.061 ± 0.015	0.134 ± 0.016	0.030 ± 0.001	0.249 ± 0.016
	30	0.161 ± 0.009	0.132 ± 0.012	0.015 ± 0.003	0.940 ± 0.041	0.361 ± 0.014	0.015 ± 0.005	0.144 ± 0.008	0.029 ± 0.003	0.024 ± 0.009	
	21	0.145 ± 0.006	0.091 ± 0.003	0.021 ± 0.004	0.090 ± 0.001	0.286 ± 0.011	0.007 ± 0.003	0.037 ± 0.011	0.239 ± 0.011	0.027 ± 0.012	0.215 ± 0.006
	30	0.092 ± 0.017	0.141 ± 0.010	0.012 ± 0.008	3.128 ± 0.171	0.698 ± 0.045	1.200 ± 0.062	0.029 ± 0.028	0.061 ± 0.019	0.041 ± 0.004	0.011 ± 0.011
	50	1.085 ± 0.126	0.194 ± 0.018	0.015 ± 0.007	2.880 ± 0.180	0.423 ± 0.018	1.044 ± 0.104	0.038 ± 0.019	0.042 ± 0.012	0.063 ± 0.004	0.047 ± 0.013
徳島県 神山 * 第一層	30	1.028 ± 0.081	0.144 ± 0.011	0.035 ± 0.022	3.138 ± 0.163	0.669 ± 0.078	1.333 ± 0.061	0.023 ± 0.027	0.061 ± 0.020	0.061 ± 0.003	0.004 ± 0.012
	51	1.186 ± 0.067	0.143 ± 0.008	0.038 ± 0.012	3.202 ± 0.163	0.707 ± 0.061	1.386 ± 0.098	0.029 ± 0.025	0.073 ± 0.021	0.061 ± 0.005	0.000 ± 0.014
	26	1.087 ± 0.129	0.203 ± 0.023	0.042 ± 0.009	3.125 ± 0.179	0.684 ± 0.080	1.090 ± 0.073	0.038 ± 0.023	0.047 ± 0.013	0.041 ± 0.003	0.487 ± 0.016
	34	1.018 ± 0.043	0.136 ± 0.012	0.043 ± 0.014	3.205 ± 0.199	0.695 ± 0.068	1.296 ± 0.090	0.029 ± 0.009	0.072 ± 0.018	0.099 ± 0.004	0.716 ± 0.012
	68	0.281 ± 0.019	0.211 ± 0.007	0.033 ± 0.003	0.708 ± 0.027	0.529 ± 0.013	0.282 ± 0.017	0.071 ± 0.009	0.034 ± 0.008	0.024 ± 0.006	0.279 ± 0.009
福岡県 守善群 * 第一層	30	0.263 ± 0.047	0.082 ± 0.002	0.027 ± 0.005	1.619 ± 0.083	0.628 ± 0.028	0.348 ± 0.015	0.103 ± 0.014	0.075 ± 0.018	0.023 ± 0.017	0.211 ± 0.011
	40	0.345 ± 0.007	0.104 ± 0.003	0.027 ± 0.005	1.535 ± 0.039	0.453 ± 0.017	0.307 ± 0.014	0.040 ± 0.016	0.059 ± 0.014	0.028 ± 0.008	0.328 ± 0.008
	30	0.007 ± 0.014	0.302 ± 0.006	0.071 ± 0.013	4.239 ± 0.206	1.046 ± 0.065	1.269 ± 0.058	0.106 ± 0.012	0.280 ± 0.017	0.028 ± 0.015	0.345 ± 0.009
	44	0.211 ± 0.009	0.011 ± 0.005	0.075 ± 0.019	2.527 ± 0.212	1.690 ± 0.096	0.141 ± 0.042	0.311 ± 0.068	0.256 ± 0.063	0.023 ± 0.032	0.333 ± 0.009
	30	0.144 ± 0.009	0.071 ± 0.003	0.031 ± 0.017	2.847 ± 0.142	1.253 ± 0.081	2.015 ± 0.099	0.147 ± 0.035	0.255 ± 0.060	0.039 ± 0.007	0.398 ± 0.009
	40	0.009 ± 0.087	0.133 ± 0.029	0.125 ± 0.018	4.662 ± 0.309	1.179 ± 0.114	2.023 ± 0.122	0.171 ± 0.035	0.205 ± 0.037	0.029 ± 0.030	0.276 ± 0.008
	40	0.052 ± 0.027	0.017 ± 0.010	0.128 ± 0.013	4.666 ± 0.322	0.850 ± 0.073	1.967 ± 0.119	0.147 ± 0.029	0.194 ± 0.028	0.033 ± 0.008	0.283 ± 0.010
	30	0.016 ± 0.017	0.045 ± 0.003	0.028 ± 0.017	4.697 ± 0.068	1.829 ± 0.229	1.522 ± 0.180	0.325 ± 0.086	0.022 ± 0.009	0.015 ± 0.012	0.418 ± 0.011
	30	0.221 ± 0.021	0.045 ± 0.003	0.040 ± 0.061	7.248 ± 0.061	1.917 ± 0.194	1.690 ± 0.173	0.326 ± 0.057	0.669 ± 0.105	0.015 ± 0.012	0.119 ± 0.011
	10	1.013 ± 0.149	0.211 ± 0.028	0.128 ± 0.016	3.491 ± 0.231	0.306 ± 0.067	4.082 ± 0.174	0.109 ± 0.021	0.137 ± 0.028	0.009 ± 0.004	0.411 ± 0.017
福岡県 * 第二層	29	1.074 ± 0.139	0.224 ± 0.024	0.122 ± 0.022	3.660 ± 0.201	0.296 ± 0.068	4.010 ± 0.197	0.103 ± 0.022	0.133 ± 0.023	0.009 ± 0.003	0.669 ± 0.014
	25	0.053 ± 0.086	0.141 ± 0.016	0.149 ± 0.039	4.298 ± 0.425	0.695 ± 0.086	3.274 ± 0.204	0.151 ± 0.025	0.243 ± 0.059	0.037 ± 0.012	0.448 ± 0.015
	30	0.113 ± 0.023	0.127 ± 0.009	0.065 ± 0.010	1.689 ± 0.124	0.669 ± 0.051	0.688 ± 0.082	0.175 ± 0.018	0.102 ± 0.028	0.042 ± 0.011	0.049 ± 0.009
	30	1.015 ± 0.102	0.230 ± 0.013	0.096 ± 0.008	5.069 ± 0.289	0.284 ± 0.051	3.528 ± 0.103	0.087 ± 0.016	0.022 ± 0.018	0.022 ± 0.016	0.310 ± 0.011
	64	0.082 ± 0.036	0.286 ± 0.015	0.051 ± 0.008	1.361 ± 0.095	0.313 ± 0.052	0.609 ± 0.038	0.056 ± 0.021	0.022 ± 0.010	0.288 ± 0.016	
福岡県 九井ノ辻 * 第一層	37	0.172 ± 0.009	0.066 ± 0.002	0.039 ± 0.005	1.176 ± 0.043	0.365 ± 0.012	0.011 ± 0.004	0.135 ± 0.018	0.304 ± 0.014	0.023 ± 0.012	0.276 ± 0.007
	28	0.174 ± 0.007	0.065 ± 0.002	0.033 ± 0.006	1.174 ± 0.045	0.369 ± 0.012	0.005 ± 0.005	0.129 ± 0.014	0.306 ± 0.012	0.023 ± 0.003	0.275 ± 0.008
	28	0.148 ± 0.009	0.038 ± 0.002	0.029 ± 0.009	1.491 ± 0.109	1.726 ± 0.085	0.005 ± 0.006	0.344 ± 0.040	0.171 ± 0.047	0.023 ± 0.012	0.238 ± 0.010
	49	0.139 ± 0.019	0.037 ± 0.002	0.016 ± 0.009	1.748 ± 0.073	1.834 ± 0.084	0.027 ± 0.013	0.328 ± 0.046	0.174 ± 0.040	0.021 ± 0.009	0.239 ± 0.013
	23	0.215 ± 0.018	0.022 ± 0.008	0.072 ± 0.016	2.554 ± 0.181	1.538 ± 0.126	0.020 ± 0.028	0.271 ± 0.086	0.254 ± 0.046	0.023 ± 0.032	0.343 ± 0.006
	17	0.183 ± 0.011	0.011 ± 0.005	0.071 ± 0.014	2.288 ± 0.319	1.323 ± 0.193	0.309 ± 0.083	0.244 ± 0.054	0.204 ± 0.049	0.014 ± 0.012	0.307 ± 0.010
	16	0.249 ± 0.023	0.082 ± 0.006	0.051 ± 0.016	1.896 ± 0.231	0.856 ± 0.112	0.465 ± 0.038	0.168 ± 0.041	0.025 ± 0.012	0.023 ± 0.014	0.333 ± 0.014
	22	0.284 ± 0.022	0.068 ± 0.008	0.045 ± 0.012	1.890 ± 0.157	0.774 ± 0.179	0.544 ± 0.036	0.239 ± 0.064	0.132 ± 0.036	0.026 ± 0.032	0.343 ± 0.010
	44	0.334 ± 0.014	0.089 ± 0.004	0.044 ± 0.009	1.744 ± 0.089	0.533 ± 0.030	0.680 ± 0.039	0.094 ± 0.022	0.119 ± 0.017	0.027 ± 0.012	0.203 ± 0.011
	25	0.243 ± 0.019	0.059 ± 0.007	0.027 ± 0.015	1.601 ± 0.104	0.811 ± 0.089	0.208 ± 0.028	0.325 ± 0.025	0.147 ± 0.023	0.028 ± 0.012	0.245 ± 0.010
長崎県 * 第二層	17	0.322 ± 0.034	0.081 ± 0.015	0.045 ± 0.011	1.288 ± 0.108	0.654 ± 0.080	0.485 ± 0.042	0.118 ± 0.025	0.089 ± 0.016	0.028 ± 0.012	0.238 ± 0.013
	38	0.199 ± 0.011	0.020 ± 0.004	0.083 ± 0.018	2.649 ± 0.195	1.714 ± 0.185	0.421 ± 0.060	0.306 ± 0.054	0.285 ± 0.044	0.014 ± 0.012	0.333 ± 0.010
	19	0.413 ± 0.013	0.076 ± 0.005	0.094 ± 0.022	2.866 ± 0.173	1.204 ± 0.051	1.854 ± 0.106	0.144 ± 0.017	0.247 ± 0.033	0.028 ± 0.012	0.307 ± 0.008
	19	0.266 ± 0.035	0.065 ± 0.010	0.051 ± 0.009	1.847 ± 0.146	0.788 ± 0.108	0.619 ± 0.048	0.127 ± 0.040	0.137 ± 0.040	0.025 ± 0.012	0.328 ± 0.010
	44	0.194 ± 0.009	0.054 ± 0.005	0.040 ± 0.008	1.686 ± 0.114	0.833 ± 0.058	0.251 ± 0.025	0.192 ± 0.022	0.124 ± 0.039	0.028 ± 0.011	0.313 ± 0.017
熊本県 大畑 * 第一層	74	0.176 ± 0.012	0.033 ± 0.002	0.041 ± 0.012	1.719 ± 0.081	0.912 ± 0.038	0.114 ± 0.012	0.392 ± 0.020	0.133 ± 0.024	0.023 ± 0.012	0.319 ± 0.010
	49	0.139 ± 0.019	0.037 ± 0.002	0.016 ± 0.009	1.748 ± 0.073	1.834 ± 0.084	0.027 ± 0.013	0.328 ± 0.046	0.174 ± 0.040	0.021 ± 0.009	0.239 ± 0.013
	30	0.261 ± 0.018	0.214 ± 0.007	0.034 ± 0.003	0.288 ± 0.033	0.328 ± 0.012	0.279 ± 0.013	0.099 ± 0.012	0.011 ± 0.009	0.011 ± 0.012	0.243 ± 0.008
	44	0.258 ± 0.018	0.214 ± 0.006	0.033 ± 0.005	0.794 ± 0.078	0.329 ± 0.017	0.275 ± 0.010	0.066 ± 0.011	0.023 ± 0.009	0.020 ± 0.013	0.243 ± 0.008
	13	1.034 ± 0.139	0.665 ± 0.035	0.075 ± 0.008	4.494 ± 0.480	0.247 ± 0.014	1.236 ± 0.092	0.080 ± 0.018	0.041 ± 0.012	0.030 ± 0.003	0.292 ± 0.010
熊本県 冠ヶ峰 * 第一層	21	0.281 ± 0.012	0.211 ± 0.008	0.032 ± 0.003	0.780 ± 0.038	0.324 ± 0.011	0.279 ± 0.017	0.084 ± 0.011	0.037 ± 0.006	0.025 ± 0.012	0.277 ± 0.009
	57	1.099 ± 0.037	0.722 ± 0.036	0.085 ± 0.011	6.295 ± 0.265	0.258 ± 0.018	1.154 ± 0.055	0.101 ± 0.014	0.047 ± 0.013	0.027 ± 0.004	0.247 ± 0.016
	84	0.176 ± 0.082	0.279 ± 0.009	0.015 ± 0.005	1.289 ± 0.013	0.279 ± 0.018	0.611 ± 0.046	0.046 ± 0.012	0.029 ± 0.014	0.021 ± 0.009	0.396 ± 0.013
	31	1.068 ± 0.165	0.084 ± 0.036	0.040 ± 0.010	4.877 ± 0.267	0.252 ± 0.015	1.235 ± 0.104	0.098 ± 0.016	0.040 ± 0.009	0.011 ± 0.003	0.286 ± 0.012
	18	1.471 ± 0.136	0.082 ± 0.041	0.078 ± 0.011	4.838 ± 0.634	0.252 ± 0.016	1.288 ± 0.124	0.101 ± 0.014	0.043 ± 0.013	0.027 ± 0.003	0.385 ± 0.013
熊本県 小国 * 第二層	49	1.508 ± 0.146	0.051 ± 0.030	0.075 ± 0.011	4.571 ± 0.572	0.257 ± 0.016	1.252 ± 0.112	0.095 ± 0.016	0.040 ± 0.009	0.020 ± 0.004	0.291 ± 0.010
	78	0.208 ± 0.021	0.101 ± 0.009	0.034 ± 0.006	1.262 ± 0.086	1.051 ± 0.039	0.313 ± 0.037	0.342 ± 0.027	0.027 ± 0.022	0.022 ± 0.013	0.317 ± 0.009
	47	0.207 ± 0.015	0.094 ± 0.006	0.070 ± 0.009	1.521 ± 0.075	1.090 ± 0.048	0.410 ± 0.020	0.296 ± 0.034	0.063 ± 0.014	0.039 ± 0.003	0.314 ± 0.011
	33	0.261 ± 0.015	0.094 ± 0.006	0.066 ± 0.010	1.743 ± 0.095	1.242 ± 0.040	0.710 ± 0.029	0.260 ± 0.020	0.047 ± 0.036	0.022 ± 0.012	0.323 ± 0.010
	30	0.238 ± 0.118	0.081 ± 0.175	0.018 ± 0.002	0.659 ± 0.082	0.909 ± 0.084	0.135 ± 0.009	0.029 ± 0.012	0.029 ± 0.012	0.015 ± 0.016	0.448 ± 0.012
熊本県 隈部中野群 * 第一層	45	0.186 ± 0.010	0.083 ± 0.005	0.047 ± 0.008	1.611 ± 0.079	0.968 ± 0.055	0.330 ± 0.022	0.283 ± 0.011	0.041 ± 0.012	0.022 ± 0.008	0.328 ± 0.014
	45	0.247 ± 0.018	0.106 ± 0.00								

表VI-4 山越の遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原産地推定結果

分析 番号	資料 番号	遺構・ 発掘区	遺物 番号	層位	原産地(確率)	判定	器種	備考
77744	1	P-5	2	層上2層	赤井川第1群(81%)、赤井川第2群(65%)	赤井川	石 鏃	P-5揚載石器、基部欠損
77745	2	P-11-c	1	Ⅲ層3回目	赤井川第1群(57%)、赤井川第2群(53%)、大釈迦(1%)	赤井川	石 鏃	包含層揚載石器№1
77746	3	T-11-b	2	Ⅲ層3回目	赤井川第2群(97%)、赤井川第1群(20%)、大釈迦(7%)	赤井川	石 鏃	包含層揚載石器№7
77747	4	FC-1	2	Ⅲ層3回目	豊泉第1群(32%)	豊 泉	フレイク	58点中1点抽出
77748	5	V-2	2	Ⅲ層4回目	赤石山(32%)	赤石山	フレイク	2点中大きい方の1点
77749	6	V-2	2	Ⅲ層4回目	赤石山(51%)	赤石山	フレイク	2点中小さい方の1点
77750	7	F-11-b	2	Ⅲ層3回目	赤井川第1群(0.2%)	赤井川	フレイク	
77751	8	U-6-d	9	Ⅳ層2回目	豊泉第1群(10%)	豊 泉	フレイク	2点中1点抽出
77752	9	V-6-a	2	Ⅲ層1回目	豊泉第1群(86%)	豊 泉	フレイク	
77753	10	W-5-c	4	Ⅲ層2回目	豊泉第1群(45%)	豊 泉	フレイク	

※ 赤石山 は遺構である。

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器球式の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われますが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには、本研究方法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には、常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があると

Ⅶ まとめ

1 山越3遺跡

平成12年度の山越3遺跡の調査では住居跡3軒、土壙18基、焼土3カ所、フレイク・チップ集中域1カ所を検出し、遺物は土器6,972点、石器等3,055点の計10,027点が出土している。ここでは検出された遺構については若干の類例を挙げ、遺物に関しては特徴をいくつか挙げて簡単に述べておきたい。

1 遺構について

(1) 住居について

検出された3軒の住居跡はいずれも全体を把握することができなかった。H-1、3は平面形が概ね円形を呈するとみられる重複する住居である。円筒上層b-サイベ沢Ⅶ式に相当するとみられ、床面は平坦ではなく段がある。柱穴は明瞭ではないが、住居の外周を巡るように付属土壌が配されている。このような構造を持つ住居の類例は今のところない。唯一類似の例として、詳細な時期は不明であるが平面形や段の構造がよく似る上ノ国町小岱遺跡H-11、12（北埋調報30 1985）を挙げておきたい。また本遺跡H-1、3は段丘斜面の落ち際にあり、地形、立地の点から人為的でない落ち込みを利用した住居の可能性も考えられる。さらに重複関係に関しても可能性はあるものの、説得力のある結論を出せなかった。今後の調査の課題としていきたい。

(2) 土壌について

検出された18基の土壌のうち、P-8は覆土が炭化物、黄褐色土ブロックが混じる埋め戻しの様相を呈し、覆土中から礫石器、礫、土器片などの遺物が出土している。こうした遺物の出土状態や、覆土の様相は本遺跡では特殊なものである。同時期の類例は函館市陣川町遺跡P-122、69（函館市教育委員会 1989）、七飯町鳴川右岸遺跡（北埋調報87 1995）の土壌B類とされたもののうち P-8が挙げられる。本遺跡では明瞭ではないが、鳴川右岸、陣川町の両遺跡では居住区から離れた狭い範囲に形状の似た土壌が集中して作られる傾向がある。

山越3遺跡の遺構の分布状況は第Ⅳ章にも述べたように、段丘の先端部と平坦部の2カ所に分かれ、それぞれ集中している。しかし2軒の住居跡がいずれも調査区南側境界付近で検出されていること、遺物も調査区境界においても出土量が多かったことから、山越3遺跡の居住域の中心は調査区より南西部の段丘平坦面、またはより北側の段丘斜面沿いにあったと思われる。

2 遺物について

石器等

出土した石器の内訳については既に第三章に述べた。ここではスクレイパーとUフレイクの区別に関して簡単に述べておきたい。

本遺跡においてスクレイパーとしたものは、概ね一枚の剥離の深さが5mm以上で、比較的連続して細部調整されるものである。Uフレイクは概ね深さが5mm以下の微細な剥離がつくものとしたが、両者の区別はつきがたいものが多い。そのためUフレイクをあらためて観察、細分し、スクレイパー類似のUフレイクについて抽出を試みた。UフレイクA（図Ⅳ-50-34、35）としたものは背面に、側縁に並行する稜線がある石刃様の縦長剥片を用いるもの、UフレイクB（図Ⅳ-50-36）としたものは同じく縦長剥片であるが、原石面が一部に残る剥片を利用するものである。さらにその他不定形な剥片を使用するものはUフレイクC（図Ⅳ-50-37）とした。スクレイパーと分類したものの中にも

A、B類と同様な剥片を使用するものが少なからずあり(図IV-47-15~29)、直接的な証拠はないが、UフレイクA・B類とした石器はスクレイパーのうち細部調整のなされていないものである可能性が指摘できる。分類区分が不完全である可能性もあるが、このことはいいかえると一定の方法で得られた剥片をフレイク→Uフレイク→(細部調整)→スクレイパーという順序で道具として長く使用していたことを示しているとみられる。また遺跡内で石器製作に関わる遺構や遺物が少ないこともこのことを裏付けているように思われるが、本遺跡ではこれ以上の分析ができるほどの資料を得ていないため、可能性の指摘のみにとどめておきたい。なおこれらの細分については一覧表中に記しておいた。

この他、特徴のあるものに軽石製の有孔石製品がある。このような形態の類例は今のところ見つからないが、軽石を素材とする同時期の石製品は、八雲町内では栄浜1遺跡から、家形石製品(八雲町教委 1998)、穿孔のある垂飾状のもの、北海道式石冠のミニチュア状のものなどが出土している(八雲町教委 1995)。本遺跡出土例に関しての類例検索、用途の解明などを充分検討するまでに到らなかったため、報告の後もし引き続き行っていきたい。(立田)

2 山越4遺跡

1 遺跡と遺構について

平成12年度の山越4遺跡の調査により、住居跡4軒、土壇1基、焼土4ヶ所、炭化物集中1ヶ所、集石1ヶ所、フレイク・チップ集中1ヶ所が検出された。遺物は土器6,503点、石器など3,774点の合計10,277点が出土した。遺構、特に住居跡の存在の有無や遺物の出土状況から、今回のA・B2つの調査区はその性格が若干異なるものと考えられる。

A地区は縄文時代中期の円筒土器上層b式からサイベ沢Ⅷ式にかけての土器が主体となり、時期不明とした遺構の多くもこの時期のものとして推測される。住居跡は掘り込みも深く、柱穴もしっかりとしたもの(H-1・2)と、掘り込みが浅く、柱穴が不明瞭なもの(H-4)とがある。前者は覆土中や周辺から多数の土器片や台石・石皿などが出土している。それに対して、後者は覆土中・周辺とも遺物が少なく、地床炉も明瞭なものではなかった。なお、石組炉を有するH-3は掘り込みなどは不明瞭であり、柱穴も判然とはしなかったが、覆土中から遺物がまぎれ出て出土した。

H-1・2はⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅷ式期の住居跡である。当該期の遺物は出土量が最も多く、A地区全域に散在するが、住居跡周辺のA地区北半部に比較的まとまる傾向がある。また、検出状況から台石を用いた作業に関連すると推測したP-1~3もH-1近くに位置することから、この時期は主に調査区北半部(海岸寄り)にしっかりとした住居を構築し、「ヤムクシナイ」の名に由来するような植物性食料の獲得などの生業を営んでいたと推測される。

一方、H-3・4はⅢ群a-1~2類、サイベ沢Ⅴ~Ⅵ式期の住居跡である。当該期の遺物はA地区の南半部に分布する傾向があるが、出土量は少ない。よって、この時期は掘り込みの浅い仮小屋の住居を構築し、比較的短期間居住していたと推測される。

B地区は縄文時代中期のサイベ沢Ⅷ式が主体となるほぼ単純遺跡と言え、遺構も全て同じ時期のものと考えられる。遺物の分布は平坦部のG-16区と無名沢に面したE・F-10~12区に大きく分かれる。両者の時期差はあまり明確ではないが、F-10~12区側のほうが貼付文・沈線文などの文様や地文、器形が多種多用であることから、G-16区周辺に途中一時的に移動したものと推測される。なお、V章6「包含層出土の石器」において既述したが、主に住居跡の有無や石器組成から、A地区と比べてB地区は相対的に非定住的で、狩猟などの一時的キャンプ地ではなかったかと考えられる。

2 遺物について

(1) 土器

出土した土器は縄文時代中期前半のものが最も多く、今回はⅢ群 a-1～3類に大きく3分した。このうち、a-1・2類はA地区のみで出土した。

Ⅲ群 a-1類：包含層出土の a・b類と細分したものおよび H-3 出土の土器が三宅氏分類による上層 b 式に相当する。同じく c・d類としたものおよび H-4 の復元土器が上層 c 式に相当する。いずれも底面近くまで地文が施文され、厚手であり、また内面調整が非常に丁寧で、胎土に砂が多く入っていることが特徴である。なお、c・d類の胎土には小石が比較的多く入っている傾向がある。

Ⅲ群 a-2類：サイベ沢Ⅵ式としたもので、地文施文後、細い貼付帯で胸骨文、菱形・木葉形のモチーフを描くものである（高橋1981）。また、口唇部が肥厚して外側に開き、その無文部（I文様帯）に波状に粘土紐が貼り付けられたものも本類とした（A地区Ⅲ群 a-2類・c類）。これらは三宅氏の上層 d 式に相当する。地文の縄文のみが施文され、貼付帯がないものでも胎土や焼成が類似するものは a-2類とした。しかし、サイベ沢Ⅵ a 式の特徴である2種2対の突起を持つものもある。口唇部に粘土紐を貼り付けたもの=c類を除いて本類は円筒土器上層式を a 式・b 式・サイベ沢Ⅵ式と3分するなかで（大沼1993）、最近ではサイベ沢Ⅵ a 式とされることもある。

Ⅲ群 a-3類：サイベ沢Ⅶ式・見晴町式土器としたもので、最も多く出土した。特にB地区は当該期の遺跡である。薄手で小型の土器が多く、内面の調整は a-1・2類と比べるとやや雑である。文様は沈線文や地文の縄文のみのものが主体となり、貼付帯があるものでも突起部およびその周辺に限られる。底部は底面近くが外側に張り出すものと張り出さないものがあるが、いずれも磨かれており無文である。また、胎土には海綿骨針が入っているものが多い。

以上のようにA地区ではⅢ群 a類土器を1～3類に細分した。a-1類はH-3・4周辺のO～Rラインにかけて、a-2類はH-4周辺のQ～SラインとU～Wラインの大きく2ヶ所に、a-3類はH-1・2周辺のU～Zラインに分布する傾向があるが、重複して混在する部分も多い。

両館市石川1遺跡の調査者はおおまかな変遷の傾向は認めつつも、高橋の設定したサイベ沢Ⅵ式～見晴町式が独立した段階を持つことに疑問を呈している（北理調報45、1988）。本遺跡ではその変遷や組成などについて具体的に示すことはできなかったが、特にサイベ沢Ⅵ式とⅦ a 式の細分についてはなお検討の余地があると思われる。

(2) 石器

今回出土した石器と、地区毎の組成差についてはV章6で述べた。ここでは石器の石材について簡単に触れてみたい。剥片石器の石材は周辺で比較的容易に採取できる頁岩がほとんどであった。黒曜石は遺跡に最も近い産地である豊浦町豊泉産のものが多い。礫石器は安山岩が最も多く、凝灰岩がわずかにあった。遊楽部川をはさんで八雲町の北側の遺跡では礫石器の石材として安山岩、凝灰岩の他に流紋岩が比較的多く選択される傾向があり、南側の遺跡とは若干の相違がある。

八雲町北側から長万部町にかけての流紋岩の選択は遺跡周辺の地質と密接に関連すると思われる。貫入岩の流紋岩は長万部町国縫周辺に大きな岩脈があり（石田1983）、また長万部市街地付近にも小さな岩脈が見られる（久保ほか1983）。渡島半島周辺では他に2ヶ所の岩脈が山中に存在する（北海道立地下資源調査所1980）が、最も広く分布し、海岸部に近い丘陵上に存在するのは国縫周辺であり、河川の河床礫としても採取できる（北理調報139、2000）。実際にこの岩脈から最も近い長万部町花園2・3遺跡では礫石器に流紋岩が多く使われている。

また、半円状扁平打裂石器の石材として八雲町北側の山崎4・5遺跡では板状節理の礫が比較的多

く使用される。これは安山岩もしくは流紋岩である。これに対して、八雲町の南側に位置する山越3・4遺跡では扁平礫を打ち欠いて製作されるものが多く、これは多くが安山岩である。前者の板状節理の礫は、長万部町に隣接する虻田町清水のホロナイ川流域（虻田町教委、角田氏のご教示による）、および豊浦町内（伊達市縄文フェスタの解説による）で採取することができる。

礫石器はその性格から石材があまり遠隔地まで運ばれないと考えられる。長万部町に近い八雲町北側と南側の遺跡での石材の相違、特に流紋岩や板状節理の礫の使用については、遺跡周辺および近接する地域の地質と密接に関連していると言える。

この他、八雲町の南側から森町にかけての遺跡では剥片石器に玉髓（めのう）が多く使用されている（野田生5遺跡、落部1遺跡、栄浜1遺跡など）。特に平成13年度に調査した森町濁川左岸遺跡では原石も多く出土しており（北海道埋蔵文化財センター調査年報14、2002）、この遺跡が原産地からあまり遠くない場所に立地しているものと推測される。実際に踏査して実見してはいないので、類似する石材か即断はできないが、近接した森町蛭谷川にめのうの産地があることが知られている（北海道地下資源調査所1983）。この点については、来年度以降の踏査や森町での発掘調査の進展を踏まえて更に考えてゆきたい。

（3）土偶に類似する土製品について

その他に特徴的な遺物としてB地区から出土した土製品が挙げられる。無文で横方向に穿孔されたもので、その形状から土偶の可能性があると考えた。類似するものは同じ八雲町の栄浜1遺跡（八雲町教委1983）、函館市石川1遺跡（北理調報45、1988）、泊村ヘロカルウス遺跡（北文研調報3、1987）で出土している。いずれも本遺跡と同じ中期前半のものである。形状は下方が長い「十」字形で、縦方向に穿孔されたものもある。ヘロカルウス遺跡のものは全く無文で穿孔もないものである。

青森県でも本遺跡例のように無文のものは近野遺跡からも出土している（青森県調報22、1975）が、これは後期の十腰内Ⅰ式に伴うものようである。また、青森県出土の中期の土偶をまとめた鈴木氏は無文のものを8類と分類したが（鈴木1985）、掲載された類例に全く無文のものではなく、顔や乳房などが粘土の貼付によって表現されたものである。

そのため、本遺跡例のように全く無文のものは円筒土器文化圏でも類例はあまり多いものではないと言える。

（藤原）

Ⅷ 成果と問題点

1 山越3遺跡のⅢ群 a-3 類土器の編年の位置と放射性炭素年代について

1) 円筒上層 b 式～見晴町式に関する器形の並存関係

山越3遺跡の調査においてⅢ群 a-3 類に属する土器がややまとまって出土した。これらはサイベⅥ式、サイベⅧ式、見晴町式に相当するものであり、徐々に大木 8 a 式の影響が色濃くなっていく時期の土器群である。

このことを踏まえて出土土器を概観すると、本遺跡出土例の中にも時期的には近接しているが明らかに円筒土器文化から外れる器形の存在も見取れる。ここではそのような器形がどのような段階から出現してくるのか、あるいは円筒土器の器形はどのように変化していき、山越3遺跡の出土例はどのような段階として解釈できるのかを探ってみたい。

まず 試みに渡島半島及び長万部までの噴火湾沿岸において、円筒上層 b 式、サイベⅥ式、見晴町式の各時期のほぼ単独出土例といってよい資料を抽出した。選んだ基準は、各遺跡において同一層または同一地区（報告書の記述によった）、または同一遺構内でⅢ群 a 類土器のみが複数個体復元できた場合において、拓本資料中にもその他の時期の資料がほとんど混じらないものとした。本来の意味よりおそらくやや広い時間幅があるとみられるが、ここではこうした資料を一括資料と呼んでおきたい。

さらに各一括資料において、復元個体の型式の供伴関係と大きさを調べてみた。また狭義の型式を超えた土器のセットを強調する意味において石川1遺跡において提唱された「段階」という呼称を各時期につけた。各時期の内訳は以下のとおりである。

・ 円筒上層 b 式新段階一括資料

（川上 B 遺跡 A H-4 同包含層出土資料、オバルベツ 2 遺跡 H-19 覆土一括資料、鳴川右岸遺跡 E 区一括資料）また若干の混入があるものとしては、白坂遺跡第 6、7、8 地点、館崎遺跡 3 号堅穴、浜町 A 遺跡 30 号住居、中浜 E 遺跡 H-1 床面一括出土資料がある。

・ サイベⅧ式古段階一括資料

（結梗 2 遺跡 H-14 覆土一括資料、鳴川右岸遺跡 S 区一括資料、桜町 7 遺跡包含層出土資料）また、若干の混入があるものとしては結梗 2 遺跡 H-19 覆土中～上層、サイベⅧ遺跡 4 号住居、陣川町遺跡 43 号住居、浜町 A 遺跡 H P-37 床面一括資料がある。

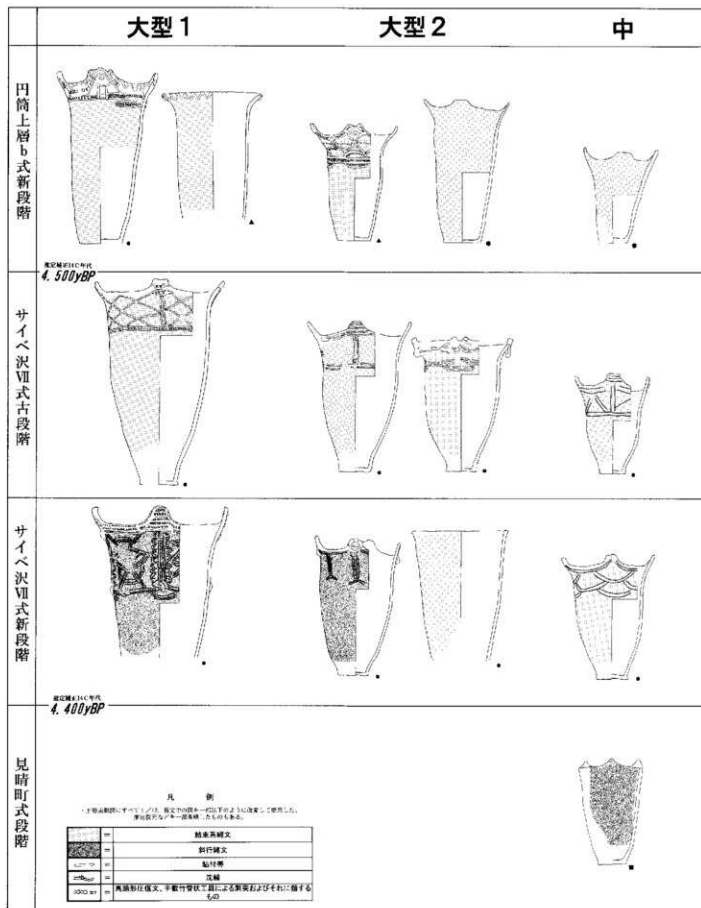
・ サイベⅧ式新段階一括資料

（石川 1 遺跡 P-56 出土資料、同 P-34 出土資料、陣川町遺跡 H-89 出土資料）また若干の混入があるものとして石川 1 遺跡 H-3、同 P-2 出土資料、サイベⅧ遺跡 1 号住居出土資料、同 8 号住居出土資料、サイベⅧ遺跡 2 号住居出土資料があげられる。

・ 見晴町式段階一括資料

（新道 4 遺跡、B H-8、D H-13 出土資料、山越 2 遺跡、H-4、9 出土資料、山崎 4 遺跡、H-11 出土資料、大岱沢 A 遺跡 P 4 壙底一括資料、P-3 出土資料）また若干の混入があるものとしては、サイベⅧ遺跡 1 号住居出土資料、権現台場遺跡 28 号住居出土資料がある。

これらの復元土器の器形をトレースしたものが図Ⅷ-1 である。大まかに器形を大中小、さらに 2



図Ⅶ-1 Ⅲ群a類土器編年表

型 1

中型 2

小型 1

小型 2
ミニチュア



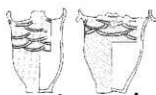
- 一括資料
 ・オムルベツ2遺跡、H-1出土資料①
 ・T1上出遺跡、DH-4出土資料①-4
 ・磯川右岸遺跡、S区出土資料①



- 一括資料
 ・松崎の遺跡、H-14出土資料①
 ・坂野7遺跡、包含層出土資料①
 ・磯川右岸遺跡、S区出土資料①



- 一括資料
 ・若原1遺跡、H-2出土資料①
 ・陸田町遺跡、B9号住居出土資料①



- 一括資料
 ・新沼4遺跡、DH-8採掘一括資料①
 ・新沼4遺跡、DH-13採掘出土資料①
 ・山崎の遺跡、H-11出土資料①
 ・山崎の遺跡、H-4出土資料①
 ・山崎の遺跡、H-9出土資料①

分し都合6種類の器種を設定してみたが、見晴町式の段階で大型の土器がなくなること、また円筒上層b式のメルクマールである縄による馬蹄形圧痕文は小型の器種に関してはサイベ沢Ⅵ式の段階まで継続して使われている事がわかる。同時期で沈線文土器が中型に現れ、馬蹄形圧痕文の名残である半截竹管状工具の刺突文が大型土器の突起周辺に残っていることから、中型・小型の一部の土器に最も早い変化が現れ、大型、小型の一部の土器は古い伝統の残るものが同時に使用される傾向にあるということがいえる可能性がある。

次に各段階の概略を説明する。

ここではできる限り広範囲の土器の変化を大まかに捕らえるために、文様の細部関しての説明は最小限にとどめ、土器の集合状態、言い換えればどのようなものが共存の関係にあってどのようなものがどの段階では消滅しているのかに重点をおいて説明する方法をとりたい。

円筒上層b式新段階

貼付帯によって区画された無文面上に馬蹄形圧痕文が施文される狭義の円筒上層b式と、高橋正勝氏のいう「(文様帯に)結節・綾くりの羽状・斜縄文が器面全体に施文される」サイベ沢Ⅵ式が混在する状況を呈する。長万部町オバルベツ2遺跡H-19の出土状態は報告者も「円筒上層b～d式が(中略)一括して出土した」と指摘するようにまさにこの時期に相当するといえる。また、筆者もかつて鳴川右岸遺跡において出土した複数の土器型式の混交状況について、明言しなかったが同時期の一括資料を提示したことがある。

この前段階である円筒上層B式古段階との区分はサイベ沢Ⅵ式土器の器種構成中の有無で判断できる。また大島直行氏の指摘するような、文様帯との区画が1条の貼付帯でなされるもの(大島1976中第1図、第1段階aモチーフの1～5、bモチーフ1～3にあたる)は新段階には存在しない。円筒上層b式古段階に該当する一括資料は現在北海道内では、権現台場遺跡24号住居、若干混入があるものに鳴川右岸遺跡N区出土資料等を確認しているが、器種構成に幾分不明な点があるので今回は言及しない。

サイベ沢Ⅵ式古段階

高橋正勝氏のいうサイベ沢Ⅵ式と、「2種2対の突起をもつか、結節、綾くりの縄文が施文される」狭義のサイベ沢Ⅵa式が混在する状況を呈する。これは石川1遺跡報文において佐川俊一氏が指摘しているとおりである(北理調報45)。器種構成中には沈線文が胴部に施文される土器が登場し始める。しかし復元土器全体の割合からすると極めて低い段階にとどまっており、中型と小型の一部の土器に限定して施文されている。また、沈線文も突起から垂下する2条の沈線を単位としており、上層B式における貼付帯の文様をそのまま置き換えたものが多い。また円筒上層b式のメルクマールとして使われることの多い馬蹄形圧痕文はこの段階においても使用されつづける。桔梗2遺跡、鳴川右岸遺跡の出土例に顕著であるが、小型の土器の無文面上に施文している。また中型、大型の土器の突起付近にも限定した形で施文されるが、伝統的な円筒土器の手法である無文面上への施文は小型土器以外には行われまいといつてよい。

筆者が一括資料とした鳴川右岸遺跡S区出土資料の中型土器に2例類似の文様があるが、これは一方は自縄自巻原体によるものではなくLR斜行縄文を折り曲げて施文されたもの。他方は爪形の圧痕文である。さらに桔梗2遺跡H-19覆土一括資料の中にも見られるが、馬蹄形圧痕文と管状工具による刺突が押し引き状に施されている。これらは円筒上層b式に伴う伝統的な手法そのものとは言えず、この時期の傾向である。また縄をコイル状に巻いたいわゆる自縄自巻の手法による馬蹄形圧痕文が無文面上に施文されるものは、現時点ではこの時期を境に消滅するといえる。

サイベ沢Ⅶ式新段階

サイベ沢Ⅶa式と、沈線の無い土器で、結束のある縄文が斜行縄文が施文され、口唇への刻み、底部の張り出し、小さな山形突起部分に簡素な貼り付けのある土器（一般的にはサイベ沢Ⅶb式といわれるが、研究者によって違う解釈がなされているので、仮に見晴町式傾向土器と呼んでおく）が混在する状況を呈するものである。サイベ沢Ⅶ式土器は本段階には伴わないとみられるが、一括資料の中にも破片資料としてわずかながら出土する例が多く、明確にはしがたい。古段階との区別は、見晴町式傾向土器が器種構成中に加わることとおきたい。馬蹄形圧痕文はわずかにのこり、沈線文とともに施文される例が、石川1遺跡H-3出土資料、サイベ沢遺跡1号住居出土資料にある。

見晴町式段階

上記の見晴町式傾向土器と斜行縄文が施文され、突起下のみ孔や沈線、粘土紐による装飾がつけられる見晴町式土器が混在する状況を呈するものである。木古内町新道4遺跡GH-13床面出土の2つの完形個体がサイベⅦb（見晴町式傾向土器）式と見晴町式であったことに象徴されている。胴部に沈線が施文された土器も前段階に続き出土するが、サイベ沢Ⅶ式古段階にあったような突起に対して垂下するような沈線ではなく、胴部を横位に巡るものに変化するものが多数を占める。また器種構成も変化した大型の器形はこの段階には無くなる。

なおこの段階においては、一括資料とした山崎4遺跡H-11、山越2遺跡H-9出土資料などには見晴町式傾向土器は伴っておらず、細分できる可能性がある。この点に関しては渡島半島域での地域差も充分考慮して今後集合作業を続けたいと考えている。

この後は茂尻C遺跡出土例のような大木8b式に相当する段階へと移行していくものと考えられる。

これら各段階の土器が単独出土した場合、どの様に呼ばれるか図Ⅷ-2に示した。これによると円筒上層e式、また円筒上層b式と呼ばれる土器は、約3段階にわたって使用された一つの土器型式であり、必ずしもその土器単独の存在のみが厳密な単位としての時期を示すものではないことは明らかである。

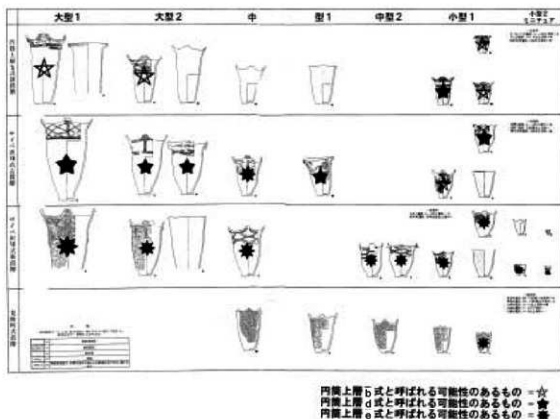
これらの各段階において筆者が画期として使用した土器の変化はまったく新しいものではなく、むしろ先学の成果を再構成したものに過ぎない。しかしこのような供伴関係を明らかにすることによって初めて各段階に伴う遺構、土器以外の道具、また各段階の地域性の理解へと到達することになると筆者は考えている。

最後に大沼氏と小柳氏により近年行われている北海道における当時期の編年作業との対応関係を述べておきたい。

筆者の言うサイベ沢Ⅶ式の新古段階は大沼氏のいうサイベ沢Ⅶa、Ⅶbという区分（大沼 1993ほか）に対応する。また泊村での調査成果を元に小柳氏がまとめたもの（小柳 1999）は、サイベ沢Ⅶb式（＝サイベ沢Ⅶ式新段階）と見晴町式の設定内容に関して図版を見る限り筆者の区分と概ね矛盾するものではない。しかしこのサイベ沢Ⅶa、Ⅶbの区分は、研究者や報告書によってさまざまな解釈がなされており、統一した区分として使用することは難しいと思われる。それに対し、サイベ沢Ⅶ新古段階は、複数の土器の存在があって初めて使用できるものとして前者の呼称と区別しておきたい。

2) 放射性炭素年代と編年上の関係

山越3遺跡において、復元した土器のうち4個体の表面についた炭化物の年代を測定した。その結果、H-2床面出土のサイベ沢Ⅶ式土器が4,470±90±50yBP、H-2覆土8層下部出土の大型深鉢が4,370±40yBP、包含層土器集中5出土大型深鉢が4,910yBP±40yBP、土器集中10出土の見晴町式に相当する土器が4,400±50yBPの値が出ている。このうち土器集中5に関しては報告にもある通り試料



図Ⅶ-2 各段階における円筒上層各型式の共存関係図

表Ⅶ-1 近年の円筒土器各時期の時期別炭素年代測定結果 (AMS法による) (三内丸山遺跡と北海道埋蔵文化センター調査分)

子器形式	遺跡名	Laboratory No	校正炭素年代	時期	測定方法	採取採取方法
FⅢa.1式	内丸山	Beta - 87143	5660 ± 50	前期後半	AMS	同一層位(ニワト)口縁下
FⅢa.2式	内丸山	Beta - 116001	4950 ± 50	前期後半	AMS	同一層位の底作物
FⅢa.3式	内丸山	Beta - 87144	4960 ± 60	前期後半	AMS	同一層位中下部の小一断面
FⅢa.4式	成林浜2	Beta - 150455	5080 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の付土
FⅢa.5式	成林浜2	Beta - 150486	5100 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の付土
FⅢa.6式	成林浜2	Beta - 150487	5080 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の付土
FⅢa.7式	成林浜2	Beta - 150488	5180 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の付土
FⅢb.1式	内丸山	Beta - 115998	4850 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢb.2式	内丸山	Beta - 115999	4920 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢb.3式	内丸山	Beta - 112441	4920 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.1式	山越5	Beta - 150456	4930 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.2式	山越5	Beta - 150463	4790 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土
FⅢc.3式	山越5	Beta - 150464	4790 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土
FⅢc.4式	山越5	Beta - 150466	4780 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.5式	山越5	Beta - 150467	4750 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.6式	山越5	Beta - 150469	4700 ± 40	前期後半	AMS	土層面より1層土
FⅢc.7式	山越5	Beta - 150470	4760 ± 40	前期後半	AMS	FⅢ-6出土の底作物
FⅢc.8式	山越5	Beta - 150474	4720 ± 30	前期後半	AMS	土層面より1層土
FⅢc.9式	山越5	Beta - 150475	4660 ± 50	前期後半	AMS	FⅢ-9出土の底作物
FⅢc.10式	山越5	Beta - 150473	4680 ± 40	前期後半	AMS	FⅢ-25出土の底作物
FⅢc.11式	山越5	Beta - 150474	4750 ± 50	前期後半	AMS	FⅢ-35出土の底作物
FⅢc.12式	山越5	Beta - 150476	4700 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.13式	山越5	Beta - 150477	4700 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.14式	山越5	Beta - 150478	4700 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢc.15式	山越5	Beta - 150479	4750 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.1式	内丸山	Beta - 117265	4650 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.2式	内丸山	Beta - 115531	4680 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.3式	内丸山	Beta - 117196	4680 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.4式	内丸山	Beta - 115532	4680 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.5式	内丸山	Beta - 115533	4640 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.6式	内丸山	Beta - 112350	4600 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢd.7式	内丸山	Beta - 112449	4750 ± 50	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
FⅢe.1式	内丸山	Beta - 115448	4640 ± 40	前期後半	AMS	同一層位出土の底作物
サイベ式新設器	山越4	Beta - 160072	4360 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
サイベ式新設器	山越4	Beta - 160080	4400 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
サイベ式新設器	山越4	Beta - 160081	4410 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
サイベ式新設器	山越3	Beta - 160073	4410 ± 40	中期前半	AMS	土層面に付着した底作物
サイベ式新設器	山越3	Beta - 160074	4400 ± 40	中期前半	AMS	土層面に付着した底作物
新設器	山越2	Beta - 150574	4410 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越2	Beta - 150575	4360 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150579	4360 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150580	4020 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150581	4350 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150582	4010 ± 50	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150583	4360 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150584	4340 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150585	4360 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越4	Beta - 150586	4520 ± 40	中期前半	AMS	同一層位出土の底作物
新設器	山越3	Beta - 160077	4400 ± 40	中期前半	AMS	土層面に付着した底作物

が不均質な物質であり、異常な数値が出ている。今村峰雄氏が指摘する海産物などを煮炊きした結果であるかもしれない。覆土8層出土の土器は、やや新しく年代が振れているが同一層位に出土している見晴町式相当の時期の炭化物の混入などが加わった可能性がある。

よって今回の分析の結果最も妥当な値としては、H-2床面出土のサイベⅧ式土器が $4,470 \pm 50$ yBP、見晴町に相当するかと見られる土器集中10の $4,400 \pm 50$ yBPである。両者の間隔は70炭素年である。

近年八雲町において当センターの調査がこの前後の時期にあたるものが多く、山崎4、山越2遺跡また本報告にある山越4遺跡についても、放射性炭素年代の測定が行われている。それによると、山崎4遺跡住居跡H-11の床面から出土した見晴町式の土器表面の炭化物は $4,340 \pm 40$ yBP、山崎4遺跡出土の大木8a式土器が $4,540 \pm 40$ yBP、山越2遺跡の住居跡H-3（見晴町式）の地焼炉出土炭化物が $4,410 \pm 40$ yBP、さらにサイベⅧ新段階～見晴町式段階考えられる山越4遺跡住居跡出土の炭化物は $4,400$ yBP付近である。これらの年代からおよそ $4,400$ yBP付近の年代が見晴町式とサイベⅧ式の境界に相当する時期ではないかという推論ができる。

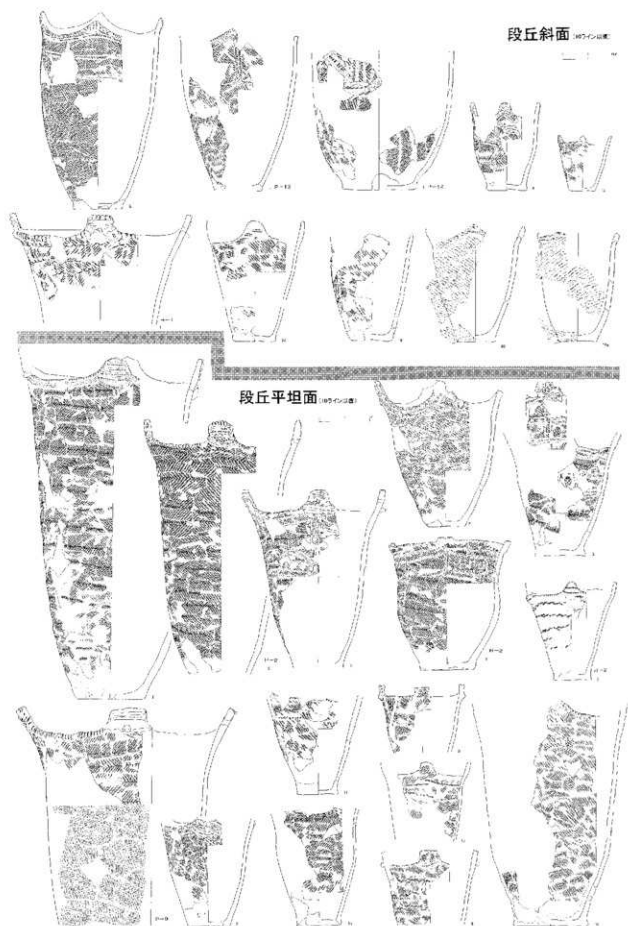
放射性炭素年代を使い土器の年代を決定する試みは、三内丸山遺跡で盛んである。その方法としては土器の出土した層位と同一の層から出土した炭化物を測定するものである。この結果によると、円筒下層a式の層位から検出された4点の試料は $4,950 \sim 5,050 \pm 50 \sim 60$ yBPである。円筒下層b式に関しては、3点の試料があり、 $4,850 \sim 4,970 \pm 50$ yBPでややばらつきはあるが、概ね下層a式に続く値が得られている。円筒下層d式の時期に関しては $4,570 \sim 4,680$ yBP $\pm 50 \sim 60$ yBPでややばらついているが概ね $4,600$ yBPとみることができる。これに続く円筒上層の各時期も測定されているがばらつきが多く、はっきりした年代を得ることができていない。

昨年調査した八雲町山崎5遺跡は円筒下層c式の時期に相当するものであり、遺構から出土した炭化物15点の年代を測定している。それから住居床面、土壘墓出土などの試料は $4,680 \sim 4,820 \pm 40 \sim 50$ の値を示し、円筒下層b～d式をつなぐ値が得られている。これらの点から、概ね従来の土器形式が補正炭素年代にして約100年の間の推移であった可能性がある。

また、これを見晴町式期が $4,400$ 年付近であることを考慮に入れると、円筒上層b式とサイベⅧ式の間が $4,500$ 年となり、本図各段階は50炭素年程度の変化であった可能性が指摘できる。しかし現段階では各時期の資料についてばらついた値も多い。しかも炭素年代は $4,500$ 年付近で牛歩期に入るため正確な年代が出ないという。そのためここで援用した炭素年代もあくまで目安としての仮の値にとどめておきたいと考える。しかしながら、近年の調査において比較的一致した値が出ていることは注目し値する。今後土器編年の整合性を主眼においた土器表面の炭化物の分析に期待したいと思う。

3) 土器一括資料の器種構成変化による理解の有効性

本論に立ち返り、山越3遺跡出土資料との対比を試みる。図Ⅷ-3は山越3遺跡の復元土器を遺構、包含層の別無く示したものである。第四章冒頭に述べたように、本遺跡では土器は段丘先端部と、段丘平坦部の2ヵ所に分かれて出土している。前者のグループには、土器集中10の見晴町式相当土器を始め、見晴町式段階の特徴を持っていることがわかる。また段丘平坦部のグループは沈線文を主体とする、見晴町式相当土器が若干混入しているサイベⅧ式新段階の特徴があるということができる。このことから、山越3遺跡はサイベⅧ式新段階の時期に段丘平坦面に生活し、後の見晴町式段階において段丘先端部に生活域を変えたことが理解できる。山越3遺跡の資料は一括資料ではないものの、調査区内での生活域の変遷を明確に理解することができる。



図Ⅶ-3 山越3遺跡復元土器

今回のまとめは筆者がかつて調査した鳴川右岸遺跡において出土した円筒上層b式古段階からサイベツⅦ式古段階にかけての資料と、北海道内での調査成果、また本遺跡の調査成果を通じて理解可能な編年を提示することを目的とした。順序が逆ではあるが、編年の方法論、器種を分けた根拠に関して詳しく述べる期間的、紙面の余裕がまったく無かった。これらの点に関しては項を改めて述べることにしたい。

(立田)

2 半円状扁平打製石器について

半円状扁平打製石器は扁平礫の周囲を半円状に打ち欠き、弦部を擦ったものである。なお、必ずしも全周を打ち欠くものではなく、また弦部に明瞭な平坦面のないものもある。このような形態の石器は古くから注目されており、主に縄文時代前期の円筒土器下層d式から中期の上層式に伴い、東北北部から北海道南部に分布するすり石の一種と考えられている。しかしその用途についてはいまだ結論が出たとは言い難い。

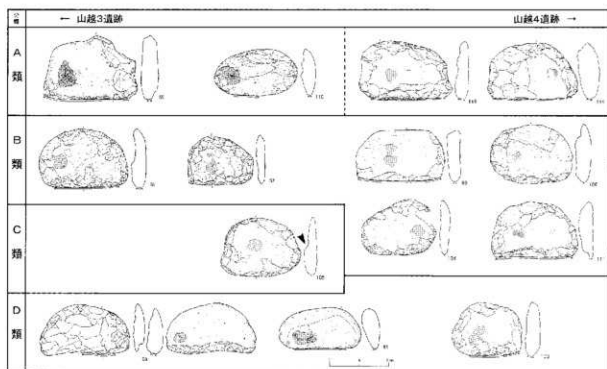
草間(1958)は岩手県の発掘調査から円筒下層d1式に伴うこの石器を形状から横刃形石斧と命名し打石器と(草間1958)、鈴木は弦部の磨擦痕を重視し何かを擦りつぶすか擦り減らすものと考えた(鈴木1958)。村越は石鏝および打製石斧の機能を有すると推測した(村越1974)。小笠原は青森県熊沢遺跡の報告書で制作方法・形態から大きく4つに分類し、用途は磨り潰すもしくは、樹木やツタなどを擦り切る道具と推定している(青森県埋文調報38、1978)。

一方、北海道では大場が岩内町の東山遺跡をまとめる中で、「庖丁形石器」と名づけている(大場ほか1958)。詳しい説明はないが、その名称から何かを切る道具と考えていたらしい。高橋はすり石・北海道式石冠を細分する中で、半円状扁平打製石器を第Ⅱ類とし、他の幅2cm以下のすり石とともに皮なめしや植物性物質の加工に用いられたとした(高橋1971)。羽賀は高橋の分類を踏襲し、獣皮なめしに用いたと考えた(羽賀1983)。小島は具体的な用途には触れていないが、半円状扁平打製石器は東北・北海道に分布するのに対して、共存する北海道式石冠は北海道に分布が偏ることから、同じすり石でも対象物や作業が異なり、両者は使い分けされていたと推測している(小島1999)。

現在では、半円状扁平打製石器に幅が狭いものの、すり面が存在するものが多いことから打製石斧説はあまり採用されず、擦りつぶす・擦り切ることに用いられたとする考えが大勢を占めるようになった。この対象物の一つに、北海道では獣皮が、東北地方では樹木・樹皮が想定されている。

本報告の山越4遺跡は縄文時代中期を主体とする遺跡で半円状扁平打製石器が70点出土した。ほぼ同じ時期の山越3遺跡からも55点が出土した。山越3遺跡の半円状扁平打製石器を整理する中で、同遺跡の半円状扁平打製石器の腹背面の一部にくぼみのあるものがあり、それは手持ち部、特に親指の置き場に相当するのではないかと推測された。実際に手に取ると親指の位置に、ちょうど良い大きさの窪みがあるものが数点あった。

このようなことから、山越4遺跡出土の半円状扁平打製石器を改めて観察すると、同じ位置に同様のくぼみのあるものが何点か存在した。従来、半円状扁平打製石器の持ち方は漠然と想定されているだけであろう。その持ち方は使用法と密接に関連すると思われるため、今回観察された窪みが手持ち部に相当するのかが、具体的な持ち方はどのようであったか、について考えてみた。



図Ⅶ-4 半円状扁平打製石器の分類

山越3・4遺跡出土の半円状扁平打製石器の内、腹背面のいずれかに窪みがあるものを示したのが図Ⅶ-4である。図網掛け部分が窪みで、その制作方法から大きく4つに細分できる。

A類：敲打により深い窪みを作出したもの（山越3-55、山越4-110）。この中には研磨整形によりたたき痕が不明瞭であるが、窪みが深いため同様の方法を用いたと推測されるものもある（4-113・114）。

B類：片面もしくは両面を打ち欠いて整形する際に浅いくぼみが作出されたもの（3-56・57、4-99・104・106・111）。打ち欠き後に研磨整形されている場合が多く、窪みが不明瞭なものも多い。

C類：打ち欠きの際の階段状剥離により、浅いくぼみと凸部が形成されるもの（4-105）。

D類：礫面にある自然の窪みのもの（深い…3-58・61、浅い…4-100）

A類はたたき石との複合石器の可能性はある。しかし、たたき痕の上から研磨されているものも存在することから、窪みを作ることに一義的な意味があったと推測できる。B類は窪みが必ずしも明瞭ではないものがあり、意図的な作出か疑問も残る。しかし、周辺から打ち欠いて整形する場合、中央部が高まりとして残る可能性のほうが高いと考えられる。C類は薄く打ち欠いた際の失敗部分として考えることができる。105の図矢印部分が高まり部分で、下方向に力を加える際の指かり部分としては有効である。D類も自然のものであるが、58・61・100の窪みの位置は類似している。58のような大型の円形扁平礫を半割して製作する場合には、自然のくぼみの位置を念頭に置いていたと考えられる。

この窪みの位置は左右いずれかに偏り、高さはちょうど中央部がそれよりも若干低く、大きさは親指大である。また、58・61・105のように図裏面に礫面を残すものでは窪みと同じ高さにザラザラした部分がある。この部分は人差し指や中指など位置に相当すること、擦痕やたたき痕ほど明瞭でないことから使用時の把握によって形成されたものと推測される。

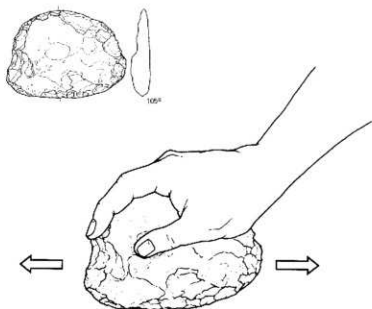
このような腹背面にある窪みを親指置き場と考えることができるなら、この石器の持ち方は図Ⅷ-5のように推定できる。これは通常漠然と想定されているものと同じであろう。そして、すり面の擦痕が確認できるものではないずれも長軸方向であるから、肘から下を前後に動かして使用したと推測される。

なお、青森県熊沢遺跡などでは半円形の弧の部分にも擦痕が見られるものもあり、これを積極的な使用痕と考えているようである。そのように使用したとするなら、図Ⅷ-5のような持ち方は想定できなくなる。しかし、断面図を見るとほとんど平坦なすり面が無いこと、弦部分のすり面の方が幅広であることから、これらを積極的な使用痕とするよりは、手持ち時に手のひらがあたる部分の刃つぶしに主眼があったと考えることができる。

さて、この半円状扁平打製石器の用途であるが、このような持ち方と擦痕、すり面の横断面が凸状になることも少ないことから、長軸方向への使用が一般的であり、皮なめし的な用途は想定し難い。八雲町山崎5遺跡は縄文時代前期、円筒土器下層c式期の遺跡であるが、半円状扁平打製石器が275点と比較的大量に出土した。この遺跡では石鏝との複合石器や、折れた際に石鏝への転用が見られる(北埋調報165, 2002)。このことから、半円状扁平打製石器の用途は石鏝と同じく長軸方向の往復運動による擦り切り行為に密接に関連すると推測される。すり面がなく断面形が「V」字状のものがあること、すり面があってもその幅は1cm前後であることから、磨りつぶすよりは擦り切る行為が主体であると考えられるのである。

また、石鏝や北海道式石冠と比べてすり面が縦方向に内湾・外湾することは少なく、擦痕が腹背面に及ぶこともない。これは擦り切られる対象物は厚みがあまりなく、小さいか平らなものであるか、または使用時に台となるものが平坦であった可能性も示す。

そして、山崎5遺跡での半円状扁平打製石器の出土分布を考察した際に、包含層での出土率と比べて、遺構内もしくは遺構近くでの出土率が大幅に低いことから、主に屋外で使用されたものとも推測



図Ⅷ-5 半円状扁平打製石器の持ち方(想像図)

した。反面、北海道式石冠は廃棄されて包含層から出土するものも多かったが、住居跡床面で確認されるものも多数あった。このことから石冠は屋内もしくは住居跡周辺での使用が想定され、小島の指摘のように両者は使い分けされていたと考えられる。このような遺跡内での出土傾向からも石冠の主たる用途である植物性食料の加工との関連はより薄いと考えられる。

以上のような持ち方や使用痕・使用方向、出土状況から考えて、擦り切る対象はあまり大きいもしくは太くはないものであったと考えられる。消去法的ではあるがあまり太くはない杖状ものヤツタ類、あるいは樹皮・獣皮のように厚みがないものを擦り切っていたと推測される。

なお、全ての半円状扁平打製石器に今回推測したような手持ち部としての窪みが確認出来る訳ではない。特に、板状節理の鏝ではほとんど無いと言える。これは、窪みが必ずしも必要なものではなく、半円形に形を整えることで十分に手の力が加わりやすくなるためと考えられる。 (藤原)



1 調査区遠景 (山越 2 遺跡から)



2 基本土層



1 調査終了（北西から）



2 調査終了（北から）



1 H-1 (北東から)



2 H-1 土層断面 (北東から)



1 H-1 覆土石皿出土状況 (南から)



2 H-2 (北西から)



3 H-2 土層断面 (北から)



4 H-2 床面土器出土状況 (北から)



5 H-2 覆土遺物出土状況 (北から)



6 H-3 (北東から)



1 P-1 (北東から)



2 P-2 (東から)



3 P-3・4土層断面 (西から)



4 P-5 (北東から)



5 P-6土層断面 (南東から)



6 P-7 (西から)



1 P-8 遺物出土状況 (東から)



2 P-9 (南西から)



3 P-10 (西から)



4 P-11 (南東から)



5 P-12 (南から)



6 P-13 (東から)



1 P-14 (北から)



2 P-15 (北から)



3 P-16 (西から)



4 P-17 (北東から)



5 P-18 (北から)



6 F-1 (北から)



1 F-2 (北から)



2 F-3 (南西から)



3 FC-1 (東から)



4 土器集中1 (東から)



5 土器集中2 (南から)



6 土器集中3 (南から)



1 土器集中4 (東から)



2 土器集中5 (東から)



3 土器集中5裏面 (東から)



4 土器集中6 (南西から)



5 土器集中7 (西から)



6 土器集中8 (西から)



1 土器集中9 (北から)



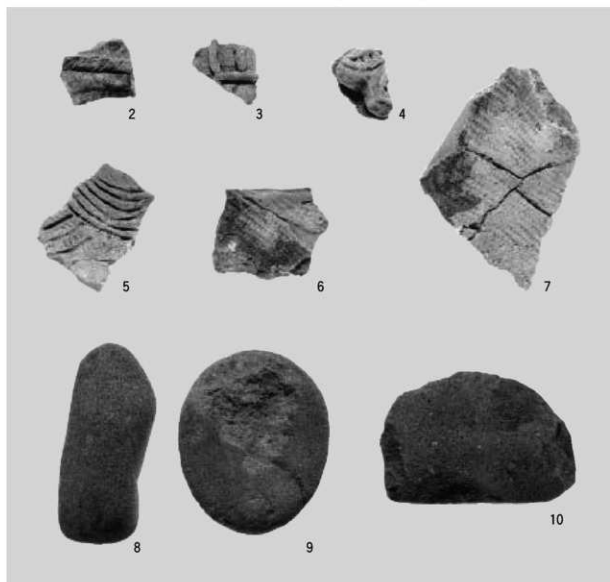
2 土器集中10 (北東から)



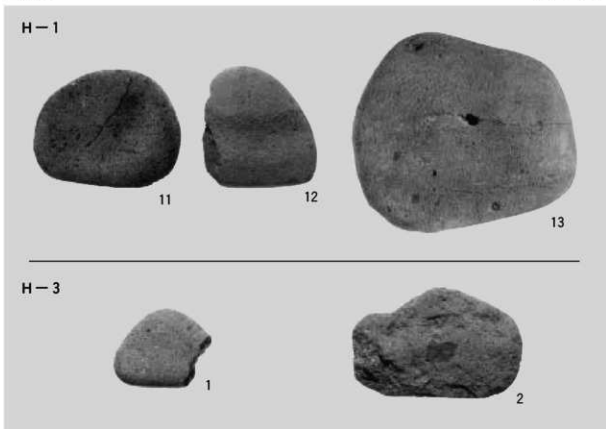
3 石槍出土状況 (北東から)



1 H-1 出土の土器 (図Ⅴ-10-1)



2 H-1 出土の遺物



1 H-1・H-3出土の石器



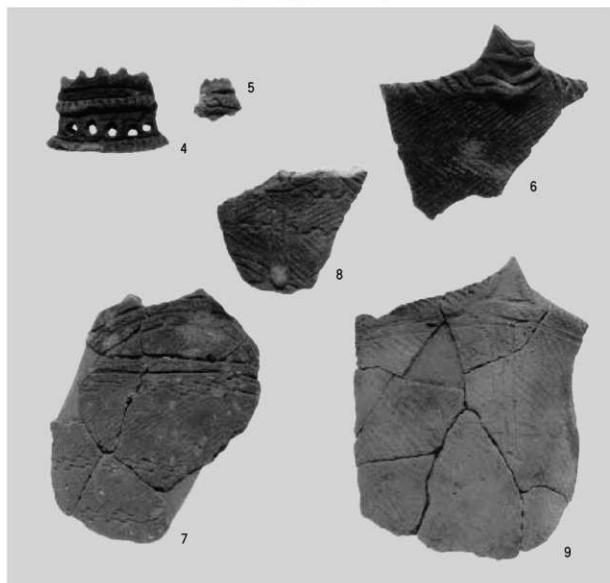
2 H-2出土の土器(図N-13-1)



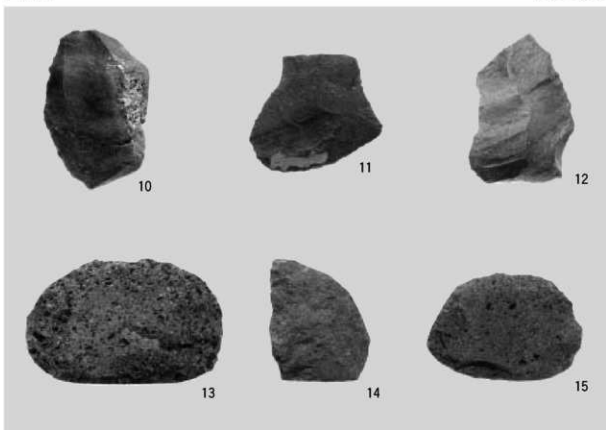
3 H-2出土の土器(図N-13-2)



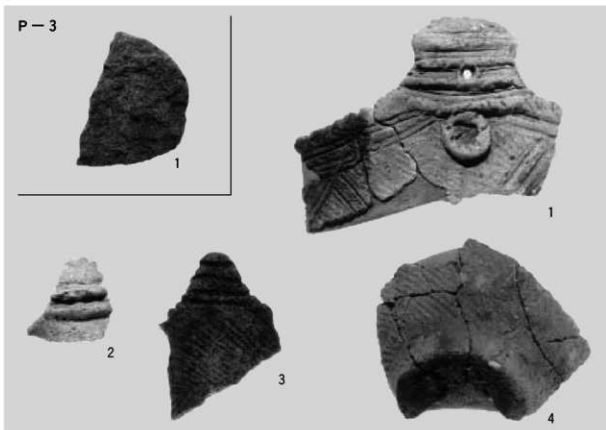
1 H-2 出土の土器 (図Ⅳ-14-3)



2 H-2 出土の土器



1 H-2 出土の石器



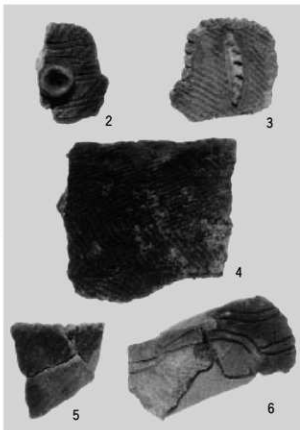
2 P-3・P-8 出土の遺物



1 P-8 出土の石器



2 P-9 出土の土器 (図Ⅳ-19-1)



3 P-9 出土の土器

P-10



P-16



1 P-10・P-16出土の遺物



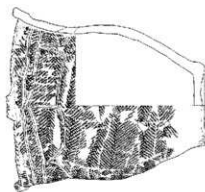
2 P-13出土の土器 (図Ⅳ-21-1)



3 P-14出土の土器 (図Ⅳ-21-1)



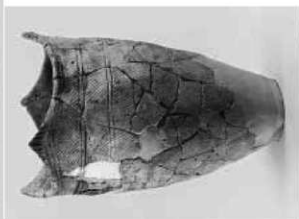
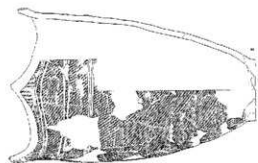
4 P-14出土の土器 (図Ⅳ-21-2)



1 H-2 出土の土器 (図IV-13-1)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-4)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-6)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-29-1)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-2)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-4)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-3)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-30-5)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-6)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-7)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-8)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-31-9)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-10)



6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-11)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-12)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-32-13)



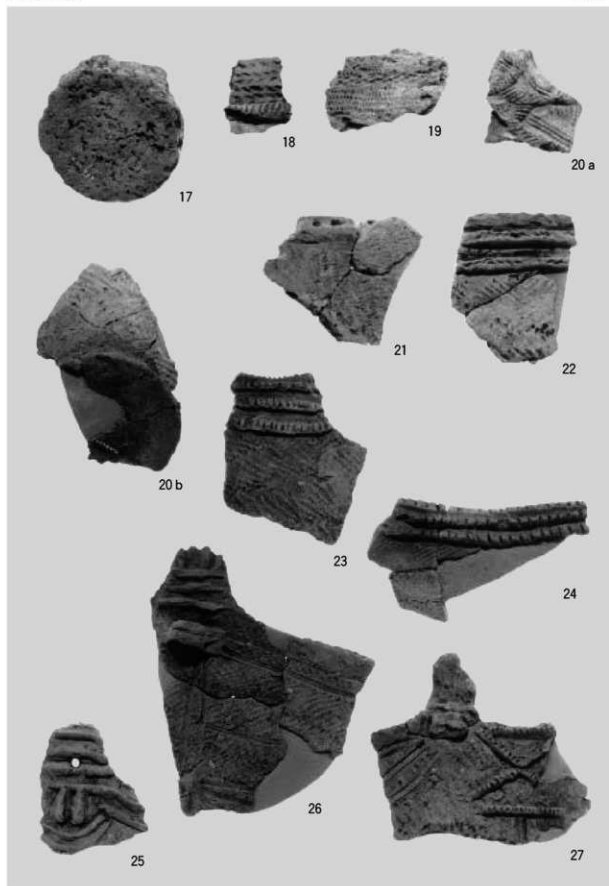
3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-14)



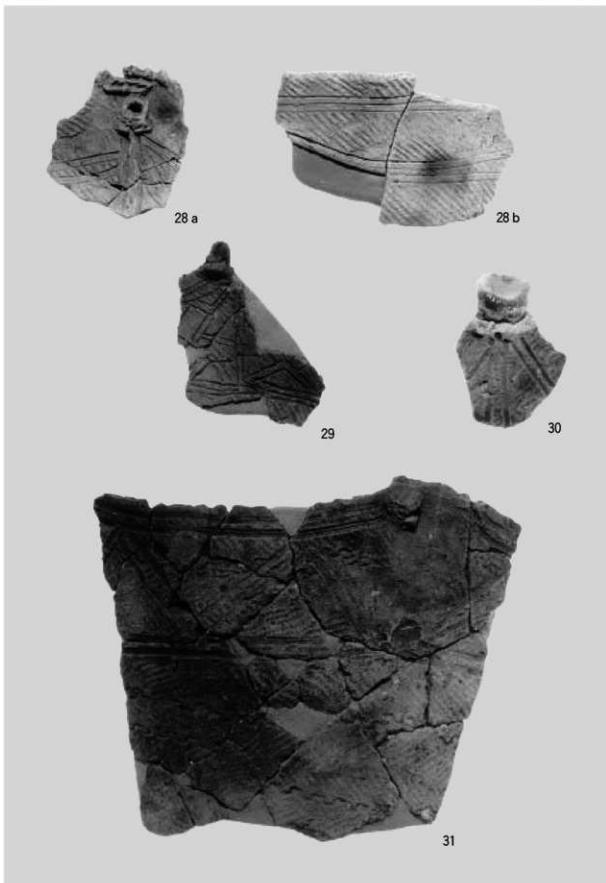
4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-15)



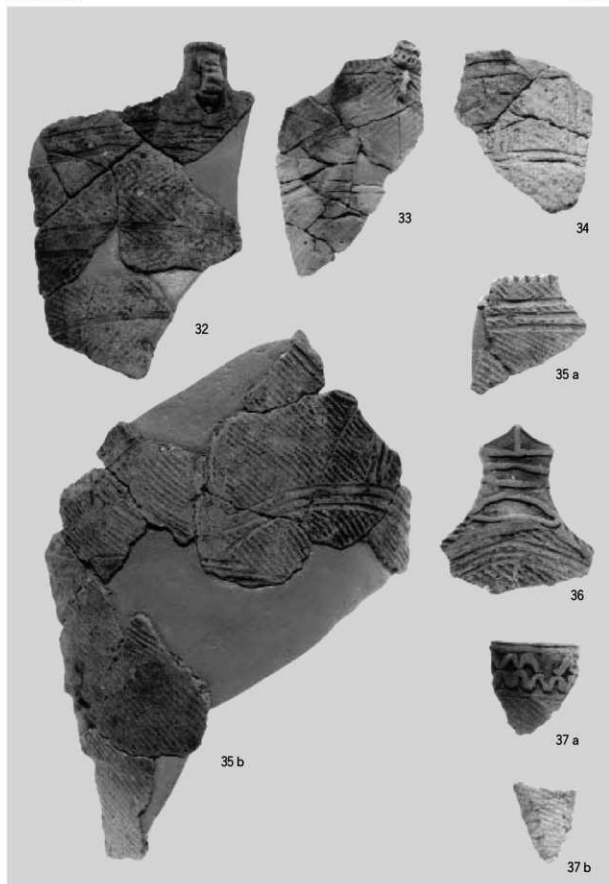
5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-33-16)



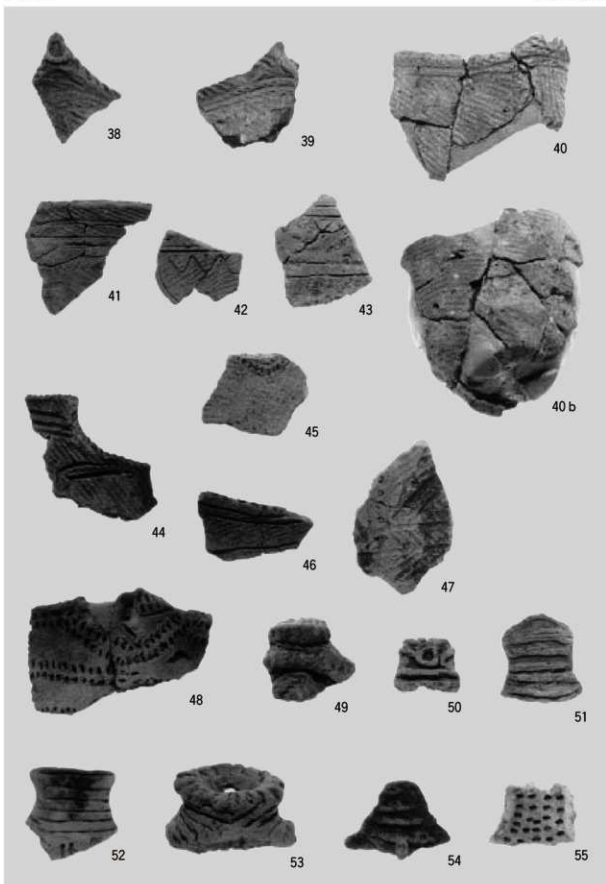
1 包含層出土の土器 (1)



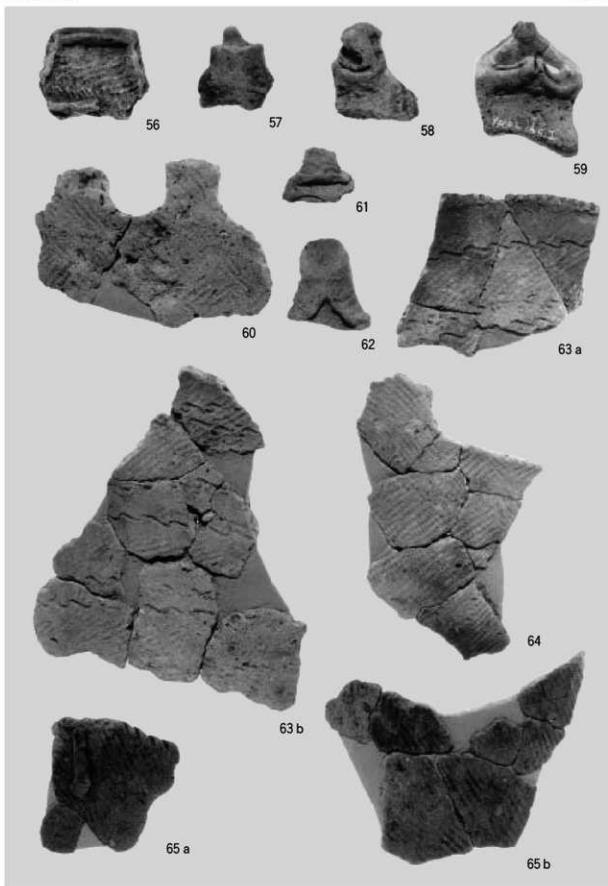
1 包含層出土の土器（2）



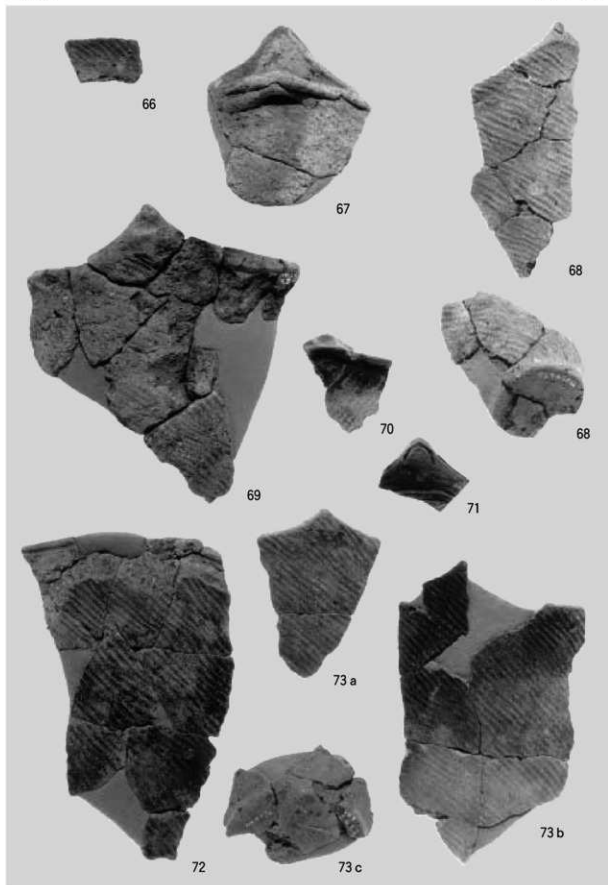
1 包含層出土の土器 (3)



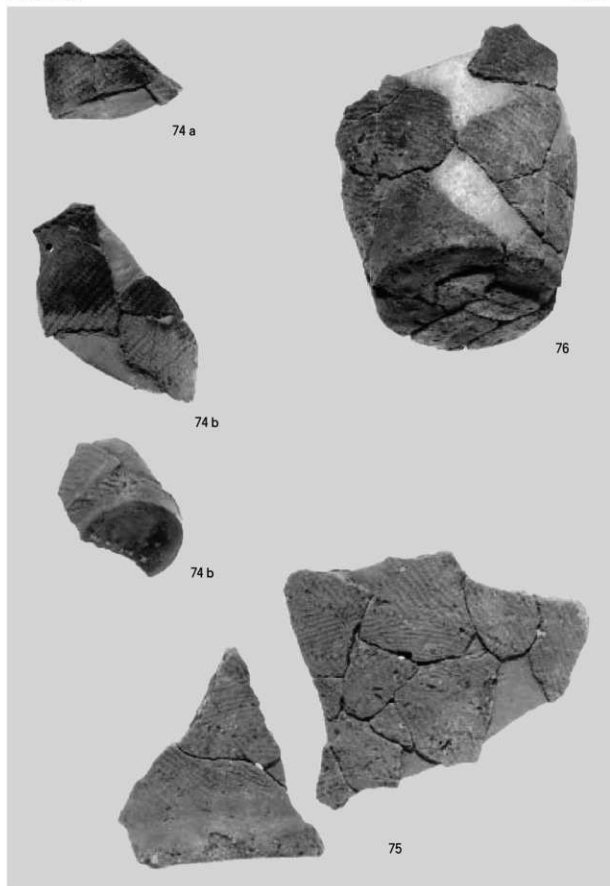
1 包含層出土の土器(4)



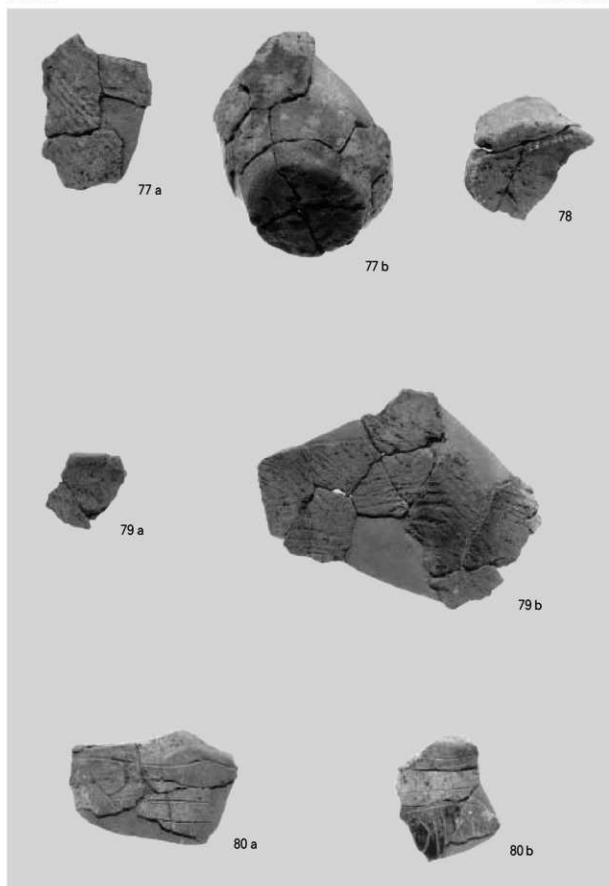
1 包含層出土の土器 (5)



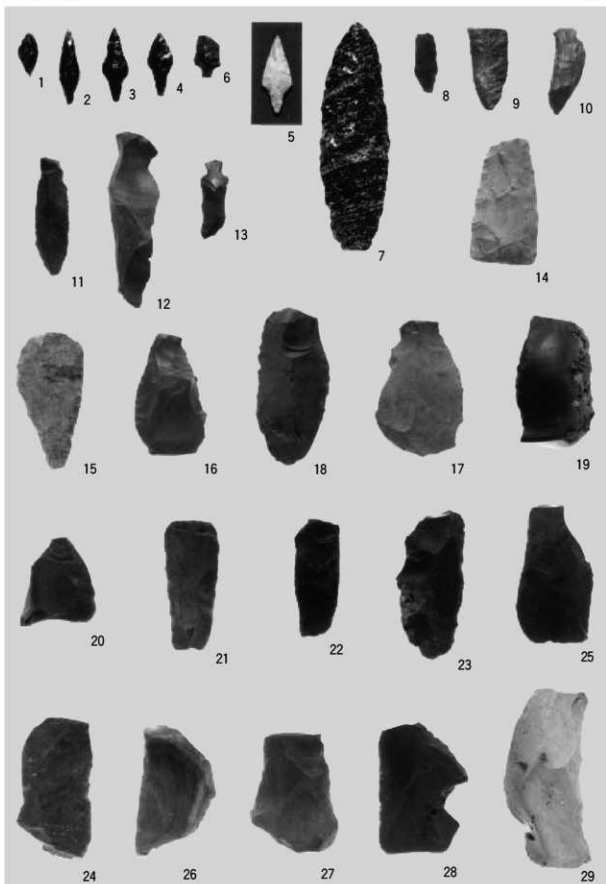
1 包含層出土の土器（6）



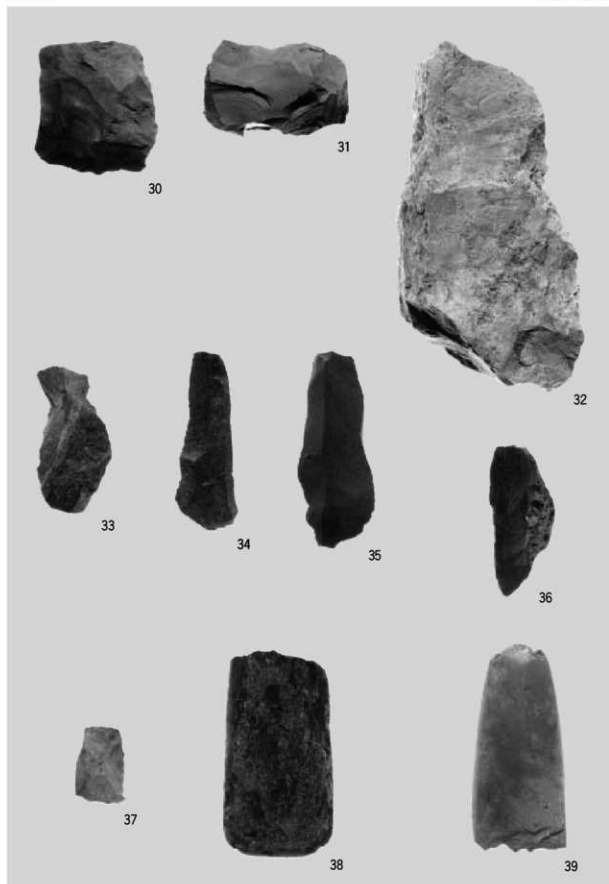
1 包含層出土の土器 (7)



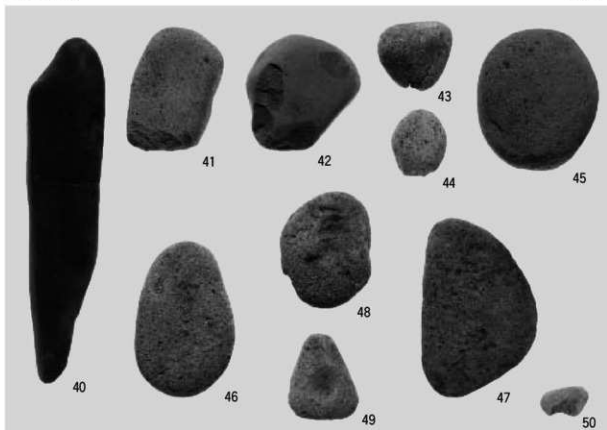
1 包含層出土の土器(8)



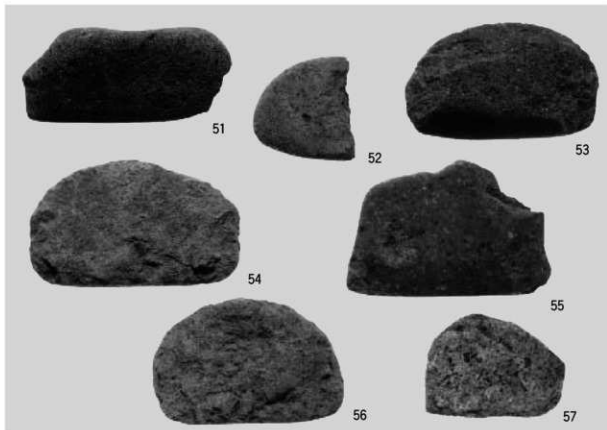
1 包含層出土の石器（石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー）



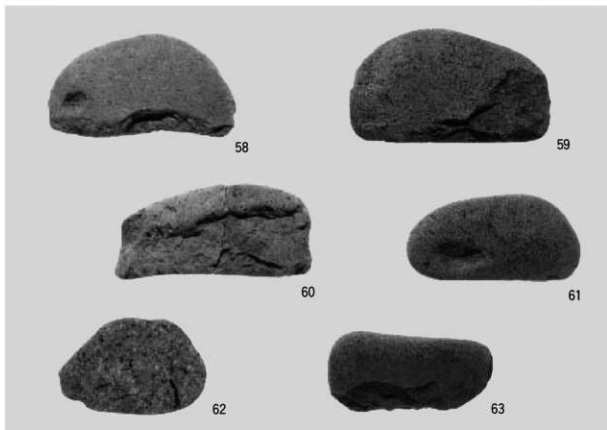
1 包含層出土の石器（両面調整石器・石核・Uフレイク・Rフレイク・石斧）



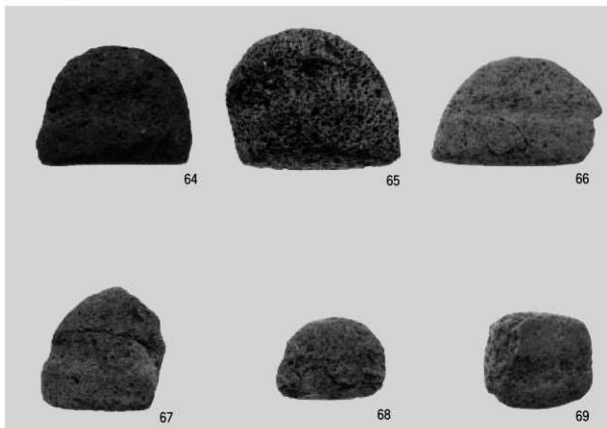
1 包含層出土の石器（たたき石）



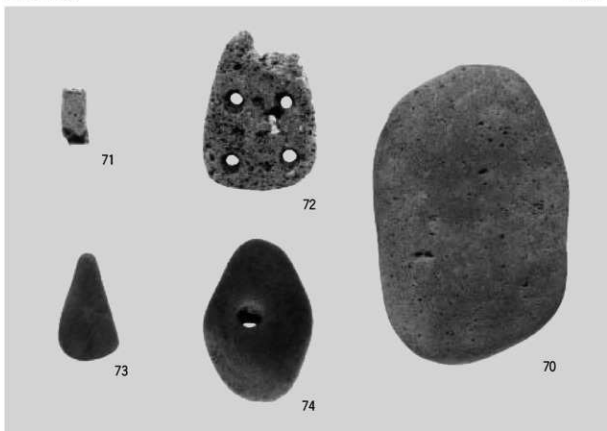
2 包含層出土の石器（すり石・半円状扁平打製石器（1））



1 包含層出土の石器（半円状扁平打製石器（2））



2 包含層出土の石器（北海道式石冠）



1 包含層出土の石器など（石皿・土製品・石製品）



1 発掘前の遺跡の状況（東から）



2 調査区遠景（野田生1遺跡から）



1 A地区25%調査状況(西から)



2 B地区調査状況(北東から)



1 A地区完掘状況（北東から）



2 B地区完掘状況（北東から）



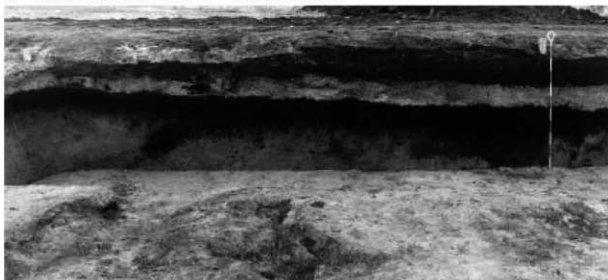
1 A地区南東斜面完掘状況(南から)



2 A地区南東斜面完掘状況(西から)



3 A地区メインセクションM-11・12区付近(北から)



4 A地区メインセクションS~T-13区付近(南東から)



1 B地区メインセクション(南西から)



2 H-1セクション(南東から)



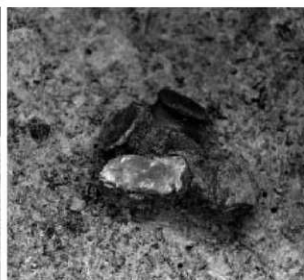
3 H-1セクション(西から)



1 H-1 遺物出土状況 (南から)



2 H-1 HP-1 遺物出土状況 (北から)



3 H-1 HP-1 壙底面遺物出土状況 (北から)



4 H-1 HP-2 セクション (南から)



5 H-1 HP-4・6・7 完掘 (北から)



1 H-1完掘(西から)



2 H-2完掘(北から)



1 H-2 セクション (南から)



2 H-2 セクション (東から)



3 H-2 HF-1 検出状況 (南東から)



4 H-2 HF-2・3 検出状況 (南から)



1 H-2 覆土3層遺物出土状況(北東から)



2 H-2 壁際遺物出土状況(北から)



3 H-2 床面遺物出土状況(北から)



4 H-2 床面遺物出土状況(北から)



5 H-2 床面台石出土状況(南東から)



6 H-2 付近の土器出土状況(西から)



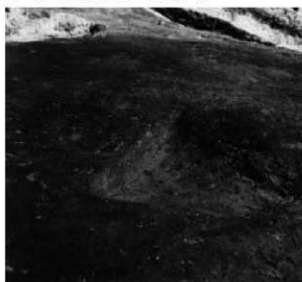
1 H-2 HP-3 セクション (西から)



2 H-2 HP-3 完掘 (西から)



3 H-3 セクション (北東から)



4 H-3 HF-2 (F-1) セクション (東から)



5 H-3 石組炉確認状況 (北から)



1 H-3 完掘 (北から)



2 H-4 完掘北から



1 H-4 セクション (南西から)



4 H-4 HP-1 セクション (南西から)



2 H-4 セクション (北西から)



5 H-4 HP-2 完掘 (北から)



3 H-4 HF-1 検出状況 (北東から)



6 P-1~3 完掘 (北東から)



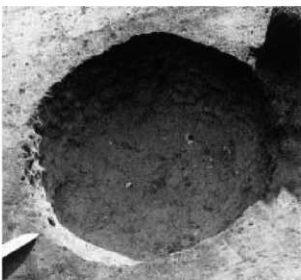
1 P-1セクション (北から)



2 P-1完掘 (東から)



3 P-2セクション (南東から)



4 P-2完掘 (東から)



5 P-3セクション (南西から)



6 P-3完掘 (北西から)



1 P-4 セクション (南西から)



2 P-4 完掘 (西から)



3 P-5 セクション (南東から)



4 P-5 完掘 (北東から)



5 P-6 セクション (南から)



6 P-6 完掘 (東から)



1 P-7セクション (東から)



2 P-7完掘 (南西から)



3 P-8セクション (西から)



4 P-8完掘 (西から)



5 P-9セクション (南東から)



6 P-9完掘 (西から)



1 F-2 検出状況 (北から)



2 F-3 検出状況 (西から)



3 C-1 検出状況 (南西から)



4 FC-1 検出状況 (南東から)



5 FC-1 付近土器出土状況 (東から)



6 N-5-b区土器出土状況 (北から)



1 W-3-b区土器出土状況（南から）



2 T-10-a区土器出土状況（北東から）



3 S-12-c区土器出土状況（北東から）



4 U-10-b区北海道式石冠・台石出土状況（南から）



5 BP-1セクション（西から）



6 BP-1完掘（東から）



1 B P-2 セクション (西から)



2 B P-2 完掘 (北から)



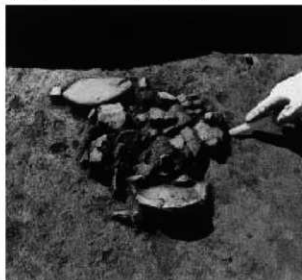
3 B F-1 検出状況 (西から)



4 B F-1 セクション (北から)



5 B F-2 検出状況 (南から)



6 B F-2 付近の遺物 (北西から)



1 B S-1 検出状況 (北から)



2 B地区土製品出土状況 (北から)



3 B地区石製品出土状況 (南西から)



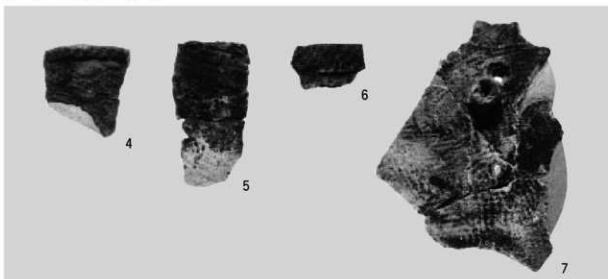
1 H-1 出土の土器 1



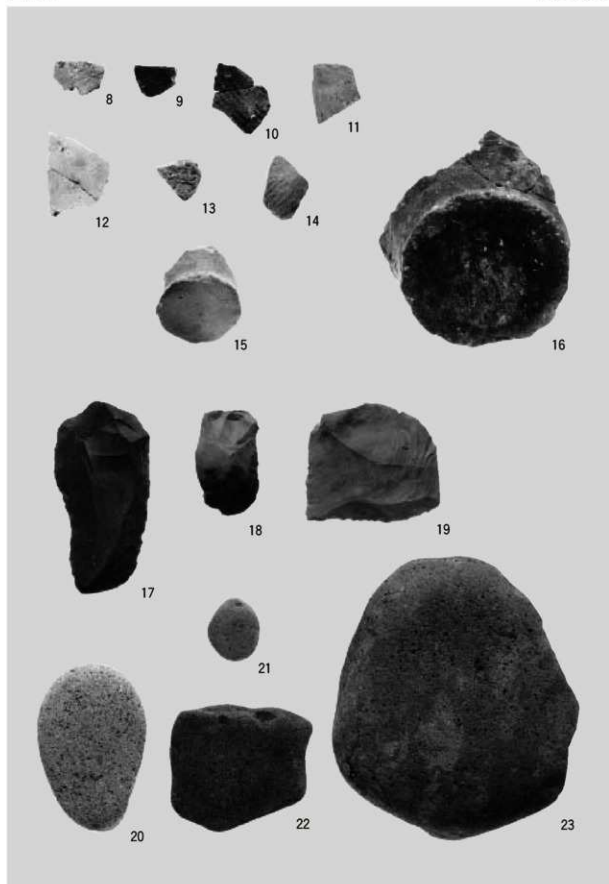
3 H-1 出土の土器 3



2 H-1 出土の土器 2



4 H-1 出土の遺物 (1)



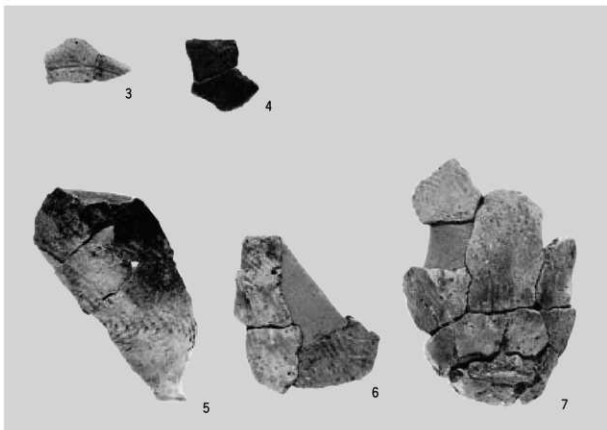
1 H-1 出土の遺物 (2)



1 H-2 出土の土器 1



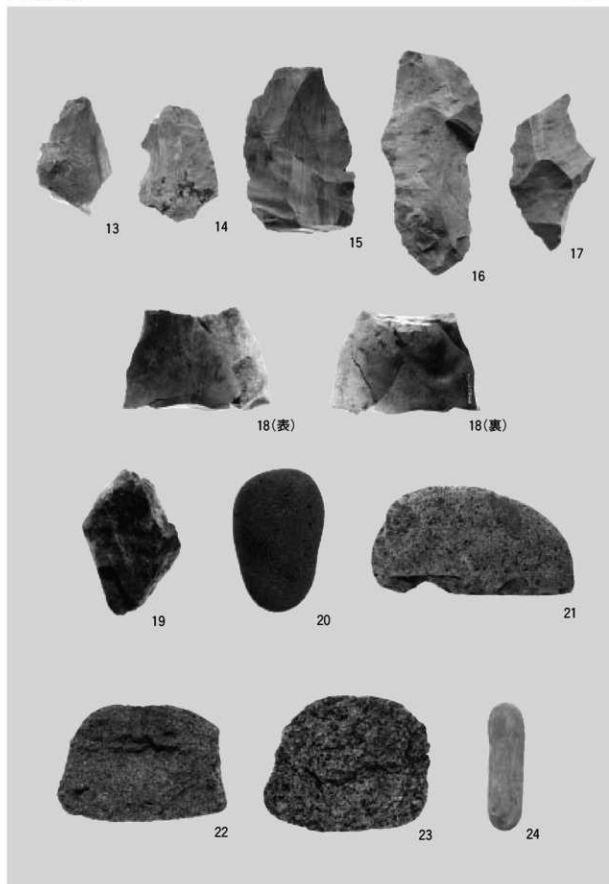
2 H-2 出土の土器 2



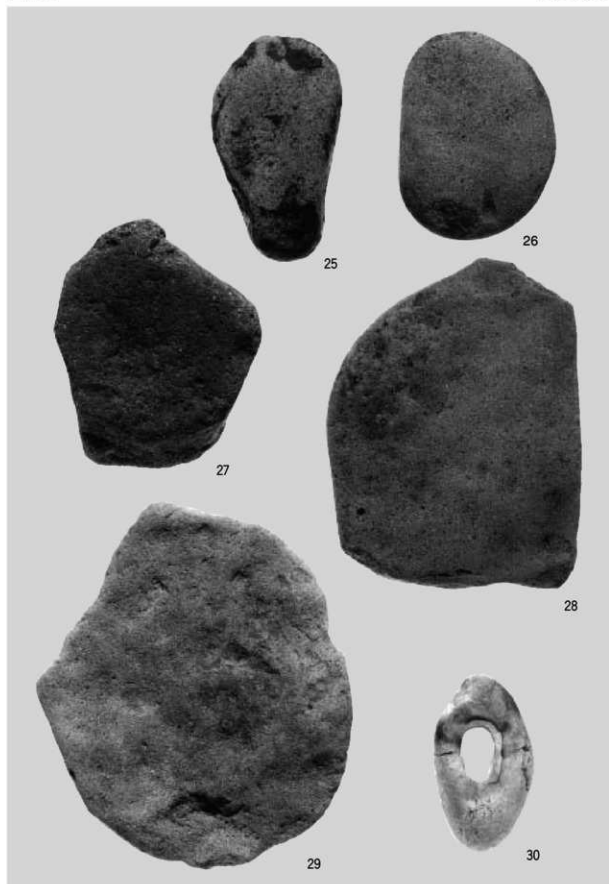
3 H-2 出土の遺物 (1)



1 H-2 出土の遺物 (2)



1 H-2 出土の遺物 (3)



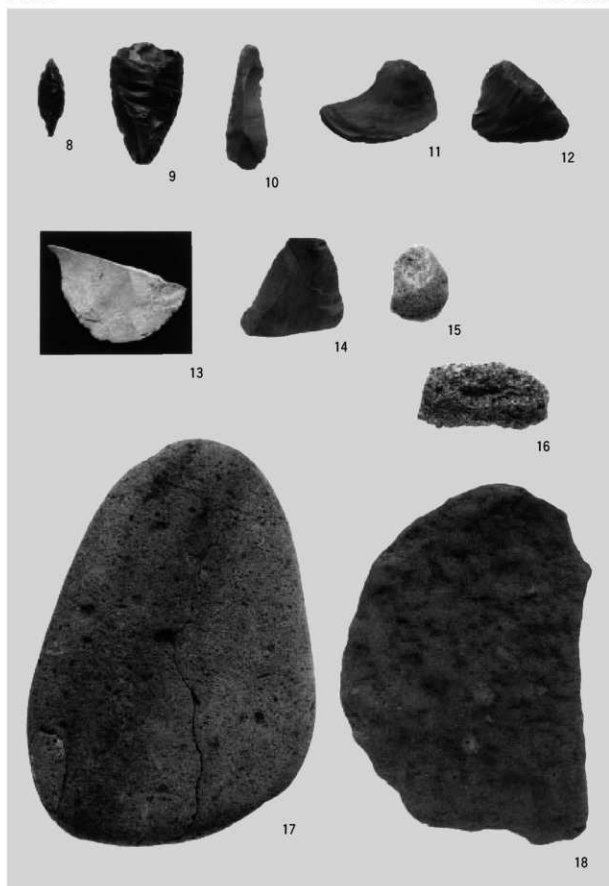
1 H-2 出土の遺物 (4)



1 H-3 出土の土器



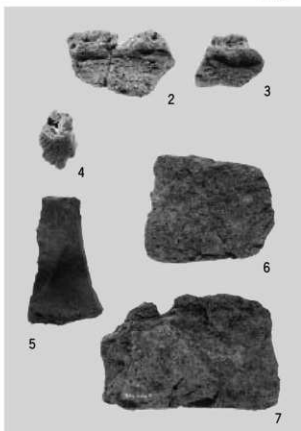
2 H-3 出土の遺物 (1)



1 H-3 出土の遺物 (2)



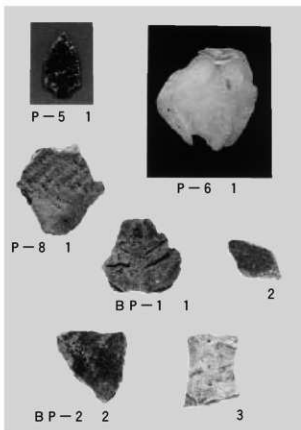
1 H-4 出土の土器



2 H-4 出土の遺物



3 B P-2 出土の土器



4 土壙出土の遺物



1 A地区出土の土器 1



3 A地区出土の土器 3



4 A地区出土の土器 4



2 A地区出土の土器 2



5 A地区出土の土器 5



1 A地区出土の土器 6



2 A地区出土の土器 7



3 A地区出土の土器 8



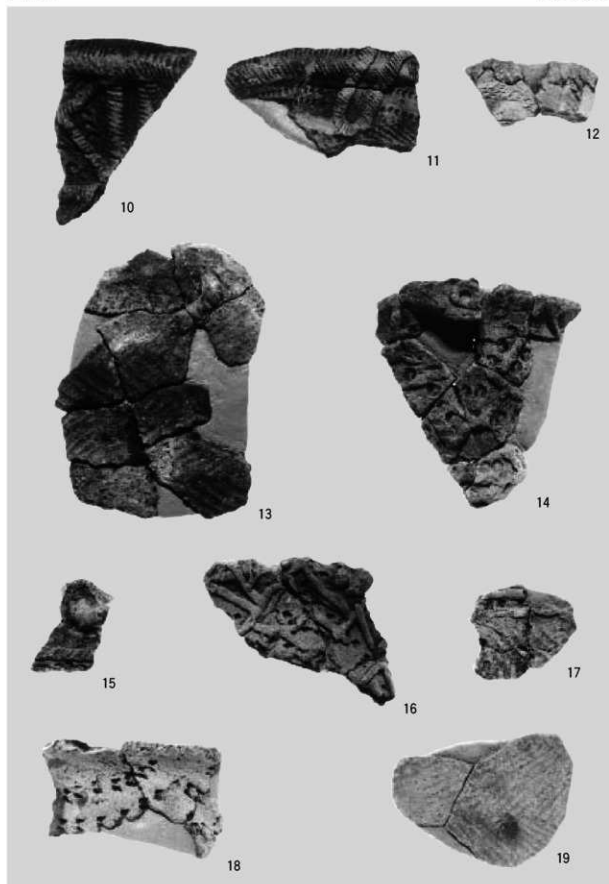
4 A地区出土の土器 9



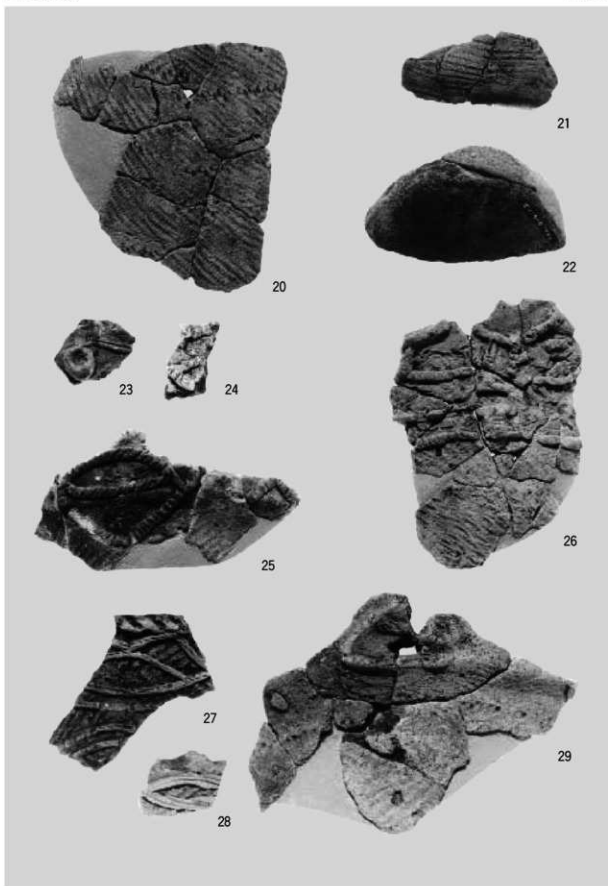
5 A地区出土の土器 (Ⅱ群b類) 1



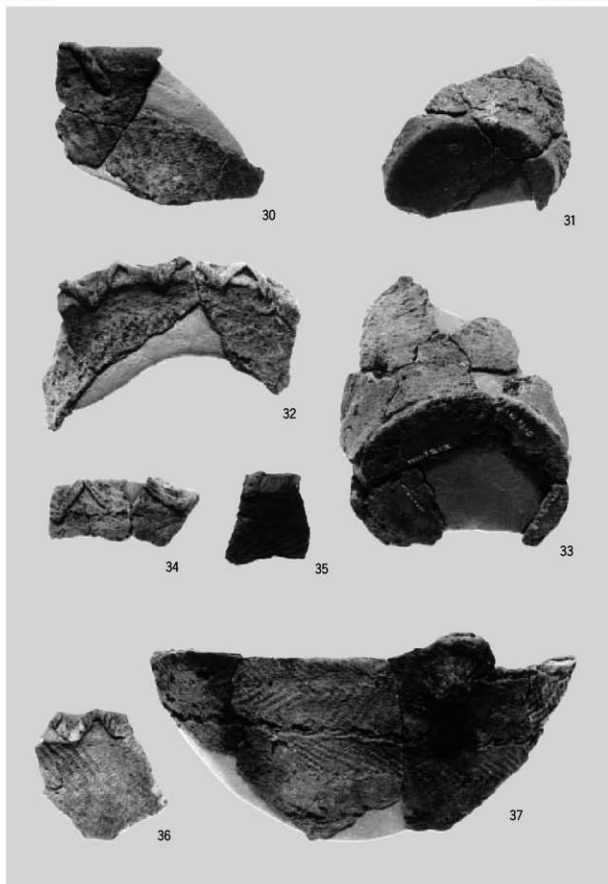
6 A地区出土の土器 (Ⅳ群a類) 3



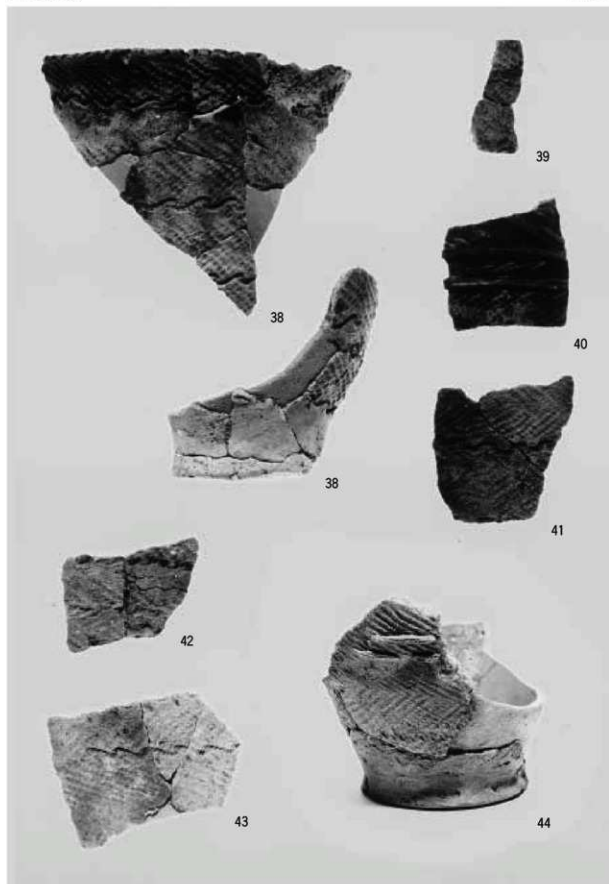
1 A地区包含層出土の土器(1)



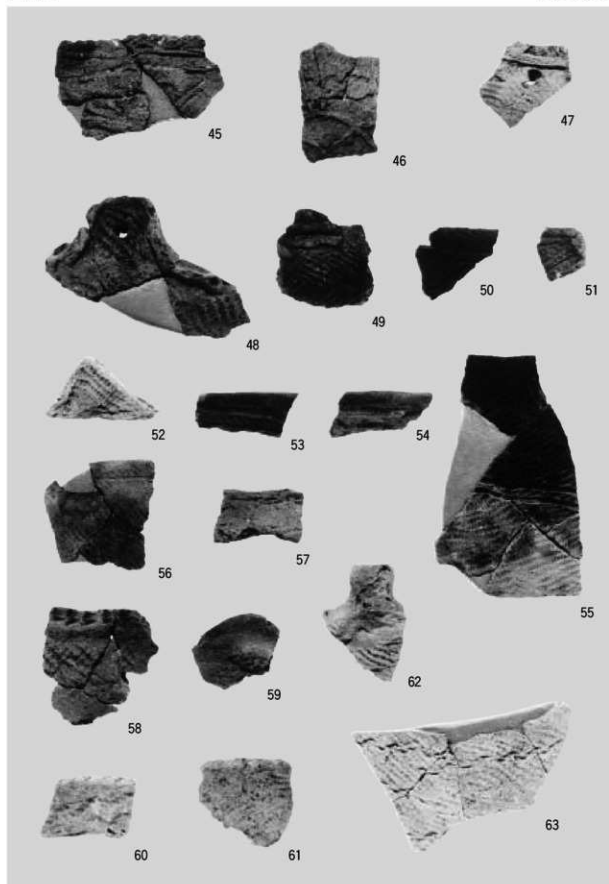
1 A地区包含層出土の土器(2)



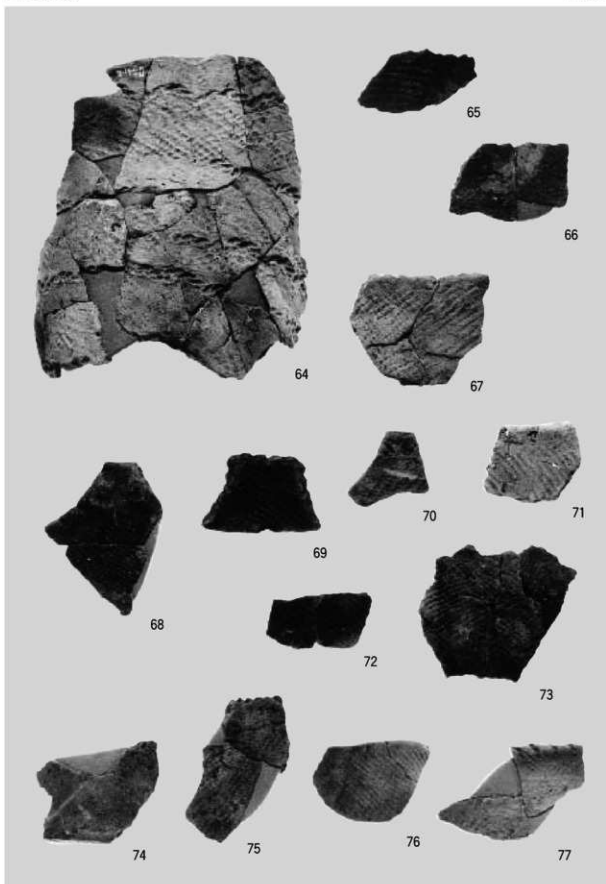
1 A地区包含層出土の土器(3)



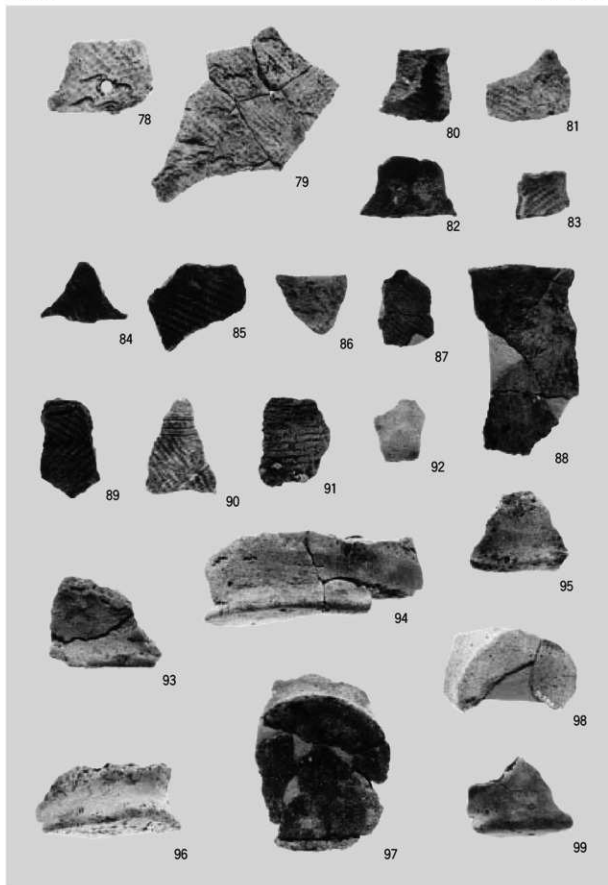
1 A地区包含層出土の土器(4)



1 A地区包含層出土の土器(5)



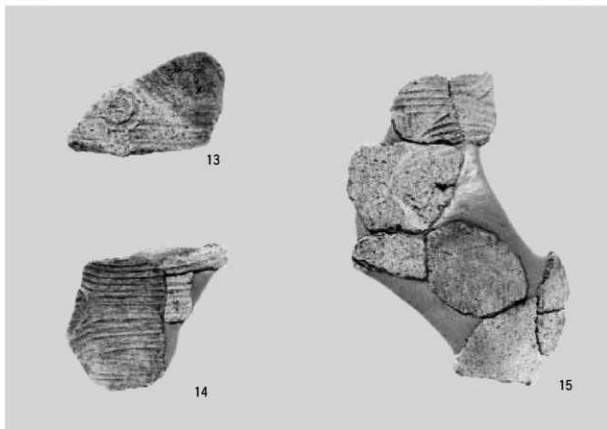
1 A地区包含層出土の土器(6)



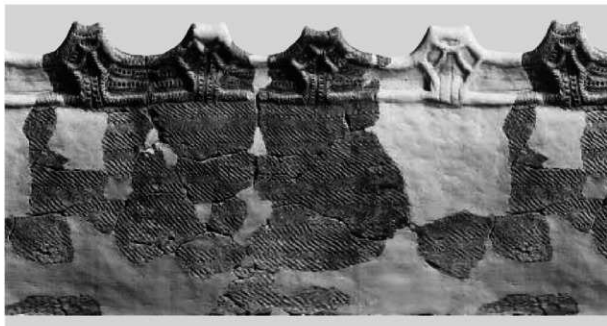
1 A地区包含層出土の土器(7)



1 A地区包含層出土の土器(8)



1 A地区包含層出土の土器(9)



2 A地区出土復元土器2の展開写真



1 B地区出土の土器 1



2 B地区出土の土器 2



3 B地区出土の土器 3



4 B地区出土の土器 4



5 B地区出土の土器 5



6 B地区出土の土器 6



1 B地区出土の土器 7



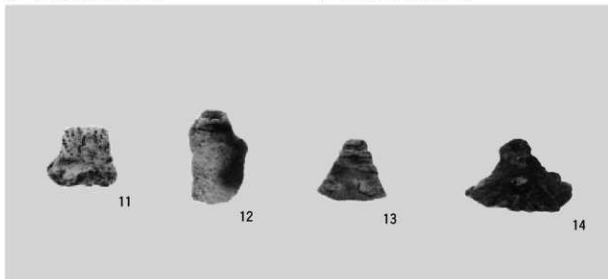
2 B地区出土の土器 8



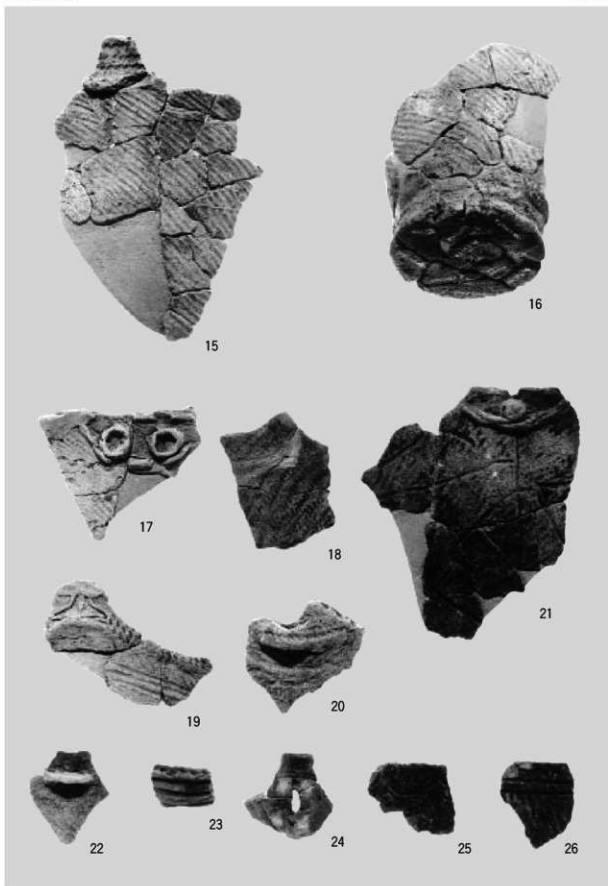
3 B地区出土の土器 9



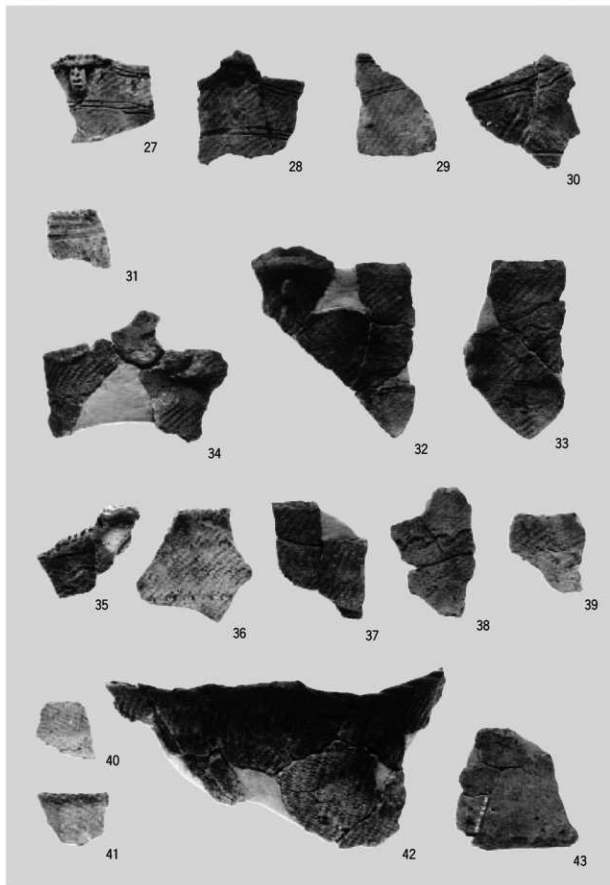
4 B地区出土の土器 10



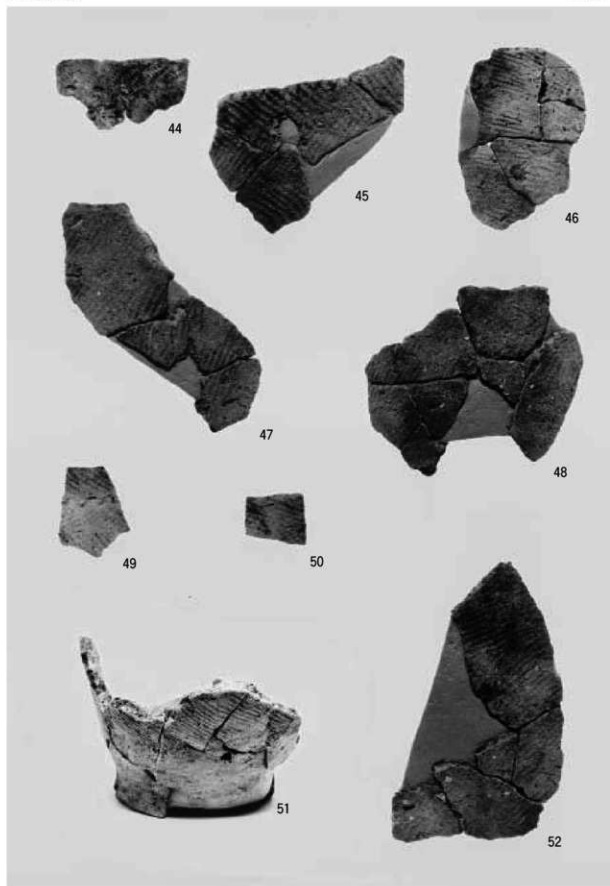
5 B地区包含層出土の土器 (1)



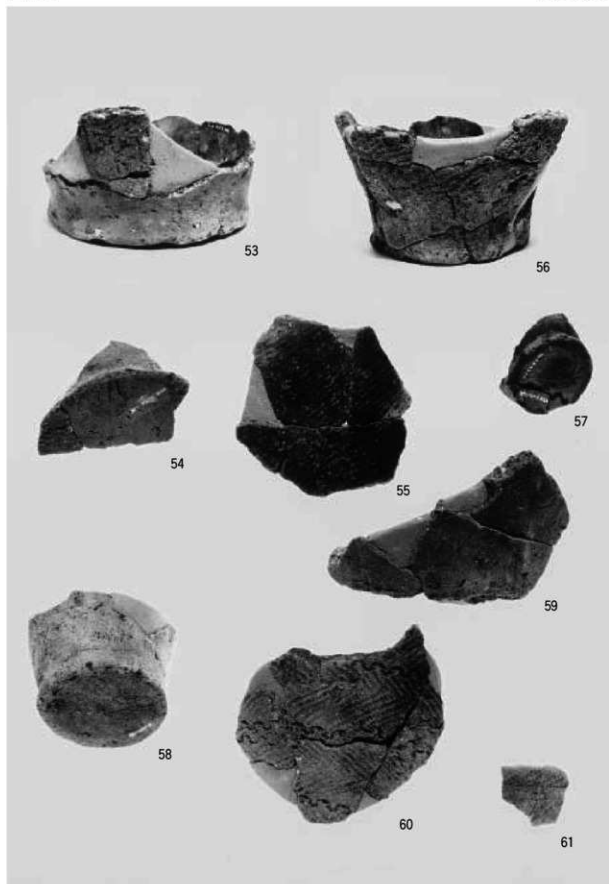
1 B地区包含層出土の土器(2)



1 B地区包含層出土の土器(3)



1 B地区包含層出土の土器(4)



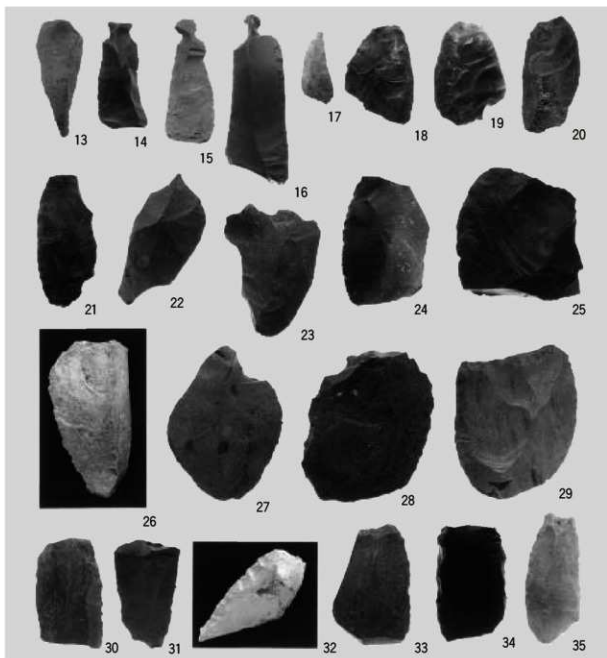
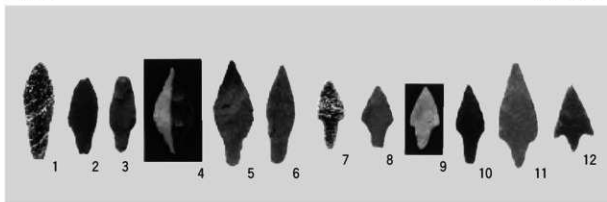
1 B地区包含層出土の土器(5)



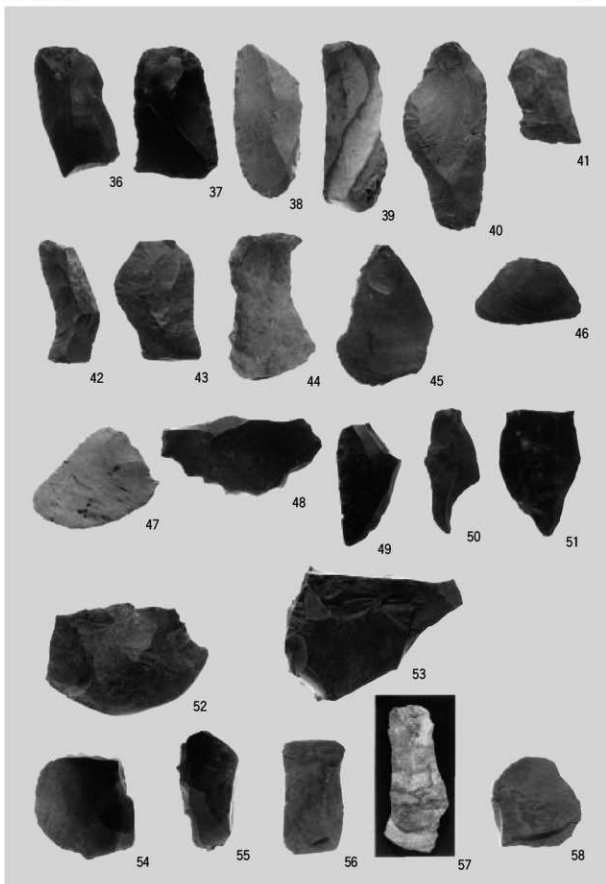
1 A地区出土の復元土器（Ⅲ群a類）



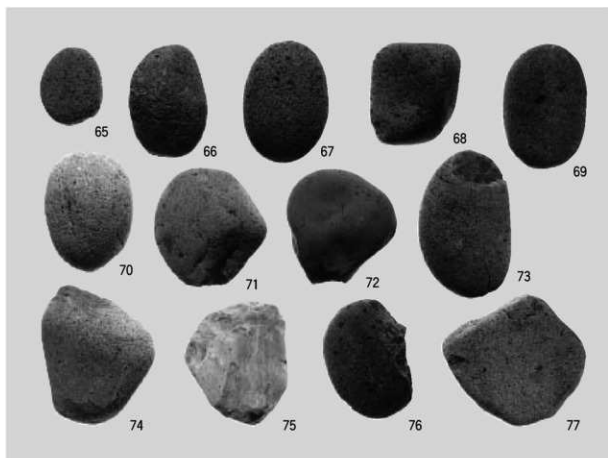
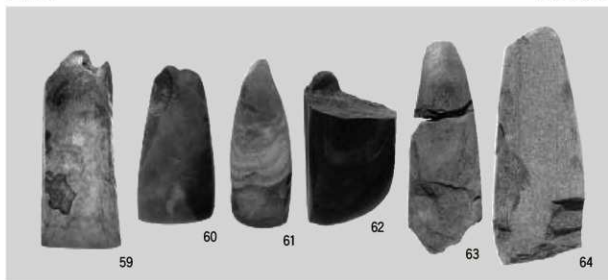
2 B地区出土の復元土器（Ⅲ群a-3類）



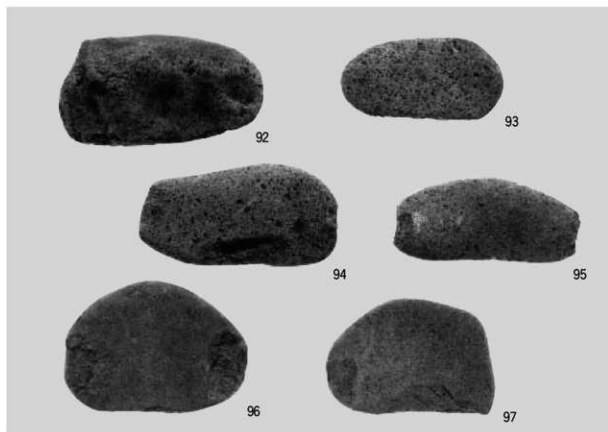
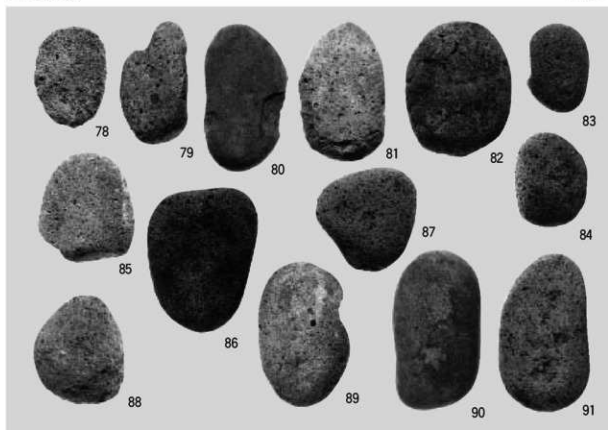
1 包含層出土の石器 (1)



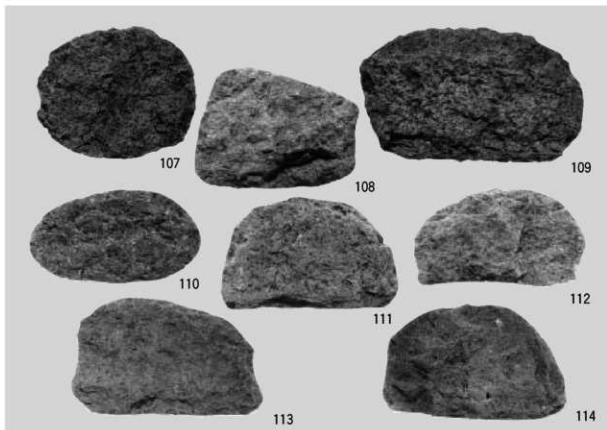
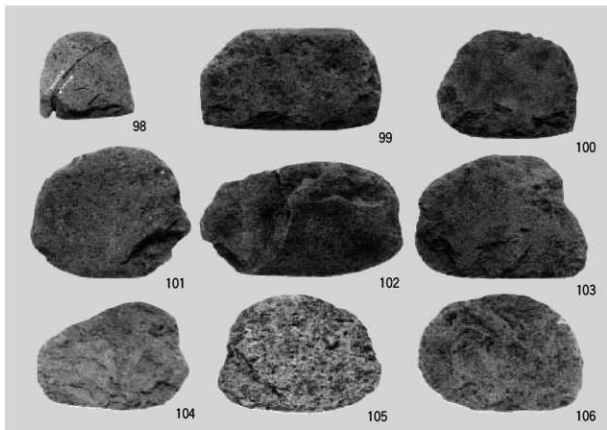
1 包含層出土の石器 (2)



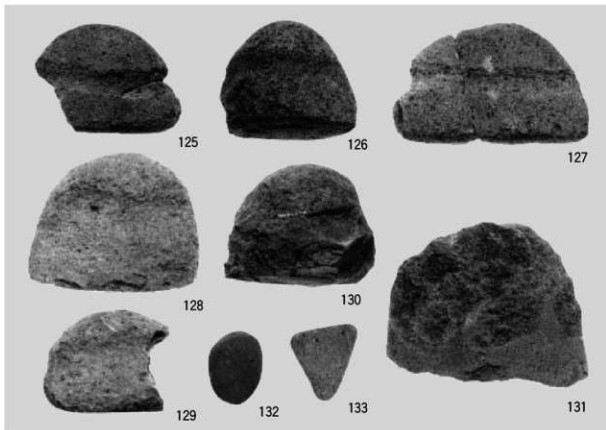
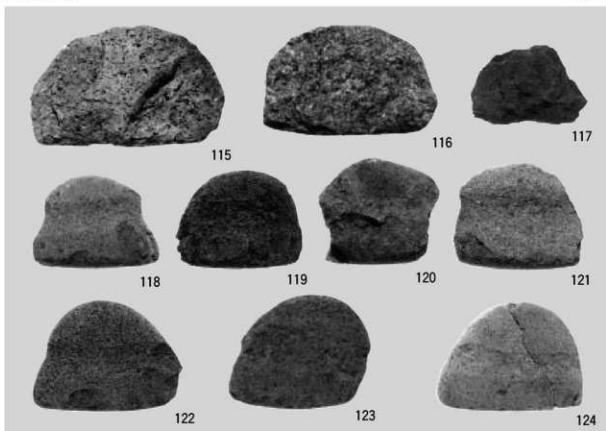
1 包含層出土の石器(3)



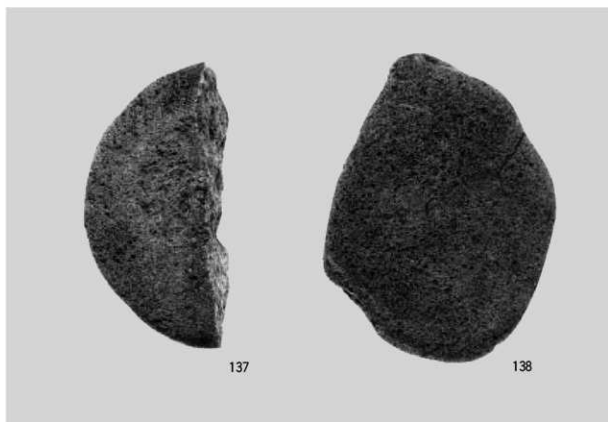
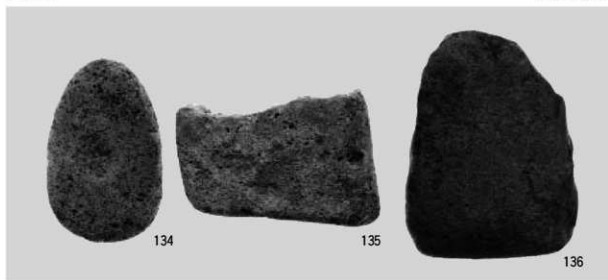
1 包含層出土の石器（4）



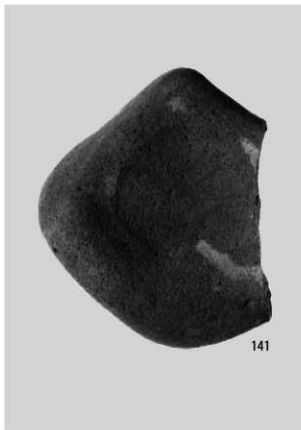
1 包含層出土の石器（5）



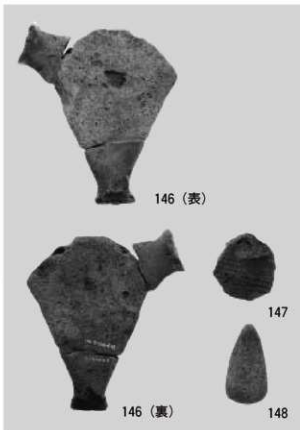
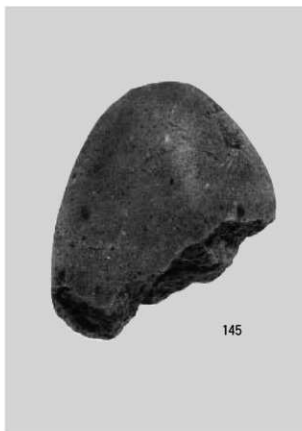
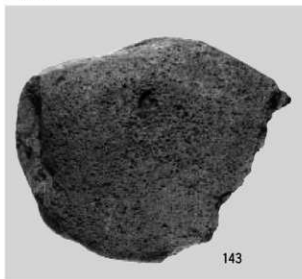
1 包含層出土の石器 (6)



1 包含層出土の石器（7）



1 包含層出土の石器（8）



1 包含層出土の石器 (9)

2 包含層出土の土製品・石製品

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1975「近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)」青埋調報22集
青森県教育委員会 1978「熊沢遺跡」青埋調報38集
青森県教育委員会 1980「大平遺跡」青埋調報52集
石田正夫 1983「国縫地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1図幅)」
石本省三ほか 1999「桜町7遺跡Ⅱ」七飯町教育委員会
今村峯雄 1999「高精度14C年代測定と考古学—方法と課題—」『月刊地球』号外No.26
宇部則安 1989「石手洗遺跡・田面木平(2)遺跡」八戸市教育委員会
江坂輝彌 1970「石神遺跡」石神遺跡研究会
及川研一郎 1987「北海道・八雲町落部遺跡出土土器の編年の位置」『潮風』第15号
大島直行 1976「円筒土器上層式の認識に関わる2・3の問題」『北海道考古学』第12号
大島直行ほか 1991「入江遺跡発掘調査報告」虻田町教育委員会
大場利夫ほか 1958「岩内遺跡」岩内町教育委員会
大沼忠春ほか 1976「元和」乙部町教育委員会
大沼忠春 1993「北海道東部の円筒土器文化」『考古学ジャーナル』No.362
小笠原忠久 1984b「北海道南西部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究』1 考古編
加藤誠・勝井義雄・北川芳男・松井愈 1990「日本の地質1 北海道地方」
草間俊一 1958「岩手県田代遺跡調査報告」『岩手大学学芸学部研究年報』13
久保和也・石田正夫・成田英吉 1983「長万部地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1図幅)」
久保泰ほか 1983「白坂」松前町教育委員会
小島朋夏 1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯
児玉作左衛門ほか 1958「サイベ沢遺跡」市立函館博物館
桜井清彦 1961「北海道山越郡落部遺跡」『日本考古学年報』12
桜井清彦 1964「北海道山越郡オトシベ遺跡」『日本考古学年報』15
(財)北海道埋蔵文化財センター 1983「登別市川上B遺跡」北埋調報13
(財)北海道埋蔵文化財センター 1984「尻岸内町中浜E遺跡」北埋調報22
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986「木古内町建川1・新道4遺跡」北埋調報33
(財)北海道埋蔵文化財センター 1987「木古内町建川2・新道4遺跡」北埋調報43
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988「函館市石川1遺跡」北埋調報45
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988「函館市桔梗2遺跡」北埋調報46
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988「木古内町新道4遺跡」北埋調報52
(財)北海道埋蔵文化財センター 1995「七飯町鳴川右岸遺跡」北埋調報87
(財)北海道埋蔵文化財センター 1995「豊浦町高岡1遺跡」北埋調報88
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000a「長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡」北埋調報139
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000b「八雲町シリカ2遺跡」北埋調報142
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000c「調査年報12 平成11年度」
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001a「八雲町黒岩3遺跡・ボンシリカ1遺跡」北埋調報155
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001b「八雲町山崎4遺跡」北埋調報162
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001c「八雲町山越2遺跡」北埋調報163
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001d「八雲町野田生5遺跡」北埋調報164

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 a 「八雲町山崎5遺跡」北理調報165
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 b 「調査年報14 平成13年度」
 佐藤 稔ほか 2001 「オハルベツ2遺跡(1)」長万部町教育委員会
 柴田信一 1991 a 「八雲町より出土した魚形石器について」『南北北海道考古学情報』第3号
 柴田信一 1991 b 「八雲町の縄文時代の遺跡と遺物について」『文京台考古』第6号
 柴田信一 1995 「柴浜1遺跡」八雲町教育委員会
 菅江真澄著 内田武志・宮本常一編訳 1980 「菅江真澄遊覧記」2
 鈴木克彦 1985 「土偶の研究(Ⅱ)―円筒土器文化に伴なう土偶―」『日高見国 菊地啓治郎学兄還
 暦記念論集』
 鈴木克彦 1999 「東北地方 中期(円筒上層式)」『縄文時代』第10号
 鈴木孝志 1958 「岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報」『上代文化』28
 高橋正勝 1971 「北海道における擦石・石冠について」『北海道の文化』第22号
 高橋正勝・小笠原忠久 1980 「4 縄文文化前期 中期」『北海道考古学講座』
 高橋正勝 1981 「中期の土器 北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4
 田川賢蔵 1956 「トコタン遺跡について」『先史時代』第四輯
 田川賢蔵 1958 「北海道山越郡元山遺跡」『日本考古学年報』10
 武内収太・山田悟郎 1968 「山越郡八雲町熱田遺跡における緊急発掘調査」『ゆうらふ』第12号
 竹内理三編 1987 「角川地名大辞典」
 田原良信ほか 1981 「権現台場遺跡」函館市教育委員会
 田原良信ほか 1985 「サイベ沢遺跡」函館市教育委員会
 田原良信ほか 1986 「サイベ沢遺跡Ⅱ」函館市教育委員会
 田原良信ほか 1989 「陣川町遺跡」函館市教育委員会
 田原良信ほか 1990 「権現台場遺跡」函館市教育委員会
 千代 肇 1965 「北海道八雲町大間遺跡について」『在華王路示』No.6 函館遺愛女子高・中学校歴史
 研究班考古学グループ
 千代 肇 1975 「北海道の円筒土器文化」『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
 千代 肇・岩本義雄 1975 「北海道八雲町上八雲の遺跡について」『北海道考古学』第11号
 辻誠一郎 1999 「高精度14C年代測定による三内丸山遺跡の編年」『月刊地球』号外No.26
 桶泉岳二 2000 「遺跡の放射性炭素年代と歴年代」『日本先史時代の14C年代』
 土偶とその情報研究会 1994 「東北・北海道の土偶Ⅰ」
 野村 崇 1982 「八雲町トコタン2遺跡」『北海道における農耕の起源(予報)』
 羽賀憲二 1983 「北海道式石冠」『縄文文化の研究7 道具と技術』
 羽賀憲二 1992 「二つの文化系統」『日本の古代9 東北・北海道』
 長谷部言人 1927 「円筒土器文化」『人類学雑誌』第42巻第1号
 春成秀爾 1999 「日本における土器編年と炭素14年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集
 古屋敷則雄 1991 「浜町A遺跡Ⅱ」
 北海道函館中部高等学校考古学研究部 1974 「道南遺跡分布事典」
 北海道文化財研究所 1987 「ヘロカルウス遺跡」北海道文化財研究所調査報告書第3集
 北海道立地下資源調査所 1980 「北海道の地質60万分の1北海道地質図」
 北海道立地下資源調査所 1983 「北海道の地質と資源Ⅴ 北海道の非金属鉱物資源」

- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス』
- 松浦武四郎著 吉田武三校註 1970『三航蝦夷日誌』上巻
- 三浦孝一 1980『山崎遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1982『柴浜1遺跡発掘調査概報』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1983『柴浜』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1984『第二編 先史時代』『改訂八雲町史 上巻』
- 三浦孝一 1987『台の上遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1989『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1990『八雲3遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1998『柴浜1遺跡Ⅳ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1986『柴浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1987『柴浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1988『山越5・6遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1991『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1992『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1993『大間校庭遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1995『浜松5遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1997『大新遺跡Ⅰ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 a『大新遺跡Ⅱ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 b『旭丘1遺跡』八雲町教育委員会
- 峰山 巖ほか 1973『栄磯岩陰遺跡発掘報告』鳥牧村教育委員会
- 宮 宏明ほか 1987『大岱沢A遺跡』上ノ国町教育委員会
- 三宅徹也 1974『青森県における円筒下層式土器群の地域的展開』『北奥古代文化』第6号
- 三宅徹也 1980『円筒土器』『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ
- 三宅徹也 1989『円筒土器下層式』『縄文土器大観』1 草創期 早期 前期
- 村越 潔 1974『円筒土器文化』
- 森田知忠・高橋正勝 1967『サイベ沢B遺跡』函館市教育委員会
- 八雲高等学校郷土史研究部 (1970)『郷研紀要』4
- 八雲町編 1984『改訂八雲町史 上巻・下巻』
- 八雲町編 2000『統計八雲』
- 八幡一郎 1942『北海道の石冠類』『人類学雑誌』第57巻第4号
- 山田悟郎 1999『クリを管理し北海道まで広げた縄文人』小林達雄編『最新縄文の世界』
- 山田秀三 1984『北海道の地名』
- 山内清男 1929『北関東に於ける繊維土器』『史前学雑誌』第1巻第2号
- 吉崎昌一 1961『白滝遺跡と北海道の無土器文化』『民族学研究』26巻1号
- 吉崎昌一 1965『縄文文化の発展と地域性 北海道』『日本の考古学Ⅱ縄文時代』

報告書抄録

ふりがな	やくもちょう やまこしさんいせき・やまこしよんいせき							
書名	八雲町 山越3遺跡・山越4遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第166集							
編者名	藤原秀樹・立田 理・遠藤香澄							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	西暦2002年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山越3遺跡	北海道山越郡八雲町 山越405番地他	1346	B-16-45	42度13分19秒	140度20分12秒	20000907～20001031	1,632㎡	高速道路北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)建設工事に伴う事前発掘調査
山越4遺跡	北海道山越郡八雲町 山越336-1番地他	1346	B-16-46	42度13分9秒	140度20分41秒	20000901～20001031	2,516㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山越3遺跡	集落跡	縄文時代中期	住居跡3軒、土壇18基、焼土3ヶ所、フレイク・チップ集中城1ヶ所、土器集中10ヶ所		縄文土器6972点(東銅路Ⅲ式、円筒土器下層d式、サイベ沢Ⅳ式、見晴町式、トリサキ式)石器など3065点(石鏃、石槍、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿)		軽石製石製品	
山越4遺跡	集落跡	縄文時代中期	住居跡4軒、土壇11基、焼土4ヶ所、集石1ヶ所、フレイク・チップ集中城1ヶ所、炭化物集中1ヶ所、土器集中8ヶ所		縄文土器6272点(円筒土器下層d式、円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅵ式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、天祐寺式、経調式)、縄文土器231点(後北C1式)石器など3774点(石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿)		ミニチュア土器、無文土偶	

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第166集

八雲町 山越3遺跡・山越4遺跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書—
平成13年2月28日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
☎011(386)3231 FAX011(386)3238
[E-mail]mail@domaibun.or.jp [URL]http://www.domaibun.or.jp

印刷 株式会社 中央広版社
〒064-0826 札幌市中央区北6条西28丁目3番16号
☎011(631)9339 FAX011(631)9343
